日付\_7月25日

日付\_7月26日

日付\_7月27日

日付\_7月28日

日付\_7月29日

日付\_7月30日

日付\_7月31日

日付\_8月1日

日付\_8月2日

日付\_8月3日

日付\_8月4日

日付\_8月5日

日付\_8月6日

日付\_8月7日

日付\_8月8日

日付\_8月9日

日付\_8月10日

日付\_8月11日

日付\_8月12日

日付\_8月13日

日付\_8月14日

日付\_8月15日

日付\_8月16日

日付\_8月17日

日付\_8月18日

日付\_8月19日

日付\_8月20日

日付\_8月21日

日付\_8月22日

日付\_8月23日

日付\_8月24日

1=朝

2=昼

3=夕

4=夜

時間\_朝

P\_CALL\_CE 12 6 7 ON

時間\_昼

時間\_夕

時間\_夜

P\_CALL\_CE\_REMOVE 12

\n<晴太>「今日から学校だ……！

　早く用意して行かないと！」

エンド

\n<晴太>「夏休みも今日で終わりだ。

　最終日だし、何しようかなぁ？」

\n<晴太>「今日は何しようかなぁ？」

\n<晴太>「あっ、若菜から電話だ」

\n<晴太>「もしもし、若菜？

　どうかしたの？」

\n<若菜>「んっ、あっ、は、ハルタ……？

　ちょっと……んっ、わたしの家に来てもらっても……あっ！」

\n<晴太>「若菜？　大丈夫？

　若菜の家に行けばいいの？」

\n<若菜>「んふぁ……う、うん……！

　お、お願いね……んっ、あっ……！」

\n<晴太>「若菜どうしたんだろう？

　とにかく、若菜の家に行ってみよう」

P\_CALL\_CE\_REMOVE 12

P\_CALL\_CE\_REMOVE 13

若菜と約束する

\n<晴太>「今日は夏祭りの日だし、若菜を誘ってみよう」

\n<晴太>「今日は若菜を誘ってみよう」

\n<晴太>「もしもし、若菜？

　一緒に夏祭り行かない？」

\n<晴太>「もしもし、若菜？

　お昼から一緒に遊ばない？」

\n<若菜>「ハルタ……えっと、ごめんね……

　これからちょっと用事があって……」

\n<晴太>「そっか……残念だなぁ」

\n<若菜>「ごめんね……すごく大事な用だから……

　ま、また遊ぼうね」

\n<晴太>「そっか。若菜は用事があるんだ。

　それじゃあ、僕は何しようかなぁ……」

\n<晴太>「なんだろう……知らない番号から電話だ。

　とりあえず出てみよう」

\n<晴太>「もしもし」

\n<陸也>「あ？　ハルタくん？

　俺は二年の陸也ってんだけど」

\n<晴太>「り、陸也先輩！？

　あの……僕に何か用ですか……？」

\n<陸也>「昼頃にさぁ、保健室来て欲しいんだよね。

　あ、どうせ暇っしょ？」

\n<晴太>「保健室ですか……？　わかりました。

　でも、なんで――」

\n<陸也>「じゃ、そういうことだから」

\n<晴太>「先輩が僕を呼ぶなんてなんだろう……

　でも、いつもサイトでお世話になってるし行こう！」

P\_CALL\_CE\_REMOVE 12

P\_CALL\_CE\_REMOVE 13

\n<若菜>「もちろんだよ～！

　えへへ、楽しみだなぁ」

今日は一人で遊ぶ

\n<晴太>「今日は一人で遊んでようかな」

\n<晴太>「あっ、健介から電話だ」

\n<晴太>「もしもし、健介？」

\n<健介>「おう、晴太！

　なあなあ、スッゲー情報ゲットしちまったぜ！」

\n<晴太>「すごい情報？　なにそれ？」

\n<健介>「うちの学園に裏サイトがあるらしいんだ！

　なんでも、先輩たちが運営してるらしくてさ」

\n<晴太>「それがすごい情報なの？」

\n<健介>「まあ焦るなって。

　聞いて驚くなよ？　その裏サイトってのがさ……」

\n<健介>「すっげーエロいらしいんだ！」

\n<晴太>「え、エロいんだ……」

\n<健介>「エロい程度じゃないらしいぜ……すっげーエロいんだって！」

\n<晴太>「すごくエロい……」

\n<健介>「おっ？　やっぱり晴太も興味持ったか？」

\n<晴太>「そ、そんなことないよ……！」

\n<健介>「誤魔化すなって。男なら興味あって当然だろ？」

\n<健介>「ただ一つだけ問題があってさ……」

\n<晴太>「問題……？」

\n<健介>「裏サイトを見るためにはパスワードがいるらしいんだ。

　こればっかりは先輩も教えてくれなくてさ」

\n<晴太>「じゃあ見れないんだ……」

\n<健介>「そんなに落ち込むなって。

　噂だと、どこかにパスワードが書いてあるらしいんだ」

\n<健介>「俺は明日から学校で探すつもりだから！

　晴太も暇だったら手伝ってくれよな！」

\n<健介>「パスワード分かったら教えてくれよ！

　俺も分かったらすぐに教えるからさ！」

\n<晴太>「う、うん……」

\n<健介>「男と男の約束だぜ！」

\n<晴太>「すごくエロい……」

\n<晴太>「こうしちゃいられない……！

　すぐにパスワードを探さなきゃ！」

\n<晴太>「なんだろう……知らない番号から電話だ。

　とりあえず出てみよう」

\n<晴太>「もしもし」

\n<陸也>「あ？　ハルタくん？

　俺は二年の陸也ってんだけど」

\n<晴太>「り、陸也先輩！？

　あの……僕に何か用ですか……？」

\n<陸也>「昼頃にさぁ、保健室来て欲しいんだよね。

　あ、どうせ暇っしょ？」

\n<晴太>「保健室ですか……？　わかりました。

　でも、なんで――」

\n<陸也>「じゃ、そういうことだから」

\n<晴太>「先輩が僕を呼ぶなんてなんだろう……

　でも、いつもサイトでお世話になってるし行こう！」

P\_CALL\_CE\_REMOVE 12

P\_CALL\_CE\_REMOVE 13

夜まで眠る

\n<晴太>「全然寝足りないかな、今日は一日中寝てよ……」

\n<晴太>「なんだろう……知らない番号から電話だ。

　とりあえず出てみよう」

\n<晴太>「もしもし」

\n<陸也>「あ？　ハルタくん？

　俺は二年の陸也ってんだけど」

\n<晴太>「り、陸也先輩！？

　あの……僕に何か用ですか……？」

\n<陸也>「昼頃にさぁ、保健室来て欲しいんだよね。

　あ、どうせ暇っしょ？」

\n<晴太>「保健室ですか……？　わかりました。

　でも、なんで――」

\n<陸也>「じゃ、そういうことだから」

\n<晴太>「先輩が僕を呼ぶなんてなんだろう……

　でも、いつもサイトでお世話になってるし行こう！」

P\_CALL\_CE\_REMOVE 12

P\_CALL\_CE\_REMOVE 13

\n<晴太>「ふわぁ……よく寝たぁ……！

　もう夜だ……一日無駄にしちゃったなぁ」

\n<晴太>「あっ、健介から電話だ」

\n<晴太>「もしもし、健介？」

\n<健介>「おう、晴太！

　なあなあ、スッゲー情報ゲットしちまったぜ！」

\n<晴太>「すごい情報？　なにそれ？」

\n<健介>「うちの学園に裏サイトがあるらしいんだ！

　なんでも、先輩たちが運営してるらしくてさ」

\n<晴太>「それがすごい情報なの？」

\n<健介>「まあ焦るなって。

　聞いて驚くなよ？　その裏サイトってのがさ……」

\n<健介>「すっげーエロいらしいんだ！」

\n<晴太>「え、エロいんだ……」

\n<健介>「エロい程度じゃないらしいぜ……すっげーエロいんだって！」

\n<晴太>「すごくエロい……」

\n<健介>「おっ？　やっぱり晴太も興味持ったか？」

\n<晴太>「そ、そんなことないよ……！」

\n<健介>「誤魔化すなって。男なら興味あって当然だろ？」

\n<健介>「ただ一つだけ問題があってさ……」

\n<晴太>「問題……？」

\n<健介>「裏サイトを見るためにはパスワードがいるらしいんだ。

　こればっかりは先輩も教えてくれなくてさ」

\n<晴太>「じゃあ見れないんだ……」

\n<健介>「そんなに落ち込むなって。

　噂だと、どこかにパスワードが書いてあるらしいんだ」

\n<健介>「俺は明日から学校で探すつもりだから！

　晴太も暇だったら手伝ってくれよな！」

\n<健介>「パスワード分かったら教えてくれよ！

　俺も分かったらすぐに教えるからさ！」

\n<晴太>「う、うん……」

\n<健介>「男と男の約束だぜ！」

\n<晴太>「すごくエロい……」

\n<晴太>「こうしちゃいられない……！

　明日にでもパスワードを探さなきゃ！」

若菜に告白する……！

\n<晴太>「もう二回も告白失敗しちゃってるんだ……！

　今日こそは絶対に告白してみせるぞ！」

\n<晴太>「今日は若菜に告白するんだ……！」

\n<晴太>「も、もしもし！

　わ、若菜にちょっと、その……大事な話があるんだけど……！」

\n<若菜>「大事な話？　ハルタがなんて珍しいねぇ。

　どんな話なの……？」

\n<若菜>「また大事な話？

　今度はどんな話なの……？」

\n<若菜>「はいはい、大事な話ね。

　それで、今日はどんな話なの……？」

\n<晴太>「で、電話じゃちょっと……

　お昼に直接会って話したいんだけど！」

\n<若菜>「ハルタ……えっと、ごめんね……

　これからちょっと用事があって……」

\n<晴太>「そ、そっか……！　気にしないでね！

　僕のはいつだっていいから！」

\n<若菜>「ごめんね……大事な用だから……

　ま、また遊ぼうね」

\n<晴太>「そっか。若菜は用事があるんだ。

　でも、ちょっとホッとしたかも……」

\n<晴太>「なんだろう……知らない番号から電話だ。

　とりあえず出てみよう」

\n<晴太>「もしもし」

\n<陸也>「あ？　ハルタくん？

　俺は二年の陸也ってんだけど」

\n<晴太>「り、陸也先輩！？

　あの……僕に何か用ですか……？」

\n<陸也>「昼頃にさぁ、保健室来て欲しいんだよね。

　あ、どうせ暇っしょ？」

\n<晴太>「保健室ですか……？　わかりました。

　でも、なんで――」

\n<陸也>「じゃ、そういうことだから」

\n<晴太>「先輩が僕を呼ぶなんてなんだろう……

　でも、いつもサイトでお世話になってるし行こう！」

P\_CALL\_CE\_REMOVE 12

P\_CALL\_CE\_REMOVE 13

\n<若菜>「わかったよ。それじゃあ、お昼にね」

エンド

時間を飛ばしますか？

はい

今後この選択を非表示にしますか？

\c[10]※設定は部屋の本棚からいつでも変更できます。

はい

いいえ

いいえ

時間を飛ばしますか？

はい

いいえ

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「じゃあ、またね」

$gameScreen.picture(11)

日付\_7月25日

日付\_7月26日

日付\_7月27日

日付\_7月28日

日付\_7月29日

日付\_7月30日

日付\_7月31日

日付\_8月1日

日付\_8月2日

日付\_8月3日

日付\_8月4日

日付\_8月5日

日付\_8月6日

日付\_8月7日

日付\_8月8日

日付\_8月9日

日付\_8月10日

日付\_8月11日

日付\_8月12日

日付\_8月13日

日付\_8月14日

日付\_8月15日

日付\_8月16日

日付\_8月17日

日付\_8月18日

日付\_8月19日

日付\_8月20日

日付\_8月21日

日付\_8月22日

日付\_8月23日

$gameScreen.picture(12)

時間\_朝

時間\_昼

時間\_夕

時間\_夜

$gameScreen.picture(13)

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「ごめんね、わざわざ付き合わせちゃって」

\n<晴太>「別にいいよ。

　でも、まさか夏休みに学校に来ることになるなんてね」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「まさか宿題を忘れちゃってたなんてね。

　あはは、うっかりしてたよ」

\n<晴太>「もう、若菜ってばドジだなぁ」

立ち絵\_服\_気まずい

\n<若菜>「えへへ……返す言葉もないよ」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「それじゃあ帰ろっか」

\n<女生徒>「キャー！　陸也くーん！」

\n<女生徒>「陸也先輩、今日もかっこいいですー！」

立ち絵\_服\_驚き

\n<若菜>「わあ、女の子がいっぱい集まってる。

　どうしたんだろう？」

\n<晴太>「絶対に陸也先輩だよ」

\n<大地>「いくぜ、陸也！　俺の必殺シュートを受けてみろ！」

\n<陸也>「テメェのへなちょこシュートなんざ余裕だっての」

\n<大地>「言ったな？　喰らえ！」

\n<陸也>「バカ、どこ蹴ってんだよッ！」

\n<若菜>「きゃっ！」

\n<陸也>「悪ィ悪ィ、当たんなかったか？」

立ち絵\_服\_驚き

\n<若菜>「あ、ありがとうございます」

\n<陸也>「キミ、名前なんつーの？」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「の、野々宮若菜です。一年の」

\n<陸也>「へぇ、若菜ちゃんねぇ。

　俺は三年の大空陸也っつうんだけど、知ってるっしょ？」

立ち絵\_服\_照れ

\n<若菜>「はい。先輩はその……人気ですから」

\n<陸也>「じゃあ、若菜ちゃんも興味あったりする？

　だったらこの後、俺と――」

立ち絵\_服\_気まずい

\n<若菜>「す、すみません……この後は用事があって……」

\n<若菜>「ね、ハルタ？」

\n<晴太>「えっ？　う、うん……」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「それじゃあ失礼します、先輩。

　ありがとうございました」

\n<大地>「ワリィ、陸也……って、どうかしたか？」

\n<陸也>「なあ、一年の野々宮若菜って知ってるか？」

\n<大地>「野々宮……？　知らねぇなぁ。

　そいつがどうかしたか？」

\n<陸也>「すげぇ、エロいおっぱいだった」

\n<大地>「マジかよ！？　どこどこ！？」

\n<陸也>「もういねぇよ。しかも超かわいい。

　校内でもトップクラスなんじゃねぇか？」

\n<陸也>「あんな上玉がまだ残ってたなんてな。

　めぼしい奴は大抵食い荒らしたと思ってたんだがな」

\n<大地>「陰キャ系はわざわざ探さねぇと見つかんねーもんな。

　陸也の周りなんて陽キャしかいねぇし」

\n<陸也>「大人しそうな見た目であの身体はねぇわ。

　男にヤられたくて生まれてきたような女だったぜ」

\n<陸也>「決めた。この夏休み中にアイツをセフレにしてやるよ」

\n<大地>「出た！　陸也の悪い癖！

　お前、そんなんだから裏で女癖悪いとか言われてんだぞ？」

\n<陸也>「食える女は脂が乗ってるうちに食っとくんだよ。

　まあ、アイツの場合、脂がのってるのはおっぱいだけどな」

\n<大地>「お前さぁ、よくそんなんで取り巻きに嫌われねぇよな。

　なあなあ、秘訣とかあんなら教えてくれよ！」

\n<陸也>「チンコで餌付けしときゃあ、女なんて言いなりだろ。

　なんなら、お前にも数人分けてやろうか？」

\n<大地>「お前ホントにクズだなぁ。一生友達だぜ！」

立ち絵\_服\_笑顔

\n<若菜>「ん～、このアイスクリーム美味しいねぇ」

\n<晴太>「これを選んで正解だったね」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「うん。これなら何本だって食べられるよ。

　アタリ棒出ないかなぁ……ぺろぺろ」

立ち絵\_服\_困り

\n<若菜>「……ダメだぁ。やっぱりハズレだった」

\n<晴太>「そう簡単にアタリなんて出ないよ……

　って、見て！　アタリ！」

立ち絵\_服\_笑顔

\n<若菜>「すごいよ、ハルタ！

　わあ、アタリなんて久しぶりに見たよ～！」

\n<晴太>「へっへーん！

　じゃあ、もう一本もらってくるね」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「わたしにも一口ちょうだいね」

\n<晴太>「しょうがないなぁ。一口だけだよ？」

立ち絵\_服\_笑顔

\n<若菜>「やったあ！　ありがとう、ハルタ」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「ハルタまだかなぁ～♪

　アイスクリームまだかなぁ～♪」

\n<若菜>「ふふっ、二口食べちゃおうかなぁ～♪」

\n<酔っ払い>「ひっく、うぇへへ……

　お嬢ちゃん、おっぱい大きいねぇ……！」

立ち絵\_服\_困り

\n<若菜>「その……やめてください……」

\n<酔っ払い>「おじさんにちょっと触らせてくれないかなぁ……？

　ねえ、ちょっとだけでいいからさぁ」

立ち絵\_服\_困り

\n<若菜>「や、やめてください……

　け、警察呼びますよ……！」

\n<酔っ払い>「けいさつぅ……？

　ひっく、そんなの怖くないってーの！」

\n<若菜>「きゃあっ！」

H1\_着衣\_閉じ目

\n<酔っ払い>「うっほぉ……！

　すんごいおっぱい！　うぇへへ、気持ちいいなぁ……！」

\n<若菜>「や、やめてください……！」

\n<酔っ払い>「やめろって言われてもねぇ……！

　こんなおっぱい前にしてやめれるわけないでしょ」

\n<若菜>「そ、そんな……！　んんっ……！」

\n<酔っ払い>「あっれぇ……？　お嬢ちゃん感じちゃってる？」

\n<若菜>「そんな、こと……ふぅ、んっ……！」

\n<酔っ払い>「こんなエッチな身体してるんだからさぁ。

　お嬢ちゃんもエッチなんでしょ……？」

\n<若菜>「ち、ちが……わたしはエッチじゃ……！」

\n<酔っ払い>「だって、ほらぁ……

　ここが固くなってきてるよぉ……？」

\n<若菜>「ふぁっ……ううぅ、やめてぇ……！」

\n<酔っ払い>「ん？　今何か聞こえたか……まあいいや」

\n<若菜>「おねがい、だから……やめてください………」

\n<酔っ払い>「やめてって言うのはさぁ……

　もっとやってーって意味だよねぇ……！」

\n<若菜>「んんっ、いや……おねがいです……やめっ……！」

\n<晴太>「あれ？　若菜ー！」

立ち絵\_服\_驚き

\n<若菜>「は、ハルタ……！」

\n<酔っ払い>「チッ、彼氏連れかよ。

　期待させやがって、クソビッチが……ひっく！」

立ち絵\_服\_困り

\n<若菜>「ハルタぁ……！　ううっ……！」

\n<晴太>「どうしたの、若菜？

　ほらほら、そんなに悲しまないで」

\n<晴太>「たくさんアイスあげるから。

　だから、落ち着いて。一緒に食べよ？」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「うん……！」

立ち絵\_服\_目閉じ

\n<若菜>「ん～、終わったぁ……！」

\n<晴太>「お疲れ様。

　若菜も少しは出来るようになったんじゃない？」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「えへへ、そうかな？

　ハルタの教えるのが上手だからだよ」

立ち絵\_服\_笑顔

\n<若菜>「これで夏休みの宿題は安泰だよ～。

　ありがとうね、ハルタ」

\n<晴太>「ど、どういたしまして……！」

\n<晴太>「そ、そうだ！

　教室に忘れ物したからちょっと取ってくるね」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「うん。いってらっしゃ～い」

\n<陸也>「はぁ、やっといなくなったわ。

　あ、隣いいだろ？」

立ち絵\_服\_照れ

\n<若菜>「り、陸也先輩……？」

\n<陸也>「若菜ちゃんだよね。ちょっと二人で話さねぇ？」

立ち絵\_服\_気まずい

\n<若菜>「す、すみません先輩。

　ちょっとこの後用事があって……」

\n<陸也>「へぇ、逃げちゃうんだ。いいのかなぁ……？」

立ち絵\_服\_困り

\n<若菜>「……どういう意味ですか？」

\n<陸也>「この写真に覚えはねぇか？」

写真

\n<若菜>「こ、これって……！」

\n<陸也>「可愛い顔して、こんなオッサンとねぇ……

　若菜ちゃんって意外と大胆なんだねぇ？」

立ち絵\_服\_驚き

\n<若菜>「ち、違います……！

　これは、そんなんじゃ……！」

\n<陸也>「へぇ、どう違うの……？

　援交してるとこバッチリ映ってるのにさぁ」

立ち絵\_服\_困り

\n<若菜>「え、援交だなんて……！

　わたしそんなことしてません！」

\n<陸也>「じゃあこの写真、ばら撒いちゃおっかなぁ。

　やましいことがないならいいっしょ？」

\n<若菜>「そ、それは……」

\n<陸也>「なに？　ダメなの？」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「……いいですよ。

　だって、わたしは何もしてないですから」

\n<陸也>「そっか。じゃあばら撒くわ。

　一年の若菜ちゃんの援交写真って書いて学校中にさ」

立ち絵\_服\_困り

\n<若菜>「そ、それは……！」

\n<陸也>「どれだけの奴が若菜ちゃんの言うこと信じるだろうなぁ？

　先公に見つかったら退学になるだろうしさ」

\n<陸也>「それに、こんな写真見ちゃたら、

　君の大事な……ハルタくんだっけ？　どう思うかなぁ？」

\n<陸也>「若菜ちゃんを見限っちゃうかもねぇ。

　オッサンに遊ばれた後の女なんて普通いらねぇからさぁ」

\n<若菜>「そんな……」

\n<若菜>「お、お願いします……

　その写真をばら撒くのをやめてください……」

\n<陸也>「まあ、俺も鬼じゃないからさぁ。

　やめろって言われたらやめてあげたくなるけど」

\n<陸也>「でも、タダってわけにはいかねぇなぁ」

立ち絵\_服\_困り

\n<若菜>「わたし、バイトもしてないし、お金は……」

\n<陸也>「お金なんていらねぇよ。

　ただ、ちょっと俺と遊んでくれるだけでさぁ」

\n<若菜>「先輩と遊ぶだけでいいんですか……？」

\n<陸也>「そうそう。簡単っしょ？

　若菜ちゃんが暇な時でいいからさぁ。いいっしょ？」

\n<若菜>「……それだけなら」

\n<陸也>「よし、オッケー！　じゃあこれ、俺の番号だから。

　ちゃんと掛けてきてよ、若菜ちゃん」

\n<陸也>「じゃあな」

\n<晴太>「おまたせ、若菜。

　いま陸也先輩とすれ違ったんだけど……」

\n<晴太>「若菜、どうかした？」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「ううん。なんでもないよ。

　それより、もう帰ろっか」

\n<晴太>「う、うん」

立ち絵\_服\_困り

\n<若菜>「あのね……ハルタに訊いて欲しいことがあるの」

\n<晴太>「うん……」

立ち絵\_服\_気まずい

\n<若菜>「あのね……笑わないで聞いて欲しいんだけどね？

　わたしの身体が……ちょっと変なの……」

\n<晴太>「若菜の身体に変なところなんてあるかなぁ……？」

立ち絵\_服\_困り

\n<若菜>「見た目の話じゃなくて……

　その……ちょっと恥ずかしいんだけどね……？」

立ち絵\_服\_困り

\n<若菜>「ハルタのこと考えるとね？

　たまに、お股の辺りがきゅう……ってするの」

\n<若菜>「いつもじゃないんだけど……

　それに、ハルタ以外のことを考えてもならないし……」

\n<若菜>「ママには言ったんだけどね？

　笑われて、パパにも友達にも言っちゃダメって……」

\n<若菜>「わたし、全然わからなくて……

　こんなこと、もうハルタにしか言えないから……」

\n<若菜>「わたしって、何かおかしいのかな……？」

\n<晴太>「若菜……それって……」

立ち絵\_服\_困り

\n<若菜>「それって……？」

\n<晴太>「病気じゃないの！？　ちゃんと病院に行った！？」

立ち絵\_服\_照れ

\n<若菜>「も～、ハルタは大げさだって～。

　痛くないし、それよりなんだか……気持ちいい感じで……」

\n<晴太>「でも、病気かもしれないよ！

　もし若菜に何かあったら……僕……！」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「ハルタ……」

立ち絵\_服\_目閉じ

\n<若菜>「……うん。そうだね」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「分かった。

　ハルタがそこまで言うなら病院に行ってみるよ」

\n<晴太>「うん。それがいいよ。

　病気じゃなかったらラッキーだったって思えるしね」

立ち絵\_服\_照れ

\n<若菜>「えへへ、そうだね。

　病気でも早く見つかってラッキーだもんね」

\n<晴太>「一人で不安だったら僕も一緒に行こうか？」

立ち絵\_服\_笑顔

\n<若菜>「も～、ハルタったら！

　わたし、そんなに子どもじゃないよ～！」

立ち絵\_服\_目閉じ

\n<若菜>「ん～、美味しい～♪」

\n<晴太>「若菜は本当にケーキが好きだね」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「ケーキも好きだけど、このお店が好きなの。

　だって、すごく可愛いんだもん♪」

\n<若菜>「それに――」

立ち絵\_服\_笑顔

\n<若菜>「ケーキもこんなに美味しいもん♪

　本当にハルタは食べなくていいの？」

\n<晴太>「僕は甘いもの苦手だから」

立ち絵\_服\_困り

\n<若菜>「そっかぁ……もぐもぐ」

立ち絵\_服\_笑顔

\n<若菜>「ハルタハルタ！

　これ甘くないけどすご～く美味しいよ！」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「ねえ、一口食べてみない？」

\n<晴太>「それじゃあ、一口だけ」

\n<若菜>「うん。はい、あ～ん♪」

\n<晴太>「あーん……もぐもぐ。うん、美味しい！」

立ち絵\_服\_笑顔

\n<若菜>「えへへ、良かったよ。

　それじゃあ、もう一口あげるね」

\n<若菜>「はい、あ～ん♪」

\n<晴太>「あーん……若菜が好きになるのも分かるなぁ」

\n<若菜>「そうでしょ？　じゃあ、わたしも……」

\n<晴太>「若菜？　どうかしたの？」

立ち絵\_服\_驚き

\n<若菜>「な、なんでもないよ！」

立ち絵\_服\_気まずい

\n<若菜>「ただ……ハルタと間接キスになっちゃうなって……」

立ち絵\_服\_照れ

\n<若菜>「え、えへへ……ごめんね、変なこと言っちゃって……」

\n<若菜>「ハルタは家族みたいなものなのにね。

　い、いただきま～す……あむっ！」

\n<若菜>「……すごく、美味しいね……」

立ち絵\_服\_驚き

\n<若菜>「わあ、見てハルタ！

　鈴先輩だよ！　すごくかわいい！」

\n<晴太>「鈴先輩……？」

立ち絵\_服\_驚き

\n<若菜>「ほら、コンビニの前にいる

　ツインテールの可愛い人だよ～！」

立ち絵\_服\_目閉じ

\n<若菜>「憧れちゃうなぁ……

　女の子だったら、あれくらい可愛くなりたいよ～」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「ねぇ、ハルタも可愛いと思わない？」

\n<晴太>「うん……可愛いと思う」

立ち絵\_服\_笑顔

\n<若菜>「だよね。一番人気な先輩だもん。

　きっと、心も可愛いんだろうなぁ～」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「可愛いオーラがすごくて近づけないよ～

　あんなに可愛い人なんて他にはいないよね」

\n<晴太>「……ぼ、僕は鈴先輩より若菜のほうが可愛いと思う」

立ち絵\_服\_驚き

\n<若菜>「え～、全然そんなことないよ～！

　もう、ハルタったら見る目がないんだから」

\n<晴太>「そ、そうかな……」

立ち絵\_服\_目閉じ

\n<若菜>「そうだよ。でも……すごく嬉しい」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「ありがとう、ハルタ」

\n<晴太>「うん……どういたしまして」

\n<晴太>「健介に教えてもらったエロ動画……すごい……

　こんなにエッチなの見たことない……！」

\n<晴太>「はぁはぁ……」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「ハルタ、遊びに来たよ～」

\n<晴太>「わ、若菜……！？」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「おはよう、ハルタ。ちょっと早く来ちゃった。

　……あれ、何かしてたの……？」

\n<晴太>「な、なにもしてないよ！　なにも！」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「そうなんだ……？

　それじゃあ、おじゃましま～す」

\n<晴太>「ちょ、ちょっと待って！

　まだ部屋に入ってこないで！」

立ち絵\_服\_気まずい

\n<若菜>「やっぱり、何かあったの？」

\n<晴太>「な、なんでもない！　本当になんでもないよ！

　でも、ちょっとだけタイミングが悪いというか……」

立ち絵\_服\_困り

\n<若菜>「どういうことなの……？

　それより、なんでハルタはこっち向いてくれないの？」

立ち絵\_服\_目閉じ

\n<若菜>「くんくん……

　なんだかこの部屋……変わった匂いがするね……」

立ち絵\_服\_照れ

\n<若菜>「いつもの部屋と匂いと違う……

　部屋の匂い変えたの？」

\n<晴太>「そ、そうなんだ！

　今だけ試しにちょっと変えてて！」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「そうなんだ。変わった匂いだけど……嫌いじゃないかも。

　ねぇ、これってなんの匂いなの……？」

\n<晴太>「な、なんの匂い……！？

　これは、その……そ、そうだ、栗の花の匂いだよ！」

立ち絵\_服\_笑顔

\n<若菜>「栗の花の匂いかぁ……こんな匂いなんだね。

　今まで嗅いだことないから知らなかったよ～」

\n<晴太>「あ、あはは……

　と、とにかく、ちょっと部屋の前で待ってて！」

立ち絵\_服\_困り

\n<若菜>「もう……分かったよ。変なハルタ」

\n<晴太>「今のうちにズボン履いて、

　後片付けしておかないと……！」

立ち絵\_服\_笑顔

\n<若菜>「そうだ、ハルタ！　言い忘れてたんだけど――」

\n<晴太>「だから入ってこないでってばー！」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「ねぇ、ハルタ。好きな人っているの？」

\n<晴太>「す、好きな人……！？

　えーっと、それは……その……」

立ち絵\_服\_照れ

\n<若菜>「なんでそんなに慌ててるの？」

\n<晴太>「あ、慌ててなんかないよ！

　そ、それより若菜はどうなの？」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「わたし？」

立ち絵\_服\_目閉じ

\n<若菜>「わたしが好きなのはね……」

立ち絵\_服\_笑顔

\n<若菜>「もちろん……ハルタだよ」

\n<晴太>「えっ！？　そ、それって……！」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「あとは……パパとママと、おじいちゃんとおばあちゃん。

　それとペットのペスと、お友達の由美ちゃんと薫ちゃんと――」

\n<晴太>「もう……そういうことじゃないのに……

　若菜ってば子供だなぁ」

立ち絵\_服\_困り

\n<若菜>「あ、わたしのこと馬鹿にしたでしょ。

　もう、好きから外れても知らないもん」

\n<晴太>「あそこにいるの、陸也先輩だ」

立ち絵\_服\_困り

\n<若菜>「あ……うん。本当だね」

\n<晴太>「若菜、どうかしたの？」

立ち絵\_服\_気まずい

\n<若菜>「う、ううん。なんでもないよ……なんでも……」

\n<晴太>「そう？」

\n<陸也>「おっ、若菜ちゃんじゃん」

立ち絵\_服\_困り

\n<若菜>「おはようございます……先輩」

\n<晴太>「おはようございます、陸也先輩！」

\n<陸也>「誰だお前……って、どうでもいいか。野郎なんて。

　じゃあね、若菜ちゃん。また今度」

\n<晴太>「若菜って陸也先輩と知り合いだったの？」

立ち絵\_服\_気まずい

\n<若菜>「え、えーっと、その……

　この前たまたま図書室で会ったんだ……」

\n<晴太>「へぇ、そうだったんだ。

　僕も先輩と知り合いになりたかったなぁ」

\n<晴太>「そうだ！

　良かったら若菜が先輩を僕に紹介してよ！」

立ち絵\_服\_気まずい

\n<若菜>「それは……考えておくね」

\n<可鈴>\{「マジで！？」

\n<鈴>「ちょっと、可鈴ってば声が大きいよ」

\n<可鈴>「だってだって、うちの鈴がぁぁ！

　鈴だけは綺麗でいて欲しかったのにぃぃ！」

\n<鈴>「もう、可鈴ってば大げさだなぁ。

　私達の歳なら初体験なんて済ませて当然でしょ？」

\n<可鈴>「そ、それはそうだけどさぁ……

　でもでも、鈴の処女はうちがもらう予定だったのに！」

\n<鈴>「うっわぁ、可鈴ってばそんな目で私を見てたんだ。

　やらし～、けだものだ～！」

\n<可鈴>「ふふふ……今さら気付いても遅いんだよね～！

　１０人の童貞と２人の処女を奪ったうちのテクをくらえー！」

\n<鈴>「あはははは、きゃああ、襲われちゃう～！」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「ハルタ。どうかしたの？」

\n<晴太>「な、なんでもないよ！　なんでも！」

立ち絵\_服\_照れ

\n<若菜>「なんだか怪しい気配がするよ……

　ハルタ、なにか隠してるでしょ……後ろかな？」

\n<晴太>「あっ、ちょっと！」

立ち絵\_服\_笑顔

\n<若菜>「あ、鈴先輩だ！

　かわいいなぁ……なんの話をしてるんだろう？」

\n<可鈴>「てか、うちの大事な鈴の初体験奪ったのって誰なの？

　半端な奴だったら怒るからね？」

\n<鈴>「もう、可鈴ったら過保護なんだから。

　ほら、同級生のサッカー部の……」

\n<可鈴>「あー、もういい。分かった分かった。

　そいつに初体験奪われた報告何人目かなぁ……」

\n<鈴>「かっこいいから仕方ないよ。

　あと……すごく上手だったし……」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「初体験……？」

\n<晴太>「え、えっと、違うからね！？

　僕はそんな話を聞いてたわけじゃなくて！」

\n<若菜>「なんの初体験なんだろう？

　鈴先輩嬉しそうだし、わたしもしてみたいなぁ」

立ち絵\_服\_笑顔

\n<若菜>「それでね、ママがすごく笑っちゃって。

　ママは足の裏をくすぐられると弱いの」

\n<晴太>「そうなんだ。

　それじゃあ、ひょっとして若菜もそうなんじゃない？」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「わたしはそんなに弱くないよぉ。

　自分でくすぐってもなんとも思わないもん」

\n<晴太>「自分でやっても分からないよ。

　ほら、僕がくすぐってみるから足出して」

立ち絵\_服\_気まずい

\n<若菜>「う、うん……なんだか緊張するね」

\n<晴太>「それじゃあ、くすぐるからね……こちょこちょ！」

立ち絵\_服\_照れ

\n<若菜>「ぷ……っく、ふふふ……！」

立ち絵\_服\_驚き

\n<若菜>「あはははは！　は、ハルタ……くすぐったいよ！」

\n<晴太>「やっぱり若菜も敏感だったね！　これもどうだ！」

\n<若菜>「ふはははは、も、もうダメ……！

　お、おしっこ漏れちゃうから……あはははは！」

\n<晴太>「そんなこと言って逃げようとしても無駄だぞ！」

\n<若菜>「くふふふふ、ほ、ホント……ホントだから！

　あはははは、ハルタぁ、もう許して……ふふふふ！」

\n<晴太>「しょうがないなぁ。これくらいで許してあげよう！」

立ち絵\_服\_気まずい

\n<若菜>「はぁはぁはぁ……参りました……

　ちょっと、おトイレ行ってくるね……」

\n<晴太>「本当にトイレ行きたかったんだ……

　やめておいて良かった……」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「ハルタ。これあと少しだから食べちゃうね」

\n<晴太>「ん？　わかんないけど、若菜の好きにしていいよ」

立ち絵\_服\_困り

\n<若菜>「うぇ～。これ苦いよ、ハルタ」

\n<晴太>「苦いものなんてあったかな？」

立ち絵\_服\_困り

\n<若菜>「これだよこれ。冷蔵庫に入ってた、とろろ。

　なんだか苦い味がするよ？」

\n<晴太>「とろろ？　そんなの最近食べてな……あっ！」

立ち絵\_服\_驚き

\n<若菜>「ど、どうしたの！？」

\n<晴太>\}「それ……冷蔵庫に入れておいた僕の精子かも……

　ティッシュが無い時にお皿に出したやつだ……」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「ん？　なにか言った？」

\n<晴太>「な、なんでもないよ！

　そ、それより全部飲んじゃったの……？」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「え？　う、うん……

　すごく少なかったから……」

\n<晴太>「そ、そっか……あはは……

　若菜が……僕のを……」

立ち絵\_服\_困り

\n<若菜>「変なハルタ」

\n<晴太>「新しいお菓子屋さんがこの辺りにあるの？」

立ち絵\_服\_笑顔

\n<若菜>「うん。そのはずだよ。

　楽しみだなぁ……どんなお菓子が置いてあるんだろう？」

立ち絵\_服\_目閉じ

\n<若菜>「きっと、お店もすごく可愛いんだろうなぁ」

立ち絵\_服\_笑顔

\n<若菜>「ひょっとして、ここじゃないかな？

　ほら、お城っぽくてかわいいもん」

\n<晴太>「こ、ここじゃないよ！」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「そうなの？

　ハルタはここがなんのお店か知ってるの？」

\n<晴太>「そ、それは……その……

　と、とにかくここじゃないの！」

\n<若菜>「ふぅん、そうなんだ。

　じゃあ、ハルタのこと信じてみるね」

立ち絵\_服\_笑顔

\n<若菜>「今度こそ、絶対にここだよ！

　流石、ハルタだね！」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「お待たせ……って、どうかしたの？」

\n<晴太>「いま、多目的トイレからカップルが出てきて……」

\n<晴太>「それって、その……

　つまり、そういうことしてたってことだよね……」

\n<若菜>「なに言ってるの、ハルタ。当然だよ。

　むしろ、それ以外にすることってあるの？」

\n<晴太>「わ、若菜ってば、そんなはっきり……」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「ハルタこそ、なにを恥ずかしがってるの？

　トイレにいたんだから、用を足してたに決まってるよ」

\n<晴太>「まあ、そうだろうと思ったよ……

　若菜はそういうこと知らなそうだし……」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「そういうこと？」

\n<晴太>「な、なんでもないよ！

　若菜はまだ子どもだなって話！」

立ち絵\_服\_困り

\n<若菜>「あ～、また子ども扱いした……ハルタのばか」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「お祭りは見てるだけでも楽しいね。

　ハルタもそう思わない？」

\n<晴太>「うん」

立ち絵\_服\_目閉じ

\n<若菜>「せっかくだし、浴衣着てくれば良かったなぁ」

\n<晴太>「浴衣……ってことは、パンツを履かないんだよね？」

立ち絵\_服\_困り

\n<若菜>「パンツは履くに決まってるでしょ！

　もう、ハルタのばか。えっち！」

\n<晴太>「ご、ごめん……」

立ち絵\_服\_笑顔

\n<若菜>「見て見て、ハルタ。フランクフルトがあるよ！

　わたし、あれ食べようかなぁ」

\n<晴太>「若菜ってそんなにフランクフルト好きだったっけ？」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「うん。大好き」

\n<晴太>「それじゃあ、僕が買ってきてあげるよ。

　神社の辺りで待っててくれる？」

立ち絵\_服\_笑顔

\n<若菜>「ほんと？　ありがとう。

　それじゃあ、場所取りは任せてね」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「神社の奥は人がいなさそう。

　穴場見つけちゃったかも」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「こんなところに制服……？」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「なんでだろう……？

　それに、なんだか変な音もするし……」

\n<晴太>「若菜、おまたせ……って、どうかしたの？」

立ち絵\_服\_笑顔

\n<若菜>「あっ、ハルタ。

　あのね、そこに女の子の制服が落ちてて……」

\n<晴太>「本当だ……なんでだろう？」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「ごめんね、絆創膏探すの手伝ってもらっちゃって」

\n<晴太>「いいよいいよ。

　でも、料理上手の若菜のママが包丁でケガするなんてね」

\n<若菜>「あはは。ママはおっちょこちょいなの」

\n<晴太>「若菜とそっくりだもんね」

\n<若菜>「ええ～、そうかなぁ？

　でも、ママみたいになりたいから嬉しいよ」

\n<若菜>「コンビニで絆創膏を買うなんて初めてだなぁ。

　どこに置いてあるんだろう……？」

\n<晴太>「僕も見たことないなぁ……」

\n<晴太>「あっ、あそこじゃない？」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「本当だ、絆創膏置いてあったよ。

　流石ハルタだね」

\n<晴太>「へへ、それほどでも……な、い……」

\n<晴太>「こ、ここ……コンドームも売ってる……！」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「ハルタはなにを見てるの……？

　えーっと……０．０２？」

\n<晴太>「ち、ちがっ、これはその……！」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「その……０．０２っていうの初めて見たよ。

　ハルタは使ったことあるの？」

\n<晴太>「な、ないよ……！」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「そうなんだ……？」

立ち絵\_服\_困り

\n<若菜>「ハルタぁ、危ないよぅ……！」

\n<晴太>「大丈夫大丈夫。ほら、若菜も来てみなよ」

\n<若菜>「で、でも……！」

\n<晴太>「大丈夫だって。

　落ちそうになったら助けてあげるから」

\n<若菜>「ぜ、絶対だからね……？」

立ち絵\_服\_困り

\n<若菜>「はぁ……怖かっ――きゃあ！」

立ち絵\_服\_気まずい

\n<若菜>「えへへ……ちょっとの風なのにすごく驚いちゃった。

　……あれ、ハルタ？」

\n<晴太>「な、何も見てない！

　若菜のパンツなんて見てないから！」

立ち絵\_服\_照れ

\n<若菜>「パンツ……？」

立ち絵\_服\_驚き

\n<若菜>「は、ハルタのばか！　えっち！

　ぱ、パンツ見るなんて……えっちだもん！」

\n<晴太>「み、見たくて見たんじゃないよ！

　わ、若菜が勝手に……」

\n<若菜>「うう……ばかー！」

\n<晴太>「神社の裏に忍び込むなんていつぶりだろう？」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「ずっと前だよね。神主さんに怒られたっけ」

\n<晴太>「へへん。

　もう大きくなったから、絶対に見つからないもんね」

立ち絵\_服\_気まずい

\n<若菜>「今見つかっちゃったら、

　子どもっぽいって怒られちゃうかもね」

\n<晴太>「大丈夫だって。

　そうだ、池の裏まで回ってみようよ」

\n<晴太>「ここに来るのも本当に久しぶり。

　ここは若菜との思い出の場所だもんね」

立ち絵\_服\_気まずい

\n<若菜>「あんなの思い出じゃないよ。

　ハルタと一緒に池に落っこちちゃっただけだもん」

\n<晴太>「それでも大事な思い出なの！」

立ち絵\_服\_照れ

\n<若菜>「そう言ってくれるのは……ちょっと嬉しいかも。

　えへへ……」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「あそこでうろうろしてる人……

　なにか困ってるのかな？」

\n<晴太>「気になるの？

　それじゃあ、声かけに行ってみようか」

\n<若菜>「うん。ありがとうね」

立ち絵\_服\_笑顔

\n<若菜>「どうかしましたか？」

\n<スカウト>\{「キミだ！」

立ち絵\_服\_驚き

\n<若菜>「えっ！？」

\n<スカウト>「キミのような逸材を探していたんだ！

　どうかな、グラビアとか興味ない？」

\n<若菜>「ぐ、グラビア！？　それって……えっちな……」

\n<スカウト>「全然そんなことないって！

　水着姿をちょ～っとポーズ取って撮らせてくれればいいから」

立ち絵\_服\_困り

\n<若菜>「で、でも……」

\n<スカウト>「すぐ終わるから！　それにお金もいっぱい出すよ？

　ね？　いまならマッサージも無料でしてあげるからさ！」

\n<若菜>「うう……ハルタぁ……」

\n<晴太>「若菜のグラビア……」

立ち絵\_服\_驚き

\n<晴太>「ハルタのばかぁ！」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「ふぅ……宿題ももう少しだよ。

　ハルタはちゃんと進んでる？」

\n<晴太>「え？　えーっと、あはは……」

立ち絵\_服\_困り

\n<若菜>「もう。今日で夏休み終わりってわかってるのかなぁ」

\n<若菜>「ハルタってばいつもそうなんだから。

　もう夏休みもあと少しなんだよ？」

\n<晴太>「分かってるって。だから、ほら！

　ちゃんと今だって宿題してるでしょ？」

立ち絵\_服\_気まずい

\n<若菜>「保健体育……？

　そんな宿題出てたっけ？」

\n<晴太>「え？」

\n<晴太>「しゅ、宿題だけじゃなくて、

　普通に勉強するのも大事なことなんだから！」

立ち絵\_服\_気まずい

\n<若菜>「間違えちゃってたんだね……」

\n<晴太>「ち、違うよ！　宿題以外の勉強をしてただけだよ！

　じゃあ、若菜に問題ね！」

\n<若菜>「え？　う、うん……」

\n<晴太>「あ、赤ちゃんを作る行為をなんと言うでしょう！」

立ち絵\_服\_驚き

\n<若菜>\{「えっ！？」

\n<晴太>「なになに、若菜分からないの？

　ダメだなぁ、ちゃんと勉強はしないと」

立ち絵\_服\_困り

\n<若菜>「違うもん……知ってるもん……」

\n<晴太>「それじゃあちゃんと言ってみてよ」

立ち絵\_服\_気まずい

\n<若菜>「えっと……せ……せっく……」

\n<晴太>「ほら、ほら！」

立ち絵\_服\_困り

\n<若菜>「うう……ハルタのいじわるぅ……」

\n<晴太>「若菜って将来の夢とかあるの？」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「将来の夢かぁ……

　小さい頃は考えてたけど、今は特にないなぁ」

\n<晴太>「あっ、思い出した。

　文集に可愛いお嫁さんとか書いてたよね？」

立ち絵\_服\_気まずい

\n<若菜>「そんなこと思い出さなくてもいいよぉ。

　すごく小さい頃の話でしょ。今は違うもん」

\n<晴太>「じゃあ、なんなの？」

立ち絵\_服\_目閉じ

\n<若菜>「う～んとね……楽しいことがしたいかなぁ」

\n<晴太>「楽しいこと？」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「うん。嫌なこととかじゃなくてね、

　ずっと気持ち良くいられるようなことがいい」

\n<晴太>「若菜はわがままだなぁ。

　大人になったらそんなこと言ってられないよ」

立ち絵\_服\_笑顔

\n<若菜>「でも、それがいいんだもん。

　ずっと気持ち良くいられたらいいなぁ」

立ち絵\_服\_目閉じ

\n<若菜>「ふぅ……紅茶も美味しいね」

\n<晴太>「そうだね。何杯でも飲めちゃいそう」

\n<若菜>「こんな美味しいのがわたしでも淹れられたらなぁ……」

立ち絵\_服\_笑顔

\n<若菜>「そうだ。ここでバイトしてみようかな」

\n<晴太>「若菜がバイト？

　あはは、ちゃんとできるの？」

立ち絵\_服\_困り

\n<若菜>「もう、なんでそういうこと言うのかなぁ」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「プール気持ちよさそうだね。

　わたしも水着持って来ればよかったなぁ」

\n<晴太>「練習の邪魔になるからダメだよ。

　若菜ってば、僕より泳げないんだから」

立ち絵\_服\_目閉じ

\n<若菜>「はしっこでプカプカ……気持ちいい……」

\n<晴太>「そういえば、若菜は部活とか入らないの？」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「部活かぁ。今は特にやりたいこともないなぁ」

\n<若菜>「家にいるほうが楽しいもん。

　やっぱり帰宅部はやめられないよ」

\n<若菜>「それより、ハルタこそ部活はしないの？

　入学する前はあれほど入りたいって言ってたのに」

\n<晴太>「それは……若菜と同じ部活に入ろうと思ってたから……」

立ち絵\_服\_気まずい

\n<若菜>「あ～、それは悪いことしちゃったかな……」

立ち絵\_服\_目閉じ

\n<若菜>「図書館って良い匂いするよね……

　わたし、この匂い大好き」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「これってなんの匂いなんだろう？

　紙の匂いかな……？」

\n<晴太>「インクの匂いじゃないの？」

\n<若菜>「まあ、なんの匂いかはともかく。

　本当に落ち着く……家も本でいっぱいにしちゃおうかな」

\n<晴太>「そんなことしたら飽きるよ。

　たまに嗅ぐからいいんじゃない？」

\n<若菜>「ええ～、いつ嗅いでも絶対に良いよぉ」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「バス来ないねぇ」

\n<晴太>「そうだね。遅れるなんて珍しいなぁ」

立ち絵\_服\_目閉じ

\n<若菜>「でも、こういうの好き。

　雨降りのバス停ってちょっとロマンチックだもん」

\n<晴太>「今は降ってないけどね」

立ち絵\_服\_困り

\n<若菜>「もう。こういうのは想像が大事なの」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「ハルタも一緒に想像してみようよ。

　ほら、目を閉じて……」

\n<晴太>「それって絶対閉じなきゃいけないの？」

\n<若菜>「ぜったいだよ。

　ほら、目を閉じて……いくよ……？」

立ち絵\_服\_目閉じ

\n<若菜>「バス停で好きな人と二人……

　いつまで経ってもこないバス……思い浮かんでる？」

\n<晴太>「……それなら、なおさら目を閉じなくても……」

立ち絵\_服\_目閉じ

\n<若菜>「うん？　なにか言った？」

立ち絵\_服\_笑顔

\n<若菜>「じゃあ……キャラメル」

\n<晴太>「る、るるる……」

\n<晴太>「もう思いつかないや……

　本当に若菜はしりとり強いよね」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「えへへ……得意だもん」

\n<晴太>「でも、もう勝ち方は分かったよ！

　『る』で終わる言葉で攻めればいいんでしょ」

\n<若菜>「言ったね、ハルタ。

　それじゃあもう一回やってみよっか」

\n<晴太>「る、るるる……！」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「いっぱい『る』出たね。

　わたしももうあんまり思いつかないよ」

\n<晴太>「ここまで若菜を追い込んだのに……

　あともう一つ『る』で返せたら……」

\n<晴太>「きた！　ルーブル！」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「ルール」

\n<晴太>「る、るるる……」

\n<晴太>「ダメだ……ま、参りました……」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「えへへ……どんなもんだい」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「このアイス美味しそう……

　あっ、こっちのアイスも良いかも」

\n<晴太>「若菜ってば、いつまで悩んでるの」

立ち絵\_服\_笑顔

\n<若菜>「だってどれも美味しそうなんだもん。

　なんでこんなに新しいのたくさん出るのかなぁ」

立ち絵\_服\_目閉じ

\n<若菜>「でも、こんなにあって幸せだよ。

　ああ、全部食べられたらいいのになぁ」

\n<晴太>「若菜って意外と食いしん坊だよね」

立ち絵\_服\_気まずい

\n<若菜>「そんなことないもん。

　美味しそうなのがいっぱいあるせいだもん」

立ち絵\_服\_目閉じ

\n<若菜>「ん～、少し涼しくなってきたよ」

\n<晴太>「そろそろ夏も終わりだもんね。

　つまり、夏休みももう……」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「あと数時間で終わりだねぇ」

\n<若菜>「あと少しで終わっちゃうねぇ」

\n<晴太>「そんなの嫌だぁ！

　ずっと夏休みにだったらいいのに！」

\n<若菜>「え～？　そんなの嫌だよ。

　だって友達と一緒にいられないもん」

\n<晴太>「ずっと休みなんだよ？

　絶対にそっちのほうがいいって」

\n<若菜>「そんなのつまんないよ。

　わたしは早く学校始まって欲しいなぁ」

\n<晴太>「……若菜って変わってるよね」

\n<若菜>「そうかなぁ？

　きっとハルタにもいつか分かる時が来るよ」

立ち絵\_服\_目閉じ

\n<若菜>「ふぅ……宿題終わったぁ……！

　今年は時間かかっちゃったなぁ」

立ち絵\_服\_照れ

\n<若菜>「宿題って段々多くなるし難しくなるよね。

　ハルタは順調に進んでる――」

立ち絵\_服\_気まずい

\n<若菜>「――わけ、ないよね……」

\n<晴太>「ま、まだ本気出してないだけ！

　やろうと思えばなんだって出来るんだから！」

\n<晴太>「そ、そもそもだよ！？

　夏休みの宿題なんて最終日に全部やるものなの！」

\n<晴太>「というか、僕と若菜ずっと一緒に遊んでたのに、

　なんで若菜は終わってるの！？」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「ずっとって言っても、ずっと一緒なわけじゃないもん。

　夕方とか夜はちゃんと宿題してたよ」

\n<晴太>「わ、若菜の裏切り者～！」

\n<若菜>「やらなかったのはハルタのせいでしょ。

　わたしを悪者にしないでよ」

\n<晴太>「うっ！」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「ほら、もう。そんなに落ち込まないで。

　ちゃんと宿題なら写させてあげるから」

\n<晴太>「ほ、ホントに！？」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「うん。もちろんだよ。

　その代わり、お菓子ちょうだいね」

立ち絵\_服\_目閉じ

\n<若菜>「今日で夏休みも終わっちゃうね」

\n<晴太>「ホントあっという間だったよ」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「うん。でも、わたしはすごく楽しかったよ。

　だって毎日ハルタと遊べたんだもん」

立ち絵\_服\_笑顔

\n<若菜>「毎日誘ってくれてありがとう。

　とっても素敵な夏休みだったよ」

\n<晴太>「若菜……」

\n<晴太>「僕も……僕もすごく楽しかったよ！

　若菜と二人だったから楽しかった！」

\n<晴太>「だから……これからもずっと二人で遊ぼうね」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「ハルタ……」

立ち絵\_服\_目閉じ

立ち絵\_服\_笑顔

\n<若菜>「うん。約束だよ！」

流れ

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

告白しようとするも勇気が出なくて失敗。

立ち絵\_服\_目閉じ

\n<若菜>「夏はこんなにも暑いのに、ここは涼しいねぇ……」

\n<晴太>「そ、そうだね！」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「それで、今日はどうしたの？」

\n<晴太>「えっ？」

立ち絵\_服\_困り

\n<若菜>「えっ、じゃないよぉ。

　わたしに大事な話があるんでしょ？」

\n<晴太>「えーっと、それは……その……」

\n<晴太>「わ、若菜に……その、言いたいことがあって！」

\n<晴太>「ぼ、僕……その、若菜のことを……ずっと……」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「ずっと……？」

\n<晴太>「若菜のことを……す、すすす……」

\n<晴太>「ストロベリーに似てると思ってたんだ！」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「ストロベリー……？

　わたしがイチゴに似てるってこと……？」

\n<晴太>「そ、そう！

　ほら、若菜ってすぐに顔が赤くなるからさ」

立ち絵\_服\_気まずい

\n<若菜>「……大事な話ってそれなの？」

\n<晴太>「そ、そうだよ？」

\n<若菜>「……そっかぁ。なんだ。

　もっと大事な話だと思っちゃってたよ」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「それじゃあ、大事な話も終わったことだし帰るね。

　バイバイ、ハルタ」

\n<晴太>\{「僕のバカー！」

流れ

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

告白しようとするも邪魔が入って失敗。

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「それで、今日の大事な話はなにかな？

　もう、いちごに似てるとか言わないよね？」

\n<晴太>「あはは、まさか……

　本当にもっと大事な話だよ！」

\n<若菜>「それじゃあ、その大事な話を聞かせてもらおうかな」

\n<晴太>「う、うん……それじゃあ、笑わないで聞いてね？」

\n<若菜>「うん」

\n<晴太>「ぼ、僕は……若菜のことが――！」

\n<男の子>\{「あっ！」

\n<男の子>「おねーちゃーん！　ボールとってー！」

立ち絵\_服\_笑顔

\n<若菜>「よ～し、いくよ～！　それ！」

\n<男の子>「ありがとー！」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「ボール蹴ったのなんて久しぶりだよ。

　ごめんね、話の途中に。それじゃあ続きをどうぞ」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「ハルタ？」

\n<晴太>「や、やっぱりなんでもないです……」

流れ

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

告白成功。

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「今度はどんな大事な話なの？

　楽しみにしてきたから、面白いのにしてね」

\n<晴太>「だから、そういうのじゃなくて……

　今日こそ本当に大事な話があるの！」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「ふ～ん……そうなんだ。

　そういえば、大事な話をするときは毎回ここだね」

\n<晴太>「それは、その……

　ここが、若菜との大事な思い出の場所だから……」

立ち絵\_服\_気まずい

\n<若菜>「ここって、そんな場所だっけ……？

　確かによく一緒にここで話すけど、大事な思い出って……」

\n<晴太>「だって、若菜と一番一緒にいるのがここだから。

　特別なことは無くても、大事な思い出の場所なの！」

立ち絵\_服\_照れ

\n<若菜>「ハルタ……」

立ち絵\_服\_目閉じ

\n<若菜>「うん……そうだね。そうだよね」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「ハルタと一緒にいた時間は全部大事な思い出だよね。

　ハルタに教えられちゃった。いつもはわたしが教えてるのに」

\n<晴太>「そ、そんなこと！

　……は、あるかも、だけど……そんなことより！」

\n<晴太>「わ、若菜！　大事な話があるんだ！

　ぼ、僕は、ずっと……若菜のことが……！」

\n<晴太>\{「若菜のことが好きでした！

　僕と付き合ってください！」

立ち絵\_服\_驚き

\n<若菜>「えっ、ええっ、えええええええええっ！？」

\n<晴太>「そんなに驚かなくても……」

立ち絵\_服\_気まずい

\n<若菜>「お、驚くよ！

　だ、だって……ハルタも同じ気持ちだったなんて……」

\n<晴太>「お、同じ気持ちって……それじゃあ、若菜も……？」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「う、うん……」

\n<晴太>「そ、それじゃあ……！」

立ち絵\_服\_照れ

\n<若菜>「ハルタとなら……付き合ってもいいよ……？」

\n<晴太>\{「やったああああああ！」

立ち絵\_服\_気まずい

\n<若菜>「そんなに喜んでくれるんだ……」

\n<晴太>「もちろんだよ！　人生で一番嬉しいよ！」

立ち絵\_服\_照れ

\n<若菜>「そ、そう……？

　それならわたしも嬉しいな……えへへ」

\n<晴太>「それにしても、若菜と両想いだったなんて。

　こんなことなら早く告白すれば良かったなぁ」

立ち絵\_服\_困り

\n<若菜>「もう、そんなこと言わないで。

　雰囲気が壊れちゃうよ」

立ち絵\_服\_目閉じ

\n<若菜>「でも、うん……そっか。

　ハルタもわたしのこと好きだったんだ……」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「せっかく恋人同士になったんだから、

　今までの関係じゃ出来なかったこと、た～くさんしようね」

\n<晴太>「そ、それってエッチなこととか……！？」

立ち絵\_服\_驚き

\n<若菜>「もうハルタのバカ！

　なんでそういうこと言うの！」

\n<晴太>「だ、だってせっかく若菜と恋人になれたんだから、

　若菜のこと全部知りたいんだ！」

立ち絵\_服\_困り

\n<若菜>「で、でもそういうのには順序が……

　でも……そんなにハルタがしたいなら……」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「少しだけ、エッチなこともしてあげる。

　だって、もう……その……恋人なんだもんね？」

窓

オナニーに気づいたり、間接キスに照れなくなったり。

なんかそういうのいっぱいちょうだい！

部活。好きなもの。バイト。好きなこと。

夏祭りとか大規模イベント。

宿題、日曜日、我慢

立ち絵\_服\_目閉じ

\n<若菜>「ん～、美味しい～♪」

\n<晴太>「若菜は本当にケーキが好きだね」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「ケーキも好きだけど、このお店が好きなの。

　だって、すごく可愛いんだもん♪」

\n<若菜>「それに――」

立ち絵\_服\_笑顔

\n<若菜>「ケーキもこんなに美味しいもん♪

　本当にハルタは食べなくていいの？」

\n<晴太>「僕は甘いもの苦手だから」

立ち絵\_服\_困り

\n<若菜>「そっかぁ……もぐもぐ」

立ち絵\_服\_笑顔

\n<若菜>「ハルタハルタ！

　これ甘くないけどすご～く美味しいよ！」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「ねえ、一口食べてみない？」

\n<晴太>「それじゃあ、一口だけ」

\n<若菜>「うん。はい、あ～ん♪」

\n<晴太>「あーん……もぐもぐ。うん、美味しい！」

立ち絵\_服\_笑顔

\n<若菜>「えへへ、良かったよ。

　それじゃあ、もう一口あげるね」

\n<若菜>「はい、あ～ん♪」

\n<晴太>「あーん……若菜が好きになるのも分かるなぁ」

\n<若菜>「そうでしょ？　じゃあ、わたしもいただきま～す」

\n<若菜>「うん。やっぱりすごく美味しいよ！」

\n<晴太>「健介に教えてもらったエロ動画……すごい……

　こんなにエッチなの見たことない……！」

\n<晴太>「はぁはぁ……」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「ハルタ、遊びに来たよ～」

\n<晴太>「わ、若菜……！？」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「おはよう、ハルタ。ちょっと早く来ちゃった。

　……あれ、何かしてたの……？」

\n<晴太>「な、なにもしてないよ！　なにも！」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「そうなんだ……？

　それじゃあ、おじゃましま～す」

\n<晴太>「ちょ、ちょっと待って！

　まだ部屋に入ってこないで！」

立ち絵\_服\_気まずい

\n<若菜>「やっぱり、何かあったの？」

\n<晴太>「な、なんでもない！　本当になんでもないよ！

　でも、ちょっとだけタイミングが悪いというか……」

立ち絵\_服\_困り

\n<若菜>「どういうことなの……？

　それより、なんでハルタはこっち向いてくれないの？」

立ち絵\_服\_目閉じ

\n<若菜>「くんくん……

　なんだかこの部屋……変わった匂いがするね……」

立ち絵\_服\_気まずい

\n<若菜>「あれ……この匂いって……」

\n<晴太>「そ、そうかな？

　いつもと変わらないけどなぁ……あはは」

\n<若菜>「えっ？　そ、そうなんだ！　へぇ……」

立ち絵\_服\_気まずい

\n<若菜>「じゃ、じゃあ……

　わたしちょっと部屋の前で待ってるね！」

\n<晴太>「う、うん！」

\n<晴太>「今のうちにズボン履いて、

　後片付けしておかないと……！」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「ねぇ、ハルタ。好きな人っているの？」

\n<晴太>「す、好きな人……！？

　えーっと、それは……その……」

立ち絵\_服\_照れ

\n<若菜>「なんでそんなに慌ててるの？」

\n<晴太>「あ、慌ててなんかないよ！

　そ、それより若菜はどうなの？」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「わたし？」

立ち絵\_服\_目閉じ

\n<若菜>「わたしが好きなのはね……」

立ち絵\_服\_笑顔

\n<若菜>「もちろん……ハルタだよ」

\n<晴太>「えっ！？　そ、それって……！」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「あとは……パパとママと、おじいちゃんとおばあちゃん。

　それとペットのペスと、お友達の由美ちゃんと薫ちゃんと――」

立ち絵\_服\_笑顔

\n<若菜>「――あとは、おちん……」

\n<晴太>「おちん？　おちんってなに？」

立ち絵\_服\_気まずい

\n<若菜>「な、なんでもないよ！　えへへ……」

\n<晴太>「そっか。それより、訊きたいのはそういうのじゃないよ。

　若菜ってば子どもだなぁ」

\n<若菜>「えへへ……ご、ごめんね……」

\n<晴太>「あそこにいるの、陸也先輩だ」

立ち絵\_服\_照れ

\n<若菜>「あ……うん。本当だね」

\n<晴太>「若菜、どうかしたの？」

立ち絵\_服\_気まずい

\n<若菜>「う、ううん。なんでもないよ……なんでも……」

\n<晴太>「そう？」

\n<陸也>「おっ、若菜ちゃんじゃん」

立ち絵\_服\_照れ

\n<若菜>「お、おはようございます……先輩」

\n<晴太>「おはようございます、陸也先輩！」

\n<陸也>「誰だお前……って、どうでもいいか。野郎なんて。

　じゃあね、若菜ちゃん。また今度」

\n<晴太>「若菜って陸也先輩と知り合いだったの？」

立ち絵\_服\_気まずい

\n<若菜>「え、えーっと、その……

　この前たまたま図書室で会ったんだ……」

\n<晴太>「へぇ、そうだったんだ。

　僕も先輩と知り合いになりたかったなぁ」

\n<晴太>「そうだ！

　良かったら若菜が先輩を僕に紹介してよ！」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「うん……先輩に話してみるね」

\n<可鈴>\{「マジで！？」

\n<鈴>「ちょっと、可鈴ってば声が大きいよ」

\n<可鈴>「だってだって、うちの鈴がぁぁ！

　鈴だけは綺麗でいて欲しかったのにぃぃ！」

\n<鈴>「もう、可鈴ってば大げさだなぁ。

　私達の歳なら初体験なんて済ませて当然でしょ？」

\n<可鈴>「そ、それはそうだけどさぁ……

　でもでも、鈴の処女はうちがもらう予定だったのに！」

\n<鈴>「うっわぁ、可鈴ってばそんな目で私を見てたんだ。

　やらし～、けだものだ～！」

\n<可鈴>「ふふふ……今さら気付いても遅いんだよね～！

　１０人の童貞と２人の処女を奪ったうちのテクをくらえー！」

\n<鈴>「あはははは、きゃああ、襲われちゃう～！」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「ハルタ。どうかしたの？」

\n<晴太>「な、なんでもないよ！　なんでも！」

立ち絵\_服\_照れ

\n<若菜>「なんだか怪しい気配がするよ……

　ハルタ、なにか隠してるでしょ……後ろかな？」

\n<晴太>「あっ、ちょっと！」

立ち絵\_服\_笑顔

\n<若菜>「あ、鈴先輩だ！

　かわいいなぁ……なんの話をしてるんだろう？」

\n<可鈴>「てか、うちの大事な鈴の初体験奪ったのって誰なの？

　半端な奴だったら怒るからね？」

\n<鈴>「もう、可鈴ったら過保護なんだから。

　ほら、同級生のサッカー部の……」

\n<可鈴>「あー、もういい。分かった分かった。

　そいつに初体験奪われた報告何人目かなぁ……」

\n<鈴>「かっこいいから仕方ないよ。

　あと……すごく上手だったし……」

立ち絵\_服\_気まずい

\n<若菜>「初体験……鈴先輩が、そんな話を……」

\n<晴太>「え、えっと、違うからね！？

　僕はそんな話を聞いてたわけじゃなくて！」

\n<若菜>「う、うん……あはは……」

立ち絵\_服\_笑顔

\n<若菜>「それでね、ママがすごく笑っちゃって。

　ママは足の裏をくすぐられると弱いの」

\n<晴太>「そうなんだ。

　それじゃあ、ひょっとして若菜もそうなんじゃない？」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「わたしはそんなに弱くないよぉ。

　自分でくすぐってもなんとも思わないもん」

\n<晴太>「自分でやっても分からないよ。

　ほら、僕がくすぐってみるから足出して」

立ち絵\_服\_気まずい

\n<若菜>「う、うん……なんだか緊張するね」

\n<晴太>「それじゃあ、くすぐるからね……こちょこちょ！」

立ち絵\_服\_照れ

\n<若菜>「んっ……あ、えっ、んん……！」

立ち絵\_服\_困り

\n<若菜>「ちょっ、ハルタ……これ、やめ……んんっ！」

\n<晴太>「やっぱり若菜も敏感だったね！　これもどうだ！」

\n<若菜>「んんっ、だめ……ハルタ、それ以上は……

　敏感……だから、んはぁ、おしっこ漏れちゃう……！」

\n<晴太>「そんなこと言って逃げようとしても無駄だぞ！」

\n<若菜>「ほ、ホント……ホントだから……んあ……

　やめっ、ハルタぁ、もう許して……んんっ！」

\n<晴太>「しょうがないなぁ。これくらいで許してあげよう！」

立ち絵\_服\_気まずい

\n<若菜>「はぁはぁはぁ……んっく、はぁ……

　ちょ、ちょっと、おトイレ行ってくるね……」

\n<晴太>「本当にトイレ行きたかったんだ……

　やめておいて良かった……」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「ハルタ。これあと少しだから食べちゃうね」

\n<晴太>「ん？　わかんないけど、若菜の好きにしていいよ」

立ち絵\_服\_気まずい

\n<若菜>「こ、これって……」

\n<若菜>\}「この味って絶対にザーメンだよね……

　なんでハルタの冷蔵庫に……」

\n<晴太>「どうかしたの？」

立ち絵\_服\_驚き

\n<若菜>「えっ！？　えーっとね、その……

　冷蔵に入ってた、とろろをね……食べたの……」

\n<晴太>「とろろ？　そんなの最近食べてな……あっ！」

立ち絵\_服\_驚き

\n<若菜>「ど、どうしたの！？」

\n<晴太>\}「それ……冷蔵庫に入れておいた僕の精子かも……

　ティッシュが無い時にお皿に出したやつだ……」

立ち絵\_服\_気まずい

\n<若菜>\}「聞こえちゃってるよ、ハルタ！

　どうしよう……知らないふりしないと！」

\n<若菜>「えっと……ん、うん？　な、なにか言った？」

\n<晴太>「な、なんでもないよ！

　そ、それより全部飲んじゃったの……？」

立ち絵\_服\_驚き

\n<若菜>「え？　う、うん……

　えっと、その……美味しかったから……」

\n<晴太>「そ、そっか……あはは……

　若菜が……僕のを……」

立ち絵\_服\_照れ

\n<若菜>「ハルタの……えへへ……」

\n<晴太>「新しいお菓子屋さんがこの辺りにあるの？」

立ち絵\_服\_笑顔

\n<若菜>「うん。そのはずだよ。

　楽しみだなぁ……どんなお菓子が置いてあるんだろう？」

立ち絵\_服\_目閉じ

\n<若菜>「きっと、お店もすごく可愛いんだろうなぁ」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「あれ……ここって……」

\n<晴太>「若菜、どうかしたの？」

立ち絵\_服\_気まずい

\n<若菜>「えっ、ううん！　なんでもない……えへへ……」

\n<晴太>「なんか様子が変だよ？　なにかあるの？」

\n<晴太>「こ、ここって……！」

\n<晴太>「そ、それじゃあ行こうか……！」

立ち絵\_服\_気まずい

\n<若菜>「う、うん……そうだね……」

立ち絵\_服\_気まずい

\n<若菜>「こ、ここだね……

　えへへ、見つかって良かった……」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「お待たせ……って、どうかしたの？」

\n<晴太>「いま、多目的トイレからカップルが出てきて……」

\n<晴太>「それって、その……

　つまり、そういうことしてたってことだよね……」

\n<若菜>「多目的トイレからカップル……？」

立ち絵\_服\_気まずい

\n<若菜>\}「それって……絶対にエッチなことだ……」

\n<晴太>「若菜……？」

立ち絵\_服\_気まずい

\n<若菜>「え？　えへへ……

　一緒に出てくるなんて、なんでなのかなぁって……」

\n<晴太>「まあ、そうだろうと思ったよ……

　若菜はそういうこと知らなそうだし……」

立ち絵\_服\_気まずい

\n<若菜>「う、うん……何も知らない……」

\n<晴太>「もう、本当に若菜はまだまだ子どもだなぁ」

\n<若菜>「そうだね……あはは……」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「お祭りは見てるだけでも楽しいね。

　ハルタもそう思わない？」

\n<晴太>「うん」

立ち絵\_服\_目閉じ

\n<若菜>「せっかくだし、浴衣着てくれば良かったなぁ」

\n<晴太>「浴衣……ってことは、パンツを履かないんだよね？」

立ち絵\_服\_困り

\n<若菜>「パンツは履くに決まってるでしょ！

　もう、ハルタのばか。えっち！」

\n<晴太>「ご、ごめん……」

立ち絵\_服\_笑顔

\n<若菜>「見て見て、ハルタ。フランクフルトがあるよ！

　わたし、あれ食べようかなぁ」

\n<晴太>「若菜ってそんなにフランクフルト好きだったっけ？」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「うん。大好き」

\n<晴太>「それじゃあ、僕が買ってきてあげるよ。

　神社の辺りで待っててくれる？」

立ち絵\_服\_笑顔

\n<若菜>「ほんと？　ありがとう。

　それじゃあ、場所取りは任せてね」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「神社の奥は人がいなさそう。

　穴場見つけちゃったかも」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「こんなところに制服……？」

立ち絵\_服\_気まずい

\n<若菜>「こ、この音……

　もしかして、誰かセックスしてるんじゃ……」

立ち絵\_服\_気まずい

\n<若菜>「でも……こんな人の多いところで……

　ちょっとだけ覗いてみよう……」

立ち絵\_服\_気まずい

\n<若菜>「陸也先輩と……鈴先輩！？

　鈴先輩も陸也先輩とそういう関係だったなんて……」

\n<陸也>「誰か覗いてると思ったら、若菜ちゃんじゃん」

立ち絵\_服\_困り

\n<若菜>「先輩……」

\n<陸也>「ちょっとこっち来てよ。

　もうコイツ、ギブっぽいからさぁッ！」

\n<鈴>「んおっ、ふぅンンッ……んふぁああ！」

立ち絵\_服\_困り

\n<若菜>「……鈴先輩とも、せ……セックスしてたんですね……」

\n<陸也>「おっ？　若菜ちゃんヤキモチ妬いてるの？

　かわいいじゃん」

\n<若菜>「そんな、違います……」

\n<陸也>「心配しなくても、コイツは遊びだよ遊び。

　俺の本命の便器は若菜ちゃんだけだから」

\n<若菜>「…………。

　それで、その……なんでわたしを呼んだんですか……？」

\n<陸也>「分かってるくせに。

　どうせ俺たちのセックス見て興奮しちゃったんでしょ？」

\n<若菜>「そんなこと……！」

\n<陸也>「まあ、断ってくれてもいいんだけどさ？

　その代わり……分かってるよね？」

\n<若菜>「……はい」

\n<晴太>「若菜、おまたせ……って、あれ？」

\n<晴太>「若菜どこに行ったんだろう？」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「お祭りは見てるだけでも楽しいね。

　ハルタもそう思わない？」

\n<晴太>「うん」

立ち絵\_服\_目閉じ

\n<若菜>「せっかくだし、浴衣着てくれば良かったなぁ」

\n<晴太>「浴衣……ってことは、パンツを履かないんだよね？」

立ち絵\_服\_困り

\n<若菜>「パンツは履くに決まってるでしょ！

　もう、ハルタのばか。えっち！」

\n<晴太>「ご、ごめん……」

立ち絵\_服\_笑顔

\n<若菜>「見て見て、ハルタ。フランクフルトがあるよ！

　わたし、あれ食べようかなぁ」

\n<晴太>「若菜ってそんなにフランクフルト好きだったっけ？」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「うん。大好き」

\n<晴太>「それじゃあ、僕が買ってきてあげるよ。

　神社の辺りで待っててくれる？」

立ち絵\_服\_笑顔

\n<若菜>「ほんと？　ありがとう。

　それじゃあ、場所取りは任せてね」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「神社の奥は人がいなさそう。

　穴場見つけちゃったかも」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「こんなところに制服……？」

立ち絵\_服\_気まずい

\n<若菜>「こ、この音……

　もしかして、誰かセックスしてるんじゃ……」

立ち絵\_服\_気まずい

\n<若菜>「でも……こんな人の多いところで……

　ちょっとだけ覗いてみよう……」

立ち絵\_服\_気まずい

\n<若菜>「陸也先輩と……鈴先輩！？

　鈴先輩も陸也先輩とそういう関係だったなんて……」

\n<陸也>「誰か覗いてると思ったら、若菜ちゃんじゃん」

立ち絵\_服\_困り

\n<若菜>「先輩……」

\n<陸也>「ちょっとこっち来てよ。

　もうコイツ、ギブっぽいからさぁッ！」

\n<鈴>「んおっ、ふぅンンッ……んふぁああ！」

立ち絵\_服\_困り

\n<若菜>「……鈴先輩とも、せ……セックスしてたんですね……」

\n<陸也>「おっ？　若菜ちゃんヤキモチ妬いてるの？

　かわいいじゃん」

\n<若菜>「そんな、違います……」

\n<陸也>「心配しなくても、コイツは遊びだよ遊び。

　俺の本命の便器は若菜ちゃんだけだから」

\n<若菜>「…………。

　それで、その……なんでわたしを呼んだんですか……？」

\n<陸也>「分かってるくせに。

　どうせ俺たちのセックス見て興奮しちゃったんでしょ？」

\n<若菜>「そんなこと……！」

\n<陸也>「じゃあ、その垂れてるのはなんなの？」

立ち絵\_服\_気まずい

\n<若菜>「そ、それは……」

\n<陸也>「いいじゃんいいじゃん、ちょっとくらいさぁ。

　それに、スリルあっていつもより気持ちいいよ？」

立ち絵\_服\_照れ

\n<若菜>「いつもより……気持ちいい……」

立ち絵\_服\_気まずい

\n<若菜>「せ、先輩は断ってもやってきますから……

　い、一回くらいなら我慢します……」

\n<陸也>「ホント素直じゃねーな。

　つか、若菜ちゃんが一回で我慢できるかっての」

\n<晴太>「若菜、おまたせ……って、あれ？」

\n<晴太>「若菜どこに行ったんだろう？」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「ごめんね、絆創膏探すの手伝ってもらっちゃって」

\n<晴太>「いいよいいよ。

　でも、料理上手の若菜のママが包丁でケガするなんてね」

\n<若菜>「あはは。ママはおっちょこちょいなの」

\n<晴太>「若菜とそっくりだもんね」

\n<若菜>「ええ～、そうかなぁ？

　でも、ママみたいになりたいから嬉しいよ」

\n<若菜>「コンビニで絆創膏を買うなんて初めてだなぁ。

　どこに置いてあるんだろう……？」

\n<晴太>「僕も見たことないなぁ……」

\n<晴太>「あっ、あそこじゃない？」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「本当だ、絆創膏置いてあったよ。

　流石ハルタだね」

\n<晴太>「へへ、それほどでも……な、い……」

\n<晴太>「こ、ここ……コンドームも売ってる……！」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「ハルタはなにを見てるの……？

　えーっと……０．０２？」

\n<晴太>「ち、ちがっ、これはその……！」

立ち絵\_服\_気まずい

\n<若菜>\}「ハルタのこの慌てよう……

　あれ……ひょっとして、ゴムってやつかも……」

\n<若菜>「そ、その……０．０２っていうの初めて見たよ。

　ハルタは使ったことあるの？」

\n<晴太>「な、ないよ……！」

\n<若菜>「そ、そう！　だよね……あはは……」

立ち絵\_服\_困り

\n<若菜>「ハルタぁ、危ないよぅ……！」

\n<晴太>「大丈夫大丈夫。ほら、若菜も来てみなよ」

\n<若菜>「で、でも……！」

\n<晴太>「大丈夫だって。

　落ちそうになったら助けてあげるから」

\n<若菜>「ぜ、絶対だからね……？」

立ち絵\_服\_困り

\n<若菜>「はぁ……怖かっ――きゃあ！」

立ち絵\_服\_気まずい

\n<若菜>「えへへ……ちょっとの風なのにすごく驚いちゃった。

　……あれ、ハルタ？」

\n<晴太>「な、何も見てない！

　若菜のパンツなんて見てないから！」

立ち絵\_服\_照れ

\n<若菜>「パンツ……？」

立ち絵\_服\_気まずい

\n<若菜>「えへへ……見えちゃってたんだ」

\n<晴太>「そ、それだけ……？」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「え？　う、うん……

　恥ずかしいけど、パンツくらい別にいいよ」

\n<晴太>「そ、そうなんだ……」

\n<晴太>「神社の裏に忍び込むなんていつぶりだろう？」

立ち絵\_服\_気まずい

\n<若菜>「えっ？　えーっと、その……ず、ずっと前だよね。

　確か……神主さんに怒られたっけ？」

\n<晴太>「へへん。

　もう大きくなったから、絶対に見つからないもんね」

立ち絵\_服\_照れ

\n<若菜>「今見つかっちゃったら、

　子どもっぽいって怒られちゃうかもね」

\n<晴太>「大丈夫だって。

　そうだ、池の裏まで回ってみようよ」

\n<晴太>「ここに来るのも本当に久しぶりだなぁ」

立ち絵\_服\_気まずい

\n<若菜>「あはは……そうだね。

　ハルタとは久しぶり……」

\n<晴太>「でも久しぶりに一緒に来れて良かったよ。

　ここは若菜との思い出の場所だもんね」

\n<若菜>「お、思い出……？

　ここの思い出っていったら、その……」

\n<晴太>「若菜？　ひょっとして忘れちゃったの？

　ほら、一緒に池に落ちたでしょ」

立ち絵\_服\_気まずい

\n<若菜>「あ、あはは……そんなこともあったね……

　よく覚えてたね、ハルタ」

\n<晴太>「そりゃあ、若菜にとってはどうでもよくてもさ、

　僕にとっては大事な思い出なの！」

立ち絵\_服\_気まずい

\n<若菜>「ど、どうでもよくなんてないよ！

　ただ……上書きがすごすぎただけだもん……」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「あそこでうろうろしてる人……

　なにか困ってるのかな？」

\n<晴太>「気になるの？

　それじゃあ、声かけに行ってみようか」

\n<若菜>「うん。ありがとうね」

立ち絵\_服\_笑顔

\n<若菜>「どうかしましたか？」

\n<スカウト>\{「キミだ！」

立ち絵\_服\_驚き

\n<若菜>「えっ！？」

\n<スカウト>「キミのような逸材を探していたんだ！

　どうかな、グラビアとか興味ない？」

\n<若菜>「ぐ、グラビア！？　それって……えっちな……」

\n<スカウト>「全然そんなことないって！

　水着姿をちょ～っとポーズ取って撮らせてくれればいいから」

立ち絵\_服\_気まずい

\n<若菜>「……それも、えっちなやつですよね……？」

\n<スカウト>「おっ？

　そこまで知ってるってことは、興味あるんじゃない？」

\n<スカウト>「すぐ終わるから！　それにお金もいっぱい出すよ？

　ね？　いまならマッサージも無料でしてあげるからさ！」

\n<若菜>「そんな……でも、知らない人となんて……」

\n<スカウト>「しかも相手はプロだからね。

　もう素人とは比べ物にならないくらい気持ち良くするよ？」

立ち絵\_服\_照れ

\n<若菜>「えっ？　えーっと、えへへ……でも……」

\n<若菜>「ね、ねぇ、ハルタ？」

\n<晴太>「若菜のグラビア……」

立ち絵\_服\_驚き

\n<晴太>「ハルタのばかぁ！」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「ふぅ……宿題ももう少しだよ。

　ハルタはちゃんと進んでる？」

\n<晴太>「え？　えーっと、あはは……」

立ち絵\_服\_困り

\n<若菜>「もう。今日で夏休み終わりってわかってるのかなぁ」

\n<若菜>「ハルタってばいつもそうなんだから。

　もう夏休みもあと少しなんだよ？」

\n<晴太>「分かってるって。だから、ほら！

　ちゃんと今だって宿題してるでしょ？」

立ち絵\_服\_気まずい

\n<若菜>「保健体育……？

　そんな宿題出てたっけ？」

\n<晴太>「え？」

\n<晴太>「しゅ、宿題だけじゃなくて、

　普通に勉強するのも大事なことなんだから！」

立ち絵\_服\_気まずい

\n<若菜>「間違えちゃってたんだね……」

\n<晴太>「ち、違うよ！　宿題以外の勉強をしてただけだよ！

　じゃあ、若菜に問題ね！」

\n<若菜>「え？　う、うん……」

\n<晴太>「あ、赤ちゃんを作る行為をなんと言うでしょう！」

立ち絵\_服\_笑顔

\n<若菜>「セックス」

\n<晴太>「えっ……？」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「え？　じゃないよぉ。

　セックスでしょ？　セックス」

\n<晴太>「そ、そんなに何度も言わなくても……」

立ち絵\_服\_照れ

\n<若菜>「あ～、ひょっとしてハルタってば恥ずかしがってるの？」

\n<晴太>「ち、ちがうよ！」

立ち絵\_服\_照れ

\n<若菜>「ふふっ、ハルタかわいい～」

日付\_8月24日

時間\_朝

P\_CALL\_CE 12 6 7 ON

\n<先生>「皆さん、おはようございます。

　有意義な夏休みを過ごすことができましたか？」

\n<先生>「それでは、出席を取ります。

　翼さん、秋穂さん、晴太さん、若菜さん」

\n<晴太>（結局、この夏休みも若菜に告白できなかったなぁ。

　またいつも通り……）

\n<晴太>（でも、いつも通りならいっか。

　どうせ若菜のこと好きなのなんて僕だけだろうから！）

\n<晴太>（機会があったら告白すればいいや。

　焦らない焦らない。誰かに取られるわけじゃないんだし）

　　　　　　　　　　　　　　ＥＮＤ

ANG\_VISIBLE 1

ANG\_ENABLE 1

日付\_8月24日

時間\_朝

P\_CALL\_CE 12 6 7 ON

\n<先生>「皆さん、おはようございます。

　有意義な夏休みを過ごすことができましたか？」

\n<先生>「それでは、出席を取ります。

　翼さん、秋穂さん、晴太さん、若菜さん……は休みですか」

\n<先生>「そういえば、連絡ありませんでしたね……

　晴太さん、若菜さんが欠席の理由知っていますか？」

\n<先生>「晴太さん？　どうかしましたか？」

\n<晴太>「……いえ、何も知らないです」

\n<先生>「そうですか……困りましたね」

\n<晴太>（本当は知ってる……

　窓から若菜の姿が見えたから……）

\n<晴太>（若菜は……きっと今も……）

H7\_EVラスト

H7\_喜んでる

SV\_ボイスの演奏 EV18\_001 100 100 0 2

\n<若菜>「あっ、んっ……んふぁっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV18\_002 100 100 0 2

\n<若菜>「せんぱいっ……んんふぁあ！

　な、中に……ザーメンいっぱい出してください……んんっ！」

SV\_ボイスの停止 2

H7\_射精\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV18\_003 100 100 0 2

\n<若菜>「んふぁああああああああああっ！」

SV\_ボイスの停止 2

H7\_射精\_喜んでる

SV\_ボイスの演奏 EV18\_004 100 100 0 2

\n<若菜>「はぁはぁ……んはぁ……♥」

SV\_ボイスの停止 2

　　　　　　　　　　　　　　ＥＮＤ

ANG\_VISIBLE 1

ANG\_ENABLE 1

\n<晴太>（嬉しすぎて、それからのことはあまり覚えていない）

日付\_8月24日

時間\_朝

P\_CALL\_CE 12 6 7 ON

\n<先生>「皆さん、おはようございます。

　有意義な夏休みを過ごすことができましたか？」

\n<先生>「それでは、出席を取ります。

　翼さん、秋穂さん――」

\n<晴太>（若菜と付き合うことになって初めての学園生活。

　なんだか、いつもとは違った感じがする……）

\n<晴太>（だって、隣には……）

立ち絵\_服\_驚き

\n<若菜>「ハルタ……まえ、まえ！」

\n<先生>\{「――晴太さん！」

\n<晴太>「は、はい！」

\n<先生>「もう……いつまでも夏休み気分じゃいけませんよ。

　それじゃあ、若菜さん」

立ち絵\_服\_気まずい

\n<若菜>「はい」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「よそ見なんてしてるから悪いんだよ」

\n<晴太>「だって、若菜のこと見たくなっちゃって……」

立ち絵\_服\_驚き

\n<若菜>「ハルタのばか！

　そんなの……いつでも見せてあげるのに……」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「もう、なんで笑ってるの。

　ほら、ちゃんと前むいたほうがいいよ」

\n<晴太>「はーい！」

\n<晴太>（若菜と恋人になってから、世界がこんなにも輝いて見える！

　今までの景色が嘘みたいにカラフルになってる！）

\n<晴太>（これからきっと、新しい学園生活が始まるんだ！

　若菜と二人で……幸せな時間を！）

　　　　　　　　　　　　　　ＥＮＤ

ANG\_VISIBLE 1

ANG\_ENABLE 1

P\_CALL\_CE\_REMOVE 12

P\_CALL\_CE\_REMOVE 13

\n<晴太>「あっ、若菜から電話だ」

\n<晴太>「もしもし、若菜？

　どうかしたの？」

\n<若菜>「ハルタの家に遊びに行ってもいいかな？

　実は陸也先輩も行きたいらしいんだけど……」

\n<晴太>「陸也先輩も？」

\n<若菜>「うん。ダメかな？」

\n<晴太>「いいよ」

\n<若菜>「ありがとう。それじゃあ後で行くね」

\n<晴太>「若菜……いつから陸也先輩と仲良くなったんだろう？」

\n<陸也>「やあ、ハルタくんだっけ？」

\n<晴太>「こ、こんにちは。陸也先輩」

\n<陸也>「なあ」

\n<若菜>「わ、分かってます……」

\n<若菜>「ね、ねぇ……ハルタ？

　ちょっとお願いがあるんだけど……」

\n<若菜>「前にあげるって言ってた本があったよね？

　それを運ぶの手伝ってもらってもいいかな？」

\n<晴太>「もちろんいいよ」

\n<陸也>「ちょいちょい、ハルタくん？

　まさか重いもの運ぶのを女の子に手伝わせるの？」

\n<陸也>「マジでそういうのダセェから。

　カッコいいとこ見せてくれよ？」

\n<晴太>「う、うん……一人で大丈夫だよ」

\n<陸也>「ハルタくん、マジかっけぇ！」

\n<陸也>「邪魔者もいなくなったし、ヤろっか」

\n<若菜>「本当にここでするんですか……？」

\n<陸也>「なに言ってんだよ。興奮してるくせに」

\n<若菜>「んっ……♥」

\n<晴太>「あれ？　本なんてどこにあるんだろう？」

\n<晴太>「若菜ー！　本ってどこにあるのー！」

\n<晴太>「若菜……？　聞こえてないのかな？」

\n<晴太>「電話なら出るかも。ちょっとかけてみよう」

\n<晴太>「もしもし、若菜？」

SV\_ボイスの演奏 EV15\_013 100 100 0 2

\n<若菜>『んっ……は、ハルタ……？　ど、どうしたの……？』

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「若菜の言ってた本ってどこにあるの？」

SV\_ボイスの演奏 EV15\_015 100 100 0 2

\n<若菜>『え、えーっと……んんっ……アぁッ……！』

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「若菜？」

SV\_ボイスの演奏 EV15\_016 100 100 0 2

\n<若菜>『な、なんでもないよ！　な、んんっ……！

　あ、あはは……ふぅ、んんっ……』

SV\_ボイスの停止 2

\n<若菜>『せ、――……！

　――から、――では……』

\n<陸也>『――の？　――だろ？』

\n<若菜>『――こと……！』

\n<晴太>「若菜？　何かしてるの？」

SV\_ボイスの演奏 EV15\_019 100 100 0 2

\n<若菜>『な、なにも……んぁっ、なにもしてないよ……！

　ほ、ほんと……んっく、ほんとだよ……！』

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「そう？」

SV\_ボイスの演奏 EV15\_020 100 100 0 2

\n<若菜>『う、うん……ホント……んんっ、えへへ……』

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「でも、カーテン越しに動いてるのが見えるんだけど」

SV\_ボイスの演奏 EV15\_021 100 100 0 2

\n<若菜>『えっ……？』

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV15\_023 100 100 0 2

\n<若菜>『ほ、ほんとは……ストレッチしてるの……！

　さ、最近……はまってて、んあっ……！！』

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV15\_024 100 100 0 2

\n<若菜>『とっても……んふぁ、気持ちいいの……んんっ！

　気持ち良くて……あんっ、声が漏れちゃうくらい……えへへ』

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「へぇ、そんなのがあるんだ。

　今度僕にも教えてよ」

SV\_ボイスの演奏 EV15\_025 100 100 0 2

\n<若菜>『ふぁ……う、うんっ……は、ハルタにも……んんっ！

　き、きもちいいストレッチ……教えて……んあっ！』

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>『――さぁ。

　俺と――に、他の――！』

\n<若菜>『……！』

\n<晴太>「……あれ？　音が切れちゃった。

　電話が切れちゃったのかな？」

\n<晴太>「あ、でも電話は繋がってる……

　もしもし、若菜？　もしもーし！」

\n<晴太>「若菜！　もしもーし、若菜！

　聞こえてるー？　大丈夫ー？」

SV\_ボイスの演奏 EV15\_039 100 100 0 2

\n<若菜>『えっ……？　んっ……ああ、うん。だ、大丈夫だよ……』

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV15\_040 100 100 0 2

\n<若菜>『あっ、思い出した……い、いま家に本が無いんだった……

　はぁはぁ……は、ハルタももう戻ってきていいよ……』

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV15\_041 100 100 0 2

\n<若菜>『も、もう……終わったから……』

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「……変な若菜」

\n<晴太>「お待たせ」

\n<陸也>「おせーよ、ハルタくん。

　俺たちもう行くから。じゃあな」

\n<若菜>「じゃ、じゃあね、ハルタ」

\n<晴太>「なんだったんだろ……？」

$gameSelfSwitches.setValue([251, 3, "A"], true)

$gameSelfSwitches.setValue([251, 4, "A"], true)

P\_CALL\_CE 12 6 7 ON

P\_CALL\_CE 13 205 7 ON

\n<晴太>「っと、その前にトイレトイレ。

　おしっこしたくなってきちゃった」

\n<晴太>「トイレっ♪　トイレっ♪」

\n<晴太>「あれ、若菜だ。何してるんだろう？」

\n<晴太>「若菜ー！　おはよー！」

\n<晴太>「あれ？　わか――」

H7\_室内

H7\_喜んでる

H7\_窓

SV\_ボイスの演奏 EV16\_009 100 100 0 2

\n<若菜>「お、おはよう……ハルタ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「おはよう。ふぁ～あ、まだ眠いや」

SV\_ボイスの演奏 EV16\_010 100 100 0 2

\n<若菜>「あ、あはは……ハルタにしては朝が早――い゛んんっ！？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「ねぇ、若菜。なんでそんなに揺れてるの？」

H7\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV16\_016 100 100 0 2

\n<若菜>「えっ？　えっと……」

SV\_ボイスの停止 2

H7\_喜んでる

SV\_ボイスの演奏 EV16\_017 100 100 0 2

\n<若菜>「そ、それは……んんっ、その……と、トランポリン！

　トランポリンに乗ってるの！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「そんなの若菜の家にあったっけ？」

SV\_ボイスの演奏 EV16\_018 100 100 0 2

\n<若菜>「あ、最近買ったの……んあっ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「若菜？　ちょっと様子が変だよ？」

SV\_ボイスの演奏 EV16\_019 100 100 0 2

\n<若菜>「へ、変じゃないよ……！

　ただ……んんっ！　えへへ……き、キモチイイだけ……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「トランポリンが気持ちいいの？

　若菜ってば変だなぁ」

\n<晴太>「あれ、ひょっとして、若菜……」

H7\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV16\_021 100 100 0 2

\n<若菜>「や、やだっ、ハルタ！　違うの、これは……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「ダイエットの為にトランポリン買ったんでしょ！

　あんなにケーキ食べてたら太っちゃうもんね」

SV\_ボイスの演奏 EV16\_022 100 100 0 2

\n<若菜>「え……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「あれ、若菜なにか言った？」

H7\_喜んでる

SV\_ボイスの演奏 EV16\_023 100 100 0 2

\n<若菜>「う、ううん……なんでもないよ！

　それより、ダイエットなんてよく分かったね……ンんっ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「ダイエットなら、もっと動いたほうがいいよ。

　ほら、こんな感じにもっと身体を上下させてさ」

H7\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV16\_024 100 100 0 2

\n<若菜>「でも、そんなことしたら声が……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「声……？」

SV\_ボイスの演奏 EV16\_025 100 100 0 2

\n<若菜>「う、ううん……なんでもない……なんでもない……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「それじゃあ、やってみてよ。

　僕がちゃんと若菜のこと見ててあげるから」

H7\_喜んでる

SV\_ボイスの演奏 EV16\_027 100 100 0 2

\n<若菜>「う、うん……

　そ、それじゃあ……わたしのこといっぱい見ててね……？」

SV\_ボイスの停止 2

H7\_だらしない

SV\_ボイスの演奏 EV16\_030 100 100 0 2

\n<若菜>「ンんん゛ッ！　っはぁ……！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV16\_032 100 100 0 2

\n<若菜>「んふぁあ、っくぅ、んああッ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「いいよいいよ！　若菜、その調子！」

SV\_ボイスの演奏 EV16\_033 100 100 0 2

\n<若菜>「ンんぁあ……！　これっ、すごっ、いい……！

　これじゃあ、すぐッ……ひゃあンんっ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「すごいでしょ？　うんうん、すぐに痩せられるよ！」

SV\_ボイスの演奏 EV16\_036 100 100 0 2

\n<若菜>「ふぁんんッ、ハルタぁ……！

　わ、わたしのことちゃんと見ててね……っ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「心配しなくても、ちゃんと見てるよ。

　若菜が変わっていくところもちゃんと見ててあげるから！」

SV\_ボイスの演奏 EV16\_037 100 100 0 2

\n<若菜>「うん……うぅんんっ……！

　っはぁ……か、変わっちゃったわたしを見ててね……んふぁ！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV16\_038 100 100 0 2

\n<若菜>「んんっ、ハルタぁ……もう我慢できないよぉ……！

　イっても……ふぁっ、イってもいいよね……！？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「行っても……？　あっ、ひょっとしてトイレ我慢してた？

　そうだ、僕もトイレ行こうと思ってたんだ！　じゃあね、若菜！」

\n<晴太>「なんだか今日の若菜……ちょっとエロいかも……」

\n<晴太>「……今日は家でオナニーでもしてようかな」

\n<晴太>「わか、な……？」

H6\_EV17

H6\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV17\_010 100 100 0 2

\n<若菜>「あっ、んっ、ハルタ……！

　やあっ、見ちゃ……んふぁっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あーあ、バレちゃった。

　だから、ここでヤるのはアブねーって言ったのに」

SV\_ボイスの演奏 EV17\_012 100 100 0 2

\n<若菜>「そ、そんな……

　先輩がここでしようって……んああっ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「俺のせいにすんなって。

　だって若菜ちゃん、ここでするのが一番気持ちいいんだろ？」

SV\_ボイスの演奏 EV17\_013 100 100 0 2

\n<若菜>「それは……ンふぁ、あんっ、んん……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「そういや、激しくしてほしかったんだっけ？

　悪ぃ悪ぃ、今から激しくしてやるからさッ！」

SV\_ボイスの演奏 EV17\_015 100 100 0 2

\n<若菜>「ン゛お……！　んふぁ、んんっ……！

　これ、すごっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「これ……なんで……

　どうして若菜が先輩と……」

H6\_喜んでる

SV\_ボイスの演奏 EV17\_016 100 100 0 2

\n<若菜>「あっ、んんっ、ハルタ、ごめんね……！

　ごめんね……んふぁ……！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV17\_017 100 100 0 2

\n<若菜>「せ、先輩に脅されて……んんぅ、仕方なく……

　わ、わたしだってこんな……んひゃあッ！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV17\_018 100 100 0 2

\n<若菜>「え、えへへ……仕方なく……

　ぜ、全部……先輩が悪いんだから……んんあっ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「若菜ちゃんってすぐ俺のせいにするよな？

　んじゃあ、もう中出ししてやらねーから」

H6\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV17\_021 100 100 0 2

\n<若菜>「そんな……んっく、ふわぁ……！

　ご、ごめんなさい……先輩……ンんんっ！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV17\_022 100 100 0 2

\n<若菜>「わ、わたしが悪かったですから……ふぅあ！

　お、お願いだから中に……んんぁっ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「中って、そんな……若菜……？」

\n<陸也>「じゃあ、いつも通り中に出すからな！

　孕む準備しとけよ！」

H6\_喜んでる

SV\_ボイスの演奏 EV17\_024 100 100 0 2

\n<若菜>「んぁっ、は、はい……！

　ざ、ザーメン……ザーメンいっぱいくださいっ！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV17\_025 100 100 0 2

\n<若菜>「んんっ……わ、わたしも……もう……！

　せ、先輩……！　わたしも一緒に……んんあっ！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV17\_026 100 100 0 2

\n<若菜>「んんっ、もう、イッっちゃ……！

　イクッ……イキます！　んんふぁああ……！」

SV\_ボイスの停止 2

H6\_射精\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV17\_027 100 100 0 2

\n<若菜>「んふぁああああああああああああ！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV17\_028 100 100 0 2

\n<若菜>「はぁはぁ……んはぁ……」

SV\_ボイスの停止 2

H6\_射精\_喜んでる

SV\_ボイスの演奏 EV17\_029 100 100 0 2

\n<若菜>「ハルタに……んんっく、見られちゃってるのに……

　先輩に、いっぱい中出しされちゃった……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「なに言ってんの？

　搾り取ってきたのは若菜ちゃんのマンコだろッ！」

H6\_射精\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV17\_030 100 100 0 2

\n<若菜>「ンんあッ……！　やめっ、先輩……

　イッたばかりで敏感だから……ひゃあんん！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「晴太くんの前だからって生娘ぶるなって。

　若菜ちゃんはこんなんじゃ満足できないっしょッ！」

H6\_射精\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV17\_031 100 100 0 2

\n<若菜>\{「ンンぅううッ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「悪ぃ悪ぃ、そういうことだからさぁ。

　もうちょい部屋借りるわ」

\n<晴太>「え……」

\n<陸也>「なんなら晴太くんも混ぜてやろうか？

　まあ、マンコはオレ専用だけどなッ！」

SV\_ボイスの演奏 EV17\_032 100 100 0 2

\n<若菜>「ンはぁっ……！　あんっ、んんぅう！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「ぼ、僕は……その、大丈夫です……」

\n<晴太>（それからのことは、あまり覚えていない）

\n<晴太>「あれ……いない……

　トイレに行ってるのかな……？」

SV\_ボイスの演奏 EV12\_009 100 100 0 2

\n<若菜>「ンんんっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「あれ……誰かいるのかな……？」

H6\_EV12

H6\_喜んでる

H6\_カーテン

SV\_ボイスの演奏 EV12\_013 100 100 0 2

\n<若菜>「は、ハルタ……どうしたの……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「あれ？　若菜？

　どうしてこんなところにいるの……？」

SV\_ボイスの演奏 EV12\_014 100 100 0 2

\n<若菜>「えーっと、その、それはね……

　ほ、保健室の先生に見ててって言われてね……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「そうなんだ……って、あれ？

　大事な用事があるんじゃなかったの？」

SV\_ボイスの演奏 EV12\_015 100 100 0 2

\n<若菜>「そ、それは……も、もう終わったの！

　意外と早く終わっちゃって……えへへ……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「そうだったんだ……

　ということは、若菜はずっと保健室にいたんだよね？」

SV\_ボイスの演奏 EV12\_016 100 100 0 2

\n<若菜>「えっ、う、うん……そうだよ……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「それじゃあさ、先輩見なかった？」

H6\_だらしない

SV\_ボイスの演奏 EV12\_017 100 100 0 2

\n<若菜>「先輩……？　それってどのせんぱ――ンんぁッ！？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「若菜？　どうかしたの？」

H6\_喜んでる

SV\_ボイスの演奏 EV12\_018 100 100 0 2

\n<若菜>「えっ、んっ……な、なにが……？

　なにも……ふぅっ、な、ないよ……」

SV\_ボイスの停止 2

H6\_感じてる

\n<若菜>「せ、――……、――、……」

\n<晴太>「若菜……？」

H6\_喜んでる

SV\_ボイスの演奏 EV12\_022 100 100 0 2

\n<若菜>「う、ううん……！　んっ……な、なんにも……

　ふぅ、な、ないよ……えへへ……んんっ……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「なんか変な音がしない……？

　ほら、パンパンって」

SV\_ボイスの演奏 EV12\_023 100 100 0 2

\n<若菜>「んっ……え、そ、そうかな……んんっ……

　わ、わたしには聞こえないけど……！」

SV\_ボイスの停止 2

H6\_だらしない

SV\_ボイスの演奏 EV12\_026 100 100 0 2

\n<若菜>「ンんお゛っ……！？　んふぁああ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「若菜！？

　そんな声出して……まさか病気なの！？」

H6\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV12\_028 100 100 0 2

\n<若菜>「んんっ、ち、違うの……んふぅっ……！

　ちょ、ちょっと……ぐ、具合が悪くて……んんっ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「大丈夫なの、若菜？

　具合が悪いなら僕が看病してあげるから！」

SV\_ボイスの演奏 EV12\_029 100 100 0 2

\n<若菜>「んんっ、だ、ダメ……来ないで……！

　は、ハルタは……ダメ……んんっ、なの……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「で、でも……若菜苦しそうだよ！」

H6\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV12\_033 100 100 0 2

\n<若菜>「は、ハルタぁ……お、おねがいが……んんっ！

　おねがいが……あるの……んふぅ……！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV12\_034 100 100 0 2

\n<若菜>「ほ、保健室の……せ、先生を……んんっく……！

　よ、呼んできて……はぁ、く、くれないかな……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「わ、分かった！　すぐに呼んでくるから！

　頑張ってね、若菜！」

\n<晴太>「若菜、先生はあとから――」

\n<晴太>「あれ、若菜……？」

P\_CALL\_CE 12 6 7 ON

P\_CALL\_CE 13 205 7 ON

裏サイト\_EV04\_02

主人公視点

ヒロイン視点

間男視点

キャンセル

主人公視点

ヒロイン視点

間男視点

キャンセル

主人公視点

ヒロイン視点

間男視点

キャンセル

主人公視点

ヒロイン視点

間男視点

キャンセル

主人公視点

ヒロイン視点

間男視点

キャンセル

主人公視点

ヒロイン視点

間男視点

キャンセル

主人公視点

ヒロイン視点

間男視点

キャンセル

主人公視点

ヒロイン視点

間男視点

キャンセル

主人公視点

ヒロイン視点

間男視点

キャンセル

主人公視点

ヒロイン視点

間男視点

キャンセル

主人公視点

ヒロイン視点

間男視点

キャンセル

主人公視点

ヒロイン視点

間男視点

キャンセル

主人公視点

ヒロイン視点

間男視点

キャンセル

主人公視点

ヒロイン視点

間男視点

キャンセル

主人公視点

ヒロイン視点

間男視点

キャンセル

主人公視点

ヒロイン視点

間男視点

キャンセル

主人公視点

ヒロイン視点

間男視点

キャンセル

SV\_ボイスの停止 2

裏サイト\_EV32\_02

Blakout

H1\_着衣\_閉じ目

H1\_モザイク

\n<陸也>\c[1]「うおっ、すっげぇおっぱい！

　今までで一番ヤベェわ！」

\n<■■>\c[27]「こ、こんなこと……

　や、やめてください……！」

\n<陸也>\c[1]「いーじゃん、減るもんじゃねぇんだしさぁ。

　むしろ、揉んで大きくしてあげてる的な？」

\n<■■>\c[27]「んっ……で、でも……」

\n<陸也>\c[1]「なに？　文句でもあるわけ？

　あーあ、あの写真ばら撒いちゃおっかなぁ！」

\n<■■>\c[27]「そ、それは……」

陸也先輩は女の子を脅しているのかな……？

イケナイところ覗いてるみたいで興奮する！

\n<陸也>\c[1]「俺は別にこんなことしなくてもいいんだけどさぁ。

　■■ちゃんの秘密守る対価じゃん？」

\n<■■>\c[27]「…………」

\n<■■>\c[27]「……ごめんなさい、続けていいです……」

\n<陸也>\c[1]「続けていいです？　なに言ってんの？

　もっと言い方あるっしょ？　こっちはやんなくていいんだぞ？」

\n<■■>\c[27]「そんな……ううっ……」

\n<■■>\c[27]「わたしの……お、おっぱい……揉んでください……」

\n<陸也>\c[1]「しょーがねぇなぁ。

　そこまで言うなら揉んでやるわ。感謝しろよ？」

\n<■■>\c[27]「ふぅん……！　は、はい……」

先輩は女の子のおっぱいを揉み始める。

両手いっぱいで、ムニムニと形が変わるように。

\n<陸也>\c[1]「服越しでなんつー柔らかさだよ！

　こんなおっぱい、オッサンに揉ませるなんてもったいねぇ」

\n<■■>\c[27]「ん……ふぅ、んん……」

\n<陸也>\c[1]「■■ちゃん、処女っしょ？」

\n<■■>\c[27]「あっ、ん……んんっ……」

\n<陸也>\c[1]「やっぱりな。

　処女のくせに男におっぱい揉まれて感じてんだ？」

この女の子、処女なんだ……

こんなエッチな子が同級生にいたなんて……

\n<■■>\c[27]「そんなこと、ん……言わないで……」

\n<陸也>\c[1]「否定はしねぇんだ？

　じゃあもっと気持ち良くしてやるよ！」

H1\_脱衣\_感じてる

\n<■■>\c[27]「きゃああああ！」

女の子のおっぱいが見えた！

すごく大きくて柔らかそう……！

\n<陸也>\c[1]「うおっ！　生で見ると迫力マジでヤベェわ！

　これ見てるやつゼッテー全員今シコってるっしょ！」

\n<■■>\c[27]「み、見てるやつって……」

\n<陸也>\c[1]「あー、こっちの話。

　若菜ちゃんは気にしなくていいから」

このビデオ撮ってること、女の子は知らないんだ。

これが盗撮……陸也先輩すごい！

\n<■■>\c[27]「んふぁ……！　ん、あっ……」

\n<陸也>\c[1]「むっちゃ手におっぱい吸い付いてくるわ！

　マジこの生おっぱいエロすぎっしょ……！」

\n<■■>\c[27]「エロくなんて……んっ、ない、です……」

\n<陸也>\c[1]「なに言ってんの？　こんなエロいおっぱい無ぇっての。

　マジ最高だわ。無限に揉んでてぇ……！」

\n<■■>\c[27]「はぁはぁ……ん、あっ……」

\n<陸也>\c[1]「乳首ビンビンじゃん！

　なに？　そんなに気持ち良くなっちゃってんの？」

\n<■■>\c[27]「そんな……こと、ふぁっ、んん……」

先輩は綺麗なピンク色の乳首をこねるように触っている。

そのたびに、女の子から喘ぎ声が聞こえた。

\n<■■>\c[27]「んふぁ……！　ち、乳首触っちゃ……んんっ！」

\n<陸也>\c[1]「コリコリして欲しくて立ててんじゃないの？」

\n<■■>\c[27]「ちがっ……ふぁっ、んん……！」

\n<陸也>\c[1]「飽きるまで揉んでやるから」

\n<■■>\c[27]「そ、んな……ふぅっ、ん……！」

この女の子、処女なんだ……

こんなエッチな子が同級生にいたなんて……

同級生の女の子のエッチな動画……

……すごいオカズを手に入れちゃった！

立ち絵\_モザイク

H1\_モザイク

H2\_モザイク

H4\_モザイク

H5\_モザイク

H6\_モザイク

H7\_モザイク

H8\_モザイク

H1\_EV01

H1\_着衣\_耐えてる

H1\_モザイク

\n<陸也>「うおっ、すっげぇおっぱい！

　今までで一番ヤベェわ！」

SV\_ボイスの演奏 EV01\_001 100 100 0 2

\n<■■>「こ、こんなこと……

　や、やめてください……！」

SV\_ボイスの停止 2

そこに映っていたのは、

女の子が男に胸を揉まれている動画だった。

女の子の顔にはモザイクがかかってるけど、

ものすごく僕のタイプそうな女の子だ……！

男の方は……陸也先輩だ。

校内最高のイケメンって、陸也先輩のことだったんだ。

\n<陸也>「いーじゃん、減るもんじゃねぇんだしさぁ。

　むしろ、揉んで大きくしてあげてる的な？」

SV\_ボイスの演奏 EV01\_004 100 100 0 2

\n<若菜>「んっ……で、でも……」

\n<陸也>「なに？　文句でもあるわけ？

　あーあ、あの写真ばら撒いちゃおっかなぁ！」

SV\_ボイスの演奏 EV01\_005 100 100 0 2

\n<■■>「そ、それは……」

SV\_ボイスの停止 2

陸也先輩は女の子を脅しているのかな……？

イケナイところ覗いてるみたいで興奮する！

\n<陸也>「俺は別にこんなことしなくてもいいんだけどさぁ。

　■■ちゃんの秘密守る対価じゃん？」

SV\_ボイスの演奏 EV01\_007 100 100 0 2

\n<■■>「…………」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV01\_008 100 100 0 2

\n<■■>「……ごめんなさい、続けていいです……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「続けていいです？　なに言ってんの？

　もっと言い方あるっしょ？　こっちはやんなくていいんだぞ？」

SV\_ボイスの演奏 EV01\_009 100 100 0 2

\n<■■>「そんな……ううっ……」

SV\_ボイスの停止 2

H1\_着衣\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV01\_011 100 100 0 2

\n<■■>「わたしの……お、おっぱい……揉んでください……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「しょーがねぇなぁ。

　そこまで言うなら揉んでやるわ。感謝しろよ？」

SV\_ボイスの演奏 EV01\_012 100 100 0 2

\n<■■>「ふぅん……！　は、はい……」

SV\_ボイスの停止 2

H1\_着衣\_耐えてる

\n<陸也>「服越しでなんつー柔らかさだよ！

　こんなおっぱい、オッサンに揉ませるなんてもったいねぇ」

SV\_ボイスの演奏 EV01\_015 100 100 0 2

\n<■■>「ん……ふぅ、んん……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「■■ちゃん、処女っしょ？」

SV\_ボイスの演奏 EV01\_016 100 100 0 2

\n<■■>「あっ、ん……んんっ……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「やっぱりな。

　処女のくせに男におっぱい揉まれて感じてんだ？」

SV\_ボイスの演奏 EV01\_018 100 100 0 2

\n<■■>「そんなこと、ん……言わないで……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「否定はしねぇんだ？

　じゃあもっと気持ち良くしてやるよ！」

H1\_脱衣\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV01\_019 100 100 0 2

\n<■■>「きゃああああ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「うおっ！　生で見ると迫力マジでヤベェわ！

　これ見てるやつゼッテー全員今シコってるっしょ！」

SV\_ボイスの演奏 EV01\_022 100 100 0 2

\n<■■>「み、見てるやつって……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あー、こっちの話。

　■■ちゃんは気にしなくていいから」

\n<陸也>「じゃあ早速触っちゃおうかな……」

SV\_ボイスの演奏 EV01\_023 100 100 0 2

\n<■■>「えっ……そのまま触るなんて……

　そ、そんなのダメです……！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV01\_024 100 100 0 2

\n<■■>「んふぁ……！　ん、あっ……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「むっちゃ手におっぱい吸い付いてくるわ！

　マジこの生おっぱいエロすぎっしょ……！」

SV\_ボイスの演奏 EV01\_026 100 100 0 2

\n<■■>「エロくなんて……んっ、ない、です……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「なに言ってんの？　こんなエロいおっぱい無ぇっての。

　マジ最高だわ。無限に揉んでてぇ……！」

SV\_ボイスの演奏 EV01\_027 100 100 0 2

\n<■■>「はぁはぁ……ん、あっ……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「乳首ビンビンじゃん！

　なに？　そんなに気持ち良くなっちゃってんの？」

SV\_ボイスの演奏 EV01\_028 100 100 0 2

\n<■■>「そんな……こと、ふぁっ、んん……」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV01\_029 100 100 0 2

\n<■■>「んふぁ……！　ち、乳首触っちゃ……んんっ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「コリコリして欲しくて立ててんじゃないの？」

SV\_ボイスの演奏 EV01\_031 100 100 0 2

\n<■■>「ちがっ……ふぁっ、んん……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「感じてるんでしょ？」

SV\_ボイスの演奏 EV01\_032 100 100 0 2

\n<■■>「ふぅ、ん……そ、れは……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「こんなおっぱいマジでレアだわ。

　飽きるまで揉んでやるから」

SV\_ボイスの演奏 EV01\_033 100 100 0 2

\n<■■>「そ、んな……ふぅっ、ん……！」

SV\_ボイスの停止 2

この女の子、処女なんだ……

こんなエッチな子が同級生にいたなんて……

同級生の女の子のエッチな動画……

……すごいオカズを手に入れちゃった！

立ち絵\_EV02

立ち絵\_裸\_困り

立ち絵\_モザイク

SV\_ボイスの演奏 EV02\_001 100 100 0 2

\n<■■>「これで……いいですか……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「うおっ、マジでえっろ……！

　こんなエロい身体して処女とかありえねー！」

すごい……女の子の裸が映ってる！

顔にはモザイクがあるけど、無修正だ……！

\n<陸也>「乳首まっピンクじゃん！

　中古ばっか相手してたから、新品最高だわ～！」

SV\_ボイスの演奏 EV02\_003 100 100 0 2

\n<■■>「ううっ……恥ずかしいです……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「マンコもみっちり閉じてるしさぁ。

　早くこじ開けてぇ……！」

SV\_ボイスの演奏 EV02\_004 100 100 0 2

\n<■■>「そ、そんなこと……しません……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「つーかパイパンじゃん！

　なに、処女のくせに剃ったりしてるわけ？」

SV\_ボイスの演奏 EV02\_005 100 100 0 2

\n<■■>「ま、まだ……その……生えてないだけです……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「ヤッバ！　そんなの初めてだわ！

　ロリっぽいと思ってたけど、犯罪臭すげぇ……！」

SV\_ボイスの演奏 EV02\_007 100 100 0 2

\n<■■>「やめてください……気にしてるんですから……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「でも、おっぱいだけはロリっぽくねーよな。

　あれか？　ロリ巨乳ってやつ？」

SV\_ボイスの演奏 EV02\_008 100 100 0 2

\n<■■>「もうやめてください……

　これで……ちゃんと消してくれるんですよね……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あ？　なにを？」

SV\_ボイスの演奏 EV02\_009 100 100 0 2

\n<■■>「あの写真です……

　裸を見せたら、消してくれるんですよね……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あー、うんうん。もちろんもちろん」

\n<陸也>「そんなことよりさぁ。

　こんなエロい裸、目に焼き付けるだけじゃもったいねぇな」

SV\_ボイスの演奏 EV02\_010 100 100 0 2

\n<■■>「え、エロいなんて言わないでください……」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV02\_012 100 100 0 2

\n<■■>「あの……そのスマホ、何に使うんですか……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「えー、そりゃあ一つに決まってるっしょ」

SV\_ボイスの演奏 EV02\_013 100 100 0 2

\n<■■>「きゃっ……！　な、なんですか……！？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「まあまあ」

SV\_ボイスの演奏 EV02\_014 100 100 0 2

\n<■■>「やめて……撮らないでください……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「いいじゃん、誰にも見せないからさぁ。

　記念だって記念。俺が一人の時に使いたいじゃん？」

SV\_ボイスの演奏 EV02\_015 100 100 0 2

\n<■■>「つ、使うって……なににですか……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「そりゃあ、シコる時に決まってるっしょ。

　オナニーだよオナニー」

SV\_ボイスの演奏 EV02\_016 100 100 0 2

\n<■■>「オナ……っ！？　ううっ……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「恥ずかしがっちゃって！

　オナニーくらいしたことあるっしょ？」

SV\_ボイスの演奏 EV02\_017 100 100 0 2

\n<■■>「そ、そんなこと……したこと、ないです……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「うっそ、マジで！？

　■■ちゃんヤッバ！　初心すぎっしょ！」

\n<陸也>「そのクセにおっぱい揉まれたり、

　こうやって裸撮られて感じちゃってるんだ」

SV\_ボイスの演奏 EV02\_018 100 100 0 2

\n<■■>「か、感じてないです……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「えー？

　でも、マンコからなんか垂れてね？」

SV\_ボイスの演奏 EV02\_019 100 100 0 2

\n<■■>「……っ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「そんなに愛液垂らしちゃうくらい、

　気持ち良くなっちゃってんでしょ？」

SV\_ボイスの演奏 EV02\_021 100 100 0 2

\n<■■>「あいえき……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あー、初心な■■ちゃんには分かんないか。

　それは■■ちゃんがエロい気分になると出てくんの」

SV\_ボイスの演奏 EV02\_022 100 100 0 2

\n<■■>「わ、わたしがエッチな気分の時に……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「見られて感じちゃうなんて、■■ちゃん素質あるなぁ。

　まあ、変態のだけど」

SV\_ボイスの演奏 EV02\_024 100 100 0 2

\n<■■>「そんなの……ないです……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「お？　感じちゃってるのは否定しないんだ？」

SV\_ボイスの演奏 EV02\_025 100 100 0 2

\n<■■>「それは…………」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「なんなら、愛液舐めとってあげよっか？

　■■ちゃんのなら俺大歓迎なんだけど」

SV\_ボイスの演奏 EV02\_026 100 100 0 2

\n<■■>「な、舐めとるって……

　わ、わたしの大事なところを舐めるって……ううっ……」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV02\_027 100 100 0 2

\n<■■>「も、もういいですよね……

　お願いだから、消してください……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「分かってる分かってる。

　はい、消去っと」

SV\_ボイスの演奏 EV02\_028 100 100 0 2

\n<■■>「あ、ありが――」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あ、言い忘れてたけど、

　さっき撮ったやつは消さないから」

SV\_ボイスの演奏 EV02\_029 100 100 0 2

\n<■■>「えっ……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「当然っしょ？　俺のオカズ用なんだからさぁ。

　大丈夫大丈夫、誰にも見せないって！」

\n<陸也>「まあ、でも？　■■ちゃんの態度次第じゃあ、

　うっかり手が滑って誰かに送信しちゃうかもなぁ」

SV\_ボイスの演奏 EV02\_030 100 100 0 2

\n<■■>「そんな……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「そういうことだから。

　それじゃあ、今日もおっぱい触らせてよ」

SV\_ボイスの演奏 EV02\_033 100 100 0 2

\n<■■>「わかり、ました……」

SV\_ボイスの停止 2

今回もすごくエッチだった……！

陸也先輩……撮った写真くれないかなぁ。

H1\_EV02

H1\_着衣\_閉じ目

H1\_モザイク

SV\_ボイスの演奏 EV03\_001 100 100 0 2

\n<■■>「ん……んんっ……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「なあ、もっと気持ちいいことしねぇ？」

H1\_着衣\_耐えてる

SV\_ボイスの演奏 EV03\_002 100 100 0 2

\n<■■>「ふっ、んん……もっと、気持ちいいこと……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「そーそー、例えばさぁ……セックスとか？」

H1\_着衣\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV03\_003 100 100 0 2

\n<■■>「なっ……そんな、ダメです！

　そういうのは、結婚してからじゃないと……んん！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「これ以上溜まったら襲っちゃうそうだしさぁ。

　せめて手で抜いてよ、■■ちゃん」

SV\_ボイスの演奏 EV03\_004 100 100 0 2

\n<■■>「手で……抜く……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あー、処女の■■ちゃんはわかんねーか。

　保体の授業くらい受けてるっしょ？」

\n<陸也>「■■ちゃんの手で俺のチンコ扱いて、

　射精させろってこと」

SV\_ボイスの演奏 EV03\_005 100 100 0 2

\n<■■>「わ、わたしの手で……おちんちんを……」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV03\_010 100 100 0 2

\n<■■>「わ、わかりました……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「それじゃあ、さっさとやってもらおうか」

SV\_ボイスの演奏 EV03\_011 100 100 0 2

\n<■■>「きゃあ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「ほら、早く。触らねぇと話になんねーだろ？」

SV\_ボイスの演奏 EV03\_013 100 100 0 2

\n<■■>「うう……」

SV\_ボイスの停止 2

H2\_EV03

H2\_着衣\_キス無\_耐えてる

H2\_モザイク

女の子が先輩に手コキしてる……！

それに、パンツも丸見えだ！

SV\_ボイスの演奏 EV03\_014 100 100 0 2

\n<■■>「……これでいいですか」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「ああ。そのまま擦ってくれればいいから」

SV\_ボイスの演奏 EV03\_017 100 100 0 2

\n<■■>「そ、それじゃあ動かします……」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV03\_022 100 100 0 2

\n<■■>「あ、あの……これで、その……

　気持ちいいんですか……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「ああ、そのまま続けてくれればいいから」

SV\_ボイスの演奏 EV03\_023 100 100 0 2

\n<■■>「分かりました……」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV03\_024 100 100 0 2

\n<■■>「んひゃあっ……！？」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV03\_025 100 100 0 2

\n<■■>「んっ……あ、あの……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「ああ、気にしなくていいから。

　■■ちゃんは気にせず続けてて」

SV\_ボイスの演奏 EV03\_026 100 100 0 2

\n<■■>「ふっ、んん……は、はい……」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV03\_028 100 100 0 2

\n<■■>「ひゃっ……！　先っぽから何か……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あー気にしなくていいから」

SV\_ボイスの演奏 EV03\_031 100 100 0 2

\n<■■>「はぁ……ん、はぁ……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あーもうイきそう……」

SV\_ボイスの演奏 EV03\_034 100 100 0 2

\n<■■>「えっ、その……イきそうってどういう……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「だから、もう射精しそうってこと」

SV\_ボイスの演奏 EV03\_036 100 100 0 2

\n<■■>「えっ！？　わ、わたしはどうすれば……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「そのまま手で受け止めてくれればいいから」

SV\_ボイスの演奏 EV03\_037 100 100 0 2

\n<■■>「手で……は、はい……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あー、イく！」

H2\_着衣\_射精\_キス無\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV03\_038 100 100 0 2

\n<■■>「んっ……んん……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「ふぅ……イったイった」

SV\_ボイスの演奏 EV03\_039 100 100 0 2

\n<■■>「…………」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「もう手離してくれていいんだけど」

H2\_着衣\_射精\_キス無\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV03\_041 100 100 0 2

\n<■■>「えっ？　あっ………は、はい……」

SV\_ボイスの停止 2

終わってからもチンチン握ってるなんて、

こんなエッチな子いるんだなぁ……！

H2\_EV04

H2\_着衣\_キス無\_耐えてる

H2\_モザイク

SV\_ボイスの演奏 EV04\_001 100 100 0 2

\n<■■>「はぁはぁ…………」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「■■ちゃんさぁ、手コキもいいんだけど、

　なんか物足りねーんだよなぁ」

SV\_ボイスの演奏 EV04\_003 100 100 0 2

\n<■■>「え？　あの、それはどうすれば……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「そうだなぁ……あ、そうだ。

　■■ちゃんがオカズになってよ」

SV\_ボイスの演奏 EV04\_004 100 100 0 2

\n<■■>「お、おかず……ですか？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「そーそー。

　■■ちゃんのエロいとこ見せてくれたらいいから」

SV\_ボイスの演奏 EV04\_005 100 100 0 2

\n<■■>「わ、わたしのエッチなところ……

　そ、それって、胸を出すってことですか……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「なに言ってんの？

　おっぱいよりエロいところあるっしょ？」

SV\_ボイスの演奏 EV04\_006 100 100 0 2

\n<■■>「ひゃあっ！？」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV04\_007 100 100 0 2

\n<■■>「ふっ、ん……んん……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「こんなの着けてたら、

　■■ちゃんも窮屈っしょ？　楽にしてやっから」

SV\_ボイスの演奏 EV04\_009 100 100 0 2

\n<■■>「やっ、それは……！」

SV\_ボイスの停止 2

H2\_脱衣\_キス無\_感じてる

\n<陸也>「おっ、パンツ糸引いてね？

　■■ちゃんもエロい気分になってたんだ？」

SV\_ボイスの演奏 EV04\_010 100 100 0 2

\n<■■>「そ、そんなこと……

　あ、あんまり見ないでください……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「もう全身くまなく見たってーの。

　俺等の仲で今さら恥ずかしがることねぇっしょ？」

SV\_ボイスの演奏 EV04\_011 100 100 0 2

\n<■■>「それは……んんっ、ふぁ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「やっぱ触るなら生に限るわ。

　挿れる時もだけどな」

SV\_ボイスの演奏 EV04\_012 100 100 0 2

\n<■■>「んっ、あ、んん……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「もう我慢できねぇ。

　おい、こっち向け」

H2\_脱衣\_キス\_耐えてる

SV\_ボイスの演奏 EV04\_013 100 100 0 2

\n<■■>「えっ……んんっ！？」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV04\_016 100 100 0 2

\n<■■>「んんっ、ちゅぶ、んんちゅ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「おい、もっと舌出せ」

H2\_脱衣\_キス\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV04\_018 100 100 0 2

\n<■■>「んっ、ちゅ……んちゅ……」

SV\_ボイスの停止 2

ＡＶでしか見たことないすごくエッチなキスだ……！

先輩、あんなことまでしちゃうなんて！

SV\_ボイスの演奏 EV04\_019 100 100 0 2

\n<■■>「んっ、んちゅ……っぷはぁ……！」

SV\_ボイスの停止 2

H2\_脱衣\_キス無\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV04\_020 100 100 0 2

\n<■■>「わ、わたしのファーストキスが……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「■■ちゃん、初めてだったの？

　おっそ……いやぁ、ごめんごめん」

\n<陸也>「まあ、でも気持ち良かったっしょ？

　あんなにエロく舌伸ばしちゃってさぁ」

SV\_ボイスの演奏 EV04\_021 100 100 0 2

\n<■■>「それは……先輩が出せって言うから……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「俺のせいにすんの？

　あんなに顔蕩けさせちゃってたくせにさぁ」

SV\_ボイスの演奏 EV04\_022 100 100 0 2

\n<■■>「そんな顔……してないです……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「自分で分かってないわけ？　まあいいや。

　分かんねーなら分かるまでしてやるよ」

\n<陸也>「ほら、さっさと舌出せ。

　あ、手コキも止めんなよ？」

SV\_ボイスの演奏 EV04\_024 100 100 0 2

\n<■■>「……はい」

SV\_ボイスの停止 2

H2\_脱衣\_キス\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV04\_025 100 100 0 2

\n<■■>「ちゅ、んちゅ……れろ……」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV04\_026 100 100 0 2

\n<■■>「んっ……はぁ、ちゅ……れろ、んちゅ……」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV04\_029 100 100 0 2

\n<■■>「あ……んっ、ちゅる……んちゅ、はぁ……」

SV\_ボイスの停止 2

H2\_脱衣\_キス無\_感じてる

\n<陸也>「あー、イきそ……！

　もっと早くしてくんね？」

SV\_ボイスの演奏 EV04\_030 100 100 0 2

\n<■■>「えっ……あ、わかりました……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「ああ……イく！」

H2\_脱衣\_射精\_キス無\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV04\_032 100 100 0 2

\n<■■>「んんっ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「ふぅ……イったイった」

H2\_脱衣\_射精\_キス無\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV04\_033 100 100 0 2

\n<■■>「…………」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あ、■■ちゃん。

　今日はそのまま握っててくれていいから」

SV\_ボイスの演奏 EV04\_035 100 100 0 2

\n<■■>「えっ……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「まだキスしたりないしさ、

　■■ちゃんだってもっと触って欲しいでしょ？」

H2\_脱衣\_射精\_キス\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV04\_036 100 100 0 2

\n<■■>「そ、そんなこと……んんむっ！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV04\_037 100 100 0 2

\n<■■>「んっ、んちゅ……んむ、れろ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「っぷは。

　まだまだ終わらせねぇよ。■■ちゃん？」

すごくエッチだった……

僕もいつか若菜とあんなキスしたいなぁ……

H3\_EV05&06

H3\_着衣

SV\_ボイスの演奏 EV05\_001 100 100 0 2

\n<■■>「んふぁ……！　んんっ、ああっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「なになに、■■ちゃん？

　そんなによがっちゃって……気持ちいいんだ？」

今回の動画はすごいアングルだ……！

こんなエッチな体勢初めて見た！

SV\_ボイスの演奏 EV05\_002 100 100 0 2

\n<■■>「ふあっ……！　ん、んふぁ……んんっ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「■■ちゃんには手コキで良くしてもらったからさぁ。

　今度はこっちが気持ち良くしてあげねーとな」

\n<陸也>「■■ちゃんの敏感なところここっしょ？

　さっきからすげービクビクしてっからバレバレ」

SV\_ボイスの演奏 EV05\_003 100 100 0 2

\n<■■>「ああん……！　んっく、んふぅ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「ありゃ、手マンが気持ち良すぎて聞いてねぇな。

　まあ、オナったこともねーなら当然か」

\n<陸也>「つか、あんだけこの格好するの嫌がってたくせに、

　こんなによがるとか……実はヤってほしかったの？」

SV\_ボイスの演奏 EV05\_004 100 100 0 2

\n<■■>「んんっ、ふぁ……んっく、んん……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「返事しねぇとか……はいお仕置きー！」

SV\_ボイスの演奏 EV05\_005 100 100 0 2

\n<■■>「んンふああああああッ！？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「つーか、この体勢マジでエロいわ……

　このアングルで撮るとか、俺って天才じゃね？」

\n<陸也>「おい、シコってる童貞ども！

　俺に感謝しながら抜けよ！」

\n<陸也>「……反応なくてもつまんねーな。

　おーい、■■ちゃん起きてー」

SV\_ボイスの演奏 EV05\_006 100 100 0 2

\n<■■>「んんっ……ふぁ、ん……！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV05\_008 100 100 0 2

\n<■■>「んあっ……はぁはぁ……せ、先輩……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「お？　やっとお目覚め？

　気持ちいいからって気ィ失わないでよ」

SV\_ボイスの演奏 EV05\_009 100 100 0 2

\n<■■>「気を失うって……きゃあっ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あーはいはい、足閉じないでねー。

　それじゃあ見てる人も萎えるから」

SV\_ボイスの演奏 EV05\_011 100 100 0 2

\n<■■>「見てる人って……んんっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「ちゃんと足抱えてろよ？

　じゃねーと写真バラ撒くからな。あと気絶しても」

SV\_ボイスの演奏 EV05\_012 100 100 0 2

\n<■■>「そん……んあぁ……んっく、ふぅん……！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV05\_013 100 100 0 2

\n<■■>「そこ……ダメ……んふあ……！

　変な……んんっ、変な感じになっちゃうからぁ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「■■ちゃん、イきそうなんでしょ？」

SV\_ボイスの演奏 EV05\_015 100 100 0 2

\n<■■>「ふぅ……んん……イ、イク……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「処女の■■ちゃんは知らねーだろうけど、

　勝手にイクのはマナー違反だからな？」

\n<陸也>「イきそうな時はイってもいいか訊いて、

　オッケーが出てからイクんだからな？」

\n<陸也>「まあ、ビッチは勝手にイクけどさ。

　■■ちゃんはそんなはしたねー女じゃねぇだろ？」

SV\_ボイスの演奏 EV05\_017 100 100 0 2

\n<■■>「そ、そうなんですね……分かりました……」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV05\_018 100 100 0 2

\n<■■>「んっくぁ……！　きゅ、急に……激しく……んん！

　せ、せんぱい……待っ……ンンっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV05\_020 100 100 0 2

\n<■■>「んふぅ……せ、せんぱい……！

　い、イっても……んふぁ！　イってもいいですか……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あっ？　なにって？」

SV\_ボイスの演奏 EV05\_021 100 100 0 2

\n<■■>「あぁん……だ、だから……ンんんッ！？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「だから？　もっとはっきり言えよ」

SV\_ボイスの演奏 EV05\_022 100 100 0 2

\n<■■>「ふぅあ……だ、だから、もう……い、イきそうで……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「イきそう？　だから？」

SV\_ボイスの演奏 EV05\_023 100 100 0 2

\n<■■>「んあっ……だから、イっても……ンふぅ……！

　い、イってもいいで……ンんふあっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV05\_024 100 100 0 2

\n<■■>「ふぅンん……！　あっ、なんかきちゃう……！

　ダメ……んんっ、まだ言えてないのに……きちゃう……！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV05\_025 100 100 0 2

\n<■■>「んふぁっ……イク！　イっちゃう……！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV05\_026 100 100 0 2

\n<■■>「イクぅううううううううううううッ！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV05\_027 100 100 0 2

\n<■■>「ンはぁあああああああああッ！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV05\_028 100 100 0 2

\n<■■>「んはぁ……はぁ……んん！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「おいおい、■■ちゃんさぁ。

　イク前はちゃんと言えって言っただろ？」

SV\_ボイスの演奏 EV05\_032 100 100 0 2

\n<■■>「ご、ごめんなさい……

　その、変な感じで……ちゃんと言えなくて……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「変な感じ……？

　気持ち良すぎて言えなかっただけっしょ？」

SV\_ボイスの演奏 EV05\_033 100 100 0 2

\n<■■>「そ、それは……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「マナー守らずイったんだからさぁ。

　ちゃんと謝るのが筋なんじゃね？」

SV\_ボイスの演奏 EV05\_034 100 100 0 2

\n<■■>「はい……ごめんなさい……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「そうじゃなくてさ。

　理由となんで謝ってるかも言わないと」

SV\_ボイスの演奏 EV05\_035 100 100 0 2

\n<■■>「き、気持ち良すぎて……イってもいいか訊く前に、

　イっちゃって……ごめんなさい」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「次からは気を付けろよ？」

SV\_ボイスの演奏 EV05\_036 100 100 0 2

\n<■■>「はい……」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV05\_038 100 100 0 2

\n<■■>「先輩……

　どうしたら……こんなこと止めてくれるんですか？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「なに？　止めたかったの？

　てっきり■■ちゃんも喜んでるのかと」

SV\_ボイスの演奏 EV05\_039 100 100 0 2

\n<■■>「……そんなことないです」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あー、じゃあ■■ちゃんがセックスしてくれたら、

　あの写真消してやるよ」

SV\_ボイスの演奏 EV05\_040 100 100 0 2

\n<■■>「そんな……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「一回セックスして、後腐れなくバイバイってことで。

　別にいいっしょ？　そんだけで消してあげるんだから」

\n<陸也>「まあ、でも■■ちゃんは気に入ると思うけどなぁ」

SV\_ボイスの演奏 EV05\_041 100 100 0 2

\n<■■>「何にですか……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「セックスだよ、セックス。

　手マンなんかより、遥かに気持ちいいぜ？」

SV\_ボイスの演奏 EV05\_042 100 100 0 2

\n<■■>「そんなこと……絶対にないです……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あっそ。まあ、考えといてよ。

　それまでは、セックス以外で遊ぶからさ」

SV\_ボイスの演奏 EV05\_045 100 100 0 2

\n<■■>「これよりも……気持ちいい……」

SV\_ボイスの停止 2

僕もこの子とセックスしたいなぁ……

いやいや、僕は若菜一筋なんだから！

H3\_EV05&06

H3\_着衣

SV\_ボイスの演奏 EV06\_001 100 100 0 2

\n<■■>「ふあっ……！　ん、んふぁ……んんっ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「それにしても、親が留守だからって、

　男連れ込むなんて。■■ちゃんもやるねぇ」

SV\_ボイスの演奏 EV06\_002 100 100 0 2

\n<■■>「そ、そんなんじゃ……んんっ、ないです……」

SV\_ボイスの停止 2

ここ、女の子の部屋なんだ……！

あれ？　このベッドどこかで見たことあるような……？

SV\_ボイスの演奏 EV06\_003 100 100 0 2

\n<■■>「へ、変な場所ですると……んあっ……

　だ、誰かにバレちゃうかもしれないから……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「だからって、家に連れ込むかフツー。

　部屋でヤんの期待してたんでしょ？」

SV\_ボイスの演奏 EV06\_004 100 100 0 2

\n<■■>「そんなこと……あっ、んんっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「どおりでよく喘いじゃうわけだ。

　ここなら声出しても平気だもんな……！」

SV\_ボイスの演奏 EV06\_005 100 100 0 2

\n<■■>「ひゃあ……！　せ、せんぱい……それは……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「可愛いパンツ汚れちゃうと悪いっしょ？

　それに、こっちのほうが気持ち良くさせれるしさぁ」

H3\_脱衣

SV\_ボイスの演奏 EV06\_006 100 100 0 2

\n<■■>「ううっ……そんなに見ないでください……」

SV\_ボイスの停止 2

お、おまんこが丸見えだ……！

す、すごい！　目に焼き付けておかないと！

\n<陸也>「マジ、エロいマンコしてるわー！

　こんなヒクヒクさせてさぁ、誘ってんの？」

SV\_ボイスの演奏 EV06\_007 100 100 0 2

\n<■■>「そんなこと……ンんふぁあああ！？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「マンコの中、とろとろで温けぇ……！

　俺の為に温めといてくれた感じ？」

SV\_ボイスの演奏 EV06\_008 100 100 0 2

\n<■■>「んっく……！

　わ、わたしのお股の中に……指が……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あ？　オナニーもしたことねーんだっけ？

　■■ちゃんの初めていっぱい奪っちゃって悪ィなぁ」

\n<陸也>「つか、そのお股って言い方なに？

　おまんこだろ？　さんはい、おまんこ」

SV\_ボイスの演奏 EV06\_009 100 100 0 2

\n<■■>「お、おまんこ……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「はい、よく言えました。

　ご褒美におまんこ気持ち良くしてあげるから」

SV\_ボイスの演奏 EV06\_010 100 100 0 2

\n<■■>「えっ、ちょっと、待っ――

　ンあっ、ンっくうぅ……！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV06\_011 100 100 0 2

\n<■■>「んふぁ、ああぅ……！

　あっ、これ……ダメです……んんくぁ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「どう、■■ちゃん？

　パンツ越しより気持ちいいっしょ？」

SV\_ボイスの演奏 EV06\_012 100 100 0 2

\n<■■>「ンんはぁっ……！　ふぁんんっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV06\_015 100 100 0 2

\n<■■>「はうっ、んんっ……ふぁああっ……！

　これ……んあ、っふぅ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「ほら、■■ちゃん。

　よがってばっかじゃなくて、舌出して」

SV\_ボイスの演奏 EV06\_016 100 100 0 2

\n<■■>「んんっ……えっ、ほ、ほうへふは……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「そうそう。ほら、もっと突き出して」

H3\_脱衣\_キス

SV\_ボイスの演奏 EV06\_017 100 100 0 2

\n<■■>「んっ……んちゅ、れろ……んんっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV06\_020 100 100 0 2

\n<■■>「ちゅぶ、んちゅ……ちゅぱぁ……んちゅ……」

SV\_ボイスの停止 2

H3\_脱衣

\n<陸也>「……っぷあ、■■ちゃん上手になったじゃん。

　そんなにキス好きなの？　エロいね」

H3\_脱衣\_キス

SV\_ボイスの演奏 EV06\_021 100 100 0 2

\n<■■>「そ、そんなこと……んっ、ちゅ……れろ……」

SV\_ボイスの停止 2

H3\_脱衣

\n<陸也>「隠すなって。■■ちゃん、舌伸ばして。

　そうそう、それじゃあ受け取ってね」

SV\_ボイスの演奏 EV06\_022 100 100 0 2

\n<■■>「えっ、受け取るって……なにを……」

SV\_ボイスの停止 2

H3\_脱衣\_キス

SV\_ボイスの演奏 EV06\_023 100 100 0 2

\n<■■>「ん、んんっ……こくん……っぷぁ」

SV\_ボイスの停止 2

H3\_脱衣

\n<陸也>「どう？　唾液美味しいっしょ？」

SV\_ボイスの演奏 EV06\_024 100 100 0 2

\n<■■>「美味しくなんか……ないです……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「俺は好きだけどなぁ。■■ちゃんの唾液」

H3\_脱衣\_キス

SV\_ボイスの演奏 EV06\_025 100 100 0 2

\n<■■>「そんな……ちゅ、ちゅぶ、れろ……んちゅる……」

SV\_ボイスの停止 2

H3\_脱衣

\n<陸也>「それじゃあ、マンコもぐちょぐちょだし、

　■■ちゃんもイキたそうだからイカせるか……」

SV\_ボイスの演奏 EV06\_027 100 100 0 2

\n<■■>「えっ、なんで……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「そんなエロい目で懇願されたら分かるっての。

　あ、本気でやるけど失神すんなよ？」

SV\_ボイスの演奏 EV06\_028 100 100 0 2

\n<■■>「失神って……ンんふああああッ！？」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV06\_029 100 100 0 2

\n<■■>「ンひゃあっ、なに、これ……ふぅああん！

　ダメ……おかしく……んっくぅ……！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV06\_030 100 100 0 2

\n<■■>「やだ、これ……んあっ、すごっ……ッ！

　あ、あたま……おかしくなっちゃうぅぅぅ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「気持ちいいの？

　■■ちゃん、気持ちいいんだ？」

SV\_ボイスの演奏 EV06\_031 100 100 0 2

\n<■■>「はぁ、んんっ……キモチイイ……！

　へ、変な感じで……おまんこキモチイよぉ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「もうイキそうだ……！」

SV\_ボイスの演奏 EV06\_032 100 100 0 2

\n<■■>「ふぁんん、は、はい……！　い、イキます……！

　んっく、イっちゃいます……ああ、もう……ンんんん！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV06\_033 100 100 0 2

\n<■■>「ンっくぅうあああああああああ！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV06\_034 100 100 0 2

\n<■■>「んはぁ……はぁはぁ……んんっ……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「■■ちゃんさぁ、親はまだ帰ってこないんだろ？

　それじゃあ、まだやってもいいよな？」

SV\_ボイスの演奏 EV06\_035 100 100 0 2

\n<■■>「はぁはぁ……んっ、はぁ……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「何も言わないって卑怯だなぁ、■■ちゃん。

　つーか、こんなにヒクヒクさせてバレてないと思ってんの？」

SV\_ボイスの演奏 EV06\_039 100 100 0 2

\n<■■>「ンふぁ……はぁはぁ……んんあっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「そんなにエロいこと好きならさぁ、

　早くセックスしちゃおうぜ？　もっと気持ち良くなれるって」

何時まで手マンされたんだろ……？

早くセックスしてるところも見たいなぁ！

H4\_EV07

H4\_渋々

H4\_モザイク

\n<陸也>「おい、歯立てんなよ」

SV\_ボイスの演奏 EV07\_001 100 100 0 2

\n<■■>「ん……ふぁ、ふぁい……んちゅ、ちゅぶ……」

SV\_ボイスの停止 2

うわ……あんな大きなチンチンにフェラしてる！

すごい……あんなに口に入れちゃうんだ……

H4\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV07\_004 100 100 0 2

\n<■■>「んちゅ、ちゅぶ……んっく、んん……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「ホントに■■ちゃん初めてなの？

　むっちゃエロくしゃぶってるし上手すぎね？」

H4\_渋々

SV\_ボイスの演奏 EV07\_005 100 100 0 2

\n<■■>「はぁ……そんなこと……ないです……

　んっく、ちゅる……ちゅぱ……んんちゅ……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「■■ちゃんの口ん中あったけぇ……

　俺専用ののチンポケースにしたげよっか？」

SV\_ボイスの演奏 EV07\_006 100 100 0 2

\n<■■>「んじゅる……っぷあ……！

　そんなの……嫌です……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「つか、■■ちゃん。あんまり拒否ってこなかったね。

　そんなに俺のチンコしゃぶりたかった？」

H4\_照れ

SV\_ボイスの演奏 EV07\_007 100 100 0 2

\n<■■>「ち、ちが……っ！　そんなのじゃないです……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「その割にはちゃんとしゃぶってんじゃん。

　あ、思ったより美味しかった系？」

SV\_ボイスの演奏 EV07\_008 100 100 0 2

\n<■■>「それ、は……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「まあいいや。それにしても眺め最高！

　やっぱ、しゃぶらせる時は全裸じゃねーとな」

SV\_ボイスの演奏 EV07\_011 100 100 0 2

\n<■■>「そ、そんなに胸見ないでください……

　わ、わたしが裸になる必要……ないじゃないですか……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「チンコ勃起させる為に決まってるっしょ。

　生でおっぱい当たってると萎えねーわ」

SV\_ボイスの演奏 EV07\_012 100 100 0 2

\n<■■>「わ、わたしの裸で……おちんちんが……

　んっ、ちゅ、ちゅぱ……んちゅ……」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV07\_013 100 100 0 2

\n<■■>「れろ、んく……ちゅぶ、れろ……ちゅぱ……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「なぁ、もっと激しくしてくれね？」

SV\_ボイスの演奏 EV07\_014 100 100 0 2

\n<■■>「は、激しくって……こ、こんな感じですか……？」

SV\_ボイスの停止 2

H4\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV07\_015 100 100 0 2

\n<■■>「じゅぶ、んんっく……じゅる、んちゅ、じゅるるるる！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「うおっ……！」

SV\_ボイスの演奏 EV07\_017 100 100 0 2

\n<■■>「んじゅる、れろ、んちゅぷぁ、んじゅぼぼ……！」

SV\_ボイスの停止 2

H4\_照れ

SV\_ボイスの演奏 EV07\_018 100 100 0 2

\n<■■>「こ、これでいいですか……んちゅぶ……

　んっくんっく、じゅる、んちゅぼ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あー、もうイキそうだわ……！

　■■ちゃん、口の中に出すから」

SV\_ボイスの演奏 EV07\_019 100 100 0 2

\n<■■>「んあっ……く、口の中に出すって……

　そ、それって……精液がわたしの口に……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「当然っしょ。ちゃんと全部飲めよ」

SV\_ボイスの演奏 EV07\_022 100 100 0 2

\n<■■>「ううっ…………」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「いいからフェラ続けろって」

H4\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV07\_023 100 100 0 2

\n<■■>「んんっ、ふぁ、ふぁい……

　んじゅぶ、むちゅ、んちゅぶぁ……！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV07\_026 100 100 0 2

\n<■■>「んじゅる、ちゅぶ、ちゅぱぁ……んじゅるるる！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あー、イクわ……！　イク！」

H4\_射精\_驚き

SV\_ボイスの演奏 EV07\_027 100 100 0 2

\n<■■>「んんんぅうううう！？」

SV\_ボイスの停止 2

H4\_射精\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV07\_028 100 100 0 2

\n<■■>「んっくんっく……！」

SV\_ボイスの停止 2

H4\_射精\_照れ

SV\_ボイスの演奏 EV07\_031 100 100 0 2

\n<■■>「んっく……こくん、ぷぁっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「おいおい、溢してんじゃん。

　ちゃんと全部飲めって言ったよな？」

SV\_ボイスの演奏 EV07\_032 100 100 0 2

\n<■■>「ご、ごめんなさい……

　飲もうとしたんですけど、すごく多くて、その……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「言い訳はいいから。

　まだ残ってるっしょ？　早く飲んでよ」

\n<陸也>「それと、尿道にも残ってるから。

　ちゃんと吸い出すまでがフェラだかんな」

SV\_ボイスの演奏 EV07\_033 100 100 0 2

\n<■■>「はい……わかりました……

　んちゅ、じゅる、ちゅぶ……」

SV\_ボイスの停止 2

H4\_射精\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV07\_034 100 100 0 2

\n<■■>「れろ、んっく……じゅるるるる……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「はぁ……処女のお掃除フェラきもちー！

　残さずザーメン飲みきれよ」

先輩……女の子の口に出せて羨ましいなぁ……

僕なんてティッシュにしか出したことないよ……

立ち絵\_EV08

立ち絵\_裸\_困り

立ち絵\_モザイク

\n<陸也>「なあ、そろそろ決めてくんね？」

SV\_ボイスの演奏 EV08\_001 100 100 0 2

\n<■■>「決めるって……何をですか……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「決まってんだろ。セックスだよ、セックス。

　いい加減、写真隠すのもメンドーになってきたしさぁ」

SV\_ボイスの演奏 EV08\_002 100 100 0 2

\n<■■>「そ、それは……

　でも……結婚もしてないのに、セックスなんて……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「つか、ラブホに来ておいてそれ言う？」

SV\_ボイスの演奏 EV08\_003 100 100 0 2

\n<■■>「そ、それは……！　先輩が、無理やり……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「■■ちゃんの考え方は古ぃんだって。

　今時、どんな女もパコパコハメまくってるっての」

\n<陸也>「それに、■■ちゃんもハマると思うけどなぁ。

　今までヤったどんなことより気持ちいいからさぁ」

SV\_ボイスの演奏 EV08\_004 100 100 0 2

\n<■■>「どんなことより……気持ちいい……」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV08\_007 100 100 0 2

\n<■■>「本当に……その……せ、セックスをしたら、

　写真を消してくれるんですよね……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「当然っしょ。なんなら、今消したげよっか？」

SV\_ボイスの演奏 EV08\_008 100 100 0 2

\n<■■>「えっ……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「ほら、消去完了っと。

　これでいいんでしょ？」

SV\_ボイスの演奏 EV08\_011 100 100 0 2

\n<■■>「わ、わかりました……

　一回だけ……一回だけセックスすればいいんですよね……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「そうそう。それじゃあヤろっか。

　まずはマンコに挿れる準備してよ」

SV\_ボイスの演奏 EV08\_012 100 100 0 2

\n<■■>「それって……どうすれば……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「分かってんだろ？

　しゃぶってチンコ立たせるんだよ」

SV\_ボイスの演奏 EV08\_013 100 100 0 2

\n<■■>「は、はい……」

SV\_ボイスの停止 2

H4\_EV13

H4\_とろけ顔

H4\_モザイク

SV\_ボイスの演奏 EV08\_015 100 100 0 2

\n<■■>「ちゅる、ちゅぶ、んちゅ……

　んっ、おっきくなってきた……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「マジで■■ちゃんのフェラ良いわ……

　なんなら、このまま出していい？」

SV\_ボイスの演奏 EV08\_016 100 100 0 2

\n<■■>「んっく、むちゅ……んぷぁ……

　そんなの、ダメです……んちゅぶ……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「冗談冗談。本気にしちゃった？

　そんな勿体ないことするわけないっしょ」

SV\_ボイスの演奏 EV08\_017 100 100 0 2

\n<■■>「んっ、ちゅぶ……もったいない……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「溜まった精液は全部さぁ、

　■■ちゃんの中に注ぐに決まってるっしょ？」

H4\_照れ

H4\_とろけ顔

SV\_ボイスの演奏 EV08\_018 100 100 0 2

\n<■■>「……んっく、じゅる、ちゅぶ……

　れろ、んぷぁ、ちゅるる……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「それじゃあ、フェラはこれくらいにして、

　セックスしちゃおうか、■■ちゃん」

SV\_ボイスの演奏 EV08\_021 100 100 0 2

\n<■■>「んちゅぷぁ……は、はい……」

SV\_ボイスの停止 2

H5\_EV08&15

H5\_閉じ目

H5\_モザイク

SV\_ボイスの演奏 EV08\_023 100 100 0 2

\n<■■>「ンんっ、んんんんっふぅ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「うお……処女マンコきっつ……！

　そのくせ中トロトロでマジヤベェわ……！」

\n<陸也>「どんだけ名器なんだっつーの。」

　こんなん挿れただけで出ちまいそうだわ……！」

H5\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV08\_025 100 100 0 2

\n<■■>「はぁはぁ……そ、そんなこと言わないで……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「それじゃあ……動くよっと！」

H5\_放心

SV\_ボイスの演奏 EV08\_028 100 100 0 2

\n<■■>「んんお゛っ……！？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「どう！　■■ちゃん！

　これが若菜ちゃんのしたがってたセックスだよ！」

SV\_ボイスの演奏 EV08\_031 100 100 0 2

\n<■■>「んふぁあッ……！　んっくぅ、んふぁあああ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「さっきまで処女だったくせに……

　いきなり感じてるとか変態すぎだろ……ッ！」

SV\_ボイスの演奏 EV08\_032 100 100 0 2

\n<■■>「ンっふぁあッ……！

　そんっ、なぁ……いきなり、激し……んんっ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あれ？　優しくしてほしかったの？

　激しいほうが気持ちいいんだけど？」

SV\_ボイスの演奏 EV08\_033 100 100 0 2

\n<■■>「はぁんんっ、で、でも……

　わ、わたし……初めてなのに……んっくうぅ！」

SV\_ボイスの停止 2

H5\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV08\_035 100 100 0 2

\n<■■>「んふぁ、そ、そこ……ダメ……んんあぁぅ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「ダメってことは、ここを責めて欲しいってことね」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV08\_036 100 100 0 2

\n<■■>「んぁっ、ちが、ンんんっ……！

　そこ、気持ち良すぎるからぁ……ダメ……んんぁ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「ねぇ、■■ちゃん。写真撮っていいよね？」

H5\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV08\_037 100 100 0 2

\n<■■>「んっ、ふぁ……え、えっ……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「今の■■ちゃんスゲェエロいからさぁ。

　どうしても撮りたいんだよね」

SV\_ボイスの演奏 EV08\_038 100 100 0 2

\n<■■>「そ、それは……んっ、あっんんっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV08\_041 100 100 0 2

\n<■■>「……ふぅっ、んんっ……んはぁ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「何も言わないってことは、

　してもいいって受け取っちゃうけどいいの？」

H5\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV08\_042 100 100 0 2

\n<■■>「はぁ……んんっく、っあぁ、んんぅ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「ホントに、■■ちゃんは卑怯だね。

　まあ、そんなところも可愛いんだけどさッ！」

SV\_ボイスの演奏 EV08\_043 100 100 0 2

\n<■■>「ンんんぅッ……！　はぁ、んんっ……んっ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あー、もうイキそうだわ……！

　■■ちゃん、中に出すから！」

H5\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV08\_044 100 100 0 2

\n<■■>「んぁっ……えっ……？　そ、それはダメです……！

　そんなことしたら、あ、赤ちゃんが……ンんんっ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「何言ってんの！

　中出しが一番気持ちいいんだって、マジで！」

SV\_ボイスの演奏 EV08\_045 100 100 0 2

\n<■■>「んっ、ふぅんん……！

　い、いちばん……きもちいい……んふぁっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「ここまでしたんだからさぁ……

　一番気持ちいいの味わわないと損だって！」

SV\_ボイスの演奏 EV08\_046 100 100 0 2

\n<■■>「それ、は……ンんんぁ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「それじゃあ、聞くけどさぁ……

　中出ししていい？　ダメならちゃんと言ってね」

SV\_ボイスの演奏 EV08\_047 100 100 0 2

\n<■■>「そ、そんな……っふあっ、んんっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あー、もうマジでイキそうだわ……！」

SV\_ボイスの演奏 EV08\_050 100 100 0 2

\n<■■>「んはぁ、んんっ、ああんっ……んっくぅう！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「中出しするぞ……！　あー、出る……！」

H5\_射精\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV08\_051 100 100 0 2

\n<■■>「ンんっふぅぁあああああああ！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV08\_053 100 100 0 2

\n<■■>「んふぁ……はぁはぁ……んっ、はぁはぁ……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「ふぅ……出した出した……」

H5\_射精\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV08\_056 100 100 0 2

\n<■■>「んっ、あの、なんで……

　お、おちんちん抜かないんですか……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「は？　まだヤるからに決まってんだろ？

　■■ちゃんだって一回で満足なんかしてねーっしょ？」

SV\_ボイスの演奏 EV08\_057 100 100 0 2

\n<■■>「えっ……で、でも……一回だけって……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「じゃあホントにこれで止めていいんだ？

　こんなにマンコでチンコ締め付けてきてんのにさぁ」

SV\_ボイスの演奏 EV08\_058 100 100 0 2

\n<■■>「そ、そんなこと……わたしは……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「いい加減さぁ、正直になっちゃえって。

　もっとハメて欲しくてたまんねぇんだろ？」

SV\_ボイスの演奏 EV08\_059 100 100 0 2

\n<■■>「そ、そんなこと……ないです……」

SV\_ボイスの停止 2

H6\_EV09

H6\_閉じ目

H6\_モザイク

SV\_ボイスの演奏 EV09\_001 100 100 0 2

\n<■■>「ふあっ、んんっ……んふぅう……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「■■ちゃんって部屋でヤるとさぁ、

　すごく良い声で鳴いてくれるよなッ！」

SV\_ボイスの演奏 EV09\_002 100 100 0 2

\n<■■>「そ、そんなこと……なぁ、んんっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「そんな声で言われたって説得力ねぇってーの」

SV\_ボイスの演奏 EV09\_003 100 100 0 2

\n<■■>「んひゃあ、んんっく……んふぁ、んああっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「そういやさぁ、この前は正常位で今日はバックじゃん？

　■■ちゃんはどっちが好きなの？」

H6\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV09\_004 100 100 0 2

\n<■■>「んんっ、そ、そんなの……

　あんぅぅ……分かりません……んあっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「ま、俺もどっちでもいいけどね。

　この極上マンコにハメれればさッ！」

H6\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV09\_007 100 100 0 2

\n<■■>「ンんんぅううッ！　んっ、んんっ……ふぁっ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「このトロマンと一緒にいてセックスしてないとか、

　●●●くんだっけ？　ソイツさ、ホモなんじゃね？」

H6\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV09\_010 100 100 0 2

\n<■■>「あっ、んふぁ、んんっ……は、●●●……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「こんなに愛液出しちゃってさぁ。

　そんなにバックで興奮してんの？」

H6\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV09\_014 100 100 0 2

\n<■■>「ちがっ……そんなんじゃ、んんっ、あんん……ッ！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV09\_015 100 100 0 2

\n<■■>「んんっ、そ、そんな早くしちゃ……

　だ、ダメ……んあっ、お、おかしくなっちゃ……んんっ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「えー、じゃあおかしくなっちゃおっか」

H6\_だらしない

SV\_ボイスの演奏 EV09\_016 100 100 0 2

\n<■■>「えっ……ダメ、そんな……ンんんふぁぁあッ！？

　んんっく、んんぅうっ……ッ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「■■ちゃん、ここが気持ちいいんでしょ？」

SV\_ボイスの演奏 EV09\_017 100 100 0 2

\n<■■>「ンんんぅ……！　そ、そんなの……ああぅうッ……！

　し、知らないです……ふぁ、んっくぅ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「それじゃあ分かるまで教え込んであげるよ。

　ま、■■ちゃんは全身性感帯だけどね」

SV\_ボイスの演奏 EV09\_019 100 100 0 2

\n<■■>「ンふぁ……！？」

SV\_ボイスの停止 2

H6\_閉じ目

\n<陸也>「あー、そろそろ出そうだわ。

　■■ちゃん、今回も中に出すけどいいよね？」

SV\_ボイスの演奏 EV09\_021 100 100 0 2

\n<■■>「んっ……んんっ……」

SV\_ボイスの停止 2

H6\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV09\_025 100 100 0 2

\n<■■>「んっ、ふぅぁ……す、好きにしてください……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「そ。じゃあ、好きに種付けするわ」

SV\_ボイスの演奏 EV09\_026 100 100 0 2

\n<■■>「あぁんん……！　んっく、んうぅう、ふぁっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「■■ちゃん……子宮めがけて出してやるよ！」

SV\_ボイスの演奏 EV09\_027 100 100 0 2

\n<■■>「んっくぅ、んふぁんん、あふぁあっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あー、出る出る……ううッ！」

H6\_射精\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV09\_028 100 100 0 2

\n<■■>「ンんふぅぁあああああああ！」

SV\_ボイスの停止 2

H6\_射精\_喜んでる

SV\_ボイスの演奏 EV09\_030 100 100 0 2

\n<■■>「はぁはぁ……んんっ、気持ちよか――」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「へぇ、■■ちゃん。気持ち良かったんだ？」

H6\_射精\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV09\_031 100 100 0 2

\n<■■>「ちがっ……気持ち良くなんか……ない、です……

　わたしはもう……こんな、こと……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「もうセックスなんかしたくないって？」

SV\_ボイスの演奏 EV09\_032 100 100 0 2

\n<■■>「…………」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「じゃあ、■■ちゃんが『もうセックスしたくないです』

　ってちゃんと言えたらセックスするの止めるわ」

SV\_ボイスの演奏 EV09\_033 100 100 0 2

\n<■■>「絶対に、嘘ですよね……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「嘘じゃねぇって。マジマジ大マジ。

　俺だって別に脅してまでヤリたくなんかねーって」

SV\_ボイスの演奏 EV09\_034 100 100 0 2

\n<■■>「……そんなの絶対嘘です。

　先輩は嘘つきだから……だから、言いません……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「……そっかぁ。■■ちゃんは正直だねぇ。

　じゃあ、■■ちゃんが言うまで遠慮なくヤリまくるわ」

H8\_EV10

H8\_目を逸らす

H8\_モザイク

SV\_ボイスの演奏 EV10\_001 100 100 0 2

\n<■■>「んっくぅ、ふぁ、んんっ……！

　せ、先輩……こんなところでなんて……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「そんなこと言って興奮してるんでしょ？

　こんなにマンコとろとろにしちゃってさぁ」

SV\_ボイスの演奏 EV10\_002 100 100 0 2

\n<■■>「ちがっ、それは……ンんんっ……！

　先輩の……お、おちんちんが……ふぁ、んぅ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「つか、この体勢マジでヤベェわ……！

　マンコ締まりすぎてチンコ持ってかれるわ！」

H8\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV10\_005 100 100 0 2

\n<■■>「んふぅ、んっくぅ……！

　そんな、こと……んあっ、言わないでぇ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「なに言ってんだよ。

　こんなにマンコ喜んでんのにさぁッ！」

SV\_ボイスの演奏 EV10\_006 100 100 0 2

\n<■■>「んふああああッ、はぁ……奥、ダメ……！

　そんなとこ、突いちゃ……ひゃぁっ、んんっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「■■ちゃんはこの体勢どうなの？

　まあ、聞くまでもないけどね」

SV\_ボイスの演奏 EV10\_007 100 100 0 2

\n<■■>「ンんんぅう……！　はぁ、こ、こんなの……

　つ、疲れるだけで、気持ち良くなんか……ひゃあん！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「その割には愛液ドバドバ出てるよ。

　あーあ、床までびしょびしょだわ」

SV\_ボイスの演奏 EV10\_008 100 100 0 2

\n<■■>「そ、それは……

　た、ただの……生理現しょ……う゛うッんん……！？」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV10\_009 100 100 0 2

\n<■■>「なに、これ……やめっ……ンンんっ……！

　そんなぁ、奥ばっか……んふぁぅう！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV10\_011 100 100 0 2

\n<■■>「んふぁ、せ、先輩……わ、わたし……

　も、もうイっちゃいそうです……んんっくう……！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV10\_012 100 100 0 2

\n<■■>「だ、だから、その……ああっ、んんっ……！

　い、イっても……んひゃあ！　い、いいですか……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「しゃーねーなぁ。

　それじゃあ、イキやすいようにしてやるよッ！」

SV\_ボイスの演奏 EV10\_013 100 100 0 2

\n<■■>「えっ……？　そ、そんな……今のままでじゅうぶ――」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV10\_014 100 100 0 2

\n<■■>「ンんんぅ……！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV10\_015 100 100 0 2

\n<■■>「ひゃあ、んんっ、ああっ……！

　こ、これ……すぐ、イっちゃ……ンンぅぅ！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV10\_016 100 100 0 2

\n<■■>「あっ、やぁ、ダメ……ンふあぁ……！

　もう、我慢できない……い、イキます……イっちゃ……！」

SV\_ボイスの停止 2

H8\_だらしない

SV\_ボイスの演奏 EV10\_017 100 100 0 2

\n<■■>「ンんふぁああああああああ！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV10\_018 100 100 0 2

\n<■■>「はぁ……はぁはぁ……ンんっく、ひゃあああッ！？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「なに満足そうにしてんだよッ！」

H8\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV10\_019 100 100 0 2

\n<■■>「せ、先輩……イった……イキましたから……

　だ、だから……動くの、やめ……ンんんっ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「は？　まだ俺がイってねーんだけど？」

SV\_ボイスの演奏 EV10\_020 100 100 0 2

\n<■■>「で、でも……おまんこが……び、敏感すぎて……！

　これじゃあ……んあっ、っくう……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「■■ちゃん感じすぎっしょ！

　すげぇエロい顔してるよ？」

SV\_ボイスの演奏 EV10\_021 100 100 0 2

\n<■■>「そんなっ、かお……んんふぁっ……

　し、してない……です……んんっく、うぅんんっ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「なに言ってんの。そこに鏡あるっしょ？

　そこに映ってる自分の顔見て見ろよ」

SV\_ボイスの演奏 EV10\_022 100 100 0 2

\n<■■>「あっ、んんっ……！　ふぁぅ……えっ……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「チンコ入れられてる時の■■ちゃん、

　すごい表情してるだろ？」

H8\_だらしない

SV\_ボイスの演奏 EV10\_025 100 100 0 2

\n<■■>「んっ、んんぅ、っくぅあああッ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「なになに、■■ちゃん？

　エロい自分の姿見たらエロい気分になっちゃった？」

SV\_ボイスの演奏 EV10\_026 100 100 0 2

\n<■■>「あっ、んはぁ、んんぅ……！　っくうぅ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「その気持ち分かるわぁ～！

　俺も毎回エロくさせられて困ってんだよねッ！」

SV\_ボイスの演奏 EV10\_027 100 100 0 2

\n<■■>「お゛ッ！　おっ、ンンッ……ふぐぅうう！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あー、そろそろ限界だわ……

　■■ちゃん相手だとマジすぐイキそうになるわ」

\n<陸也>「それじゃあ、■■ちゃん。

　今日も中に出すけど……って聞いてねぇな」

SV\_ボイスの演奏 EV10\_028 100 100 0 2

\n<■■>「んお゛っ、んぐぅう、ふぅ……んふぁあ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「まあ、いいや。嫌がっても中出しするし。

　中出ししねぇセックスって意味ねぇってのッ！」

SV\_ボイスの演奏 EV10\_029 100 100 0 2

\n<■■>「ンんふぁあ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あー、もうダメだわ……イクッ！」

H8\_射精\_だらしない

SV\_ボイスの演奏 EV10\_030 100 100 0 2

\n<■■>「ンんんっぅおおおおおおおおッ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「ふぅ……出した出した。

　この体勢ヤベェな……今度他の女でも試すか」

SV\_ボイスの演奏 EV10\_031 100 100 0 2

\n<■■>「はぁはぁ……んっく、あっ、んんっ……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「……喘ぐだけのオナホみてぇになっちまったな。

　それじゃあ、犯して起こしてやるか」

SV\_ボイスの演奏 EV10\_032 100 100 0 2

\n<■■>「ンおお゛っ、ふぁあっ、んんふぁううう！」

SV\_ボイスの停止 2

H7\_EV11&16

H7\_全裸\_感じてる

H7\_モザイク

SV\_ボイスの演奏 EV11\_001 100 100 0 2

\n<■■>「んふぁ……！　んっく、んぅううう！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「やっぱ騎乗位たまんねぇわ……！

　若菜ちゃんと繋がってるとこ丸見え」

SV\_ボイスの演奏 EV11\_002 100 100 0 2

\n<■■>「んっ、やっ……見ないでください……！

　わ、わたしのおまんこ……んあっ、ひゃっ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「そんなこと言って見て欲しいんでしょ？

　ほら、見ただけで愛液溢れてきてんじゃん」

SV\_ボイスの演奏 EV11\_003 100 100 0 2

\n<■■>「ち、ちがっ……んっ、違います……！

　見られてなんて、わたし……んあっ、ふぅ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「■■ちゃんのおっぱいすげぇ！

　突かれてめっちゃ揺らしてんじゃん！」

H7\_全裸\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV11\_005 100 100 0 2

\n<■■>「ふぁあ、んんっ……！

　そ、そんなこと……言わな……んあっ、んふぅ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「ヤリまくっても締まり変わんねぇしさぁ。

　ああ、もうチンコ持ってかれちまいそう……！」

SV\_ボイスの演奏 EV11\_006 100 100 0 2

\n<■■>「ンふぁ、ああんっ、んっくぅう……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あー、そろそろイキそうだわ……！」

H7\_全裸\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV11\_008 100 100 0 2

\n<■■>「んふぁっ、んんっく、あんぅう……！

　ま、また……中に出すんですよね……んんっ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あ、中出しはもうしねーから」

SV\_ボイスの演奏 EV11\_009 100 100 0 2

\n<■■>「えっ……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「だから、もう中出しはしねーって。

　ガチで孕んでも困るからさぁ。所詮遊びじゃん？」

SV\_ボイスの演奏 EV11\_010 100 100 0 2

\n<■■>「それは、そう……ですね……」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV11\_012 100 100 0 2

\n<■■>「…………」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV11\_015 100 100 0 2

\n<■■>「――して、ください……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あ？　なんか言った？」

SV\_ボイスの演奏 EV11\_016 100 100 0 2

\n<■■>「先輩のざ、ザーメン……

　わ、わたしの中に出してください……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「いいの？

　赤ちゃんできちゃうかもしれねーよ？」

SV\_ボイスの演奏 EV11\_017 100 100 0 2

\n<■■>「それ、は……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「でも、■■ちゃんに赤ちゃん出来たらさぁ、

　俺の子になるってことっしょ？　俺めんどいの嫌だわ」

\n<陸也>「だからさぁ、そんなに精子欲しいなら、

　自分で腰振って勝手に中出しさせれば？」

SV\_ボイスの演奏 EV11\_018 100 100 0 2

\n<■■>「えっ……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「■■ちゃんが勝手に俺の精子で孕むなら、

　俺の知ったことじゃねーじゃん？」

\n<陸也>「俺、変な責任とか負いたくねーしさぁ。

　全部■■ちゃんの責任でヤるなら好きにすれば？」

SV\_ボイスの演奏 EV11\_019 100 100 0 2

\n<■■>「…………」

SV\_ボイスの停止 2

H7\_全裸\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV11\_020 100 100 0 2

\n<■■>「はぁはぁ……んっく、ふぅ……んあっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「気持ち良そうに腰振っちゃってさぁ。

　そんなに俺の赤ちゃん欲しいんだ？」

SV\_ボイスの演奏 EV11\_021 100 100 0 2

\n<■■>「んっ……ちがっ、います……

　わ、わたしは……中出しして欲しいだけ……んふぁ……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「うわっ、そんな理由で中出ししてほしいとか、

　■■ちゃんエロすぎっしょ……！」

SV\_ボイスの演奏 EV11\_026 100 100 0 2

\n<■■>「エッチなんかじゃ……ないです……んんっ……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「つか、■■ちゃん今のソレさぁ。

　オナニーしてみるたいでめっちゃエロい」

H7\_全裸\_喜んでる

SV\_ボイスの演奏 EV11\_027 100 100 0 2

\n<■■>「オナ……こ、これが……オナニーですか……？

　おちんちんで……オナニー……ふっぅ、んんっ……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「チンコでオナニーとかビッチすぎっしょ！」

H7\_全裸\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV11\_029 100 100 0 2

\n<■■>「わ、わたしは……んふぅ、んんっ……

　ビッチ、なんかじゃ……あっ、ないです……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「そんなエロい腰使いしてビッチじゃねーとか、

　流石に言い訳ひどすぎね？」

H7\_全裸\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV11\_030 100 100 0 2

\n<■■>「そんなの……んっ、ふぁっ……んんっく、ふぅ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あー、もうイキそうだわ……！

　■■ちゃんさぁ、引き返すなら今しかねーよ？」

SV\_ボイスの演奏 EV11\_031 100 100 0 2

\n<■■>「んんっ……ふぁっ、ああっんんっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

H7\_全裸\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV11\_032 100 100 0 2

\n<■■>「はぁはぁ……んふっ、んんっ……ふぁ……！

　あっ、ここ……んぁ、すごい……」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV11\_033 100 100 0 2

\n<■■>「んんぅ……もう、ダメ……わ、わたしも……

　わ、わたしも……一緒に、イっても……いいですか……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「ああ。中出しで絶頂させてやるよ」

SV\_ボイスの演奏 EV11\_034 100 100 0 2

\n<■■>「はぁ、んんぅ……それは、んんっ、あっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV11\_035 100 100 0 2

\n<■■>「んはぁ、ダメ……もう我慢できないです……！

　んっく、ううぅ……イクッ、イっちゃ……んんんんっ！」

SV\_ボイスの停止 2

H7\_全裸\_射精\_喜んでる

SV\_ボイスの演奏 EV11\_036 100 100 0 2

\n<■■>「ンふぅぁあああああああああああああっ！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV11\_037 100 100 0 2

\n<■■>「んっ……はぁはぁ……んんっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「ふぅ……搾り取られたわ。

　どんだけザー汁狂いなんだよ」

H7\_全裸\_射精\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV11\_039 100 100 0 2

\n<■■>「ざ、ザーメンなんて好きじゃないです……

　わ、わたしは先輩が脅すから仕方なく……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「そうだ。もう写真消したから」

SV\_ボイスの演奏 EV11\_040 100 100 0 2

\n<■■>「えっ……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「どうかしたの？　写真消してほしくて、

　俺とセックスしてたんでしょ？」

SV\_ボイスの演奏 EV11\_041 100 100 0 2

\n<■■>「そ、そうですけど……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「だから、望み通り消してあげたってわけ。

　ほら、証拠にスマホのアルバム見せたげよっか？」

\n<陸也>「あーあ。すっげー残念だけど、

　これで■■ちゃんとセックスする理由はなくなっちゃった」

SV\_ボイスの演奏 EV11\_042 100 100 0 2

\n<■■>「……わたしは、良かったです……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あっ、それで話は変わるんだけどさ。

　俺、明日も学園行くんだわ。新しい女漁りに」

SV\_ボイスの演奏 EV11\_043 100 100 0 2

\n<■■>「…………」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「次も■■ちゃんみたいな子がいいなぁ。

　見つけたら保健室に連れ込んでその場でヤリまくるわ」

\n<陸也>「夜までよがらせまくってセックス三昧。

　孕むまで中出ししまくってやろうかな」

SV\_ボイスの演奏 EV11\_044 100 100 0 2

\n<■■>「孕むまでずっと……中出し……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「ま、もう■■ちゃんには関係ねーか」

SV\_ボイスの演奏 EV11\_045 100 100 0 2

\n<■■>「そ、そうです……

　わたしには、もう……関係ないです……」

SV\_ボイスの停止 2

H6\_EV12

H6\_閉じ目

H6\_モザイク

SV\_ボイスの演奏 EV12\_001 100 100 0 2

\n<■■>「んっ、はぁ、んんっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「それにしても、■■ちゃんが来るなんてね」

SV\_ボイスの演奏 EV12\_002 100 100 0 2

\n<■■>「た、たまたま……んんっ、です……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「つか、来たってことはさ、

　これからも■■ちゃんを犯しまくっていいってことだよね？」

H6\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV12\_003 100 100 0 2

\n<■■>「それは…………」

SV\_ボイスの停止 2

H6\_喜んでる

SV\_ボイスの演奏 EV12\_004 100 100 0 2

\n<■■>「……先輩のところに来ちゃったのは、

　わたしの不注意ですから……されても文句言えないです……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「ホント、■■ちゃん言い訳好きだよね。

　正直に言ったら？　セックス大好きですってさ」

SV\_ボイスの演奏 EV12\_005 100 100 0 2

\n<■■>「んっあ……い、言い訳なんかじゃ……ンンッ……！

　わ、わたしは……そんなこと……ひゃあ、んあっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

H6\_射精\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV12\_006 100 100 0 2

\n<■■>「せ、先輩……誰か来ちゃいました……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「それはマズったな……とりあえず静かに」

SV\_ボイスの演奏 EV12\_007 100 100 0 2

\n<■■>「わ、分かりました……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<●●>「あれ……いない……

　トイレに行ってるのかな……？」

H6\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV12\_009 100 100 0 2

\n<■■>「ンんんっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

H6\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV12\_010 100 100 0 2

\n<■■>「せ、先輩……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「悪ぃ悪ぃ、つい腰が動いちゃって。

　マジわざとじゃねーって。ごめんごめん」

\n<●●>「あれ……誰かいるのかな……？」

SV\_ボイスの演奏 EV12\_011 100 100 0 2

\n<■■>「●●●がこっち来ちゃう……！

　せ、先輩……ど、どうすれば……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「知り合いなんだろ？　俺はいねーことにするから。

　■■ちゃんも身体だけ隠して追い払ってよ」

SV\_ボイスの演奏 EV12\_012 100 100 0 2

\n<■■>「わかりました……や、やってみます……」

SV\_ボイスの停止 2

H6\_喜んでる

SV\_ボイスの演奏 EV12\_013 100 100 0 2

\n<■■>「は、●●●……どうしたの……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<●●>「あれ？　■■？

　どうしてこんなところにいるの……？」

SV\_ボイスの演奏 EV12\_014 100 100 0 2

\n<■■>「えーっと、その、それはね……

　ほ、保健室の先生に見ててって言われてね……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<●●>「そうなんだ……って、あれ？

　大事な用事があるんじゃなかったの？」

SV\_ボイスの演奏 EV12\_015 100 100 0 2

\n<■■>「そ、それは……も、もう終わったの！

　意外と早く終わっちゃって……えへへ……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<●●>「そうだったんだ……

　ということは、■■はずっと保健室にいたんだよね？」

SV\_ボイスの演奏 EV12\_016 100 100 0 2

\n<■■>「えっ、う、うん……そうだよ……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<●●>「それじゃあさ、先輩見なかった？」

H6\_だらしない

SV\_ボイスの演奏 EV12\_017 100 100 0 2

\n<■■>「先輩……？　それってどのせんぱ――ンんぁッ！？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<●●>「■■？　どうかしたの？」

H6\_喜んでる

SV\_ボイスの演奏 EV12\_018 100 100 0 2

\n<■■>「えっ、んっ……な、なにが……？

　なにも……ふぅっ、な、ないよ……」

SV\_ボイスの停止 2

H6\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV12\_020 100 100 0 2

\n<■■>\}「せ、先輩……止めてください……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>\}「ごめんごめん、腰が勝手に動いちゃってさぁ。

　ほら、普通にしてないと●●●くんにバレちゃうよ」

SV\_ボイスの演奏 EV12\_021 100 100 0 2

\n<■■>\}「そ、そんな……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<●●>「■■……？」

H6\_喜んでる

SV\_ボイスの演奏 EV12\_022 100 100 0 2

\n<■■>「う、ううん……！　んっ……な、なんにも……

　ふぅ、な、ないよ……えへへ……んんっ……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<●●>「なんか変な音がしない……？

　ほら、パンパンって」

SV\_ボイスの演奏 EV12\_023 100 100 0 2

\n<■■>「んっ……え、そ、そうかな……んんっ……

　わ、わたしには聞こえないけど……！」

SV\_ボイスの停止 2

H6\_閉じ目

H6\_だらしない

SV\_ボイスの演奏 EV12\_026 100 100 0 2

\n<■■>「ンんお゛っ……！？　んふぁああ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<●●>「■■！？

　そんな声出して……まさか病気なの！？」

H6\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV12\_028 100 100 0 2

\n<■■>「んんっ、ち、違うの……んふぅっ……！

　ちょ、ちょっと……ぐ、具合が悪くて……んんっ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<●●>「大丈夫なの、■■？

　具合が悪いなら僕が看病してあげるから！」

SV\_ボイスの演奏 EV12\_029 100 100 0 2

\n<■■>「んんっ、だ、ダメ……来ないで……！

　は、●●●は……ダメ……んんっ、なの……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<●●>「で、でも……■■苦しそうだよ！」

H6\_閉じ目

H6\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV12\_033 100 100 0 2

\n<■■>「は、●●●ぁ……お、おねがいが……んんっ！

　おねがいが……あるの……んふぅ……！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV12\_034 100 100 0 2

\n<■■>「ほ、保健室の……せ、先生を……んんっく……！

　よ、呼んできて……はぁ、く、くれないかな……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<●●>「わ、分かった！　すぐに呼んでくるから！

　頑張ってね、■■！」

SV\_ボイスの演奏 EV12\_035 100 100 0 2

\n<■■>「んっく……せ、先輩……！

　ば、バレたら……どうするんで……んふぁ、んんっ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「見られながらイキそうなクセに。

　イクところ見られたくなくて追い出したんだろ！」

H6\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV12\_036 100 100 0 2

\n<■■>「ンふぅあ……そ、それは……ンんッ！

　せ、先輩が……おちんちん入れてくるから……ふぁ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「その割にはいつもより濡れてたっての。

　物欲しそうにマンコもヒクヒクさせてさぁ」

SV\_ボイスの演奏 EV12\_037 100 100 0 2

\n<■■>「そんな……こと、んひゃあっ……！

　おちんちんなんて……欲しく……ンんあっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「俺とのセックスは大事な用事なんだろ！

　●●●くんと遊ぶより気持ちいいもんなッ！」

SV\_ボイスの演奏 EV12\_038 100 100 0 2

\n<■■>「はぁ……ンンんっ！　んあふぅ……！

　そ、それは……んっあっ、んんっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「それじゃあご褒美に、

　■■ちゃんの大好きな中出ししてやるよ！」

H6\_喜んでる

SV\_ボイスの演奏 EV12\_039 100 100 0 2

\n<■■>「んふぁ……！　は、はい……！

　な、中出し……中出ししてください……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「孕むまで止めねぇからな……！

　その覚悟出来たから来たんだもんな！」

SV\_ボイスの演奏 EV12\_040 100 100 0 2

\n<■■>「ふぅんんっ……せ、先輩の赤ちゃんなんて……

　そ、そんなの……孕みません……からぁ、んあッ！」

SV\_ボイスの停止 2

H6\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV12\_041 100 100 0 2

\n<■■>「あんっ……も、もう我慢できないよぉ……！

　はぁ……イク、イっちゃう……んんぅ、イクぅ……！」

SV\_ボイスの停止 2

H6\_射精\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV12\_042 100 100 0 2

\n<■■>「ンんんっうあああああああああ！」

SV\_ボイスの停止 2

H6\_射精\_喜んでる

SV\_ボイスの演奏 EV12\_043 100 100 0 2

\n<■■>「はぁはぁ……ふぅ……んんっ……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「見られて興奮するなんて■■ちゃん変態だね。

　ま、そういうところがいいんだけどッ」

SV\_ボイスの演奏 EV12\_044 100 100 0 2

\n<■■>「んんっ……！　ふぅ、はぁはぁ……んっく……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「それじゃあ、場所移すか。

　早く行かねーと●●●くんが戻ってくるぜ？」

SV\_ボイスの演奏 EV12\_045 100 100 0 2

\n<■■>「は……はい……」

SV\_ボイスの停止 2

H4\_EV13

H4\_射精\_閉じ目

H4\_モザイク

SV\_ボイスの演奏 EV13\_001 100 100 0 2

\n<■■>「んんっ……じゅる、んちゅぶ……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「はぁ……出した出した。

　■■ちゃん、ちゃんとお掃除フェラしてよ？」

SV\_ボイスの演奏 EV13\_002 100 100 0 2

\n<■■>「わ、分かってます……んじゅ、ちゅぷぁ……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「美味しそうにザーメン飲むようになったな。

　そんなに美味しいの？」

H4\_射精\_照れ

SV\_ボイスの演奏 EV13\_003 100 100 0 2

\n<■■>「ザーメンなんて……美味しくないです……

　こんなの……本当は舐めたくないです……れろ、んちゅ……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あー、マジで気持ちいいわー。

　ここまでヤる女はそうそういねーからな」

H4\_射精\_とろけ顔

SV\_ボイスの演奏 EV13\_004 100 100 0 2

\n<■■>「じゅぶ、んむっ、れろ……んっじゅる……んん……！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV13\_007 100 100 0 2

\n<■■>「んっく……変な味……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「うわ、チンカスついてんじゃん。

　■■ちゃん、食べちゃったの？」

H4\_射精\_渋々

SV\_ボイスの演奏 EV13\_008 100 100 0 2

\n<■■>「え……た、食べちゃダメなのでしたか……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「いいや、俺好みだからセーフ。

　まあ、その口とはキスしたくねーけど」

\n<陸也>「これからチンカス付いてたら、

　ちゃんと食べて掃除してよ？」

H4\_射精\_照れ

SV\_ボイスの演奏 EV13\_009 100 100 0 2

\n<■■>「これが……ち、ちんかすなんですね……

　は、はい……分かりました……」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV13\_011 100 100 0 2

\n<■■>「れろ、んれろ……んちゅる、れろ、んっく……」

SV\_ボイスの停止 2

H4\_射精\_とろけ顔

SV\_ボイスの演奏 EV13\_013 100 100 0 2

\n<■■>「んちゅ、れろ……んんっ、こくん……っぷはぁ……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「■■ちゃんくらいだわ。

　そんなに美味しそうにチンカス食べるの」

H4\_射精\_照れ

SV\_ボイスの演奏 EV13\_015 100 100 0 2

\n<■■>「美味しくなんか……ないです……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「でも、嫌いじゃないんでしょ？」

H4\_射精\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV13\_016 100 100 0 2

\n<■■>「…………。

　れろ、ちゅぶ……んちゅる、ちゅぷぁ……」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV13\_017 100 100 0 2

\n<■■>「ちゅる、れろ、んぷぁ……はぁはぁ……

　んっく……れろ、れろ……んんっ……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「つか、■■ちゃんのってさぁ、

　お掃除フェラってよりフェラじゃね？　イキそうになるわ」

H4\_射精\_照れ

SV\_ボイスの演奏 EV13\_019 100 100 0 2

\n<■■>「ちゅる、ちゅぷ……ち、違います……

　これは……フェラじゃありませんから……んちゅ……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「まあいいけど。これは掃除なんだからさぁ、

　射精させんなよ？　汚したらまた初めから掃除だからな」

SV\_ボイスの演奏 EV13\_020 100 100 0 2

\n<■■>「また……初めから……

　……そんなの絶対に嫌です……んちゅぷ、れろ、んちゅる……」

SV\_ボイスの停止 2

H4\_射精\_とろけ顔

SV\_ボイスの演奏 EV13\_024 100 100 0 2

\n<■■>「んじゅる、れろ……んっくんっく！　んっちゅぷ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「おいおいそんなに激しくしたら……

　あー、また出そうだわ……いいのか……？」

SV\_ボイスの演奏 EV13\_025 100 100 0 2

\n<■■>「んじゅるる、ぐっぽぐっぽ……んじゅぼぼぼ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あー、もうイキそ……出すぞ……！」

SV\_ボイスの演奏 EV13\_026 100 100 0 2

\n<■■>「ぐっぽぐっぽ……じゅる、んむちゅ……んじゅるるる！」

SV\_ボイスの停止 2

H4\_射精\_驚き

SV\_ボイスの演奏 EV13\_027 100 100 0 2

\n<■■>「ンんんんむぅううううっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

H4\_射精\_とろけ顔

SV\_ボイスの演奏 EV13\_028 100 100 0 2

\n<■■>「んんっ……んちゅる、んんっく……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あーあ。またチンコ汚くなったわ。

　■■ちゃんさぁ、どうすればいいか分かるよね？」

SV\_ボイスの演奏 EV13\_029 100 100 0 2

\n<■■>「んっく……こくん……っぷぁ。

　……それくらい、分かってます……」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV13\_030 100 100 0 2

\n<■■>「先輩をイカせたわたしが悪いんですから……

　嫌ですけど、また……おちんちん掃除します……」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV13\_031 100 100 0 2

\n<■■>「しょうがなく……しょうがなくですから……

　んれろ、んじゅぶ……ちゅ、んんちゅ……ちゅぷぁ……」

SV\_ボイスの停止 2

H8\_EV14

H8\_感じてる

H8\_モザイク

SV\_ボイスの演奏 EV14\_001 100 100 0 2

\n<■■>「んんっ……！　はぁはぁ……んっく、んあっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV14\_002 100 100 0 2

\n<■■>「わ、わたし……こんなところでセックスしちゃってる……！

　お、お外でなんて……んっ、ふぁ、んんっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「でも■■ちゃんも興奮してんだろ？

　いつも以上にマンコ締めちゃってさッ！」

H8\_射精\_だらしない

SV\_ボイスの演奏 EV14\_003 100 100 0 2

\n<■■>「ンお゛っ……！？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あー、やっぱこの体位いいわ……！

　■■ちゃんの身体が柔らかくてマジラッキー」

H8\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV14\_004 100 100 0 2

\n<■■>「んあっ、っくぅ……そ、そんな深く……！

　はぅ、んんっ……ああっ、んふぁ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「ほら、■■ちゃんも分かるっしょ？

　チンコがマンコの形作り変えてくとこ」

H8\_目を逸らす

SV\_ボイスの演奏 EV14\_006 100 100 0 2

\n<■■>「んふっ、そ、そんなの分かん……ンんあぁッ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「それじゃあ、■■ちゃんでも分かるように、

　俺のチンコの形をマンコに教えて込んあげる」

SV\_ボイスの演奏 EV14\_008 100 100 0 2

\n<■■>「い、いいです……そんなことしなくても……！

　そんなことされたら……ンんんぅぅうっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

H8\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV14\_010 100 100 0 2

\n<■■>「んっ……ふぅん……はぁ、んふぁ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「どう？　分かってきた？」

SV\_ボイスの演奏 EV14\_011 100 100 0 2

\n<■■>「そんなの知らな……んふぁ……ふぅ、んんっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV14\_013 100 100 0 2

\n<■■>「はぁ、んんっ……んっく、ふぅ……んふぁ……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「これで分かった……っしょッ！」

H8\_だらしない

SV\_ボイスの演奏 EV14\_014 100 100 0 2

\n<■■>「ンんあ゛ッ！？」

SV\_ボイスの停止 2

H8\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV14\_015 100 100 0 2

\n<■■>「ああっ、んんっ……んふぁ！　んっく、はぁんん！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「■■ちゃんさぁ、喘いでばっかじゃなくて、

　折角教えてやったんだから、分かったか言えよっ！」

SV\_ボイスの演奏 EV14\_017 100 100 0 2

\n<■■>「わ、わか……んんっく、わかりましたぁ……！

　おまんこが、先輩のおちんちんの形になっちゃってますっ！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV14\_018 100 100 0 2

\n<■■>「わたしのおまんこが……んひゃあっ！

　先輩のおちんちん専用に……なっちゃって……あアんんっ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「これで■■ちゃんのマンコは、

　オレ専用のチンコケースだからなッ！　他のチンコ食うなよ！」

SV\_ボイスの演奏 EV14\_019 100 100 0 2

\n<■■>「ンぅうッ……！　は、はい……！

　せ、先輩としかセックスしま……んふぁ、んあっ……！！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あー、もう限界だわ……イキそ……出すぞ！」

SV\_ボイスの演奏 EV14\_020 100 100 0 2

\n<■■>「んぁっ、な、中に……中に出してください……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「中出し以外するかよッ！

　■■ちゃんは孕んでも俺の精液便所だってーのッ！」

SV\_ボイスの演奏 EV14\_021 100 100 0 2

\n<■■>「ンふぁっ……！　んっく、んはぁ……！

　わ、わたしも……わたしももう……イクぅッ！」

SV\_ボイスの停止 2

H8\_射精\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV14\_022 100 100 0 2

\n<■■>「ンんんふぅぁあああああああああっ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あー、搾り取られるわ……！

　どんだけ孕みてぇんだよ」

SV\_ボイスの演奏 EV14\_023 100 100 0 2

\n<■■>「んはぁ……は、孕みたくなんかないです……

　ただ、中出しが気持ちいいだけ……んんっ……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「どんだけ変態なんだよ。

　そっちのほうがエロいとか思わねーの？」

SV\_ボイスの演奏 EV14\_024 100 100 0 2

\n<■■>「はぁはぁ……んふぁっ……

　わ、わたしはエッチなんかじゃ……ないです……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「■■ちゃん、この後どこでヤる？

　■■ちゃん家か……ラブホとか？」

SV\_ボイスの演奏 EV14\_028 100 100 0 2

\n<■■>「はぁはぁ……先輩を家に入れたくないです……

　でも、ラブホなんて……そんなエッチなところは嫌です……」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV14\_029 100 100 0 2

\n<■■>「だ、だから……しょうがないですから……

　こ、ここで……このままでいいです……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「んじゃあ、抜くのもメンドイしこのままヤるか。

　孕むまで中出し続けてやるから」

SV\_ボイスの演奏 EV14\_030 100 100 0 2

\n<■■>「んんっ……は、はい……」

SV\_ボイスの停止 2

H5\_EV08&15

H5\_喜んでる

H5\_モザイク

SV\_ボイスの演奏 EV15\_001 100 100 0 2

\n<■■>「ンはぁ……！　んあっ、んんっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「■■ちゃん、いつもより興奮してるっしょ？

　挿れる前からマンコびしょびしょだったもんね？」

H5\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV15\_002 100 100 0 2

\n<■■>「んっく、そ、それは……ふぁっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「おいおい……他の男のこと考えてんじゃねーだろうな？

　■■ちゃんは俺のチンコのことだけ考えてろッ！」

SV\_ボイスの演奏 EV15\_006 100 100 0 2

\n<■■>「ふぁあッ……！　んっく、んああッ！

　ダメ、そんな……いま、敏感だから……ふぅんん！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<●●>「■■ー！　本ってどこにあるのー！」

\n<陸也>「うるせぇな。■■ちゃんならテメェの部屋で、

　セックスの真っ最中だっての！」

H5\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV15\_007 100 100 0 2

\n<■■>「先輩……ちょっと、待ってくだ……んんっ！

　このままじゃ●●●にバレちゃ……うううっ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「聞こえないフリしてればいいんじゃね？

　そんなことより■■ちゃんはマンコに集中！」

H5\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV15\_008 100 100 0 2

\n<■■>「ンんっあっ……！　で、でも……それじゃ、んんっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

H5\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV15\_009 100 100 0 2

\n<■■>「は、●●●から電話だ……

　せ、先輩……これは出ないと怪しまれるんじゃ……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「しつけー男だな。もういいや。出れば？

　まあ、俺は勝手にヤってるから」

SV\_ボイスの演奏 EV15\_010 100 100 0 2

\n<■■>「んんっ……！　で、でもそれじゃあ声が……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「いいからさっさと出ろって。怪しまれていいの？」

SV\_ボイスの演奏 EV15\_011 100 100 0 2

\n<■■>「ううっ……」

SV\_ボイスの停止 2

H5\_電話\_感じてる

\n<●●>『もしもし、■■？』

SV\_ボイスの演奏 EV15\_013 100 100 0 2

\n<■■>「んっ……は、●●●……？　ど、どうしたの……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<●●>『■■の言ってた本ってどこにあるの？』

SV\_ボイスの演奏 EV15\_015 100 100 0 2

\n<■■>「え、えーっと……んんっ……アぁッ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<●●>『■■？』

H5\_電話\_射精\_喜んでる

SV\_ボイスの演奏 EV15\_016 100 100 0 2

\n<■■>「な、なんでもないよ！　な、んんっ……！

　あ、あはは……ふぅ、んんっ……」

SV\_ボイスの停止 2

H5\_電話\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV15\_017 100 100 0 2

\n<■■>「せ、先輩……！

　お願いですから、●●●の前では……んんぁっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「なに言ってんの？　聞かれて気持ちいいんだろ？」

SV\_ボイスの演奏 EV15\_018 100 100 0 2

\n<■■>「そ、そんなこと……ふぁ、んっく、んはぁ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<●●>『■■？　何かしてるの？』

H5\_電話\_喜んでる

SV\_ボイスの演奏 EV15\_019 100 100 0 2

\n<■■>「な、なにも……んぁっ、なにもしてないよ……！

　ほ、ほんと……んっく、ほんとだよ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<●●>『そう？』

SV\_ボイスの演奏 EV15\_020 100 100 0 2

\n<■■>「う、うん……ホント……んんっ、えへへ……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<●●>『でも、カーテン越しに動いてるのが見えるんだけど』

H5\_電話\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV15\_021 100 100 0 2

\n<■■>「えっ……？」

SV\_ボイスの停止 2

H5\_電話\_喜んでる

SV\_ボイスの演奏 EV15\_023 100 100 0 2

\n<■■>「ほ、ほんとは……ストレッチしてるの……！

　さ、最近……はまってて、んあっ……！！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV15\_024 100 100 0 2

\n<■■>「とっても……んふぁ、気持ちいいの……んんっ！

　気持ち良くて……あんっ、声が漏れちゃうくらい……えへへ」

SV\_ボイスの停止 2

\n<●●>『へぇ、そんなのがあるんだ。

　今度僕にも教えてよ』

SV\_ボイスの演奏 EV15\_025 100 100 0 2

\n<■■>「ふぁ……う、うんっ……は、●●●にも……んんっ！

　き、きもちいいストレッチ……教えて……んあっ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「なあなあ、■■ちゃんさぁ。

　俺とヤってる最中に、他の男とセックスの予約してんじゃねーよ！」

H5\_電話\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV15\_026 100 100 0 2

\n<■■>「ンあぅッ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「■■ちゃんのマンコはオレ専用だって言ったよな？

　クソビッチの■■ちゃんには難しかったかッ！？」

SV\_ボイスの演奏 EV15\_027 100 100 0 2

\n<■■>「あんんっ……！　わ、忘れてなんか……はぁんんッ！

　そ、それに……わたしはビッチじゃ……ンふぁ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「なら、ちゃんと言ってみろよ！

　■■ちゃんのマンコは誰のモンだ！？」

SV\_ボイスの演奏 EV15\_028 100 100 0 2

\n<■■>「ふぁあ、んううっ、激し……んあっ……！

　い、言います……んんっく、言いますからぁ……！」

SV\_ボイスの停止 2

H5\_電話\_放心

SV\_ボイスの演奏 EV15\_029 100 100 0 2

\n<■■>「わ、わたしのおまんこは……せ、先輩の……

　先輩のおちんちん専用の……精液便所です……ンふあぅッ……！？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「ちゃんと分かってんじゃん。

　ちゃんと言えたご褒美に、すぐにイカせてやるよッ！」

H5\_電話\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV15\_030 100 100 0 2

\n<■■>「ンはぁあぅっ……！

　そ、そこ……んんっ、すごっ……あっ、んんっぅう！」

SV\_ボイスの停止 2

H5\_電話\_放心

SV\_ボイスの演奏 EV15\_031 100 100 0 2

\n<■■>「んあっ、も、もう我慢できない……！

　い、イっても……イってもいいですか……んひゃぁ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あー、俺も出そうだわ……！

　俺の射精でイカせてやるよ！」

SV\_ボイスの演奏 EV15\_032 100 100 0 2

\n<■■>「は、●●●に……バレちゃうとダメだから……

　ざ、ザーメンは……わ、わたしの中に……んんあっ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「素直に中出ししてほしいって言えっての！

　まあ、どっちにしろ中出し以外しねーけどなッ！」

SV\_ボイスの演奏 EV15\_033 100 100 0 2

\n<■■>「ンはぁっ！　だめっ、もうっ……んあっ！

　はぁはぁ……イっちゃう……●●●の部屋で……ふぁっ！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV15\_034 100 100 0 2

\n<■■>「こんなこと、イケナイのに……感じちゃうぅっ！

　ンんんっ、イクッ……イっちゃうぅうう！」

SV\_ボイスの停止 2

H5\_電話\_射精\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV15\_035 100 100 0 2

\n<■■>「ンんんぅぅうあああああああっ！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV15\_036 100 100 0 2

\n<■■>「……っ、んんっ……！　んはぁ……はぁはぁ……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「ふぅ……出した出した。

　おっと、電話のことすっかり忘れてたわ」

\n<●●>『――かな！　もしもーし、■■！

　聞こえてるー？　大丈夫ー？』

H5\_電話\_射精\_喜んでる

SV\_ボイスの演奏 EV15\_039 100 100 0 2

\n<■■>「えっ……？　んっ……ああ、うん。だ、大丈夫だよ……」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV15\_040 100 100 0 2

\n<■■>「あっ、思い出した……い、いま家に本が無いんだった……

　はぁはぁ……は、●●●ももう戻ってきていいよ……」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV15\_041 100 100 0 2

\n<■■>「も、もう……終わったから……」

SV\_ボイスの停止 2

H7\_EV11&16

H7\_喜んでる

H7\_モザイク

SV\_ボイスの演奏 EV16\_001 100 100 0 2

\n<■■>「んはぁ、んんっ……！　はぁはぁ……んんぅ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「うわ、もう朝じゃん。

　■■ちゃんに一晩中搾り取られてたわ」

H7\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV16\_002 100 100 0 2

\n<■■>「ちがっ、先輩が……んんぁッ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「何がちげーの？　チンコ咥えこんで離さなかったクセにさぁ。

　こんなドロドロマンコで言っても説得力なくね？」

SV\_ボイスの演奏 EV16\_003 100 100 0 2

\n<■■>「あんっ、んっくぁ……！

　それは、先輩がセックスやめてくれないからぁ……んふぁ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「流石にそろそろ休憩すっか。

　じゃあ、次出したら一旦終わりなッ！」

SV\_ボイスの演奏 EV16\_004 100 100 0 2

\n<■■>「ンあぁっ、は、はい……！

　わ、わか……んんっ、あ、わかりましたぁ……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「おいおい、そんな悲しそうにすんなって。

　起きたらまたハメ倒してやるっての」

SV\_ボイスの演奏 EV16\_005 100 100 0 2

\n<■■>「か、悲しくなんて……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<●●>「■■ー！　おはよー！」

SV\_ボイスの演奏 EV16\_006 100 100 0 2

\n<■■>「は、●●●……？　なんで……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「またアイツかよ。

　彼氏でもねーのにしつけー男だな、モヤシ男」

SV\_ボイスの演奏 EV16\_007 100 100 0 2

\n<■■>「ど、どうしよう……

　わたしがいるのはバレちゃってるだろうし……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「いいじゃん。開けちゃえば。

　部屋ん中あちぃし、精子くせぇし、換気換気」

SV\_ボイスの演奏 EV16\_008 100 100 0 2

\n<■■>「えっ、ちょっと待っ――！」

SV\_ボイスの停止 2

H7\_喜んでる

SV\_ボイスの演奏 EV16\_009 100 100 0 2

\n<■■>「お、おはよう……●●●……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<●●>「おはよう。ふぁ～あ、まだ眠いや」

SV\_ボイスの演奏 EV16\_010 100 100 0 2

\n<■■>「あ、あはは……●●●にしては朝が早――い゛んんっ！？」

SV\_ボイスの停止 2

H7\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV16\_012 100 100 0 2

\n<■■>「せ、先輩……動いちゃダメです……んんぁっ！

　は、●●●に……セックスしちゃってるのバレちゃう！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「大丈夫大丈夫。今までだってバレてないっしょ？

　■■ちゃんが声抑えてりゃ大丈夫だってのッ！」

H7\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV16\_013 100 100 0 2

\n<■■>「んふぁあ！　な、なら……せめて、んんっ！

　激しく……ふぅんん、しないでくだ……ンんぅっ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「可愛い可愛い■■ちゃんの頼みだから、まあ……

　出来る限り、多少は、小指の先くらいは善処してみるわ」

\n<●●>「ねぇ、■■。なんでそんなに揺れてるの？」

H7\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV16\_016 100 100 0 2

\n<■■>「えっ？　えっと……」

SV\_ボイスの停止 2

H7\_喜んでる

SV\_ボイスの演奏 EV16\_017 100 100 0 2

\n<■■>「そ、それは……んんっ、その……と、トランポリン！

　トランポリンに乗ってるの！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<●●>「そんなの■■の家にあったっけ？」

SV\_ボイスの演奏 EV16\_018 100 100 0 2

\n<■■>「あ、最近買ったの……んあっ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<●●>「■■？　ちょっと様子が変だよ？」

SV\_ボイスの演奏 EV16\_019 100 100 0 2

\n<■■>「へ、変じゃないよ……！

　ただ……んんっ！　えへへ……き、キモチイイだけ……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<●●>「トランポリンが気持ちいいの？

　■■ってば変だなぁ」

\n<●●>「あれ、ひょっとして、■■……」

H7\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV16\_021 100 100 0 2

\n<■■>「や、やだっ、●●●！　違うの、これは……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<●●>「ダイエットの為にトランポリン買ったんでしょ！

　あんなにケーキ食べてたら太っちゃうもんね」

SV\_ボイスの演奏 EV16\_022 100 100 0 2

\n<■■>「え……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「は……？」

\n<●●>「あれ、■■なにか言った？」

H7\_喜んでる

SV\_ボイスの演奏 EV16\_023 100 100 0 2

\n<■■>「う、ううん……なんでもないよ！

　それより、ダイエットなんてよく分かったね……ンんっ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<●●>「ダイエットなら、もっと動いたほうがいいよ。

　ほら、こんな感じにもっと身体を上下させてさ」

H7\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV16\_024 100 100 0 2

\n<■■>「でも、そんなことしたら声が……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<●●>「声……？」

SV\_ボイスの演奏 EV16\_025 100 100 0 2

\n<■■>「う、ううん……なんでもない……なんでもない……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<●●>「それじゃあ、やってみてよ。

　僕がちゃんと■■のこと見ててあげるから」

H7\_喜んでる

SV\_ボイスの演奏 EV16\_027 100 100 0 2

\n<■■>「う、うん……

　そ、それじゃあ……わたしのこといっぱい見ててね……？」

SV\_ボイスの停止 2

H7\_だらしない

SV\_ボイスの演奏 EV16\_030 100 100 0 2

\n<■■>「ンんん゛ッ！　っはぁ……！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV16\_032 100 100 0 2

\n<■■>「んふぁあ、っくぅ、んああッ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<●●>「いいよいいよ！　■■、その調子！」

SV\_ボイスの演奏 EV16\_033 100 100 0 2

\n<■■>「ンんぁあ……！　これっ、すごっ、いい……！

　これじゃあ、すぐッ……ひゃあンんっ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<●●>「すごいでしょ？　うんうん、すぐに痩せられるよ！」

SV\_ボイスの演奏 EV16\_036 100 100 0 2

\n<■■>「ふぁんんッ、●●●ぁ……！

　わ、わたしのことちゃんと見ててね……っ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<●●>「心配しなくても、ちゃんと見てるよ。

　■■が変わっていくところもちゃんと見ててあげるから！」

SV\_ボイスの演奏 EV16\_037 100 100 0 2

\n<■■>「うん……うぅんんっ……！

　っはぁ……か、変わっちゃったわたしを見ててね……んふぁ！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV16\_038 100 100 0 2

\n<■■>「んんっ、●●●ぁ……もう我慢できないよぉ……！

　イっても……ふぁっ、イってもいいよね……！？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<●●>「行っても……？　あっ、ひょっとしてトイレ我慢してた？

　そうだ、僕もトイレ行こうと思ってたんだ！　じゃあね、■■！」

SV\_ボイスの演奏 EV16\_039 100 100 0 2

\n<■■>「うん……イクッ、イクからねッ！

　ちゃんとイクところも見ててね……！　●●●ぁ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「うっ……俺ももう限界だ……！」

SV\_ボイスの演奏 EV16\_040 100 100 0 2

\n<■■>「わたしのイクところ……気持ち良くなっちゃってるところ……！

　全部見てぇ……！　んあぁッ、イクぅううう！」

SV\_ボイスの停止 2

H7\_射精\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV16\_041 100 100 0 2

\n<■■>「ンんっふぁあああああああああ！」

SV\_ボイスの停止 2

H7\_射精\_だらしない

SV\_ボイスの演奏 EV16\_042 100 100 0 2

\n<■■>「んはぁ……はぁはぁ……んんっく……」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV16\_043 100 100 0 2

\n<■■>「はぁはぁ……わたし……●●●に全部見せちゃった……

　あ、あれ……●●●は……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「アイツならとっくにいねーっての。

　つーかまだセックスしてたことも気付いてねぇ」

H7\_射精\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV16\_044 100 100 0 2

\n<■■>「そう、ですか……良かった……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「休憩したら、明日までヤリっぱだからな。

　寝かさねーから覚悟しといてよ」

SV\_ボイスの演奏 EV16\_048 100 100 0 2

\n<■■>「……どうせ文句言っても変わらないと思うので、

　先輩の好きにしてください……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「そう？　それじゃあ明日さ――」

H6\_EV17

H6\_感じてる

\n<陸也>「もうそろそろ戻ってくるんじゃね？

　早くマンコ締めて射精させないとマズいんじゃない？」

SV\_ボイスの演奏 EV17\_001 100 100 0 2

\n<若菜>「んんっ、そ、そんなこと言っても……

　せ、先輩が焦らして……んあッ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「せっかく晴太くんの家でシてるんだからさぁ、

　気持ちよくイキたいっしょ？」

SV\_ボイスの演奏 EV17\_002 100 100 0 2

\n<若菜>「それ、は……んんぁッ！

　なら……も、もっと激しくしてくださ……ンンぅ！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV17\_003 100 100 0 2

\n<若菜>「う、うそ……

　か、階段上がってきてる音が……んっ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「だから？」

SV\_ボイスの演奏 EV17\_004 100 100 0 2

\n<若菜>「だ、だから……んんっ、早く止めないと……

　ハルタに……見つかっちゃ……ンはぁ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「だから？　それがどうかしたの？」

SV\_ボイスの演奏 EV17\_005 100 100 0 2

\n<若菜>「だ、だって……ハルタに見つかっちゃったら……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「若菜ちゃんさぁ、晴太くんに見られたいんだろ？

　見られると気持ちよくなっちゃう変態なんだろ？」

SV\_ボイスの演奏 EV17\_006 100 100 0 2

\n<若菜>「そんな、こと……んんっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「だったら、見せてやればいいじゃん。

　そうしたら、今までで一番気持ちよくなれるんだよ？」

SV\_ボイスの演奏 EV17\_007 100 100 0 2

\n<若菜>「い、今までで……いち、ばん……んぁあ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「そうそう。ほら、ちゃんとドアのほう向いて。

　そのトロ顔見せてやれよ」

\n<晴太>「わか、な……？」

SV\_ボイスの演奏 EV17\_010 100 100 0 2

\n<若菜>「あっ、んっ、ハルタ……！

　やあっ、見ちゃ……んふぁっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あーあ、バレちゃった。

　だから、ここでヤるのはアブねーって言ったのに」

SV\_ボイスの演奏 EV17\_012 100 100 0 2

\n<若菜>「そ、そんな……

　先輩がここでしようって……んああっ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「俺のせいにすんなって。

　だって若菜ちゃん、ここでするのが一番気持ちいいんだろ？」

SV\_ボイスの演奏 EV17\_013 100 100 0 2

\n<若菜>「それは……ンふぁ、あんっ、んん……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「そういや、激しくしてほしかったんだっけ？

　悪ぃ悪ぃ、今から激しくしてやるからさッ！」

SV\_ボイスの演奏 EV17\_015 100 100 0 2

\n<若菜>「ン゛お……！　んふぁ、んんっ……！

　これ、すごっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「これ……なんで……

　どうして若菜が先輩と……」

H6\_喜んでる

SV\_ボイスの演奏 EV17\_016 100 100 0 2

\n<若菜>「あっ、んんっ、ハルタ、ごめんね……！

　ごめんね……んふぁ……！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV17\_017 100 100 0 2

\n<若菜>「せ、先輩に脅されて……んんぅ、仕方なく……

　わ、わたしだってこんな……んひゃあッ！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV17\_018 100 100 0 2

\n<若菜>「え、えへへ……仕方なく……

　ぜ、全部……先輩が悪いんだから……んんあっ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「若菜ちゃんってすぐ俺のせいにするよな？

　んじゃあ、もう中出ししてやらねーから」

H6\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV17\_021 100 100 0 2

\n<若菜>「そんな……んっく、ふわぁ……！

　ご、ごめんなさい……先輩……ンんんっ！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV17\_022 100 100 0 2

\n<若菜>「わ、わたしが悪かったですから……ふぅあ！

　お、お願いだから中に……んんぁっ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「中って、そんな……若菜……？」

\n<陸也>「じゃあ、いつも通り中に出すからな！

　孕む準備しとけよ！」

H6\_喜んでる

SV\_ボイスの演奏 EV17\_024 100 100 0 2

\n<若菜>「んぁっ、は、はい……！

　ざ、ザーメン……ザーメンいっぱいくださいっ！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV17\_025 100 100 0 2

\n<若菜>「んんっ……わ、わたしも……もう……！

　せ、先輩……！　わたしも一緒に……んんあっ！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV17\_026 100 100 0 2

\n<若菜>「んんっ、もう、イッっちゃ……！

　イクッ……イキます！　んんふぁああ……！」

SV\_ボイスの停止 2

H6\_射精\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV17\_027 100 100 0 2

\n<若菜>「んふぁああああああああああああ！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV17\_028 100 100 0 2

\n<若菜>「はぁはぁ……んはぁ……」

SV\_ボイスの停止 2

H6\_射精\_喜んでる

SV\_ボイスの演奏 EV17\_029 100 100 0 2

\n<若菜>「ハルタに……んんっく、見られちゃってるのに……

　先輩に、いっぱい中出しされちゃった……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「なに言ってんの？

　搾り取ってきたのは若菜ちゃんのマンコだろッ！」

H6\_射精\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV17\_030 100 100 0 2

\n<若菜>「ンんあッ……！　やめっ、先輩……

　イッたばかりで敏感だから……ひゃあんん！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「晴太くんの前だからって生娘ぶるなって。

　若菜ちゃんはこんなんじゃ満足できないっしょッ！」

H6\_射精\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV17\_031 100 100 0 2

\n<若菜>\{「ンンぅううッ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「悪ぃ悪ぃ、そういうことだからさぁ。

　もうちょい部屋借りるわ」

\n<晴太>「え……」

\n<陸也>「なんなら晴太くんも混ぜてやろうか？

　まあ、マンコはオレ専用だけどなッ！」

SV\_ボイスの演奏 EV17\_032 100 100 0 2

\n<若菜>「ンはぁっ……！　あんっ、んんぅう！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「ぼ、僕は……その、大丈夫です……」

\n<陸也>「あーあ。晴太くん行っちゃった。

　若菜ちゃん、幻滅されたかもね」

SV\_ボイスの演奏 EV17\_033 100 100 0 2

\n<若菜>「んんぅあ……んっ、あっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「その様子じゃ気にしてなさそうだな。

　若菜ちゃんが孕むまではずっと俺が可愛がってやるよッ！」

H6\_射精\_喜んでる

SV\_ボイスの演奏 EV17\_034 100 100 0 2

\n<若菜>「ンあっ！　はぁ……は、はい……」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV01\_001 100 100 0 2

H1\_EV01

とある路地の一角で、

一組の男女が気配を殺すようにして密着し合っていた。

H1\_着衣\_耐えてる

\n<陸也>「うおっ、すっげぇおっぱい！

　今までで一番ヤベェわ！」

SV\_ボイスの演奏 EV01\_001 100 100 0 2

\n<若菜>「こ、こんなこと……

　や、やめてください……！」

SV\_ボイスの停止 2

若菜は抵抗の言葉を口にしながらも、

強引に振りほどくことはせずにじっと耐えていた。

SV\_ボイスの演奏 EV01\_002 100 100 0 2

\n<若菜>（胸なんて、今まで誰にも触られたことないのに……

　こんな、先輩に……）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV01\_003 100 100 0 2

\n<若菜>（でも断ったら、写真が……）

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「いーじゃん、減るもんじゃねぇんだしさぁ。

　むしろ、揉んで大きくしてあげてる的な？」

SV\_ボイスの演奏 EV01\_004 100 100 0 2

\n<若菜>「んっ……で、でも……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「なに？　文句でもあるわけ？

　あーあ、あの写真ばら撒いちゃおっかなぁ！」

SV\_ボイスの演奏 EV01\_005 100 100 0 2

\n<若菜>「そ、それは……」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV01\_006 100 100 0 2

\n<若菜>（それだけは絶対にダメ……

　ハルタに見られちゃったら、わたし……！）

SV\_ボイスの停止 2

男の脅しに若菜は言葉を詰まらせる。

その言動に男はニヤリと嫌な笑みを浮かべた。

\n<陸也>「俺は別にこんなことしなくてもいいんだけどさぁ。

　若菜ちゃんの秘密守る対価じゃん？」

SV\_ボイスの演奏 EV01\_007 100 100 0 2

\n<若菜>「…………」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV01\_008 100 100 0 2

\n<若菜>「……ごめんなさい、続けていいです……」

SV\_ボイスの停止 2

若菜は観念したように小さく呟く。

けれど、男の態度がそれで修まることはなかった。

\n<陸也>「続けていいです？　なに言ってんの？

　もっと言い方あるっしょ？　こっちはやんなくていいんだぞ？」

SV\_ボイスの演奏 EV01\_009 100 100 0 2

\n<若菜>「そんな……ううっ……」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV01\_010 100 100 0 2

\n<若菜>（言い方って……それって、わたしから誘うってこと……？

　きっと、エッチな言葉で……）

SV\_ボイスの停止 2

戸惑いを表に出したまま、若菜は顔を紅潮させる。

そして意を決したようにおもむろに口を開いた。

H1\_着衣\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV01\_011 100 100 0 2

\n<若菜>「わたしの……お、おっぱい……揉んでください……」

SV\_ボイスの停止 2

若菜はひどく赤面しながら、胸元をぐっと差し出す。

その行動に男は口角を吊り上げた。

\n<陸也>「しょーがねぇなぁ。

　そこまで言うなら揉んでやるわ。感謝しろよ？」

SV\_ボイスの演奏 EV01\_012 100 100 0 2

\n<若菜>「ふぅん……！　は、はい……」

SV\_ボイスの停止 2

男はまたも若菜の胸を両手で掴むと、

揉みしだくように何度も無遠慮に手を動かす。

H1\_着衣\_耐えてる

SV\_ボイスの演奏 EV01\_013 100 100 0 2

\n<若菜>（なんだろう、これ……

　なんだか、変な気持ちになってきちゃう……！）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV01\_014 100 100 0 2

\n<若菜>（変な声も出ちゃってるし……

　わたし、どうかしちゃったのかな……）

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「服越しでなんつー柔らかさだよ！

　こんなおっぱい、オッサンに揉ませるなんてもったいねぇ」

SV\_ボイスの演奏 EV01\_015 100 100 0 2

\n<若菜>「ん……ふぅ、んん……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「若菜ちゃん、処女っしょ？」

SV\_ボイスの演奏 EV01\_016 100 100 0 2

\n<若菜>「あっ、ん……んんっ……」

SV\_ボイスの停止 2

若菜は返答ではなく、小さな嬌声で返す。

それだけで男は確信を得たようだった。

\n<陸也>「やっぱりな。

　処女のくせに男におっぱい揉まれて感じてんだ？」

SV\_ボイスの演奏 EV01\_017 100 100 0 2

\n<若菜>（感じる……？　これが感じるってことなの……？

　じゃあ、わたし……エッチな気分になってるってこと……？）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV01\_018 100 100 0 2

\n<若菜>「そんなこと、ん……言わないで……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「否定はしねぇんだ？

　じゃあもっと気持ち良くしてやるよ！」

H1\_脱衣\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV01\_019 100 100 0 2

\n<若菜>「きゃああああ！」

SV\_ボイスの停止 2

男は若菜の胸元を包む衣服をぐっと下へ引っ張る。

それだけで、たわわに実った乳房が表に放り出された。

SV\_ボイスの演奏 EV01\_020 100 100 0 2

\n<若菜>（見られちゃった見られちゃった見られちゃった！

　ハルタにも見せたことないのに……！）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV01\_021 100 100 0 2

\n<若菜>（わたしの胸を見られちゃった……！）

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「うおっ！　生で見ると迫力マジでヤベェわ！

　これ見てるやつゼッテー全員今シコってるっしょ！」

SV\_ボイスの演奏 EV01\_022 100 100 0 2

\n<若菜>「み、見てるやつって……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あー、こっちの話。

　若菜ちゃんは気にしなくていいから」

男は薄っぺらい笑みを浮かべながら視線を下へと落とす。

視線の先には隠れるように置かれたカメラが静かに動いていた。

\n<陸也>「じゃあ早速触っちゃおうかな……」

SV\_ボイスの演奏 EV01\_023 100 100 0 2

\n<若菜>「えっ……そのまま触るなんて……

　そ、そんなのダメです……！」

SV\_ボイスの停止 2

男は強引に若菜の胸部に手を伸ばす。

そして乳房を握るように揉み始めた。

SV\_ボイスの演奏 EV01\_024 100 100 0 2

\n<若菜>「んふぁ……！　ん、あっ……」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV01\_025 100 100 0 2

\n<若菜>（ダメ……声が抑えられない……！

　なんでこんな声出ちゃうの……！）

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「むっちゃ手におっぱい吸い付いてくるわ！

　マジこの生おっぱいエロすぎっしょ……！」

男の指は乳房の柔肌に沈み込んでいく。

しっとりとした肌は離れるのを拒むように吸い付いてきた。

SV\_ボイスの演奏 EV01\_026 100 100 0 2

\n<若菜>「エロくなんて……んっ、ない、です……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「なに言ってんの？　こんなエロいおっぱい無ぇっての。

　マジ最高だわ。無限に揉んでてぇ……！」

SV\_ボイスの演奏 EV01\_027 100 100 0 2

\n<若菜>「はぁはぁ……ん、あっ……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「乳首ビンビンじゃん！

　なに？　そんなに気持ち良くなっちゃってんの？」

SV\_ボイスの演奏 EV01\_028 100 100 0 2

\n<若菜>「そんな……こと、ふぁっ、んん……」

SV\_ボイスの停止 2

若菜の言葉とは裏腹に、乳首はツンと固くなっていた。

男は勃起した乳首を人差し指で弾くように触れる。

SV\_ボイスの演奏 EV01\_029 100 100 0 2

\n<若菜>「んふぁ……！　ち、乳首触っちゃ……んんっ！」

SV\_ボイスの停止 2

全身を駆け巡る経験したことのない感覚。

その感覚に、若菜の身体がびくりと震えた。

SV\_ボイスの演奏 EV01\_030 100 100 0 2

\n<若菜>（なにこれ……！　今まででいちばん……っ！

　なにか……なにかきちゃいそう……！）

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「コリコリして欲しくて立ててんじゃないの？」

SV\_ボイスの演奏 EV01\_031 100 100 0 2

\n<若菜>「ちがっ……ふぁっ、んん……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「感じてるんでしょ？」

SV\_ボイスの演奏 EV01\_032 100 100 0 2

\n<若菜>「ふぅ、ん……そ、れは……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「こんなおっぱいマジでレアだわ。

　飽きるまで揉んでやるから」

SV\_ボイスの演奏 EV01\_033 100 100 0 2

\n<若菜>「そ、んな……ふぅっ、ん……！」

SV\_ボイスの停止 2

立ち絵\_EV02

廊下の隅にある物置の中で、

若菜は決まりが悪そうにモジモジと立ち尽くしていた。

立ち絵\_裸\_困り

SV\_ボイスの演奏 EV02\_001 100 100 0 2

\n<若菜>「これで……いいですか……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「うおっ、マジでえっろ……！

　こんなエロい身体して処女とかありえねー！」

若菜は衣服を纏うことなく男の前に立ちながら、

男の視線を一身に受け止めていた。

SV\_ボイスの演奏 EV02\_002 100 100 0 2

\n<若菜>（恥ずかしい……でも、我慢しなきゃ……

　これで、終わるんだから……）

SV\_ボイスの停止 2

男は全裸の若菜を舐めまわすように見つめる。

傍らには綺麗に畳まれた制服が置かれていた。

\n<陸也>「乳首まっピンクじゃん！

　中古ばっか相手してたから、新品最高だわ～！」

SV\_ボイスの演奏 EV02\_003 100 100 0 2

\n<若菜>「ううっ……恥ずかしいです……」

SV\_ボイスの停止 2

全身を視線が這っていく感覚に、

若菜は太ももをすり合わせて羞恥を露わにする。

\n<陸也>「マンコもみっちり閉じてるしさぁ。

　早くこじ開けてぇ……！」

SV\_ボイスの演奏 EV02\_004 100 100 0 2

\n<若菜>「そ、そんなこと……しません……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「つーかパイパンじゃん！

　なに、処女のくせに剃ったりしてるわけ？」

その言葉を聞くなり、

かあっと、若菜の顔がみるみるうちに赤くなっていく。

SV\_ボイスの演奏 EV02\_005 100 100 0 2

\n<若菜>「ま、まだ……その……生えてないだけです……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「ヤッバ！　そんなの初めてだわ！

　ロリっぽいと思ってたけど、犯罪臭すげぇ……！」

その指摘に若菜は視線を落として無毛の股間を見る。

そして更に顔を赤らめた。

SV\_ボイスの演奏 EV02\_006 100 100 0 2

\n<若菜>（や、やっぱり変なんだ……

　お友達もみんなもう生えてるって言ってたし……）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV02\_007 100 100 0 2

\n<若菜>「やめてください……気にしてるんですから……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「でも、おっぱいだけはロリっぽくねーよな。

　あれか？　ロリ巨乳ってやつ？」

SV\_ボイスの演奏 EV02\_008 100 100 0 2

\n<若菜>「もうやめてください……

　これで……ちゃんと消してくれるんですよね……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あ？　なにを？」

SV\_ボイスの演奏 EV02\_009 100 100 0 2

\n<若菜>「あの写真です……

　裸を見せたら、消してくれるんですよね……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あー、うんうん。もちろんもちろん」

男は心にもなさそうに言ってみせる。

けれど、若菜は安心したようにほっと一息吐いた。

\n<陸也>「そんなことよりさぁ。

　こんなエロい裸、目に焼き付けるだけじゃもったいねぇな」

SV\_ボイスの演奏 EV02\_010 100 100 0 2

\n<若菜>「え、エロいなんて言わないでください……」

SV\_ボイスの停止 2

男はポケットからスマートフォンを取り出すと、

若菜の前で操作をしてみせる。

SV\_ボイスの演奏 EV02\_011 100 100 0 2

\n<若菜>（良かった……写真消してくれるんだ……

　でも、なんでスマホをこっちに向けてるんだろう……？）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV02\_012 100 100 0 2

\n<若菜>「あの……そのスマホ、何に使うんですか……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「えー、そりゃあ一つに決まってるっしょ」

SV\_ボイスの演奏 EV02\_013 100 100 0 2

\n<若菜>「きゃっ……！　な、なんですか……！？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「まあまあ」

SV\_ボイスの演奏 EV02\_014 100 100 0 2

\n<若菜>「やめて……撮らないでください……！」

SV\_ボイスの停止 2

若菜の制止など気に留めることなく、

男はスマホのシャッターを切り続ける。

\n<陸也>「いいじゃん、誰にも見せないからさぁ。

　記念だって記念。俺が一人の時に使いたいじゃん？」

SV\_ボイスの演奏 EV02\_015 100 100 0 2

\n<若菜>「つ、使うって……なににですか……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「そりゃあ、シコる時に決まってるっしょ。

　オナニーだよオナニー」

SV\_ボイスの演奏 EV02\_016 100 100 0 2

\n<若菜>「オナ……っ！？　ううっ……」

SV\_ボイスの停止 2

言葉にするのも恥ずかしいというように、

若菜は俯きながら言葉尻をすぼめる。

\n<陸也>「恥ずかしがっちゃって！

　オナニーくらいしたことあるっしょ？」

SV\_ボイスの演奏 EV02\_017 100 100 0 2

\n<若菜>「そ、そんなこと……したこと、ないです……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「うっそ、マジで！？

　若菜ちゃんヤッバ！　初心すぎっしょ！」

\n<陸也>「そのクセにおっぱい揉まれたり、

　こうやって裸撮られて感じちゃってるんだ」

SV\_ボイスの演奏 EV02\_018 100 100 0 2

\n<若菜>「か、感じてないです……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「えー？

　でも、マンコからなんか垂れてね？」

SV\_ボイスの演奏 EV02\_019 100 100 0 2

\n<若菜>「……っ！」

SV\_ボイスの停止 2

若菜が慌てるように秘裂に手を当てると、

トロリとした液が糸を引いて指を光らせる。

SV\_ボイスの演奏 EV02\_020 100 100 0 2

\n<若菜>（これ、ハルタのこと考えてる時に出てくるやつだ……

　なんでこんな時に出てくるんだろう……）

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「そんなに愛液垂らしちゃうくらい、

　気持ち良くなっちゃってんでしょ？」

SV\_ボイスの演奏 EV02\_021 100 100 0 2

\n<若菜>「あいえき……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あー、初心な若菜ちゃんには分かんないか。

　それは若菜ちゃんがエロい気分になると出てくんの」

SV\_ボイスの演奏 EV02\_022 100 100 0 2

\n<若菜>「わ、わたしがエッチな気分の時に……」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV02\_023 100 100 0 2

\n<若菜>（それじゃあ、お股がきゅうってなってたのって、

　ひょっとして、エッチな気分だったってこと……？）

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「見られて感じちゃうなんて、若菜ちゃん素質あるなぁ。

　まあ、変態のだけど」

SV\_ボイスの演奏 EV02\_024 100 100 0 2

\n<若菜>「そんなの……ないです……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「お？　感じちゃってるのは否定しないんだ？」

SV\_ボイスの演奏 EV02\_025 100 100 0 2

\n<若菜>「それは…………」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「なんなら、愛液舐めとってあげよっか？

　若菜ちゃんのなら俺大歓迎なんだけど」

SV\_ボイスの演奏 EV02\_026 100 100 0 2

\n<若菜>「な、舐めとるって……

　わ、わたしの大事なところを舐めるって……ううっ……」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV02\_027 100 100 0 2

\n<若菜>「も、もういいですよね……

　お願いだから、消してください……」

SV\_ボイスの停止 2

　若菜は目を潤ませながら、

　懇願するように男に向かって言葉を投げかける。

\n<陸也>「分かってる分かってる。

　はい、消去っと」

　男は若菜にスマホの画面を見せる。

　そこには『消去しました』の文字が浮かんでいた。

SV\_ボイスの演奏 EV02\_028 100 100 0 2

\n<若菜>「あ、ありが――」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あ、言い忘れてたけど、

　さっき撮ったやつは消さないから」

SV\_ボイスの演奏 EV02\_029 100 100 0 2

\n<若菜>「えっ……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「当然っしょ？　俺のオカズ用なんだからさぁ。

　大丈夫大丈夫、誰にも見せないって！」

\n<陸也>「まあ、でも？　若菜ちゃんの態度次第じゃあ、

　うっかり手が滑って誰かに送信しちゃうかもなぁ」

SV\_ボイスの演奏 EV02\_030 100 100 0 2

\n<若菜>「そんな……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「そういうことだから。

　それじゃあ、今日もおっぱい触らせてよ」

SV\_ボイスの演奏 EV02\_031 100 100 0 2

\n<若菜>（胸を触られてる写真なら、言い訳はできたのに……

　でも、学校で裸になってる写真なんて……）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV02\_032 100 100 0 2

\n<若菜>（わたしは……先輩に逆らえないんだ……）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV02\_033 100 100 0 2

\n<若菜>「わかり、ました……」

SV\_ボイスの停止 2

H1\_EV02

H1\_着衣\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV03\_001 100 100 0 2

\n<若菜>「ん……んんっ……」

SV\_ボイスの停止 2

若菜の吐息が神社の片隅で小さく響く。

その後ろには、両手いっぱいの柔肉を揉む男がいた。

\n<陸也>「なあ、もっと気持ちいいことしねぇ？」

H1\_着衣\_耐えてる

SV\_ボイスの演奏 EV03\_002 100 100 0 2

\n<若菜>「ふっ、んん……もっと、気持ちいいこと……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「そーそー、例えばさぁ……セックスとか？」

H1\_着衣\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV03\_003 100 100 0 2

\n<若菜>「なっ……そんな、ダメです！

　そういうのは、結婚してからじゃないと……んん！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「これ以上溜まったら襲っちゃうそうだしさぁ。

　せめて手で抜いてよ、若菜ちゃん」

SV\_ボイスの演奏 EV03\_004 100 100 0 2

\n<若菜>「手で……抜く……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あー、処女の若菜ちゃんはわかんねーか。

　保体の授業くらい受けてるっしょ？」

\n<陸也>「若菜ちゃんの手で俺のチンコ扱いて、

　射精させろってこと」

SV\_ボイスの演奏 EV03\_005 100 100 0 2

\n<若菜>「わ、わたしの手で……おちんちんを……」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV03\_006 100 100 0 2

\n<若菜>（そ、それって……すごくエッチなことじゃ……！

　陸也先輩は彼氏でもないのに、そんなこと……）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV03\_007 100 100 0 2

\n<若菜>（それに……そういうのは好きな人と……

　結婚を誓った相手じゃないとダメなのに……）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV03\_008 100 100 0 2

\n<若菜>（でも、やらないと写真が……

　わたしの裸がみんなに見られちゃう……）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV03\_009 100 100 0 2

\n<若菜>（ハルタに……見られちゃう……

　エッチな女の子だって、幻滅されちゃう……）

SV\_ボイスの停止 2

若菜の顔が不安と興奮が入り混じって熱くなっていく。

そして、恐る恐るゆっくりと口を開いた。

SV\_ボイスの演奏 EV03\_010 100 100 0 2

\n<若菜>「わ、わかりました……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「それじゃあ、さっさとやってもらおうか」

SV\_ボイスの演奏 EV03\_011 100 100 0 2

\n<若菜>「きゃあ！」

SV\_ボイスの停止 2

男はすぐさまズボンを下ろすと、

ボロンとそそり立った一物を露わにした。

SV\_ボイスの演奏 EV03\_012 100 100 0 2

\n<若菜>（お、おちんちん……授業で見たことあるけど、

　本物なんて初めて見た……）

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「ほら、早く。触らねぇと話になんねーだろ？」

SV\_ボイスの演奏 EV03\_013 100 100 0 2

\n<若菜>「うう……」

SV\_ボイスの停止 2

H2\_EV03

H2\_着衣\_キス無\_耐えてる

若菜はおっかなびっくりな手つきで男根に触れ、

そのまま意を決してように握りしめた。

SV\_ボイスの演奏 EV03\_014 100 100 0 2

\n<若菜>「……これでいいですか」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV03\_015 100 100 0 2

\n<若菜>（さ、触っちゃった……！

　こ、これが男の人のおちんちん……）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV03\_016 100 100 0 2

\n<若菜>（こんなに大きくて、固くて、熱いなんて……

　は、ハルタのもこんな感じなのかな……）

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「ああ。そのまま擦ってくれればいいから」

SV\_ボイスの演奏 EV03\_017 100 100 0 2

\n<若菜>「そ、それじゃあ動かします……」

SV\_ボイスの停止 2

若菜はゆっくりと皮を上下に擦り、

根元から亀頭まで、すべてを刺激するように動かす。

SV\_ボイスの演奏 EV03\_018 100 100 0 2

\n<若菜>（こんな感じでいいのかな……）

SV\_ボイスの停止 2

初めて触れる男根に、重なる拙い手つきは、

けれど拙いが故に想像だにしない刺激を男に与えていく。

SV\_ボイスの演奏 EV03\_019 100 100 0 2

\n<若菜>（射精……をしたら、終わりなんだよね……

　でも、それってどうやったら……）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV03\_020 100 100 0 2

\n<若菜>（わたしも……お、オナニーしたことないから……

　どういう感じなのか全然分からないよ……）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV03\_021 100 100 0 2

\n<若菜>（でも、おちんちん……ビクビクしてる……

　これって、気持ちいいってことなのかな……？）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV03\_022 100 100 0 2

\n<若菜>「あ、あの……これで、その……

　気持ちいいんですか……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「ああ、そのまま続けてくれればいいから」

SV\_ボイスの演奏 EV03\_023 100 100 0 2

\n<若菜>「分かりました……」

SV\_ボイスの停止 2

男の言葉通りに若菜は肉棒を一心に扱き続ける。

強弱も擦り方もまばらな刺激が絶えず男に襲い掛かる。

SV\_ボイスの演奏 EV03\_024 100 100 0 2

\n<若菜>「んひゃあっ……！？」

SV\_ボイスの停止 2

　男の手が若菜のスカートの中へと伸びていく。

　そしてゆっくりスカートを上げて、太ももに触れた。

SV\_ボイスの演奏 EV03\_025 100 100 0 2

\n<若菜>「んっ……あ、あの……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「ああ、気にしなくていいから。

　若菜ちゃんは気にせず続けてて」

SV\_ボイスの演奏 EV03\_026 100 100 0 2

\n<若菜>「ふっ、んん……は、はい……」

SV\_ボイスの停止 2

若菜の太ももから臀部にかけてを滑るように、

男は焦らすような手つきで小さな刺激を与えていく。

SV\_ボイスの演奏 EV03\_027 100 100 0 2

\n<若菜>（なにこれ……変な感じ……

　自分で触ってもこんな気分にならないのに……）

SV\_ボイスの停止 2

触れられている部分へと意識が傾いていた若菜は、

手の平にぬるりと現れた冷たさに小さく驚く。

SV\_ボイスの演奏 EV03\_028 100 100 0 2

\n<若菜>「ひゃっ……！　先っぽから何か……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あー気にしなくていいから」

責められ続けた男根はカウパーを漏らし、

次第にぐちゅぐちゅと、淫らな水音を立て始めた。

SV\_ボイスの演奏 EV03\_029 100 100 0 2

\n<若菜>（このぬるぬるした液体ってもしかして……

　これって、愛液だよね……？）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV03\_030 100 100 0 2

\n<若菜>（先輩もエッチな気持ちなんだ……

　なんだか、わたしもお股がむずむずしてきた……）

SV\_ボイスの停止 2

若菜はきゅんと身体を震わせる。

クロッチには小さな染みが拡がっていた。

SV\_ボイスの演奏 EV03\_031 100 100 0 2

\n<若菜>「はぁ……ん、はぁ……」

SV\_ボイスの停止 2

　我慢汁は潤滑液の役割を果たし、

　竿全体に先ほどよりも容赦ない刺激を与える。

SV\_ボイスの演奏 EV03\_032 100 100 0 2

\n<若菜>（身体が熱い……火照ってるみたい……

　それに……この音聞いてるとなんだか……）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV03\_033 100 100 0 2

\n<若菜>（変な気持ちになる……）

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あーもうイきそう……」

SV\_ボイスの演奏 EV03\_034 100 100 0 2

\n<若菜>「えっ、その……イきそうってどういう……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「だから、もう射精しそうってこと」

男の申し出に、若菜の頭は半ば真っ白になる。

SV\_ボイスの演奏 EV03\_035 100 100 0 2

\n<若菜>（射精するってことは……そのえーっと……

　精液が出るってことで、その……）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV03\_036 100 100 0 2

\n<若菜>「えっ！？　わ、わたしはどうすれば……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「そのまま手で受け止めてくれればいいから」

SV\_ボイスの演奏 EV03\_037 100 100 0 2

\n<若菜>「手で……は、はい……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あー、イく！」

H2\_着衣\_射精\_キス無\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV03\_038 100 100 0 2

\n<若菜>「んっ……んん……！」

SV\_ボイスの停止 2

肉棒はビクビクと大きく震えたかと思うと、

若菜の手のひらに白濁とした精液が解き放った。

\n<陸也>「ふぅ……イったイった」

SV\_ボイスの演奏 EV03\_039 100 100 0 2

\n<若菜>「…………」

SV\_ボイスの停止 2

若菜は手の平にこびりついた熱を感じながら、

呆然したように立ち尽くしていた。

SV\_ボイスの演奏 EV03\_040 100 100 0 2

\n<若菜>（これが精液……

　すごく熱くて……なんだか、クラクラする匂い……）

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「もう手離してくれていいんだけど」

H2\_着衣\_射精\_キス無\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV03\_041 100 100 0 2

\n<若菜>「えっ？　あっ………は、はい……」

SV\_ボイスの停止 2

若菜はおずおずと精液まみれの手を鼻にかざす。

そこから放たれる濃密な雄の匂いに、瞳が一瞬蕩けた。

SV\_ボイスの演奏 EV03\_042 100 100 0 2

\n<若菜>（嫌いな匂いじゃ……ない……）

SV\_ボイスの停止 2

H2\_EV04

H2\_着衣\_キス無\_耐えてる

多目的トイレの中で、

二人の男女が密着し合って小さな吐息を漏らしていた。

室内に響くのは、ぐちゃぐちゃという、

粘液が摩擦を加えられているような音だった。

SV\_ボイスの演奏 EV04\_001 100 100 0 2

\n<若菜>「はぁはぁ…………」

SV\_ボイスの停止 2

若菜は頬を真っ赤に染めながら、肉棒を擦り続ける。

手はカウパーに塗れて白く染まっていた。

SV\_ボイスの演奏 EV04\_002 100 100 0 2

\n<若菜>（こんな感じでいいんだよね……

　すごくエッチで、恥ずかしいけど、これなら……）

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「若菜ちゃんさぁ、手コキもいいんだけど、

　なんか物足りねーんだよなぁ」

SV\_ボイスの演奏 EV04\_003 100 100 0 2

\n<若菜>「え？　あの、それはどうすれば……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「そうだなぁ……あ、そうだ。

　若菜ちゃんがオカズになってよ」

SV\_ボイスの演奏 EV04\_004 100 100 0 2

\n<若菜>「お、おかず……ですか？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「そーそー。

　若菜ちゃんのエロいとこ見せてくれたらいいから」

SV\_ボイスの演奏 EV04\_005 100 100 0 2

\n<若菜>「わ、わたしのエッチなところ……

　そ、それって、胸を出すってことですか……？」

SV\_ボイスの停止 2

若菜はさっと片手で胸を押さえつける。

けれど、男はきょとんとした表情を浮かべた。

\n<陸也>「なに言ってんの？

　おっぱいよりエロいところあるっしょ？」

SV\_ボイスの演奏 EV04\_006 100 100 0 2

\n<若菜>「ひゃあっ！？」

SV\_ボイスの停止 2

男の手が若菜のスカートの中を這いずり回る。

無遠慮に、下着越しに若菜の肌を弄んでいく。

SV\_ボイスの演奏 EV04\_007 100 100 0 2

\n<若菜>「ふっ、ん……んん……」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV04\_008 100 100 0 2

\n<若菜>（この触り方、なんで……

　なんで……こんなに身体が熱くなるの……）

SV\_ボイスの停止 2

男の手つきに、若菜は身体をくねらせる。

そんな若菜を追い込むように下着に指がかかった。

\n<陸也>「こんなの着けてたら、

　若菜ちゃんも窮屈っしょ？　楽にしてやっから」

SV\_ボイスの演奏 EV04\_009 100 100 0 2

\n<若菜>「やっ、それは……！」

SV\_ボイスの停止 2

H2\_脱衣\_キス無\_感じてる

若菜の言葉を無視して、男は下着をずり下げる。

桃色のショーツの下に隠れた秘裂が露わになった。

\n<陸也>「おっ、パンツ糸引いてね？

　若菜ちゃんもエロい気分になってたんだ？」

SV\_ボイスの演奏 EV04\_010 100 100 0 2

\n<若菜>「そ、そんなこと……

　あ、あんまり見ないでください……」

SV\_ボイスの停止 2

言葉尻をすぼめながら、若菜は俯くように言う。

その秘部は光に反射するほどぬめりを帯びていた。

\n<陸也>「もう全身くまなく見たってーの。

　俺等の仲で今さら恥ずかしがることねぇっしょ？」

SV\_ボイスの演奏 EV04\_011 100 100 0 2

\n<若菜>「それは……んんっ、ふぁ……！」

SV\_ボイスの停止 2

男は撫でまわすように若菜の臀部に触れる。

直接伝わる細やかな刺激に、若菜は声を漏らす。

\n<陸也>「やっぱ触るなら生に限るわ。

　挿れる時もだけどな」

SV\_ボイスの演奏 EV04\_012 100 100 0 2

\n<若菜>「んっ、あ、んん……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「もう我慢できねぇ。

　おい、こっち向け」

H2\_脱衣\_キス\_耐えてる

SV\_ボイスの演奏 EV04\_013 100 100 0 2

\n<若菜>「えっ……んんっ！？」

SV\_ボイスの停止 2

若菜が男に目を合わせると、

男はそのまま顔を近づけて若菜の唇に口を重ねた。

SV\_ボイスの演奏 EV04\_014 100 100 0 2

\n<若菜>（これ……キス……！

　わたしのファーストキスが……奪われちゃった……）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV04\_015 100 100 0 2

\n<若菜>（ハルタにあげるはずだった初めてが……

　先輩に、先に奪われちゃった……）

SV\_ボイスの停止 2

けれど、初めての口づけはそれだけでは終わらない。

それは若菜の思い描いていたキスとは違うものだった。

SV\_ボイスの演奏 EV04\_016 100 100 0 2

\n<若菜>「んんっ、ちゅぶ、んんちゅ……！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV04\_017 100 100 0 2

\n<若菜>（舌が……舌が吸われちゃってる……！

　これがキスなの……？　こんな、エッチなのが……）

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「おい、もっと舌出せ」

H2\_脱衣\_キス\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV04\_018 100 100 0 2

\n<若菜>「んっ、ちゅ……んちゅ……」

SV\_ボイスの停止 2

男の言葉通りに若菜は舌を伸ばす。

その舌と絡み合うように男の舌も伸びてきた。

SV\_ボイスの演奏 EV04\_019 100 100 0 2

\n<若菜>「んっ、んちゅ……っぷはぁ……！」

SV\_ボイスの停止 2

H2\_脱衣\_キス無\_感じてる

ようやく若菜の口から男の唇が離れる。

舌は小さく糸を引いて男と繋がっていた。

SV\_ボイスの演奏 EV04\_020 100 100 0 2

\n<若菜>「わ、わたしのファーストキスが……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「若菜ちゃん、初めてだったの？

　おっそ……いやぁ、ごめんごめん」

\n<陸也>「まあ、でも気持ち良かったっしょ？

　あんなにエロく舌伸ばしちゃってさぁ」

若菜の頬が一気に紅潮する。

舌に残った他人の感覚に、若菜は戸惑っていた。

SV\_ボイスの演奏 EV04\_021 100 100 0 2

\n<若菜>「それは……先輩が出せって言うから……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「俺のせいにすんの？

　あんなに顔蕩けさせちゃってたくせにさぁ」

SV\_ボイスの演奏 EV04\_022 100 100 0 2

\n<若菜>「そんな顔……してないです……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「自分で分かってないわけ？　まあいいや。

　分かんねーなら分かるまでしてやるよ」

\n<陸也>「ほら、さっさと舌出せ。

　あ、手コキも止めんなよ？」

SV\_ボイスの演奏 EV04\_023 100 100 0 2

\n<若菜>（嫌だって言いたい……

　でも、そんなことしたら……）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV04\_024 100 100 0 2

\n<若菜>「……はい」

SV\_ボイスの停止 2

若菜は恐る恐る舌を伸ばしていく。

それを啄むように、男の唇が迫ってきた。

H2\_脱衣\_キス\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV04\_025 100 100 0 2

\n<若菜>「ちゅ、んちゅ……れろ……」

SV\_ボイスの停止 2

若菜は拙いキスを繰り返しながら、

白く泡立った手で男根を前後に扱き続ける。

SV\_ボイスの演奏 EV04\_026 100 100 0 2

\n<若菜>「んっ……はぁ、ちゅ……れろ、んちゅ……」

SV\_ボイスの停止 2

太もも周りやお尻の周辺を撫でまわされ、

愛撫されているように小さな息を吐く。

SV\_ボイスの演奏 EV04\_027 100 100 0 2

\n<若菜>（キスされると頭がぼーっとするし……

　触られると身体がびくってする……）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV04\_028 100 100 0 2

\n<若菜>（なんだか、何も考えられない……

　わたし、なんでこんなことしてるんだろ……）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV04\_029 100 100 0 2

\n<若菜>「あ……んっ、ちゅる……んちゅ、はぁ……」

SV\_ボイスの停止 2

若菜は放心したように口づけを交わしながら、

右手で男根を刺激し続ける。

H2\_脱衣\_キス無\_感じてる

\n<陸也>「あー、イきそ……！

　もっと早くしてくんね？」

SV\_ボイスの演奏 EV04\_030 100 100 0 2

\n<若菜>「えっ……あ、わかりました……」

SV\_ボイスの停止 2

ぐちゅぐちゅと響く音を大きくさせながら、

若菜の手は肉棒を激しく擦り上げていく。

SV\_ボイスの演奏 EV04\_031 100 100 0 2

\n<若菜>（ビクビクして、熱くなっていく感じ……

　もうすぐ……しゃ、射精しそうなんだ……）

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「ああ……イく！」

H2\_脱衣\_射精\_キス無\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV04\_032 100 100 0 2

\n<若菜>「んんっ！」

SV\_ボイスの停止 2

若菜はきゅっと手をすぼめて精液を受け止める。

手にはべったりと白濁液がこびりついていた。

\n<陸也>「ふぅ……イったイった」

H2\_脱衣\_射精\_キス無\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV04\_033 100 100 0 2

\n<若菜>「…………」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV04\_034 100 100 0 2

\n<若菜>（こんなにたくさん……

　変な匂いがすごく漂ってくる……）

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あ、若菜ちゃん。

　今日はそのまま握っててくれていいから」

SV\_ボイスの演奏 EV04\_035 100 100 0 2

\n<若菜>「えっ……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「まだキスしたりないしさ、

　若菜ちゃんだってもっと触って欲しいでしょ？」

H2\_脱衣\_射精\_キス\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV04\_036 100 100 0 2

\n<若菜>「そ、そんなこと……んんむっ！」

SV\_ボイスの停止 2

若菜の口を塞ぐように男は唇を重ねては、

強引に口内に舌を潜り込ませていく。

SV\_ボイスの演奏 EV04\_037 100 100 0 2

\n<若菜>「んっ、んちゅ……んむ、れろ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「っぷは。

　まだまだ終わらせねぇよ。若菜ちゃん？」

H3\_EV05&06

H3\_着衣

保健室の仕切られたベッドの中から、

いっそ獣じみた声が部屋中に響き渡っていた。

SV\_ボイスの演奏 EV05\_001 100 100 0 2

\n<若菜>「んふぁ……！　んんっ、ああっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「なになに、若菜ちゃん？

　そんなによがっちゃって……気持ちいいんだ？」

若菜は仰向けになって足を抱えながら、

男に大事なところの全てをさらけ出していた。

SV\_ボイスの演奏 EV05\_002 100 100 0 2

\n<若菜>「ふあっ……！　ん、んふぁ……んんっ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「若菜ちゃんには手コキで良くしてもらったからさぁ。

　今度はこっちが気持ち良くしてあげねーとな」

カリカリと爪で擦るように、

下着越しに勃起したクリトリスを絶え間なく刺激し続ける。

\n<陸也>「若菜ちゃんの敏感なところここっしょ？

　さっきからすげービクビクしてっからバレバレ」

SV\_ボイスの演奏 EV05\_003 100 100 0 2

\n<若菜>「ああん……！　んっく、んふぅ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「ありゃ、手マンが気持ち良すぎて聞いてねぇな。

　まあ、オナったこともねーなら当然か」

男の挑発じみた言葉に、けれど若菜は返答を返さない。

それほどまでに若菜は切羽詰まっていた。

\n<陸也>「つか、あんだけこの格好するの嫌がってたくせに、

　こんなによがるとか……実はヤってほしかったの？」

SV\_ボイスの演奏 EV05\_004 100 100 0 2

\n<若菜>「んんっ、ふぁ……んっく、んん……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「返事しねぇとか……はいお仕置きー！」

SV\_ボイスの演奏 EV05\_005 100 100 0 2

\n<若菜>「んンふああああああッ！？」

SV\_ボイスの停止 2

男はクリトリスをきゅっと摘まんでみせる。

それだけで、若菜の身体は大きく腰を反らせた。

\n<陸也>「つーか、この体勢マジでエロいわ……

　このアングルで撮るとか、俺って天才じゃね？」

\n<陸也>「おい、シコってる童貞ども！

　俺に感謝しながら抜けよ！」

男はカメラに向かって高らかに言ってみせる。

その言葉にさえ、若菜が反応を示すことはなかった。

\n<陸也>「……反応なくてもつまんねーな。

　おーい、若菜ちゃん起きてー」

SV\_ボイスの演奏 EV05\_006 100 100 0 2

\n<若菜>「んんっ……ふぁ、ん……！」

SV\_ボイスの停止 2

男は若菜の耳元で名前を呼びながら、

秘裂をなぞるように何度も指で擦りあげる。

SV\_ボイスの演奏 EV05\_007 100 100 0 2

\n<若菜>（んっ……あれ、わたし……どうして……

　誰かに名前が呼ばれてるような……）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV05\_008 100 100 0 2

\n<若菜>「んあっ……はぁはぁ……せ、先輩……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「お？　やっとお目覚め？

　気持ちいいからって気ィ失わないでよ」

SV\_ボイスの演奏 EV05\_009 100 100 0 2

\n<若菜>「気を失うって……きゃあっ！」

SV\_ボイスの停止 2

若菜はふと意識を取り戻すと、

自分の置かれている状況に叫びにも近い声を上げた。

SV\_ボイスの演奏 EV05\_010 100 100 0 2

\n<若菜>（そうだ……わたし、先輩にお股触られて……

　それで、すごく変な気分になって……）

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あーはいはい、足閉じないでねー。

　それじゃあ見てる人も萎えるから」

SV\_ボイスの演奏 EV05\_011 100 100 0 2

\n<若菜>「見てる人って……んんっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「ちゃんと足抱えてろよ？

　じゃねーと写真バラ撒くからな。あと気絶しても」

SV\_ボイスの演奏 EV05\_012 100 100 0 2

\n<若菜>「そん……んあぁ……んっく、ふぅん……！」

SV\_ボイスの停止 2

下着越しにピンと勃起したクリトリスに、

撫でて、弾いて、摘まんで、様々な刺激を与える。

SV\_ボイスの演奏 EV05\_013 100 100 0 2

\n<若菜>「そこ……ダメ……んふあ……！

　変な……んんっ、変な感じになっちゃうからぁ……！」

SV\_ボイスの停止 2

クチュクチュとわざと音をたたせながら、

男は若菜の敏感な部分を責め立てる。

SV\_ボイスの演奏 EV05\_014 100 100 0 2

\n<若菜>（なにこれ……なにか、込み上げてくる……！

　なにかすごいのが……きちゃいそう……！）

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「若菜ちゃん、イきそうなんでしょ？」

SV\_ボイスの演奏 EV05\_015 100 100 0 2

\n<若菜>「ふぅ……んん……イ、イク……？」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV05\_016 100 100 0 2

\n<若菜>（これが……イクってことなの……？

　それじゃあ、あの変な感じは気持ちいいってこと……？）

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「処女の若菜ちゃんは知らねーだろうけど、

　勝手にイクのはマナー違反だからな？」

\n<陸也>「イきそうな時はイってもいいか訊いて、

　オッケーが出てからイクんだからな？」

\n<陸也>「まあ、ビッチは勝手にイクけどさ。

　若菜ちゃんはそんなはしたねー女じゃねぇだろ？」

SV\_ボイスの演奏 EV05\_017 100 100 0 2

\n<若菜>「そ、そうなんですね……分かりました……」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV05\_018 100 100 0 2

\n<若菜>「んっくぁ……！　きゅ、急に……激しく……んん！

　せ、せんぱい……待っ……ンンっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV05\_019 100 100 0 2

\n<若菜>（なにかきちゃうの……！

　もうダメ……もう抑えきれない……！）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV05\_020 100 100 0 2

\n<若菜>「んふぅ……せ、せんぱい……！

　い、イっても……んふぁ！　イってもいいですか……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あっ？　なにって？」

SV\_ボイスの演奏 EV05\_021 100 100 0 2

\n<若菜>「あぁん……だ、だから……ンんんッ！？」

SV\_ボイスの停止 2

男の指が強く秘裂に押し込まれ、

下着を越えて秘裂に侵入しそうなほどに深く入り込む。

\n<陸也>「だから？　もっとはっきり言えよ」

SV\_ボイスの演奏 EV05\_022 100 100 0 2

\n<若菜>「ふぅあ……だ、だから、もう……い、イきそうで……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「イきそう？　だから？」

SV\_ボイスの演奏 EV05\_023 100 100 0 2

\n<若菜>「んあっ……だから、イっても……ンふぅ……！

　い、イってもいいで……ンんふあっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

若菜が肝心なところを言おうとする度に、

男は強い刺激を与えて妨害する。

SV\_ボイスの演奏 EV05\_024 100 100 0 2

\n<若菜>「ふぅンん……！　あっ、なんかきちゃう……！

　ダメ……んんっ、まだ言えてないのに……きちゃう……！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV05\_025 100 100 0 2

\n<若菜>「んふぁっ……イク！　イっちゃう……！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV05\_026 100 100 0 2

\n<若菜>「イクぅううううううううううううッ！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV05\_027 100 100 0 2

\n<若菜>「ンはぁあああああああああッ！」

SV\_ボイスの停止 2

若菜の腰が一際大きく震えると、

ビクビクと何度も痙攣しながら秘部をひくひくさせる。

SV\_ボイスの演奏 EV05\_028 100 100 0 2

\n<若菜>「んはぁ……はぁ……んん！」

SV\_ボイスの停止 2

未だ秘部に残った余韻に若菜は声を漏らす。

その顔は羞恥で真っ赤に染まっていた。

SV\_ボイスの演奏 EV05\_029 100 100 0 2

\n<若菜>（言う前に……イっちゃった……

　先輩にマナーだって言われてたのに……）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV05\_030 100 100 0 2

\n<若菜>（わたし……はしたない女だったんだ……

　わたし……び、ビッチだったんだ……）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV05\_031 100 100 0 2

\n<若菜>（だから、先輩にこんなことされるのに……

　嫌なはずなのに、気持ち良くなっちゃうんだ……）

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「おいおい、若菜ちゃんさぁ。

　イク前はちゃんと言えって言っただろ？」

SV\_ボイスの演奏 EV05\_032 100 100 0 2

\n<若菜>「ご、ごめんなさい……

　その、変な感じで……ちゃんと言えなくて……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「変な感じ……？

　気持ち良すぎて言えなかっただけっしょ？」

SV\_ボイスの演奏 EV05\_033 100 100 0 2

\n<若菜>「そ、それは……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「マナー守らずイったんだからさぁ。

　ちゃんと謝るのが筋なんじゃね？」

SV\_ボイスの演奏 EV05\_034 100 100 0 2

\n<若菜>「はい……ごめんなさい……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「そうじゃなくてさ。

　理由となんで謝ってるかも言わないと」

SV\_ボイスの演奏 EV05\_035 100 100 0 2

\n<若菜>「き、気持ち良すぎて……イってもいいか訊く前に、

　イっちゃって……ごめんなさい」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「次からは気を付けろよ？」

SV\_ボイスの演奏 EV05\_036 100 100 0 2

\n<若菜>「はい……」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV05\_037 100 100 0 2

\n<若菜>（あれ……次って……）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV05\_038 100 100 0 2

\n<若菜>「先輩……

　どうしたら……こんなこと止めてくれるんですか？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「なに？　止めたかったの？

　てっきり若菜ちゃんも喜んでるのかと」

SV\_ボイスの演奏 EV05\_039 100 100 0 2

\n<若菜>「……そんなことないです」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あー、じゃあ若菜ちゃんがセックスしてくれたら、

　あの写真消してやるよ」

SV\_ボイスの演奏 EV05\_040 100 100 0 2

\n<若菜>「そんな……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「一回セックスして、後腐れなくバイバイってことで。

　別にいいっしょ？　そんだけで消してあげるんだから」

\n<陸也>「まあ、でも若菜ちゃんは気に入ると思うけどなぁ」

SV\_ボイスの演奏 EV05\_041 100 100 0 2

\n<若菜>「何にですか……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「セックスだよ、セックス。

　手マンなんかより、遥かに気持ちいいぜ？」

SV\_ボイスの演奏 EV05\_042 100 100 0 2

\n<若菜>「そんなこと……絶対にないです……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あっそ。まあ、考えといてよ。

　それまでは、セックス以外で遊ぶからさ」

SV\_ボイスの演奏 EV05\_043 100 100 0 2

\n<若菜>（写真を消してもらうには、

　先輩とセックスしなきゃいけないなんて……）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV05\_044 100 100 0 2

\n<若菜>（でも……）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV05\_045 100 100 0 2

\n<若菜>「これよりも……気持ちいい……」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV05\_046 100 100 0 2

\n<若菜>（それって……どんな感じなんだろう……）

SV\_ボイスの停止 2

H3\_EV05&06

H3\_着衣

SV\_ボイスの演奏 EV06\_001 100 100 0 2

\n<若菜>「ふあっ……！　ん、んふぁ……んんっ！」

SV\_ボイスの停止 2

若菜は大きく足を拡げた体勢のまま、

秘部をされるがままに弄ばれていた。

\n<陸也>「それにしても、親が留守だからって、

　男連れ込むなんて。若菜ちゃんもやるねぇ」

SV\_ボイスの演奏 EV06\_002 100 100 0 2

\n<若菜>「そ、そんなんじゃ……んんっ、ないです……」

SV\_ボイスの停止 2

若菜は声を抑えようと必死になるも、

慣れない快感の波に止められないでいた。

SV\_ボイスの演奏 EV06\_003 100 100 0 2

\n<若菜>「へ、変な場所ですると……んあっ……

　だ、誰かにバレちゃうかもしれないから……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「だからって、家に連れ込むかフツー。

　部屋でヤんの期待してたんでしょ？」

SV\_ボイスの演奏 EV06\_004 100 100 0 2

\n<若菜>「そんなこと……あっ、んんっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「どおりでよく喘いじゃうわけだ。

　ここなら声出しても平気だもんな……！」

男は秘部の入り口を片手で擦ったまま、

下着のサイドをゆっくりと引っ張っていく。

SV\_ボイスの演奏 EV06\_005 100 100 0 2

\n<若菜>「ひゃあ……！　せ、せんぱい……それは……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「可愛いパンツ汚れちゃうと悪いっしょ？

　それに、こっちのほうが気持ち良くさせれるしさぁ」

H3\_脱衣

男は若菜の足からパンツを引き抜いていく。

パックリと口を開いた秘部が露わになった。

SV\_ボイスの演奏 EV06\_006 100 100 0 2

\n<若菜>「ううっ……そんなに見ないでください……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「マジ、エロいマンコしてるわー！

　こんなヒクヒクさせてさぁ、誘ってんの？」

SV\_ボイスの演奏 EV06\_007 100 100 0 2

\n<若菜>「そんなこと……ンんふぁあああ！？」

SV\_ボイスの停止 2

すぶり。若菜の秘裂を割って入っていくように、

男の中指が異物を知らない奥へと侵入していく。

\n<陸也>「マンコの中、とろとろで温けぇ……！

　俺の為に温めといてくれた感じ？」

SV\_ボイスの演奏 EV06\_008 100 100 0 2

\n<若菜>「んっく……！

　わ、わたしのお股の中に……指が……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あ？　オナニーもしたことねーんだっけ？

　若菜ちゃんの初めていっぱい奪っちゃって悪ィなぁ」

\n<陸也>「つか、そのお股って言い方なに？

　おまんこだろ？　さんはい、おまんこ」

SV\_ボイスの演奏 EV06\_009 100 100 0 2

\n<若菜>「お、おまんこ……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「はい、よく言えました。

　ご褒美におまんこ気持ち良くしてあげるから」

SV\_ボイスの演奏 EV06\_010 100 100 0 2

\n<若菜>「えっ、ちょっと、待っ――

　ンあっ、ンっくうぅ……！」

SV\_ボイスの停止 2

男は突き立てた中指を上下に動かして、

蜜壺をかき回すように奥を責め立てる。

SV\_ボイスの演奏 EV06\_011 100 100 0 2

\n<若菜>「んふぁ、ああぅ……！

　あっ、これ……ダメです……んんくぁ……！」

SV\_ボイスの停止 2

くちゅくちゅ、という水音をわざと立てて、

耳からでさえ若菜の興奮を底上げしていく。

\n<陸也>「どう、若菜ちゃん？

　パンツ越しより気持ちいいっしょ？」

SV\_ボイスの演奏 EV06\_012 100 100 0 2

\n<若菜>「ンんはぁっ……！　ふぁんんっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV06\_013 100 100 0 2

\n<若菜>（これ……気持ち良すぎちゃう……！

　直接触られるとこんなになっちゃうなんて……！）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV06\_014 100 100 0 2

\n<若菜>（なにも考えれないよぅ……

　おまんこのことしか……考えられない……！）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV06\_015 100 100 0 2

\n<若菜>「はうっ、んんっ……ふぁああっ……！

　これ……んあ、っふぅ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「ほら、若菜ちゃん。

　よがってばっかじゃなくて、舌出して」

SV\_ボイスの演奏 EV06\_016 100 100 0 2

\n<若菜>「んんっ……えっ、ほ、ほうへふは……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「そうそう。ほら、もっと突き出して」

H3\_脱衣\_キス

SV\_ボイスの演奏 EV06\_017 100 100 0 2

\n<若菜>「んっ……んちゅ、れろ……んんっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

若菜の伸ばした舌に、男の舌が絡みつく。

若菜は蕩けるような瞳でそれを受け入れた。

SV\_ボイスの演奏 EV06\_018 100 100 0 2

\n<若菜>（なにこれ……この前のキスと違う……！

　おまんこ触られて、身体中が敏感なんだ……）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV06\_019 100 100 0 2

\n<若菜>（口の中まで敏感になっちゃってるから……

　キスだけで気持ち良くなっちゃう……！）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV06\_020 100 100 0 2

\n<若菜>「ちゅぶ、んちゅ……ちゅぱぁ……んちゅ……」

SV\_ボイスの停止 2

H3\_脱衣

\n<陸也>「……っぷあ、若菜ちゃん上手になったじゃん。

　そんなにキス好きなの？　エロいね」

H3\_脱衣\_キス

SV\_ボイスの演奏 EV06\_021 100 100 0 2

\n<若菜>「そ、そんなこと……んっ、ちゅ……れろ……」

SV\_ボイスの停止 2

H3\_脱衣

\n<陸也>「隠すなって。若菜ちゃん、舌伸ばして。

　そうそう、それじゃあ受け取ってね」

SV\_ボイスの演奏 EV06\_022 100 100 0 2

\n<若菜>「えっ、受け取るって……なにを……」

SV\_ボイスの停止 2

H3\_脱衣\_キス

若菜が舌を伸ばして恐々としていると、

男はくちゅくちゅと唾液を若菜の舌へと垂らした。

SV\_ボイスの演奏 EV06\_023 100 100 0 2

\n<若菜>「ん、んんっ……こくん……っぷぁ」

SV\_ボイスの停止 2

若菜は戸惑いつつもそれを口に含むと、

そのまま喉を鳴らして飲み込んだ。

H3\_脱衣

\n<陸也>「どう？　唾液美味しいっしょ？」

SV\_ボイスの演奏 EV06\_024 100 100 0 2

\n<若菜>「美味しくなんか……ないです……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「俺は好きだけどなぁ。若菜ちゃんの唾液」

H3\_脱衣\_キス

SV\_ボイスの演奏 EV06\_025 100 100 0 2

\n<若菜>「そんな……ちゅ、ちゅぶ、れろ……んちゅる……」

SV\_ボイスの停止 2

最早、抵抗もなく若菜は何度も口づけを交わす。

それは唾液を混ぜ合わせる淫靡なキスだった。

SV\_ボイスの演奏 EV06\_026 100 100 0 2

\n<若菜>（はぁはぁ……あの変な感じ……きちゃいそう……

　また、イキたい……）

SV\_ボイスの停止 2

H3\_脱衣

\n<陸也>「それじゃあ、マンコもぐちょぐちょだし、

　若菜ちゃんもイキたそうだからイカせるか……」

SV\_ボイスの演奏 EV06\_027 100 100 0 2

\n<若菜>「えっ、なんで……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「そんなエロい目で懇願されたら分かるっての。

　あ、本気でやるけど失神すんなよ？」

SV\_ボイスの演奏 EV06\_028 100 100 0 2

\n<若菜>「失神って……ンんふああああッ！？」

SV\_ボイスの停止 2

男の指が今までよりも速く若菜の膣をかき回す。

途端に若菜の腰が大きく反りかえった。

SV\_ボイスの演奏 EV06\_029 100 100 0 2

\n<若菜>「ンひゃあっ、なに、これ……ふぅああん！

　ダメ……おかしく……んっくぅ……！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV06\_030 100 100 0 2

\n<若菜>「やだ、これ……んあっ、すごっ……ッ！

　あ、あたま……おかしくなっちゃうぅぅぅ！」

SV\_ボイスの停止 2

若菜が未だ経験したことのない快楽の渦が、

一気に押し寄せて若菜の身体に責めこんでくる。

\n<陸也>「気持ちいいの？

　若菜ちゃん、気持ちいいんだ？」

SV\_ボイスの演奏 EV06\_031 100 100 0 2

\n<若菜>「はぁ、んんっ……キモチイイ……！

　へ、変な感じで……おまんこキモチイよぉ……！」

SV\_ボイスの停止 2

最早、若菜の頭は正常な判断を下せずに、

思ったまま、聞かれたままを正直に口にする。

\n<陸也>「もうイキそうだ……！」

SV\_ボイスの演奏 EV06\_032 100 100 0 2

\n<若菜>「ふぁんん、は、はい……！　い、イキます……！

　んっく、イっちゃいます……ああ、もう……ンんんん！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV06\_033 100 100 0 2

\n<若菜>「ンっくぅうあああああああああ！」

SV\_ボイスの停止 2

若菜は嬌声をあげながら絶頂すると、

ビクッビクッ、と腰を一際大きく反り返させた。

SV\_ボイスの演奏 EV06\_034 100 100 0 2

\n<若菜>「んはぁ……はぁはぁ……んんっ……」

SV\_ボイスの停止 2

若菜は悩ましげな吐息を漏らし、

小刻みに震えながら、残った余韻に悶える。

\n<陸也>「若菜ちゃんさぁ、親はまだ帰ってこないんだろ？

　それじゃあ、まだやってもいいよな？」

SV\_ボイスの演奏 EV06\_035 100 100 0 2

\n<若菜>「はぁはぁ……んっ、はぁ……」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV06\_036 100 100 0 2

\n<若菜>（嫌って言わなきゃ……嫌って……

　こんなこと……嫌なはずなんだから……）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV06\_037 100 100 0 2

\n<若菜>（でも……疲れて上手く声が出ない……

　だったら……このまま黙ってればいいかな……）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV06\_038 100 100 0 2

\n<若菜>（それなら……

　先輩が勝手にやったことになるから……）

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「何も言わないって卑怯だなぁ、若菜ちゃん。

　つーか、こんなにヒクヒクさせてバレてないと思ってんの？」

SV\_ボイスの演奏 EV06\_039 100 100 0 2

\n<若菜>「ンふぁ……はぁはぁ……んんあっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

ずぶずぶと焦らすようにゆっくりと、

男は絶頂した秘部に指を出し入れしていく。

\n<陸也>「そんなにエロいこと好きならさぁ、

　早くセックスしちゃおうぜ？　もっと気持ち良くなれるって」

SV\_ボイスの演奏 EV06\_040 100 100 0 2

\n<若菜>（これより……気持ちいいこと……

　そんなことされたら、わたし……）

SV\_ボイスの停止 2

H4\_EV07

H4\_渋々

\n<陸也>「おい、歯立てんなよ」

SV\_ボイスの演奏 EV07\_001 100 100 0 2

\n<若菜>「ん……ふぁ、ふぁい……んちゅ、ちゅぶ……」

SV\_ボイスの停止 2

若菜は一糸まとわぬ姿で男に乗りかかりながら、

肉棒を口いっぱいに頬張っていた。

SV\_ボイスの演奏 EV07\_002 100 100 0 2

\n<若菜>（わたし……おちんちん口に入れちゃってる……

　こんなエッチなこと……ダメなのに……）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV07\_003 100 100 0 2

\n<若菜>（でも、写真で脅されてるんだから……

　仕方ないよね……）

SV\_ボイスの停止 2

H4\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV07\_004 100 100 0 2

\n<若菜>「んちゅ、ちゅぶ……んっく、んん……」

SV\_ボイスの停止 2

若菜は口を懸命に動かして肉棒を扱く。

竿は唾液に塗れて、ぐちょぐちょに濡れていた。

\n<陸也>「ホントに若菜ちゃん初めてなの？

　むっちゃエロくしゃぶってるし上手すぎね？」

H4\_渋々

SV\_ボイスの演奏 EV07\_005 100 100 0 2

\n<若菜>「はぁ……そんなこと……ないです……

　んっく、ちゅる……ちゅぱ……んんちゅ……」

SV\_ボイスの停止 2

若菜は一心に男根を咥えこむ。

その姿はいっそ献身的にさえ見えた。

\n<陸也>「若菜ちゃんの口ん中あったけぇ……

　俺専用ののチンポケースにしたげよっか？」

SV\_ボイスの演奏 EV07\_006 100 100 0 2

\n<若菜>「んじゅる……っぷあ……！

　そんなの……嫌です……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「つか、若菜ちゃん。あんまり拒否ってこなかったね。

　そんなに俺のチンコしゃぶりたかった？」

H4\_照れ

その言葉に若菜の顔は一気の紅潮する。

その表情には焦りにも似た色が浮かんでいた。

SV\_ボイスの演奏 EV07\_007 100 100 0 2

\n<若菜>「ち、ちが……っ！　そんなのじゃないです……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「その割にはちゃんとしゃぶってんじゃん。

　あ、思ったより美味しかった系？」

SV\_ボイスの演奏 EV07\_008 100 100 0 2

\n<若菜>「それ、は……」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV07\_009 100 100 0 2

\n<若菜>（こんなの……美味しくないもん……

　ただ、すごくマズいのを想像したからそう思っただけ……）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV07\_010 100 100 0 2

\n<若菜>（こんなの……本当は口に入れたくない……

　でも、先輩に言われたから仕方なく……）

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「まあいいや。それにしても眺め最高！

　やっぱ、しゃぶらせる時は全裸じゃねーとな」

SV\_ボイスの演奏 EV07\_011 100 100 0 2

\n<若菜>「そ、そんなに胸見ないでください……

　わ、わたしが裸になる必要……ないじゃないですか……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「チンコ勃起させる為に決まってるっしょ。

　生でおっぱい当たってると萎えねーわ」

SV\_ボイスの演奏 EV07\_012 100 100 0 2

\n<若菜>「わ、わたしの裸で……おちんちんが……

　んっ、ちゅ、ちゅぱ……んちゅ……」

SV\_ボイスの停止 2

恥ずかしさから逃げるように男根に口づけを交わし、

若菜はそのまま亀頭を口に含んだ。

SV\_ボイスの演奏 EV07\_013 100 100 0 2

\n<若菜>「れろ、んく……ちゅぶ、れろ……ちゅぱ……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「なぁ、もっと激しくしてくれね？」

SV\_ボイスの演奏 EV07\_014 100 100 0 2

\n<若菜>「は、激しくって……こ、こんな感じですか……？」

SV\_ボイスの停止 2

H4\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV07\_015 100 100 0 2

\n<若菜>「じゅぶ、んんっく……じゅる、んちゅ、じゅるるるる！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「うおっ……！」

若菜は顔を激しく前後に振りながら、

舌で亀頭も舐めまわして竿全体を刺激していく。

SV\_ボイスの演奏 EV07\_016 100 100 0 2

\n<若菜>（激しくって……こういうことだよね……？

　分からないけど、すごく恥ずかしいことしてる気がする……）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV07\_017 100 100 0 2

\n<若菜>「んじゅる、れろ、んちゅぷぁ、んじゅぼぼ……！」

SV\_ボイスの停止 2

H4\_照れ

SV\_ボイスの演奏 EV07\_018 100 100 0 2

\n<若菜>「こ、これでいいですか……んちゅぶ……

　んっくんっく、じゅる、んちゅぼ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あー、もうイキそうだわ……！

　若菜ちゃん、口の中に出すから」

SV\_ボイスの演奏 EV07\_019 100 100 0 2

\n<若菜>「んあっ……く、口の中に出すって……

　そ、それって……精液がわたしの口に……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「当然っしょ。ちゃんと全部飲めよ」

SV\_ボイスの演奏 EV07\_020 100 100 0 2

\n<若菜>（せ、精液を飲んじゃうなんて……！

　そんなエッチなこと……わたしがするなんて……）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV07\_021 100 100 0 2

\n<若菜>（でも……匂いだけでもすごいのに……

　飲んだら……どんな感じなんだろう……）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV07\_022 100 100 0 2

\n<若菜>「ううっ…………」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「いいからフェラ続けろって」

H4\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV07\_023 100 100 0 2

\n<若菜>「んんっ、ふぁ、ふぁい……

　んじゅぶ、むちゅ、んちゅぶぁ……！」

SV\_ボイスの停止 2

射精間近の膨張した肉棒は、

若菜の口内でビクビクと脈打って絶頂を待つ。

SV\_ボイスの演奏 EV07\_024 100 100 0 2

\n<若菜>（すごくビクビクしてる……

　もうすぐに出ちゃうそうなんだって分かっちゃう……）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV07\_025 100 100 0 2

\n<若菜>（でも、そうしたら……わたしの口の中に、

　精液が出されちゃうんだ……飲まされちゃうんだ……）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV07\_026 100 100 0 2

\n<若菜>「んじゅる、ちゅぶ、ちゅぱぁ……んじゅるるる！」

SV\_ボイスの停止 2

若菜は絶頂の近づいた肉棒を激しく責め立てる。

その刺激に、男根は一際大きく震え上がった。

\n<陸也>「あー、イクわ……！　イク！」

H4\_射精\_驚き

SV\_ボイスの演奏 EV07\_027 100 100 0 2

\n<若菜>「んんんぅうううう！？」

SV\_ボイスの停止 2

若菜の口内に、白濁した液が放出される。

精液は若菜の口を一杯にしてなお溢れてきた。

H4\_射精\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV07\_028 100 100 0 2

\n<若菜>「んっくんっく……！」

SV\_ボイスの停止 2

若菜は口の中に残る圭啓したことのない味を、

懸命に喉を鳴らして飲み込んでいく。

SV\_ボイスの演奏 EV07\_029 100 100 0 2

\n<若菜>（ううっ……熱くて、喉に絡みついてくる……

　これが精液なんだ……この味が……）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV07\_030 100 100 0 2

\n<若菜>（匂いだけでもすごかったのに……

　飲んだら……もっと変な気持ちになっちゃう……）

SV\_ボイスの停止 2

H4\_射精\_照れ

SV\_ボイスの演奏 EV07\_031 100 100 0 2

\n<若菜>「んっく……こくん、ぷぁっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「おいおい、溢してんじゃん。

　ちゃんと全部飲めって言ったよな？」

SV\_ボイスの演奏 EV07\_032 100 100 0 2

\n<若菜>「ご、ごめんなさい……

　飲もうとしたんですけど、すごく多くて、その……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「言い訳はいいから。

　まだ残ってるっしょ？　早く飲んでよ」

\n<陸也>「それと、尿道にも残ってるから。

　ちゃんと吸い出すまでがフェラだかんな」

SV\_ボイスの演奏 EV07\_033 100 100 0 2

\n<若菜>「はい……わかりました……

　んちゅ、じゅる、ちゅぶ……」

SV\_ボイスの停止 2

H4\_射精\_閉じ目

若菜は残った肉棒に残った精液を、

舐めとって、吸い出して、綺麗にしていく。

SV\_ボイスの演奏 EV07\_034 100 100 0 2

\n<若菜>「れろ、んっく……じゅるるるる……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「はぁ……処女のお掃除フェラきもちー！

　残さずザーメン飲みきれよ」

H4\_射精\_照れ

SV\_ボイスの演奏 EV07\_035 100 100 0 2

\n<若菜>（精液……ザーメンって言うんだ……

　この匂い……ずっと嗅いでたらおかしくなっちゃいそう……）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV07\_036 100 100 0 2

\n<若菜>（ザーメンの匂いなんて……好きじゃない……

　こんな味なんて……好きなはずないもん……）

SV\_ボイスの停止 2

言葉では拒絶の言葉を口にする若菜は、

けれど肉棒を口から離すことなく精液を拭き取っていった。

立ち絵\_EV08

立ち絵\_裸\_困り

\n<陸也>「なあ、そろそろ決めてくんね？」

SV\_ボイスの演奏 EV08\_001 100 100 0 2

\n<若菜>「決めるって……何をですか……？」

SV\_ボイスの停止 2

若菜は当然のように男の前で素肌を晒しながら、

おどおどとした様子で男の言葉に耳を傾ける。

\n<陸也>「決まってんだろ。セックスだよ、セックス。

　いい加減、写真隠すのもメンドーになってきたしさぁ」

SV\_ボイスの演奏 EV08\_002 100 100 0 2

\n<若菜>「そ、それは……

　でも……結婚もしてないのに、セックスなんて……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「つか、ラブホに来ておいてそれ言う？」

SV\_ボイスの演奏 EV08\_003 100 100 0 2

\n<若菜>「そ、それは……！　先輩が、無理やり……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「若菜ちゃんの考え方は古ぃんだって。

　今時、どんな女もパコパコハメまくってるっての」

\n<陸也>「それに、若菜ちゃんもハマると思うけどなぁ。

　今までヤったどんなことより気持ちいいからさぁ」

SV\_ボイスの演奏 EV08\_004 100 100 0 2

\n<若菜>「どんなことより……気持ちいい……」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV08\_005 100 100 0 2

\n<若菜>（胸揉まれたのも、キスされたのも、

　て、手マンされたのだって……すごかったのに……）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV08\_006 100 100 0 2

\n<若菜>（そ、それより気持ちいいなんて……

　でも、そんな……そんなの……）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV08\_007 100 100 0 2

\n<若菜>「本当に……その……せ、セックスをしたら、

　写真を消してくれるんですよね……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「当然っしょ。なんなら、今消したげよっか？」

SV\_ボイスの演奏 EV08\_008 100 100 0 2

\n<若菜>「えっ……？」

SV\_ボイスの停止 2

男は若菜にスマホのアルバムを見せながら、

若菜の裸が映った写真をその場で消去した。

\n<陸也>「ほら、消去完了っと。

　これでいいんでしょ？」

SV\_ボイスの演奏 EV08\_009 100 100 0 2

\n<若菜>（ほ、本当に消してくれた……

　それなら、わたしも……ちゃんとしないと……）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV08\_010 100 100 0 2

\n<若菜>（セックスなんて……すごくエッチで、嫌だけど……

　でも、消してもらったんだからしょうがないよね……）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV08\_011 100 100 0 2

\n<若菜>「わ、わかりました……

　一回だけ……一回だけセックスすればいいんですよね……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「そうそう。それじゃあヤろっか。

　まずはマンコに挿れる準備してよ」

SV\_ボイスの演奏 EV08\_012 100 100 0 2

\n<若菜>「それって……どうすれば……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「分かってんだろ？

　しゃぶってチンコ立たせるんだよ」

SV\_ボイスの演奏 EV08\_013 100 100 0 2

\n<若菜>「は、はい……」

SV\_ボイスの停止 2

若菜は男のズボンをおもむろに下ろすと、

露わになった肉棒をゆっくりと口に咥えこんだ。

H4\_EV13

H4\_とろけ顔

SV\_ボイスの演奏 EV08\_014 100 100 0 2

\n<若菜>（セックスするために……わたしの中に挿れるために……

　処女をあげるためだけに、おちんちん舐めちゃってる……）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV08\_015 100 100 0 2

\n<若菜>「ちゅる、ちゅぶ、んちゅ……

　んっ、おっきくなってきた……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「マジで若菜ちゃんのフェラ良いわ……

　なんなら、このまま出していい？」

SV\_ボイスの演奏 EV08\_016 100 100 0 2

\n<若菜>「んっく、むちゅ……んぷぁ……

　そんなの、ダメです……んちゅぶ……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「冗談冗談。本気にしちゃった？

　そんな勿体ないことするわけないっしょ」

SV\_ボイスの演奏 EV08\_017 100 100 0 2

\n<若菜>「んっ、ちゅぶ……もったいない……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「溜まった精液は全部さぁ、

　若菜ちゃんの中に注ぐに決まってるっしょ？」

H4\_照れ

H4\_とろけ顔

SV\_ボイスの演奏 EV08\_018 100 100 0 2

\n<若菜>「……んっく、じゅる、ちゅぶ……

　れろ、んぷぁ、ちゅるる……」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV08\_019 100 100 0 2

\n<若菜>（舐めてると分かる……こんなに大きいのが……

　わたしの中に入っちゃうんだ……）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV08\_020 100 100 0 2

\n<若菜>（おまんこに挿れられちゃうんだ……）

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「それじゃあ、フェラはこれくらいにして、

　セックスしちゃおうか、若菜ちゃん」

SV\_ボイスの演奏 EV08\_021 100 100 0 2

\n<若菜>「んちゅぷぁ……は、はい……」

SV\_ボイスの停止 2

若菜は一糸纏わぬまま恐る恐るベッドに横たわる。

男はその光景を目に焼き付けながら、男根をそそり立てる。

SV\_ボイスの演奏 EV08\_022 100 100 0 2

\n<若菜>（ああ、今からおちんちんが入っちゃうんだ……

　んんっ…来る……入ってきちゃう……！）

SV\_ボイスの停止 2

H5\_EV08&15

H5\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV08\_023 100 100 0 2

\n<若菜>「ンんっ、んんんんっふぅ……！」

SV\_ボイスの停止 2

みちみちと秘裂を押し広げていくように、

肉棒が若菜の処女膜を貫いて膣内へと侵入していく。

SV\_ボイスの演奏 EV08\_024 100 100 0 2

\n<若菜>（先輩に……わたしの初めてあげちゃった……

　ハルタじゃない人に……奪われちゃった……）

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「うお……処女マンコきっつ……！

　そのくせ中トロトロでマジヤベェわ……！」

\n<陸也>「どんだけ名器なんだっつーの。」

　こんなん挿れただけで出ちまいそうだわ……！」

H5\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV08\_025 100 100 0 2

\n<若菜>「はぁはぁ……そ、そんなこと言わないで……」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV08\_026 100 100 0 2

\n<若菜>（お、お腹の中が……圧迫されてるみたい……

　ずっと……おまんこ弄られてる感じがする……）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV08\_027 100 100 0 2

\n<若菜>（これがセックス……

　でも、これなら今までのとはあんまり……）

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「それじゃあ……動くよっと！」

H5\_放心

SV\_ボイスの演奏 EV08\_028 100 100 0 2

\n<若菜>「んんお゛っ……！？」

SV\_ボイスの停止 2

ずぶり、と容赦なく秘部に腰が打ち付けられる。

その衝撃と快楽に若菜は低い声を上げた。

SV\_ボイスの演奏 EV08\_029 100 100 0 2

\n<若菜>（なにこれ……なにこれなにこれ……！

　今までのと……全然違う……！）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV08\_030 100 100 0 2

\n<若菜>（ダメ……こんなこと、しちゃったら……

　気持ち良すぎておかしくなっちゃう……！）

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「どう！　若菜ちゃん！

　これが若菜ちゃんのしたがってたセックスだよ！」

SV\_ボイスの演奏 EV08\_031 100 100 0 2

\n<若菜>「んふぁあッ……！　んっくぅ、んふぁあああ！」

SV\_ボイスの停止 2

パンパンとリズミカルに男は腰を打ち付ける。

その度に、若菜は響くような嬌声を漏らした。

\n<陸也>「さっきまで処女だったくせに……

　いきなり感じてるとか変態すぎだろ……ッ！」

SV\_ボイスの演奏 EV08\_032 100 100 0 2

\n<若菜>「ンっふぁあッ……！

　そんっ、なぁ……いきなり、激し……んんっ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あれ？　優しくしてほしかったの？

　激しいほうが気持ちいいんだけど？」

SV\_ボイスの演奏 EV08\_033 100 100 0 2

\n<若菜>「はぁんんっ、で、でも……

　わ、わたし……初めてなのに……んっくうぅ！」

SV\_ボイスの停止 2

H5\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV08\_034 100 100 0 2

\n<若菜>（はぁはぁ……激しくされるのすごい……

　セックスで……おまんこ馬鹿になっちゃう……！）

SV\_ボイスの停止 2

男は若菜の敏感なポイントを探るように、

突く部分を変えながら何度も出し入れを繰り返す。

SV\_ボイスの演奏 EV08\_035 100 100 0 2

\n<若菜>「んふぁ、そ、そこ……ダメ……んんあぁぅ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「ダメってことは、ここを責めて欲しいってことね」

SV\_ボイスの演奏 EV08\_036 100 100 0 2

\n<若菜>「んぁっ、ちが、ンんんっ……！

　そこ、気持ち良すぎるからぁ……ダメ……んんぁ！」

SV\_ボイスの停止 2

見つけた性感帯を男は容赦なく責め立てる。

そのたびに、若菜は身体を揺らして興奮を露わにする。

\n<陸也>「ねぇ、若菜ちゃん。写真撮っていいよね？」

H5\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV08\_037 100 100 0 2

\n<若菜>「んっ、ふぁ……え、えっ……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「今の若菜ちゃんスゲェエロいからさぁ。

　どうしても撮りたいんだよね」

SV\_ボイスの演奏 EV08\_038 100 100 0 2

\n<若菜>「そ、それは……んっ、あっんんっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV08\_039 100 100 0 2

\n<若菜>（せっかく写真を消してもらったのに……

　また撮られたら、またエッチなことさせられちゃう……）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV08\_040 100 100 0 2

\n<若菜>（またセックスをさせられちゃう……

　この気持ちいいことを……また、ずっと……）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV08\_041 100 100 0 2

\n<若菜>「……ふぅっ、んんっ……んはぁ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「何も言わないってことは、

　してもいいって受け取っちゃうけどいいの？」

H5\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV08\_042 100 100 0 2

\n<若菜>「はぁ……んんっく、っあぁ、んんぅ……！」

SV\_ボイスの停止 2

若菜はわざとらしく嬌声だけをあげる。

その姿に男はニヤリと口角を釣り上げた。

\n<陸也>「ホントに、若菜ちゃんは卑怯だね。

　まあ、そんなところも可愛いんだけどさッ！」

SV\_ボイスの演奏 EV08\_043 100 100 0 2

\n<若菜>「ンんんぅッ……！　はぁ、んんっ……んっ！」

SV\_ボイスの停止 2

男は激しさを増して腰を動かす。

それは絶頂を迎える寸前である合図だった。

\n<陸也>「あー、もうイキそうだわ……！

　若菜ちゃん、中に出すから！」

H5\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV08\_044 100 100 0 2

\n<若菜>「んぁっ……えっ……？　そ、それはダメです……！

　そんなことしたら、あ、赤ちゃんが……ンんんっ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「何言ってんの！

　中出しが一番気持ちいいんだって、マジで！」

SV\_ボイスの演奏 EV08\_045 100 100 0 2

\n<若菜>「んっ、ふぅんん……！

　い、いちばん……きもちいい……んふぁっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「ここまでしたんだからさぁ……

　一番気持ちいいの味わわないと損だって！」

SV\_ボイスの演奏 EV08\_046 100 100 0 2

\n<若菜>「それ、は……ンんんぁ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「それじゃあ、聞くけどさぁ……

　中出ししていい？　ダメならちゃんと言ってね」

SV\_ボイスの演奏 EV08\_047 100 100 0 2

\n<若菜>「そ、そんな……っふあっ、んんっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV08\_048 100 100 0 2

\n<若菜>（中で出すなんて……そんなこと絶対にダメ……

　赤ちゃんできちゃうかもしれないのに……）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV08\_049 100 100 0 2

\n<若菜>（でも、それが一番気持ちいいなら……

　い、一回くらいなら……大丈夫、だよね……？）

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あー、もうマジでイキそうだわ……！」

SV\_ボイスの演奏 EV08\_050 100 100 0 2

\n<若菜>「んはぁ、んんっ、ああんっ……んっくぅう！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「中出しするぞ……！　あー、出る……！」

H5\_射精\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV08\_051 100 100 0 2

\n<若菜>「ンんっふぅぁあああああああ！」

SV\_ボイスの停止 2

ビクビクと痙攣する若菜の膣内に、

逆流するほどの精液が勢いよく流し込まれる。

SV\_ボイスの演奏 EV08\_052 100 100 0 2

\n<若菜>（これが中出し……

　こんな気持ちいいことがあるなんて……！）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV08\_053 100 100 0 2

\n<若菜>「んふぁ……はぁはぁ……んっ、はぁはぁ……」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV08\_054 100 100 0 2

\n<若菜>（まだドクドク流れ込んできちゃってる……

　これ、本当に赤ちゃん出来ないよね……？）

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「ふぅ……出した出した……」

男は最後の一滴まで精液を出し尽くしても、

なお若菜と繋がったままでいた。

SV\_ボイスの演奏 EV08\_055 100 100 0 2

\n<若菜>（まだおちんちん挿れられちゃってる……

　ザーメンが出ないようにおまんこ蓋されちゃってるみたい……）

SV\_ボイスの停止 2

H5\_射精\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV08\_056 100 100 0 2

\n<若菜>「んっ、あの、なんで……

　お、おちんちん抜かないんですか……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「は？　まだヤるからに決まってんだろ？

　若菜ちゃんだって一回で満足なんかしてねーっしょ？」

SV\_ボイスの演奏 EV08\_057 100 100 0 2

\n<若菜>「えっ……で、でも……一回だけって……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「じゃあホントにこれで止めていいんだ？

　こんなにマンコでチンコ締め付けてきてんのにさぁ」

男の言葉に若菜の顔が耳まで真っ赤に染まる。

その実、若菜の膣内はきゅうっと竿全体を包んでいた。

SV\_ボイスの演奏 EV08\_058 100 100 0 2

\n<若菜>「そ、そんなこと……わたしは……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「いい加減さぁ、正直になっちゃえって。

　もっとハメて欲しくてたまんねぇんだろ？」

SV\_ボイスの演奏 EV08\_059 100 100 0 2

\n<若菜>「そ、そんなこと……ないです……」

SV\_ボイスの停止 2

H6\_EV09

H6\_閉じ目

若菜の部屋中にパンパンと腰を打ち付ける音と、

甲高い嬌声と吐息が響き渡っていた。

SV\_ボイスの演奏 EV09\_001 100 100 0 2

\n<若菜>「ふあっ、んんっ……んふぅう……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「若菜ちゃんって部屋でヤるとさぁ、

　すごく良い声で鳴いてくれるよなッ！」

SV\_ボイスの演奏 EV09\_002 100 100 0 2

\n<若菜>「そ、そんなこと……なぁ、んんっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「そんな声で言われたって説得力ねぇってーの」

SV\_ボイスの演奏 EV09\_003 100 100 0 2

\n<若菜>「んひゃあ、んんっく……んふぁ、んああっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

男は容赦のない突きで若菜の秘部を抉っていく。

かき回された蜜壺は白く濁った液に塗れていた。

\n<陸也>「そういやさぁ、この前は正常位で今日はバックじゃん？

　若菜ちゃんはどっちが好きなの？」

H6\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV09\_004 100 100 0 2

\n<若菜>「んんっ、そ、そんなの……

　あんぅぅ……分かりません……んあっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV09\_005 100 100 0 2

\n<若菜>（どっちが気持ちいいかなんて考えられない……

　だって、セックスが気持ち良すぎるもん……！）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV09\_006 100 100 0 2

\n<若菜>（どっちもおちんちんが奥まで当たって……

　おまんこがきゅんきゅんしちゃってるもん……！）

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「ま、俺もどっちでもいいけどね。

　この極上マンコにハメれればさッ！」

H6\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV09\_007 100 100 0 2

\n<若菜>「ンんんぅううッ！　んっ、んんっ……ふぁっ！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV09\_008 100 100 0 2

\n<若菜>（前の体勢より奥まで突かれちゃってる……！

　し、子宮の入口に……おちんちんでキスされちゃってる……！）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV09\_009 100 100 0 2

\n<若菜>（後ろからのセックスすごい……！

　こっちの体勢のほうが気持ちいいかも……！）

SV\_ボイスの停止 2

　若菜はさらに喘ぎ声を大きく響かせる。

　その声にこそ、若菜の本心が露わになっていた。

\n<陸也>「このトロマンと一緒にいてセックスしてないとか、

　ハルタくんだっけ？　ソイツさ、ホモなんじゃね？」

H6\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV09\_010 100 100 0 2

\n<若菜>「あっ、んふぁ、んんっ……は、ハルタ……？」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV09\_011 100 100 0 2

\n<若菜>（ハルタはそんなこと思わないもん……

　ハルタはわたしのことエッチな目でなんか……）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV09\_012 100 100 0 2

\n<若菜>（でも、この体勢だと先輩の顔見えないから、

　あ、相手がハルタだって想像しただけで……）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV09\_013 100 100 0 2

\n<若菜>（あっ……ダメ、そんなこと考えちゃったら……

　おまんこからエッチなお汁がいっぱい垂れちゃう……！）

SV\_ボイスの停止 2

若菜は想像を逞しくさせながら、

愛液を洪水のように垂らしながら肉棒を咥えこむ。

\n<陸也>「こんなに愛液出しちゃってさぁ。

　そんなにバックで興奮してんの？」

H6\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV09\_014 100 100 0 2

\n<若菜>「ちがっ……そんなんじゃ、んんっ、あんん……ッ！」

SV\_ボイスの停止 2

愛液はローションの役目を果たし、

肉棒のピストンをさらに加速させていく。

SV\_ボイスの演奏 EV09\_015 100 100 0 2

\n<若菜>「んんっ、そ、そんな早くしちゃ……

　だ、ダメ……んあっ、お、おかしくなっちゃ……んんっ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「えー、じゃあおかしくなっちゃおっか」

H6\_だらしない

SV\_ボイスの演奏 EV09\_016 100 100 0 2

\n<若菜>「えっ……ダメ、そんな……ンんんふぁぁあッ！？

　んんっく、んんぅうっ……ッ！」

SV\_ボイスの停止 2

男は執拗に同じ部分だけを突き続ける。

そこは若菜が一等身体をくねらせる敏感なポイントだった。

\n<陸也>「若菜ちゃん、ここが気持ちいいんでしょ？」

SV\_ボイスの演奏 EV09\_017 100 100 0 2

\n<若菜>「ンんんぅ……！　そ、そんなの……ああぅうッ……！

　し、知らないです……ふぁ、んっくぅ！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV09\_018 100 100 0 2

\n<若菜>（そんなこと、わたしでも知らないのに……

　先輩に、わたしの身体のこと全部知られちゃってる……）

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「それじゃあ分かるまで教え込んであげるよ。

　ま、若菜ちゃんは全身性感帯だけどね」

SV\_ボイスの演奏 EV09\_019 100 100 0 2

\n<若菜>「ンふぁ……！？」

SV\_ボイスの停止 2

男が軽くお尻の表面を撫で上げただけで、

若菜は肩をびくりと震わせて快感に声を上げる。

H6\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV09\_020 100 100 0 2

\n<若菜>（な、なんで……お尻触られただけなのに……

　こんなに気持ち良く感じちゃうの……？）

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あー、そろそろ出そうだわ。

　若菜ちゃん、今回も中に出すけどいいよね？」

SV\_ボイスの演奏 EV09\_021 100 100 0 2

\n<若菜>「んっ……んんっ……」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV09\_022 100 100 0 2

\n<若菜>（今度こそ……ちゃんと言わなきゃ……

　中出ししちゃダメだって……）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV09\_023 100 100 0 2

\n<若菜>（また中出しされちゃったら本当に……

　でも、またあの気持ちいいのを……）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV09\_024 100 100 0 2

\n<若菜>（一回しちゃったんだし、別にいいよね……

　赤ちゃんなんて簡単にできないもん……）

SV\_ボイスの停止 2

H6\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV09\_025 100 100 0 2

\n<若菜>「んっ、ふぅぁ……す、好きにしてください……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「そ。じゃあ、好きに種付けするわ」

男はフィニッシュを迎えるために、

腰の打ちつける速度をぐんぐん加速させていく。

SV\_ボイスの演奏 EV09\_026 100 100 0 2

\n<若菜>「あぁんん……！　んっく、んうぅう、ふぁっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「若菜ちゃん……子宮めがけて出してやるよ！」

SV\_ボイスの演奏 EV09\_027 100 100 0 2

\n<若菜>「んっくぅ、んふぁんん、あふぁあっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あー、出る出る……ううッ！」

H6\_射精\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV09\_028 100 100 0 2

\n<若菜>「ンんふぅぁあああああああ！」

SV\_ボイスの停止 2

一番奥へと亀頭を押し付けながら、

男は膣内いっぱいに精液を放出させる。

SV\_ボイスの演奏 EV09\_029 100 100 0 2

\n<若菜>（んんっ……すごい量のザーメン……

　お腹の中で精子が動いてるの分かっちゃう……）

SV\_ボイスの停止 2

H6\_射精\_喜んでる

SV\_ボイスの演奏 EV09\_030 100 100 0 2

\n<若菜>「はぁはぁ……んんっ、気持ちよか――」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「へぇ、若菜ちゃん。気持ち良かったんだ？」

若菜がポロリと溢した言葉を聞き逃さず、

男は煽り立てるように言ってみせる。

H6\_射精\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV09\_031 100 100 0 2

\n<若菜>「ちがっ……気持ち良くなんか……ない、です……

　わたしはもう……こんな、こと……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「もうセックスなんかしたくないって？」

SV\_ボイスの演奏 EV09\_032 100 100 0 2

\n<若菜>「…………」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「じゃあ、若菜ちゃんが『もうセックスしたくないです』

　ってちゃんと言えたらセックスするの止めるわ」

SV\_ボイスの演奏 EV09\_033 100 100 0 2

\n<若菜>「絶対に、嘘ですよね……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「嘘じゃねぇって。マジマジ大マジ。

　俺だって別に脅してまでヤリたくなんかねーって」

SV\_ボイスの演奏 EV09\_034 100 100 0 2

\n<若菜>「……そんなの絶対嘘です。

　先輩は嘘つきだから……だから、言いません……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「……そっかぁ。若菜ちゃんは正直だねぇ。

　じゃあ、若菜ちゃんが言うまで遠慮なくヤリまくるわ」

H8\_EV10

H8\_目を逸らす

夏休み中の静まり返った廊下の用具室から、

けれど学び舎とは思えない淫靡な声が漏れていた。

SV\_ボイスの演奏 EV10\_001 100 100 0 2

\n<若菜>「んっくぅ、ふぁ、んんっ……！

　せ、先輩……こんなところでなんて……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「そんなこと言って興奮してるんでしょ？

　こんなにマンコとろとろにしちゃってさぁ」

SV\_ボイスの演奏 EV10\_002 100 100 0 2

\n<若菜>「ちがっ、それは……ンんんっ……！

　先輩の……お、おちんちんが……ふぁ、んぅ……！」

SV\_ボイスの停止 2

若菜は立ったまま足を大きく広げて、

壁に寄り掛かるようにして膣いっぱいに肉棒を咥えこむ。

\n<陸也>「つか、この体勢マジでヤベェわ……！

　マンコ締まりすぎてチンコ持ってかれるわ！」

SV\_ボイスの演奏 EV10\_003 100 100 0 2

\n<若菜>（この体勢……なんだか動物みたい……

　すごく……犯されちゃってる感じがする……！）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV10\_004 100 100 0 2

\n<若菜>（それに、前の時とは全然違う場所に当たって……

　それがすごく……気持ちいい……！）

SV\_ボイスの停止 2

H8\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV10\_005 100 100 0 2

\n<若菜>「んふぅ、んっくぅ……！

　そんな、こと……んあっ、言わないでぇ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「なに言ってんだよ。

　こんなにマンコ喜んでんのにさぁッ！」

SV\_ボイスの演奏 EV10\_006 100 100 0 2

\n<若菜>「んふああああッ、はぁ……奥、ダメ……！

　そんなとこ、突いちゃ……ひゃぁっ、んんっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

男は若菜の太ももを抱えながら、

奥まで抉るようなピストンで膣内を責める。

\n<陸也>「若菜ちゃんはこの体勢どうなの？

　まあ、聞くまでもないけどね」

SV\_ボイスの演奏 EV10\_007 100 100 0 2

\n<若菜>「ンんんぅう……！　はぁ、こ、こんなの……

　つ、疲れるだけで、気持ち良くなんか……ひゃあん！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「その割には愛液ドバドバ出てるよ。

　あーあ、床までびしょびしょだわ」

SV\_ボイスの演奏 EV10\_008 100 100 0 2

\n<若菜>「そ、それは……

　た、ただの……生理現しょ……う゛うッんん……！？」

SV\_ボイスの停止 2

膣奥まで突き刺さった肉棒は、

浅く、けれど深い部分をいじめるように前後する。

SV\_ボイスの演奏 EV10\_009 100 100 0 2

\n<若菜>「なに、これ……やめっ……ンンんっ……！

　そんなぁ、奥ばっか……んふぁぅう！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV10\_010 100 100 0 2

\n<若菜>（この体勢ダメ……すぐにイっちゃいそうになる……

　も、もう……これ以上耐えられない……！）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV10\_011 100 100 0 2

\n<若菜>「んふぁ、せ、先輩……わ、わたし……

　も、もうイっちゃいそうです……んんっくう……！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV10\_012 100 100 0 2

\n<若菜>「だ、だから、その……ああっ、んんっ……！

　い、イっても……んひゃあ！　い、いいですか……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「しゃーねーなぁ。

　それじゃあ、イキやすいようにしてやるよッ！」

SV\_ボイスの演奏 EV10\_013 100 100 0 2

\n<若菜>「えっ……？　そ、そんな……今のままでじゅうぶ――」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV10\_014 100 100 0 2

\n<若菜>「ンんんぅ……！」

SV\_ボイスの停止 2

男は近づいた若菜の絶頂を迎えるために、

ピストンの速度を早くして膣内に刺激を与える。

SV\_ボイスの演奏 EV10\_015 100 100 0 2

\n<若菜>「ひゃあ、んんっ、ああっ……！

　こ、これ……すぐ、イっちゃ……ンンぅぅ！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV10\_016 100 100 0 2

\n<若菜>「あっ、やぁ、ダメ……ンふあぁ……！

　もう、我慢できない……い、イキます……イっちゃ……！」

SV\_ボイスの停止 2

H8\_だらしない

SV\_ボイスの演奏 EV10\_017 100 100 0 2

\n<若菜>「ンんふぁああああああああ！」

SV\_ボイスの停止 2

若菜の腰が大きく震えて絶頂へと至る。

その目は虚ろに、けれど満足そうな表情を浮かべていた。

SV\_ボイスの演奏 EV10\_018 100 100 0 2

\n<若菜>「はぁ……はぁはぁ……ンんっく、ひゃあああッ！？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「なに満足そうにしてんだよッ！」

若菜が絶頂を迎えたというのに、

男のピストンは止まることなく若菜の秘部をかき回す。

H8\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV10\_019 100 100 0 2

\n<若菜>「せ、先輩……イった……イキましたから……

　だ、だから……動くの、やめ……ンんんっ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「は？　まだ俺がイってねーんだけど？」

SV\_ボイスの演奏 EV10\_020 100 100 0 2

\n<若菜>「で、でも……おまんこが……び、敏感すぎて……！

　これじゃあ……んあっ、っくう……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「若菜ちゃん感じすぎっしょ！

　すげぇエロい顔してるよ？」

SV\_ボイスの演奏 EV10\_021 100 100 0 2

\n<若菜>「そんなっ、かお……んんふぁっ……

　し、してない……です……んんっく、うぅんんっ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「なに言ってんの。そこに鏡あるっしょ？

　そこに映ってる自分の顔見て見ろよ」

SV\_ボイスの演奏 EV10\_022 100 100 0 2

\n<若菜>「あっ、んんっ……！　ふぁぅ……えっ……？」

SV\_ボイスの停止 2

若菜は鏡に映った自分の姿を目に映す。

そこには快楽に表情を歪めた自分自身が映っていた。

\n<陸也>「チンコ入れられてる時の若菜ちゃん、

　すごい表情してるだろ？」

SV\_ボイスの演奏 EV10\_023 100 100 0 2

\n<若菜>（こ、これが……わたし……？

　こんなエッチで……喜んでるのが、わたし……？）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV10\_024 100 100 0 2

\n<若菜>（こんな……こんなエッチな顔してるなんて……

　まるで、わたしがセックス好きみたいな……）

SV\_ボイスの停止 2

H8\_だらしない

SV\_ボイスの演奏 EV10\_025 100 100 0 2

\n<若菜>「んっ、んんぅ、っくぅあああッ……！」

SV\_ボイスの停止 2

性行為に酔っている自分の姿を見た若菜は、

その姿に寄っていくように快感が深まっていく。

\n<陸也>「なになに、若菜ちゃん？

　エロい自分の姿見たらエロい気分になっちゃった？」

SV\_ボイスの演奏 EV10\_026 100 100 0 2

\n<若菜>「あっ、んはぁ、んんぅ……！　っくうぅ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「その気持ち分かるわぁ～！

　俺も毎回エロくさせられて困ってんだよねッ！」

SV\_ボイスの演奏 EV10\_027 100 100 0 2

\n<若菜>「お゛ッ！　おっ、ンンッ……ふぐぅうう！」

SV\_ボイスの停止 2

一等深くまで突き刺される肉棒に、

若菜は低い声で鳴きながら秘部をぐっしょりと濡らす。

\n<陸也>「あー、そろそろ限界だわ……

　若菜ちゃん相手だとマジすぐイキそうになるわ」

\n<陸也>「それじゃあ、若菜ちゃん。

　今日も中に出すけど……って聞いてねぇな」

SV\_ボイスの演奏 EV10\_028 100 100 0 2

\n<若菜>「んお゛っ、んぐぅう、ふぅ……んふぁあ……！」

SV\_ボイスの停止 2

絶頂を迎えて感覚が鋭くなった秘部を突かれ続け、

若菜の意識は快楽の渦に飲み込まれていた。

\n<陸也>「まあ、いいや。嫌がっても中出しするし。

　中出ししねぇセックスって意味ねぇってのッ！」

SV\_ボイスの演奏 EV10\_029 100 100 0 2

\n<若菜>「ンんふぁあ……！」

SV\_ボイスの停止 2

男はラストスパートをかけるように腰の動きを速める。

それに合わせて若菜の声も大きくなっていく。

\n<陸也>「あー、もうダメだわ……イクッ！」

H8\_射精\_だらしない

SV\_ボイスの演奏 EV10\_030 100 100 0 2

\n<若菜>「ンんんっぅおおおおおおおおッ！」

SV\_ボイスの停止 2

明後日の方向を向きながら、若菜は身体を震わせ、

膣内に注がれる精液を迎えていた。

\n<陸也>「ふぅ……出した出した。

　この体勢ヤベェな……今度他の女でも試すか」

SV\_ボイスの演奏 EV10\_031 100 100 0 2

\n<若菜>「はぁはぁ……んっく、あっ、んんっ……」

SV\_ボイスの停止 2

男は時折奥まで突いて精子を膣奥へと押し込む。

その隙間から溢れ出た精液が床へと零れた。

\n<陸也>「……喘ぐだけのオナホみてぇになっちまったな。

　それじゃあ、犯して起こしてやるか」

SV\_ボイスの演奏 EV10\_032 100 100 0 2

\n<若菜>「ンおお゛っ、ふぁあっ、んんふぁううう！」

SV\_ボイスの停止 2

H7\_EV11&16

H7\_全裸\_感じてる

若菜の部屋でベッドがギシギシと悲鳴を上げる。

その上では若菜が跳ねるように突き上げられていた。

SV\_ボイスの演奏 EV11\_001 100 100 0 2

\n<若菜>「んふぁ……！　んっく、んぅううう！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「やっぱ騎乗位たまんねぇわ……！

　若菜ちゃんと繋がってるとこ丸見え」

SV\_ボイスの演奏 EV11\_002 100 100 0 2

\n<若菜>「んっ、やっ……見ないでください……！

　わ、わたしのおまんこ……んあっ、ひゃっ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「そんなこと言って見て欲しいんでしょ？

　ほら、見ただけで愛液溢れてきてんじゃん」

SV\_ボイスの演奏 EV11\_003 100 100 0 2

\n<若菜>「ち、ちがっ……んっ、違います……！

　見られてなんて、わたし……んあっ、ふぅ……！」

SV\_ボイスの停止 2

男は肉棒が出入りする秘部をじっくりと見つめる。

愛液とカウパーが混ざり合ってぐっしょりと濡れていた。

SV\_ボイスの演奏 EV11\_004 100 100 0 2

\n<若菜>（お、おまんこすごく見られてる……！

　おちんちんが出たり入ったりするとこ……見られちゃってる！）

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「若菜ちゃんのおっぱいすげぇ！

　突かれてめっちゃ揺らしてんじゃん！」

H7\_全裸\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV11\_005 100 100 0 2

\n<若菜>「ふぁあ、んんっ……！

　そ、そんなこと……言わな……んあっ、んふぅ！」

SV\_ボイスの停止 2

まるでゼリーを揺らしているような柔らかさで、

若菜の胸はたゆんと弾むように激しく上下に揺れる。

\n<陸也>「ヤリまくっても締まり変わんねぇしさぁ。

　ああ、もうチンコ持ってかれちまいそう……！」

SV\_ボイスの演奏 EV11\_006 100 100 0 2

\n<若菜>「ンふぁ、ああんっ、んっくぅう……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あー、そろそろイキそうだわ……！」

SV\_ボイスの演奏 EV11\_007 100 100 0 2

\n<若菜>（中出しされちゃう……でも、もういっか……

　わたしは先輩には逆らえないんだから……）

SV\_ボイスの停止 2

H7\_全裸\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV11\_008 100 100 0 2

\n<若菜>「んふぁっ、んんっく、あんぅう……！

　ま、また……中に出すんですよね……んんっ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あ、中出しはもうしねーから」

男の腰の動きが突如止まる。

その言葉に若菜は動揺を隠し切れないでいた。

SV\_ボイスの演奏 EV11\_009 100 100 0 2

\n<若菜>「えっ……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「だから、もう中出しはしねーって。

　ガチで孕んでも困るからさぁ。所詮遊びじゃん？」

SV\_ボイスの演奏 EV11\_010 100 100 0 2

\n<若菜>「それは、そう……ですね……」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV11\_011 100 100 0 2

\n<若菜>（ザーメンを中に出すなんていけないことなんだから……

　これでいいんだよね……これが普通なんだよね……）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV11\_012 100 100 0 2

\n<若菜>「…………」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV11\_013 100 100 0 2

\n<若菜>（でも……それじゃあ、あの気持ちいいのが……

　中出しされる気持ちいい感覚が味わえない……）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV11\_014 100 100 0 2

\n<若菜>（そんな……そんなの……セックスじゃない……

　あの気持ちいいのをまた……中出しされたい……！）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV11\_015 100 100 0 2

\n<若菜>「――して、ください……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あ？　なんか言った？」

SV\_ボイスの演奏 EV11\_016 100 100 0 2

\n<若菜>「先輩のざ、ザーメン……

　わ、わたしの中に出してください……！」

SV\_ボイスの停止 2

男は満足そうにニヤリと下卑た笑みを浮かべる。

けれど、すぐさま平静を装って若菜に声をかけた。

\n<陸也>「いいの？

　赤ちゃんできちゃうかもしれねーよ？」

SV\_ボイスの演奏 EV11\_017 100 100 0 2

\n<若菜>「それ、は……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「でも、若菜ちゃんに赤ちゃん出来たらさぁ、

　俺の子になるってことっしょ？　俺めんどいの嫌だわ」

\n<陸也>「だからさぁ、そんなに精子欲しいなら、

　自分で腰振って勝手に中出しさせれば？」

SV\_ボイスの演奏 EV11\_018 100 100 0 2

\n<若菜>「えっ……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「若菜ちゃんが勝手に俺の精子で孕むなら、

　俺の知ったことじゃねーじゃん？」

\n<陸也>「俺、変な責任とか負いたくねーしさぁ。

　全部若菜ちゃんの責任でヤるなら好きにすれば？」

SV\_ボイスの演奏 EV11\_019 100 100 0 2

\n<若菜>「…………」

SV\_ボイスの停止 2

静寂を破ったのは、

ぐちゅぐちゅと粘液をかき回すような音だった。

H7\_全裸\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV11\_020 100 100 0 2

\n<若菜>「はぁはぁ……んっく、ふぅ……んあっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

若菜はまるで肉棒で自慰をするように、

自ら腰を前後左右に揺すって膣内を刺激する。

\n<陸也>「気持ち良そうに腰振っちゃってさぁ。

　そんなに俺の赤ちゃん欲しいんだ？」

SV\_ボイスの演奏 EV11\_021 100 100 0 2

\n<若菜>「んっ……ちがっ、います……

　わ、わたしは……中出しして欲しいだけ……んふぁ……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「うわっ、そんな理由で中出ししてほしいとか、

　若菜ちゃんエロすぎっしょ……！」

SV\_ボイスの演奏 EV11\_022 100 100 0 2

\n<若菜>（わたしは先輩のことなんて好きじゃないもん……

　わたしは……エッチなんかじゃないもん……）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV11\_023 100 100 0 2

\n<若菜>（でも……先輩に脅されてるから仕方なく……

　今のだって……きっとわたしが言わなくても中出しされてた……）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV11\_024 100 100 0 2

\n<若菜>（そうだよ……絶対にされてたもん……

　きっと、おねだりするようにも言わされてたよ……）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV11\_025 100 100 0 2

\n<若菜>（わたしは、言われる前にしただけ……

　全然……わたしがしたいだけとかじゃないもん……）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV11\_026 100 100 0 2

\n<若菜>「エッチなんかじゃ……ないです……んんっ……」

SV\_ボイスの停止 2

若菜は心の中の自分に何度も言い訳をしながら、

けれど腰を上下に振り続けるのを止めないでいた。

\n<陸也>「つか、若菜ちゃん今のソレさぁ。

　オナニーしてみるたいでめっちゃエロい」

H7\_全裸\_喜んでる

SV\_ボイスの演奏 EV11\_027 100 100 0 2

\n<若菜>「オナ……こ、これが……オナニーですか……？

　おちんちんで……オナニー……ふっぅ、んんっ……」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV11\_028 100 100 0 2

\n<若菜>（オナニーって、こんなに気持ちいいんだ……

　自分の好きなところに、自分で当てれて……すごい……）

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「チンコでオナニーとかビッチすぎっしょ！」

H7\_全裸\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV11\_029 100 100 0 2

\n<若菜>「わ、わたしは……んふぅ、んんっ……

　ビッチ、なんかじゃ……あっ、ないです……」

SV\_ボイスの停止 2

若菜は敏感な部分を探り当てては、

腰を縦横無尽に振って膣内に肉棒を押し当てる。

\n<陸也>「そんなエロい腰使いしてビッチじゃねーとか、

　流石に言い訳ひどすぎね？」

H7\_全裸\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV11\_030 100 100 0 2

\n<若菜>「そんなの……んっ、ふぁっ……んんっく、ふぅ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あー、もうイキそうだわ……！

　若菜ちゃんさぁ、引き返すなら今しかねーよ？」

SV\_ボイスの演奏 EV11\_031 100 100 0 2

\n<若菜>「んんっ……ふぁっ、ああっんんっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

男の言葉に若菜は返答することなく、

ただ絶頂を促すように腰の動きを激しくさせる。

H7\_全裸\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV11\_032 100 100 0 2

\n<若菜>「はぁはぁ……んふっ、んんっ……ふぁ……！

　あっ、ここ……んぁ、すごい……」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV11\_033 100 100 0 2

\n<若菜>「んんぅ……もう、ダメ……わ、わたしも……

　わ、わたしも……一緒に、イっても……いいですか……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「ああ。中出しで絶頂させてやるよ」

SV\_ボイスの演奏 EV11\_034 100 100 0 2

\n<若菜>「はぁ、んんぅ……それは、んんっ、あっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV11\_035 100 100 0 2

\n<若菜>「んはぁ、ダメ……もう我慢できないです……！

　んっく、ううぅ……イクッ、イっちゃ……んんんんっ！」

SV\_ボイスの停止 2

H7\_全裸\_射精\_喜んでる

SV\_ボイスの演奏 EV11\_036 100 100 0 2

\n<若菜>「ンふぅぁあああああああああああああっ！」

SV\_ボイスの停止 2

若菜の膣内に精液が流し込まれるのと同時に、

若菜は身体を大きく反らして絶頂を迎える。

SV\_ボイスの演奏 EV11\_037 100 100 0 2

\n<若菜>「んっ……はぁはぁ……んんっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

大量に射精された精液は若菜の膣内をいっぱいにして、

それでも溢れ返って体外へと放出される。

SV\_ボイスの演奏 EV11\_038 100 100 0 2

\n<若菜>（やっぱり中出しが一番気持ちいい……！）

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「ふぅ……搾り取られたわ。

　どんだけザー汁狂いなんだよ」

H7\_全裸\_射精\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV11\_039 100 100 0 2

\n<若菜>「ざ、ザーメンなんて好きじゃないです……

　わ、わたしは先輩が脅すから仕方なく……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「そうだ。もう写真消したから」

SV\_ボイスの演奏 EV11\_040 100 100 0 2

\n<若菜>「えっ……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「どうかしたの？　写真消してほしくて、

　俺とセックスしてたんでしょ？」

SV\_ボイスの演奏 EV11\_041 100 100 0 2

\n<若菜>「そ、そうですけど……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「だから、望み通り消してあげたってわけ。

　ほら、証拠にスマホのアルバム見せたげよっか？」

男は若菜に向かってスマホの画面を向ける。

そこに若菜の姿は一枚たりとも映っていなかった。

\n<陸也>「あーあ。すっげー残念だけど、

　これで若菜ちゃんとセックスする理由はなくなっちゃった」

SV\_ボイスの演奏 EV11\_042 100 100 0 2

\n<若菜>「……わたしは、良かったです……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あっ、それで話は変わるんだけどさ。

　俺、明日も学園行くんだわ。新しい女漁りに」

SV\_ボイスの演奏 EV11\_043 100 100 0 2

\n<若菜>「…………」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「次も若菜ちゃんみたいな子がいいなぁ。

　見つけたら保健室に連れ込んでその場でヤリまくるわ」

\n<陸也>「夜までよがらせまくってセックス三昧。

　孕むまで中出ししまくってやろうかな」

SV\_ボイスの演奏 EV11\_044 100 100 0 2

\n<若菜>「孕むまでずっと……中出し……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「ま、もう若菜ちゃんには関係ねーか」

SV\_ボイスの演奏 EV11\_045 100 100 0 2

\n<若菜>「そ、そうです……

　わたしには、もう……関係ないです……」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV11\_046 100 100 0 2

\n<若菜>（そうだもん……もうわたしには関係ない……

　もうセックスなんて、しなくていいんだから……）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV11\_047 100 100 0 2

\n<若菜>（セックスを……もう、しない……

　もう……気持ち良くなれないってこと……？）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV11\_048 100 100 0 2

\n<若菜>（わたしに似た子が良いって言ってたけど……

　それって……わたしでも良いのかな……）

SV\_ボイスの停止 2

H6\_EV12

H6\_閉じ目

保健室の中のカーテンに仕切られた奥から、

淫靡な匂いを放つ物音が小さく聞こえてくる。

SV\_ボイスの演奏 EV12\_001 100 100 0 2

\n<若菜>「んっ、はぁ、んんっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「それにしても、若菜ちゃんが来るなんてね」

SV\_ボイスの演奏 EV12\_002 100 100 0 2

\n<若菜>「た、たまたま……んんっ、です……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「つか、来たってことはさ、

　これからも若菜ちゃんを犯しまくっていいってことだよね？」

H6\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV12\_003 100 100 0 2

\n<若菜>「それは…………」

SV\_ボイスの停止 2

H6\_喜んでる

SV\_ボイスの演奏 EV12\_004 100 100 0 2

\n<若菜>「……先輩のところに来ちゃったのは、

　わたしの不注意ですから……されても文句言えないです……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「ホント、若菜ちゃん言い訳好きだよね。

　正直に言ったら？　セックス大好きですってさ」

SV\_ボイスの演奏 EV12\_005 100 100 0 2

\n<若菜>「んっあ……い、言い訳なんかじゃ……ンンッ……！

　わ、わたしは……そんなこと……ひゃあ、んあっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

ガラガラと、保健室の扉が開く音がする。

その瞬間、若菜の鼓動は緊張で早く鳴り始めた。

H6\_射精\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV12\_006 100 100 0 2

\n<若菜>「せ、先輩……誰か来ちゃいました……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「それはマズったな……とりあえず静かに」

SV\_ボイスの演奏 EV12\_007 100 100 0 2

\n<若菜>「わ、分かりました……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「あれ……いない……

　トイレに行ってるのかな……？」

SV\_ボイスの演奏 EV12\_008 100 100 0 2

\n<若菜>（あれ……この声って……ハルタ？

　な、なんで保健室に……！）

SV\_ボイスの停止 2

H6\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV12\_009 100 100 0 2

\n<若菜>「ンんんっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

止まっていたはずの肉棒が、急に膣奥へと刺さり、

若菜は抑えていた声を思わず漏らした。

H6\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV12\_010 100 100 0 2

\n<若菜>「せ、先輩……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「悪ぃ悪ぃ、つい腰が動いちゃって。

　マジわざとじゃねーって。ごめんごめん」

\n<晴太>「あれ……誰かいるのかな……？」

SV\_ボイスの演奏 EV12\_011 100 100 0 2

\n<若菜>「ハルタがこっち来ちゃう……！

　せ、先輩……ど、どうすれば……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「知り合いなんだろ？　俺はいねーことにするから。

　若菜ちゃんも身体だけ隠して追い払ってよ」

SV\_ボイスの演奏 EV12\_012 100 100 0 2

\n<若菜>「わかりました……や、やってみます……」

SV\_ボイスの停止 2

若菜は仕切られたカーテンから顔だけを出して、

こちらを向いていた晴太に声をかけた。

H6\_喜んでる

SV\_ボイスの演奏 EV12\_013 100 100 0 2

\n<若菜>「は、ハルタ……どうしたの……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「あれ？　若菜？

　どうしてこんなところにいるの……？」

SV\_ボイスの演奏 EV12\_014 100 100 0 2

\n<若菜>「えーっと、その、それはね……

　ほ、保健室の先生に見ててって言われてね……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「そうなんだ……って、あれ？

　大事な用事があるんじゃなかったの？」

SV\_ボイスの演奏 EV12\_015 100 100 0 2

\n<若菜>「そ、それは……も、もう終わったの！

　意外と早く終わっちゃって……えへへ……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「そうだったんだ……

　ということは、若菜はずっと保健室にいたんだよね？」

SV\_ボイスの演奏 EV12\_016 100 100 0 2

\n<若菜>「えっ、う、うん……そうだよ……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「それじゃあさ、先輩見なかった？」

H6\_だらしない

SV\_ボイスの演奏 EV12\_017 100 100 0 2

\n<若菜>「先輩……？　それってどのせんぱ――ンんぁッ！？」

SV\_ボイスの停止 2

ずぶり、と油断していた膣内に肉棒が突き刺さる。

突然の出来事に、若菜は甲高い声を漏らした。

\n<晴太>「若菜？　どうかしたの？」

H6\_喜んでる

SV\_ボイスの演奏 EV12\_018 100 100 0 2

\n<若菜>「えっ、んっ……な、なにが……？

　なにも……ふぅっ、な、ないよ……」

SV\_ボイスの停止 2

H6\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV12\_019 100 100 0 2

\n<若菜>（先輩なんで動くの……！

　これじゃあ、ハルタにバレちゃう……！）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV12\_020 100 100 0 2

\n<若菜>\}「せ、先輩……止めてください……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>\}「ごめんごめん、腰が勝手に動いちゃってさぁ。

　ほら、普通にしてないとハルタくんにバレちゃうよ」

SV\_ボイスの演奏 EV12\_021 100 100 0 2

\n<若菜>\}「そ、そんな……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「若菜……？」

H6\_喜んでる

SV\_ボイスの演奏 EV12\_022 100 100 0 2

\n<若菜>「う、ううん……！　んっ……な、なんにも……

　ふぅ、な、ないよ……えへへ……んんっ……」

SV\_ボイスの停止 2

若菜は努めて平静を装うも、

男はからかうようにピストンを速めていく。

\n<晴太>「なんか変な音がしない……？

　ほら、パンパンって」

SV\_ボイスの演奏 EV12\_023 100 100 0 2

\n<若菜>「んっ……え、そ、そうかな……んんっ……

　わ、わたしには聞こえないけど……！」

SV\_ボイスの停止 2

H6\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV12\_024 100 100 0 2

\n<若菜>（なにこれ……いつもと全然違う……！

　ハルタがいるだけなのに……キュンキュンする……！）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV12\_025 100 100 0 2

\n<若菜>（ハルタにセックスしてるところ、

　見られちゃうかもしれないのに……なんで……！）

SV\_ボイスの停止 2

男はまるで面白がるような表情で、

若菜の膣奥に肉棒を抉るように押し込んだ。

H6\_だらしない

SV\_ボイスの演奏 EV12\_026 100 100 0 2

\n<若菜>「ンんお゛っ……！？　んふぁああ……！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV12\_027 100 100 0 2

\n<若菜>（そんな奥まで挿れられちゃったら……

　声が抑えきれないよ……！）

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「若菜！？

　そんな声出して……まさか病気なの！？」

H6\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV12\_028 100 100 0 2

\n<若菜>「んんっ、ち、違うの……んふぅっ……！

　ちょ、ちょっと……ぐ、具合が悪くて……んんっ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「大丈夫なの、若菜？

　具合が悪いなら僕が看病してあげるから！」

SV\_ボイスの演奏 EV12\_029 100 100 0 2

\n<若菜>「んんっ、だ、ダメ……来ないで……！

　は、ハルタは……ダメ……んんっ、なの……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「で、でも……若菜苦しそうだよ！」

H6\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV12\_030 100 100 0 2

\n<若菜>（ハルタに見られてるだけで……

　いつもより……すごく感じちゃってる……！）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV12\_031 100 100 0 2

\n<若菜>（こんなのすぐにイっちゃうよ……！

　ハルタに見られながら……イっちゃう……！）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV12\_032 100 100 0 2

\n<若菜>（そんなのダメ……ハルタにバレちゃ……！

　は、早く……ハルタを追い返してイキたい……！）

SV\_ボイスの停止 2

H6\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV12\_033 100 100 0 2

\n<若菜>「は、ハルタぁ……お、おねがいが……んんっ！

　おねがいが……あるの……んふぅ……！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV12\_034 100 100 0 2

\n<若菜>「ほ、保健室の……せ、先生を……んんっく……！

　よ、呼んできて……はぁ、く、くれないかな……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「わ、分かった！　すぐに呼んでくるから！

　頑張ってね、若菜！」

晴太は慌てるように、保健室を飛び出していく。

若菜は安堵しながら身体の力を抜いた。

SV\_ボイスの演奏 EV12\_035 100 100 0 2

\n<若菜>「んっく……せ、先輩……！

　ば、バレたら……どうするんで……んふぁ、んんっ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「見られながらイキそうなクセに。

　イクところ見られたくなくて追い出したんだろ！」

H6\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV12\_036 100 100 0 2

\n<若菜>「ンふぅあ……そ、それは……ンんッ！

　せ、先輩が……おちんちん入れてくるから……ふぁ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「その割にはいつもより濡れてたっての。

　物欲しそうにマンコもヒクヒクさせてさぁ」

SV\_ボイスの演奏 EV12\_037 100 100 0 2

\n<若菜>「そんな……こと、んひゃあっ……！

　おちんちんなんて……欲しく……ンんあっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「俺とのセックスは大事な用事なんだろ！

　ハルタくんと遊ぶより気持ちいいもんなッ！」

SV\_ボイスの演奏 EV12\_038 100 100 0 2

\n<若菜>「はぁ……ンンんっ！　んあふぅ……！

　そ、それは……んっあっ、んんっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「それじゃあご褒美に、

　若菜ちゃんの大好きな中出ししてやるよ！」

H6\_喜んでる

SV\_ボイスの演奏 EV12\_039 100 100 0 2

\n<若菜>「んふぁ……！　は、はい……！

　な、中出し……中出ししてください……！」

SV\_ボイスの停止 2

若菜の懇願するような言葉に、

男のピストンは絶頂を迎えるために加速していく。

\n<陸也>「孕むまで止めねぇからな……！

　その覚悟出来たから来たんだもんな！」

SV\_ボイスの演奏 EV12\_040 100 100 0 2

\n<若菜>「ふぅんんっ……せ、先輩の赤ちゃんなんて……

　そ、そんなの……孕みません……からぁ、んあッ！」

SV\_ボイスの停止 2

H6\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV12\_041 100 100 0 2

\n<若菜>「あんっ……も、もう我慢できないよぉ……！

　はぁ……イク、イっちゃう……んんぅ、イクぅ……！」

SV\_ボイスの停止 2

H6\_射精\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV12\_042 100 100 0 2

\n<若菜>「ンんんっうあああああああああ！」

SV\_ボイスの停止 2

若菜は抑えていた声を解放するように、

廊下にまで響くほどの嬌声を上げて絶頂に至る。

H6\_射精\_喜んでる

SV\_ボイスの演奏 EV12\_043 100 100 0 2

\n<若菜>「はぁはぁ……ふぅ……んんっ……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「見られて興奮するなんて若菜ちゃん変態だね。

　ま、そういうところがいいんだけどッ」

SV\_ボイスの演奏 EV12\_044 100 100 0 2

\n<若菜>「んんっ……！　ふぅ、はぁはぁ……んっく……」

SV\_ボイスの停止 2

子宮口にまで精子を押し込むように、

男は射精しきった肉棒を膣奥へと突っ込む。

\n<陸也>「それじゃあ、場所移すか。

　早く行かねーとハルタくんが戻ってくるぜ？」

SV\_ボイスの演奏 EV12\_045 100 100 0 2

\n<若菜>「は……はい……」

SV\_ボイスの停止 2

H4\_EV13

H4\_射精\_閉じ目

ラブホテルの一室で事を終えた二人の男女が、

身体を重ねながら、淫らな音を部屋中に響かせていた。

SV\_ボイスの演奏 EV13\_001 100 100 0 2

\n<若菜>「んんっ……じゅる、んちゅぶ……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「はぁ……出した出した。

　若菜ちゃん、ちゃんとお掃除フェラしてよ？」

SV\_ボイスの演奏 EV13\_002 100 100 0 2

\n<若菜>「わ、分かってます……んじゅ、ちゅぷぁ……」

SV\_ボイスの停止 2

若菜は性行為を終えてドロドロになった肉棒を、

口いっぱいに頬張って液を舐めとっていく。

\n<陸也>「美味しそうにザーメン飲むようになったな。

　そんなに美味しいの？」

H4\_射精\_照れ

SV\_ボイスの演奏 EV13\_003 100 100 0 2

\n<若菜>「ザーメンなんて……美味しくないです……

　こんなの……本当は舐めたくないです……れろ、んちゅ……」

SV\_ボイスの停止 2

言葉とは裏腹に若菜は熱心に竿を咥え、

あらゆる隙間に舌を伸ばして愛撫するように亀頭を舐める。

\n<陸也>「あー、マジで気持ちいいわー。

　ここまでヤる女はそうそういねーからな」

H4\_射精\_とろけ顔

SV\_ボイスの演奏 EV13\_004 100 100 0 2

\n<若菜>「じゅぶ、んむっ、れろ……んっじゅる……んん……！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV13\_005 100 100 0 2

\n<若菜>（なにこれ……この黄色い消しカスみたいなの……

　すごい……くらっとする匂いがする……）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV13\_006 100 100 0 2

\n<若菜>（でも……この匂い嗅いでるとなんだか……

　だんだん変な気分になっちゃう……）

SV\_ボイスの停止 2

若菜はカリの部分に溜まった恥垢を舌で掬い、

その味を確かめるように喉を鳴らした。

SV\_ボイスの演奏 EV13\_007 100 100 0 2

\n<若菜>「んっく……変な味……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「うわ、チンカスついてんじゃん。

　若菜ちゃん、食べちゃったの？」

H4\_射精\_渋々

SV\_ボイスの演奏 EV13\_008 100 100 0 2

\n<若菜>「え……た、食べちゃダメなのでしたか……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「いいや、俺好みだからセーフ。

　まあ、その口とはキスしたくねーけど」

\n<陸也>「これからチンカス付いてたら、

　ちゃんと食べて掃除してよ？」

H4\_射精\_照れ

SV\_ボイスの演奏 EV13\_009 100 100 0 2

\n<若菜>「これが……ち、ちんかすなんですね……

　は、はい……分かりました……」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV13\_010 100 100 0 2

\n<若菜>（ちんかす……変な味だけど、嫌いじゃない……

　もっといっぱいあるのかな……？）

SV\_ボイスの停止 2

若菜はカリと皮の隙間に舌を滑り込ませると、

ほじくるように恥垢を舐めとっていく。

SV\_ボイスの演奏 EV13\_011 100 100 0 2

\n<若菜>「れろ、んれろ……んちゅる、れろ、んっく……」

SV\_ボイスの停止 2

H4\_射精\_とろけ顔

SV\_ボイスの演奏 EV13\_012 100 100 0 2

\n<若菜>（はぁはぁ……頭がすごくくらくらする……

　なんでだろ……おまんこがキュンってしちゃう……）

SV\_ボイスの停止 2

恥垢の強烈な媚薬のような匂いにあてられて、

若菜の表情が蕩けるように締まりのないものになっていく。

SV\_ボイスの演奏 EV13\_013 100 100 0 2

\n<若菜>「んちゅ、れろ……んんっ、こくん……っぷはぁ……」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV13\_014 100 100 0 2

\n<若菜>（味は全然違うのに……ザーメン飲んでる感じがする……

　美味しくないのに……全然嫌いじゃなくて……）

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「若菜ちゃんくらいだわ。

　そんなに美味しそうにチンカス食べるの」

H4\_射精\_照れ

SV\_ボイスの演奏 EV13\_015 100 100 0 2

\n<若菜>「美味しくなんか……ないです……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「でも、嫌いじゃないんでしょ？」

H4\_射精\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV13\_016 100 100 0 2

\n<若菜>「…………。

　れろ、ちゅぶ……んちゅる、ちゅぷぁ……」

SV\_ボイスの停止 2

若菜は返答代わりに亀頭へ口づけを交わす。

それは暗に肯定を意を示していた。

SV\_ボイスの演奏 EV13\_017 100 100 0 2

\n<若菜>「ちゅる、れろ、んぷぁ……はぁはぁ……

　んっく……れろ、れろ……んんっ……」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV13\_018 100 100 0 2

\n<若菜>（我慢汁が垂れてきてる……

　しょっぱくて、トロトロで……美味しい……）

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「つか、若菜ちゃんのってさぁ、

　お掃除フェラってよりフェラじゃね？　イキそうになるわ」

H4\_射精\_照れ

SV\_ボイスの演奏 EV13\_019 100 100 0 2

\n<若菜>「ちゅる、ちゅぷ……ち、違います……

　これは……フェラじゃありませんから……んちゅ……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「まあいいけど。これは掃除なんだからさぁ、

　射精させんなよ？　汚したらまた初めから掃除だからな」

SV\_ボイスの演奏 EV13\_020 100 100 0 2

\n<若菜>「また……初めから……

　……そんなの絶対に嫌です……んちゅぷ、れろ、んちゅる……」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV13\_021 100 100 0 2

\n<若菜>（このままおちんちん射精させたら……

　また……ザーメンがいっぱい飲める……）

SV\_ボイスの停止 2

H4\_射精\_とろけ顔

SV\_ボイスの演奏 EV13\_022 100 100 0 2

\n<若菜>（このまま……少しおちんちんしゃぶるだけで……

　でも、そんなエッチなこと……）

SV\_ボイスの停止 2

肉棒から放たれる強烈な雄の匂いが若菜の鼻孔をくすぐる。

その匂いに、若菜の瞳はとろんと蕩ける。

SV\_ボイスの演奏 EV13\_023 100 100 0 2

\n<若菜>（こんなに匂い嗅いじゃったら、抑えられない……

　ザーメンが……ザーメンが飲みたい……！）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV13\_024 100 100 0 2

\n<若菜>「んじゅる、れろ……んっくんっく！　んっちゅぷ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「おいおいそんなに激しくしたら……

　あー、また出そうだわ……いいのか……？」

若菜は男の言葉を聞かずに顔を激しく上下に動かす。

それは射精に導くためだけの強引な口淫だった。

SV\_ボイスの演奏 EV13\_025 100 100 0 2

\n<若菜>「んじゅるる、ぐっぽぐっぽ……んじゅぼぼぼ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あー、もうイキそ……出すぞ……！」

SV\_ボイスの演奏 EV13\_026 100 100 0 2

\n<若菜>「ぐっぽぐっぽ……じゅる、んむちゅ……んじゅるるる！」

SV\_ボイスの停止 2

H4\_射精\_驚き

SV\_ボイスの演奏 EV13\_027 100 100 0 2

\n<若菜>「ンんんんむぅううううっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

若菜を口内から孕ませるような勢いで、

白濁した液が喉奥に絡むように口内を穢していく。

H4\_射精\_とろけ顔

SV\_ボイスの演奏 EV13\_028 100 100 0 2

\n<若菜>「んんっ……んちゅる、んんっく……」

SV\_ボイスの停止 2

口内に溢れかえるほどの精液を、

若菜は何度も喉を鳴らして飲み干していく。

\n<陸也>「あーあ。またチンコ汚くなったわ。

　若菜ちゃんさぁ、どうすればいいか分かるよね？」

SV\_ボイスの演奏 EV13\_029 100 100 0 2

\n<若菜>「んっく……こくん……っぷぁ。

　……それくらい、分かってます……」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV13\_030 100 100 0 2

\n<若菜>「先輩をイカせたわたしが悪いんですから……

　嫌ですけど、また……おちんちん掃除します……」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV13\_031 100 100 0 2

\n<若菜>「しょうがなく……しょうがなくですから……

　んれろ、んじゅぶ……ちゅ、んんちゅ……ちゅぷぁ……」

SV\_ボイスの停止 2

若菜は渋々というように再度肉棒にむしゃぶりつく。

けれどその瞳には、情欲の色が浮かんでいた。

H8\_EV14

H8\_感じてる

神社の境内の奥でひっそりと、

裸の男女が抱き合うようにして腰を打ち付け合っていた。

SV\_ボイスの演奏 EV14\_001 100 100 0 2

\n<若菜>「んんっ……！　はぁはぁ……んっく、んあっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV14\_002 100 100 0 2

\n<若菜>「わ、わたし……こんなところでセックスしちゃってる……！

　お、お外でなんて……んっ、ふぁ、んんっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「でも若菜ちゃんも興奮してんだろ？

　いつも以上にマンコ締めちゃってさッ！」

H8\_射精\_だらしない

SV\_ボイスの演奏 EV14\_003 100 100 0 2

\n<若菜>「ンお゛っ……！？」

SV\_ボイスの停止 2

男はぐっと肉棒を膣深くまで沈み込ませる。

若菜の身体がぶるりと快楽に震えて膣をさらに狭めた。

\n<陸也>「あー、やっぱこの体位いいわ……！

　若菜ちゃんの身体が柔らかくてマジラッキー」

H8\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV14\_004 100 100 0 2

\n<若菜>「んあっ、っくぅ……そ、そんな深く……！

　はぅ、んんっ……ああっ、んふぁ……！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV14\_005 100 100 0 2

\n<若菜>（やっぱり……この体勢すごい……

　おちんちんが気持ちいいところに擦れちゃう……！）

SV\_ボイスの停止 2

立ち鼎できゅっと締められた膣内に形を教え込むように、

竿全体がぎちぎちと肉壁を押し広げて擦り上げる。

\n<陸也>「ほら、若菜ちゃんも分かるっしょ？

　チンコがマンコの形作り変えてくとこ」

H8\_目を逸らす

SV\_ボイスの演奏 EV14\_006 100 100 0 2

\n<若菜>「んふっ、そ、そんなの分かん……ンんあぁッ！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV14\_007 100 100 0 2

\n<若菜>（わかっちゃう……おまんこで分からされちゃう……！

　わたしのおまんこが……先輩の形に変わってきちゃってるの……！）

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「それじゃあ、若菜ちゃんでも分かるように、

　俺のチンコの形をマンコに教えて込んあげる」

SV\_ボイスの演奏 EV14\_008 100 100 0 2

\n<若菜>「い、いいです……そんなことしなくても……！

　そんなことされたら……ンんんぅぅうっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

男は竿を秘部からゆっくりと引き抜いていき、

カリ首が肉壁を緩やかに擦る感覚を植え付けていく。

H8\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV14\_009 100 100 0 2

\n<若菜>（おちんちんの形をいつも以上に感じる……

　一番太いところがおまんこに引っかかるの分かっちゃう……）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV14\_010 100 100 0 2

\n<若菜>「んっ……ふぅん……はぁ、んふぁ……！」

SV\_ボイスの停止 2

激しいピストンとは対称的な性行為ながら、

若菜の漏らす声はそれに近しいほどの熱を帯びていた。

\n<陸也>「どう？　分かってきた？」

SV\_ボイスの演奏 EV14\_011 100 100 0 2

\n<若菜>「そんなの知らな……んふぁ……ふぅ、んんっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

ぬぷり、と肉壁を分け入るように亀頭が侵入していく。

緩慢な動作ながら、若菜の身体は大きく震えた。

SV\_ボイスの演奏 EV14\_012 100 100 0 2

\n<若菜>（こんなにゆっくり動いてるはずなのに……

　なんでこんなにも気持ちいいの……！）

SV\_ボイスの停止 2

竿はゆっくりと何度も膣内を往復しながら、

若菜の肉壁に形を徐々に染みこませていく。

SV\_ボイスの演奏 EV14\_013 100 100 0 2

\n<若菜>「はぁ、んんっ……んっく、ふぅ……んふぁ……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「これで分かった……っしょッ！」

H8\_だらしない

SV\_ボイスの演奏 EV14\_014 100 100 0 2

\n<若菜>「ンんあ゛ッ！？」

SV\_ボイスの停止 2

男のピストンが突然激しさを取り戻し、

油断しきっていた若菜は押し寄せる快楽に頭が真っ白になった。

H8\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV14\_015 100 100 0 2

\n<若菜>「ああっ、んんっ……んふぁ！　んっく、はぁんん！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「若菜ちゃんさぁ、喘いでばっかじゃなくて、

　折角教えてやったんだから、分かったか言えよっ！」

SV\_ボイスの演奏 EV14\_016 100 100 0 2

\n<若菜>（わ、分かりたくなんてないのに……！

　完璧におまんこに分からされちゃったよぅ！）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV14\_017 100 100 0 2

\n<若菜>「わ、わか……んんっく、わかりましたぁ……！

　おまんこが、先輩のおちんちんの形になっちゃってますっ！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV14\_018 100 100 0 2

\n<若菜>「わたしのおまんこが……んひゃあっ！

　先輩のおちんちん専用に……なっちゃって……あアんんっ！」

SV\_ボイスの停止 2

若菜は恥ずかしげもなく大声で淫らな言葉を叫ぶ。

男は満足げに腰をさらに強く打ちつける。

\n<陸也>「これで若菜ちゃんのマンコは、

　オレ専用のチンコケースだからなッ！　他のチンコ食うなよ！」

SV\_ボイスの演奏 EV14\_019 100 100 0 2

\n<若菜>「ンぅうッ……！　は、はい……！

　せ、先輩としかセックスしま……んふぁ、んあっ……！！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あー、もう限界だわ……イキそ……出すぞ！」

SV\_ボイスの演奏 EV14\_020 100 100 0 2

\n<若菜>「んぁっ、な、中に……中に出してください……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「中出し以外するかよッ！

　若菜ちゃんは孕んでも俺の精液便所だってーのッ！」

SV\_ボイスの演奏 EV14\_021 100 100 0 2

\n<若菜>「ンふぁっ……！　んっく、んはぁ……！

　わ、わたしも……わたしももう……イクぅッ！」

SV\_ボイスの停止 2

H8\_射精\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV14\_022 100 100 0 2

\n<若菜>「ンんんふぅぁあああああああああっ！」

SV\_ボイスの停止 2

膣内を満たすように放出された精液を、

若菜の子宮はごくごくと飲み干していく。

\n<陸也>「あー、搾り取られるわ……！

　どんだけ孕みてぇんだよ」

SV\_ボイスの演奏 EV14\_023 100 100 0 2

\n<若菜>「んはぁ……は、孕みたくなんかないです……

　ただ、中出しが気持ちいいだけ……んんっ……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「どんだけ変態なんだよ。

　そっちのほうがエロいとか思わねーの？」

SV\_ボイスの演奏 EV14\_024 100 100 0 2

\n<若菜>「はぁはぁ……んふぁっ……

　わ、わたしはエッチなんかじゃ……ないです……」

SV\_ボイスの停止 2

若菜は艶めかしい吐息を何度も溢しては、

いつも以上に湧き上がる悦楽に浸っていた。

SV\_ボイスの演奏 EV14\_025 100 100 0 2

\n<若菜>（誰かに見られるかもと思ったら……

　中出しされるのも……いつもよりも興奮しちゃった……）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV14\_026 100 100 0 2

\n<若菜>（これがお外でするセックス……イケナイことなのに、

　こんなにキモチイイなんて……またお外でヤリたい……）

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「若菜ちゃん、この後どこでヤる？

　若菜ちゃん家か……ラブホとか？」

SV\_ボイスの演奏 EV14\_027 100 100 0 2

\n<若菜>（お外がいい……このままここでヤリたい……！

　でも、そんなエッチなこと言えない……どうしよう……）

SV\_ボイスの停止 2

男は当然のように性行為を続ける宣言をするも、

それに対して若菜が思うことは何もなかった。

SV\_ボイスの演奏 EV14\_028 100 100 0 2

\n<若菜>「はぁはぁ……先輩を家に入れたくないです……

　でも、ラブホなんて……そんなエッチなところは嫌です……」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV14\_029 100 100 0 2

\n<若菜>「だ、だから……しょうがないですから……

　こ、ここで……このままでいいです……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「んじゃあ、抜くのもメンドイしこのままヤるか。

　孕むまで中出し続けてやるから」

SV\_ボイスの演奏 EV14\_030 100 100 0 2

\n<若菜>「んんっ……は、はい……」

SV\_ボイスの停止 2

H5\_EV08&15

H5\_喜んでる

部屋の主人が留守にしている状況で、

男女がスリルを楽しむように身体を繋ぎ合っていた。

SV\_ボイスの演奏 EV15\_001 100 100 0 2

\n<若菜>「ンはぁ……！　んあっ、んんっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「若菜ちゃん、いつもより興奮してるっしょ？

　挿れる前からマンコびしょびしょだったもんね？」

H5\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV15\_002 100 100 0 2

\n<若菜>「んっく、そ、それは……ふぁっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV15\_003 100 100 0 2

\n<若菜>（ハルタの部屋でセックスしちゃってる……！

　相手はハルタじゃなくて先輩なのに……！）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV15\_004 100 100 0 2

\n<若菜>（でもハルタの部屋で……ハルタの匂いに囲まれて……

　こんな中でセックスするなんて……ハルタとしてるみたい……）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV15\_005 100 100 0 2

\n<若菜>（はぁはぁ……ハルタと……セックス……

　こんなの……いつもより気持ち良くなっちゃう……！）

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「おいおい……他の男のこと考えてんじゃねーだろうな？

　若菜ちゃんは俺のチンコのことだけ考えてろッ！」

SV\_ボイスの演奏 EV15\_006 100 100 0 2

\n<若菜>「ふぁあッ……！　んっく、んああッ！

　ダメ、そんな……いま、敏感だから……ふぅんん！」

SV\_ボイスの停止 2

瞬間、カーテンに閉め切られた窓の向こうから、

ドンドンとガラスを叩く音と共に大声が響いてきた。

\n<晴太>「若菜ー！　本ってどこにあるのー！」

\n<陸也>「うるせぇな。若菜ちゃんならテメェの部屋で、

　セックスの真っ最中だっての！」

H5\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV15\_007 100 100 0 2

\n<若菜>「先輩……ちょっと、待ってくだ……んんっ！

　このままじゃハルタにバレちゃ……うううっ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「聞こえないフリしてればいいんじゃね？

　そんなことより若菜ちゃんはマンコに集中！」

H5\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV15\_008 100 100 0 2

\n<若菜>「ンんっあっ……！　で、でも……それじゃ、んんっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

しばらくすると窓を叩く音は止み、

代わりに、電話の着信音が部屋中に鳴り響いた。

H5\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV15\_009 100 100 0 2

\n<若菜>「は、ハルタから電話だ……

　せ、先輩……これは出ないと怪しまれるんじゃ……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「しつけー男だな。もういいや。出れば？

　まあ、俺は勝手にヤってるから」

SV\_ボイスの演奏 EV15\_010 100 100 0 2

\n<若菜>「んんっ……！　で、でもそれじゃあ声が……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「いいからさっさと出ろって。怪しまれていいの？」

SV\_ボイスの演奏 EV15\_011 100 100 0 2

\n<若菜>「ううっ……」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV15\_012 100 100 0 2

\n<若菜>（先輩のことだから……本当に続けてくるよね。

　頑張って声抑えないと……本当にバレちゃう……）

SV\_ボイスの停止 2

H5\_電話\_感じてる

若菜は渋々と言ったように着信ボタンを押す。

その実、蜜壺からは愛液が洪水のように溢れ出していた。

\n<晴太>『もしもし、若菜？』

SV\_ボイスの演奏 EV15\_013 100 100 0 2

\n<若菜>「んっ……は、ハルタ……？　ど、どうしたの……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>『若菜の言ってた本ってどこにあるの？』

SV\_ボイスの演奏 EV15\_014 100 100 0 2

\n<若菜>（大丈夫……これくらいなら耐えれるかも……

　でも、ハルタの声を聴きながらセックスしちゃうなんて……）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV15\_015 100 100 0 2

\n<若菜>「え、えーっと……んんっ……アぁッ……！」

SV\_ボイスの停止 2

男は膣奥にぐっと亀頭を押し込む。

その快感に、若菜は抑えていた声をふっと漏らした。

\n<晴太>『若菜？』

H5\_電話\_射精\_喜んでる

SV\_ボイスの演奏 EV15\_016 100 100 0 2

\n<若菜>「な、なんでもないよ！　な、んんっ……！

　あ、あはは……ふぅ、んんっ……」

SV\_ボイスの停止 2

H5\_電話\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV15\_017 100 100 0 2

\n<若菜>「せ、先輩……！

　お願いですから、ハルタの前では……んんぁっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「なに言ってんの？　聞かれて気持ちいいんだろ？」

SV\_ボイスの演奏 EV15\_018 100 100 0 2

\n<若菜>「そ、そんなこと……ふぁ、んっく、んはぁ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>『若菜？　何かしてるの？』

H5\_電話\_喜んでる

SV\_ボイスの演奏 EV15\_019 100 100 0 2

\n<若菜>「な、なにも……んぁっ、なにもしてないよ……！

　ほ、ほんと……んっく、ほんとだよ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>『そう？』

SV\_ボイスの演奏 EV15\_020 100 100 0 2

\n<若菜>「う、うん……ホント……んんっ、えへへ……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>『でも、カーテン越しに動いてるのが見えるんだけど』

H5\_電話\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV15\_021 100 100 0 2

\n<若菜>「えっ……？」

SV\_ボイスの停止 2

若菜が窓に視線を移すと、

そこには自分の部屋いる晴太の姿がシルエットで映っていた。

SV\_ボイスの演奏 EV15\_022 100 100 0 2

\n<若菜>（そ、そうだった……どうしよう！

　部屋の窓から、影で分かっちゃうんだった……！）

SV\_ボイスの停止 2

H5\_電話\_喜んでる

SV\_ボイスの演奏 EV15\_023 100 100 0 2

\n<若菜>「ほ、ほんとは……ストレッチしてるの……！

　さ、最近……はまってて、んあっ……！！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV15\_024 100 100 0 2

\n<若菜>「とっても……んふぁ、気持ちいいの……んんっ！

　気持ち良くて……あんっ、声が漏れちゃうくらい……えへへ」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>『へぇ、そんなのがあるんだ。

　今度僕にも教えてよ』

SV\_ボイスの演奏 EV15\_025 100 100 0 2

\n<若菜>「ふぁ……う、うんっ……は、ハルタにも……んんっ！

　き、きもちいいストレッチ……教えて……んあっ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「なあなあ、若菜ちゃんさぁ。

　俺とヤってる最中に、他の男とセックスの予約してんじゃねーよ！」

H5\_電話\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV15\_026 100 100 0 2

\n<若菜>「ンあぅッ……！」

SV\_ボイスの停止 2

男は若菜の握っている電話の画面を操作し、

マイクとスピーカーをミュートに切り替える。

\n<陸也>「若菜ちゃんのマンコはオレ専用だって言ったよな？

　クソビッチの若菜ちゃんには難しかったかッ！？」

SV\_ボイスの演奏 EV15\_027 100 100 0 2

\n<若菜>「あんんっ……！　わ、忘れてなんか……はぁんんッ！

　そ、それに……わたしはビッチじゃ……ンふぁ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「なら、ちゃんと言ってみろよ！

　若菜ちゃんのマンコは誰のモンだ！？」

責め立てるように腰を強く振るう男に、

若菜はたじたじになりながらも快楽に喘ぐ。

SV\_ボイスの演奏 EV15\_028 100 100 0 2

\n<若菜>「ふぁあ、んううっ、激し……んあっ……！

　い、言います……んんっく、言いますからぁ……！」

SV\_ボイスの停止 2

H5\_電話\_放心

SV\_ボイスの演奏 EV15\_029 100 100 0 2

\n<若菜>「わ、わたしのおまんこは……せ、先輩の……

　先輩のおちんちん専用の……精液便所です……ンふあぅッ……！？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「ちゃんと分かってんじゃん。

　ちゃんと言えたご褒美に、すぐにイカせてやるよッ！」

H5\_電話\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV15\_030 100 100 0 2

\n<若菜>「ンはぁあぅっ……！

　そ、そこ……んんっ、すごっ……あっ、んんっぅう！」

SV\_ボイスの停止 2

繋がっていないマイクに向かって、

若菜は遠慮なしに快楽の声を上げ続ける。

H5\_電話\_放心

SV\_ボイスの演奏 EV15\_031 100 100 0 2

\n<若菜>「んあっ、も、もう我慢できない……！

　い、イっても……イってもいいですか……んひゃぁ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あー、俺も出そうだわ……！

　俺の射精でイカせてやるよ！」

SV\_ボイスの演奏 EV15\_032 100 100 0 2

\n<若菜>「は、ハルタに……バレちゃうとダメだから……

　ざ、ザーメンは……わ、わたしの中に……んんあっ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「素直に中出ししてほしいって言えっての！

　まあ、どっちにしろ中出し以外しねーけどなッ！」

男は射精を導くための激しいピストンを繰り返し、

若菜を絶頂へと高めていく。

SV\_ボイスの演奏 EV15\_033 100 100 0 2

\n<若菜>「ンはぁっ！　だめっ、もうっ……んあっ！

　はぁはぁ……イっちゃう……ハルタの部屋で……ふぁっ！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV15\_034 100 100 0 2

\n<若菜>「こんなこと、イケナイのに……感じちゃうぅっ！

　ンんんっ、イクッ……イっちゃうぅうう！」

SV\_ボイスの停止 2

H5\_電話\_射精\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV15\_035 100 100 0 2

\n<若菜>「ンんんぅぅうあああああああっ！」

SV\_ボイスの停止 2

若菜は声を必死に抑えながら絶頂に至るも、

漏れ出た声は若菜の興奮を大いに物語っていた。

SV\_ボイスの演奏 EV15\_036 100 100 0 2

\n<若菜>「……っ、んんっ……！　んはぁ……はぁはぁ……」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV15\_037 100 100 0 2

\n<若菜>（これ……今までで一番気持ち良かった……

　こんな……ハルタの部屋でシちゃダメなのに……）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV15\_038 100 100 0 2

\n<若菜>（……こんなに気持ち良かったのって、

　ひょっとしてハルタの部屋だから……かな？）

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「ふぅ……出した出した。

　おっと、電話のことすっかり忘れてたわ」

男は若菜に抱き着くような姿勢でミュートをオフにする。

瞬間、部屋の中にもう一人の声が響き渡った。

\n<晴太>『――かな！　もしもーし、若菜！

　聞こえてるー？　大丈夫ー？』

H5\_電話\_射精\_喜んでる

SV\_ボイスの演奏 EV15\_039 100 100 0 2

\n<若菜>「えっ……？　んっ……ああ、うん。だ、大丈夫だよ……」

SV\_ボイスの停止 2

突然耳元で聞こえてくる晴太の言葉に、

若菜は快楽の余韻に浸りながら虚ろな言葉を返す。

SV\_ボイスの演奏 EV15\_040 100 100 0 2

\n<若菜>「あっ、思い出した……い、いま家に本が無いんだった……

　はぁはぁ……は、ハルタももう戻ってきていいよ……」

SV\_ボイスの停止 2

ごぽり、と若菜の秘部から白濁した液が零れる。

それを見ながら若菜は緩んだ口元で送話口に声をかけた。

SV\_ボイスの演奏 EV15\_041 100 100 0 2

\n<若菜>「も、もう……終わったから……」

SV\_ボイスの停止 2

H7\_EV11&16

H7\_喜んでる

むせ返るような淫靡な匂い、部屋中を包む熱気。

夜通し響く乾いた音は止むことなく朝を迎えた。

SV\_ボイスの演奏 EV16\_001 100 100 0 2

\n<若菜>「んはぁ、んんっ……！　はぁはぁ……んんぅ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「うわ、もう朝じゃん。

　若菜ちゃんに一晩中搾り取られてたわ」

H7\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV16\_002 100 100 0 2

\n<若菜>「ちがっ、先輩が……んんぁッ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「何がちげーの？　チンコ咥えこんで離さなかったクセにさぁ。

　こんなドロドロマンコで言っても説得力なくね？」

SV\_ボイスの演奏 EV16\_003 100 100 0 2

\n<若菜>「あんっ、んっくぁ……！

　それは、先輩がセックスやめてくれないからぁ……んふぁ！」

SV\_ボイスの停止 2

一日中肉棒を頬張った蜜壺はぐちょぐちょに蕩け、

滑るように子宮奥まで男根を飲み込んでいく。

\n<陸也>「流石にそろそろ休憩すっか。

　じゃあ、次出したら一旦終わりなッ！」

SV\_ボイスの演奏 EV16\_004 100 100 0 2

\n<若菜>「ンあぁっ、は、はい……！

　わ、わか……んんっ、あ、わかりましたぁ……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「おいおい、そんな悲しそうにすんなって。

　起きたらまたハメ倒してやるっての」

SV\_ボイスの演奏 EV16\_005 100 100 0 2

\n<若菜>「か、悲しくなんて……」

SV\_ボイスの停止 2

若菜の言葉を遮るように、窓を叩く音が部屋中に響く。

その音に続くように、男にしては高めな声が聞こえてきた。

\n<晴太>「若菜ー！　おはよー！」

SV\_ボイスの演奏 EV16\_006 100 100 0 2

\n<若菜>「は、ハルタ……？　なんで……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「またアイツかよ。

　彼氏でもねーのにしつけー男だな、モヤシ男」

SV\_ボイスの演奏 EV16\_007 100 100 0 2

\n<若菜>「ど、どうしよう……

　わたしがいるのはバレちゃってるだろうし……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「いいじゃん。開けちゃえば。

　部屋ん中あちぃし、精子くせぇし、換気換気」

SV\_ボイスの演奏 EV16\_008 100 100 0 2

\n<若菜>「えっ、ちょっと待っ――！」

SV\_ボイスの停止 2

男は足で蹴とばすようにカーテンを払い、窓を開け放つ。

窓越しに若菜と晴太の目があった。

H7\_喜んでる

SV\_ボイスの演奏 EV16\_009 100 100 0 2

\n<若菜>「お、おはよう……ハルタ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「おはよう。ふぁ～あ、まだ眠いや」

SV\_ボイスの演奏 EV16\_010 100 100 0 2

\n<若菜>「あ、あはは……ハルタにしては朝が早――い゛んんっ！？」

SV\_ボイスの停止 2

晴太の目があるにも関わらず、

男は容赦なく若菜の秘部を突きあげて身体を揺らす。

SV\_ボイスの演奏 EV16\_011 100 100 0 2

\n<若菜>（な、なんで……

　こんなことしたらハルタにバレちゃう……！）

SV\_ボイスの停止 2

H7\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV16\_012 100 100 0 2

\n<若菜>「せ、先輩……動いちゃダメです……んんぁっ！

　は、ハルタに……セックスしちゃってるのバレちゃう！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「大丈夫大丈夫。今までだってバレてないっしょ？

　若菜ちゃんが声抑えてりゃ大丈夫だってのッ！」

H7\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV16\_013 100 100 0 2

\n<若菜>「んふぁあ！　な、なら……せめて、んんっ！

　激しく……ふぅんん、しないでくだ……ンんぅっ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「可愛い可愛い若菜ちゃんの頼みだから、まあ……

　出来る限り、多少は、小指の先くらいは善処してみるわ」

SV\_ボイスの演奏 EV16\_014 100 100 0 2

\n<若菜>（先輩……本当にやめてくれるかな……？

　とにかく、あんまり声が出ないように頑張らないと……）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV16\_015 100 100 0 2

\n<若菜>（ただでさえ、ずっとセックスしちゃってたから、

　おまんこがすごく敏感になっちゃってるのに……）

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「ねぇ、若菜。なんでそんなに揺れてるの？」

H7\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV16\_016 100 100 0 2

\n<若菜>「えっ？　えっと……」

SV\_ボイスの停止 2

若菜は考え込むような素振りで男を見やる。

男はヘラヘラと笑いながら手で謝罪を表した。

H7\_喜んでる

SV\_ボイスの演奏 EV16\_017 100 100 0 2

\n<若菜>「そ、それは……んんっ、その……と、トランポリン！

　トランポリンに乗ってるの！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「そんなの若菜の家にあったっけ？」

SV\_ボイスの演奏 EV16\_018 100 100 0 2

\n<若菜>「あ、最近買ったの……んあっ！」

SV\_ボイスの停止 2

激しくはないものの、小刻みに動く肉棒に、

一晩かけて開発された若菜の秘部は蜜を垂らす。

\n<晴太>「若菜？　ちょっと様子が変だよ？」

SV\_ボイスの演奏 EV16\_019 100 100 0 2

\n<若菜>「へ、変じゃないよ……！

　ただ……んんっ！　えへへ……き、キモチイイだけ……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「トランポリンが気持ちいいの？

　若菜ってば変だなぁ」

\n<晴太>「あれ、ひょっとして、若菜……」

晴太の目がきっと鋭くなり若菜を見つめる。

それは、まるで何かに気づいたような表情だった。

H7\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV16\_020 100 100 0 2

\n<若菜>（ハルタのあの顔……気付いちゃったんだ！

　どうしよう……わたしがエッチだってバレちゃう……！）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV16\_021 100 100 0 2

\n<若菜>「や、やだっ、ハルタ！　違うの、これは……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「ダイエットの為にトランポリン買ったんでしょ！

　あんなにケーキ食べてたら太っちゃうもんね」

SV\_ボイスの演奏 EV16\_022 100 100 0 2

\n<若菜>「え……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「は……？」

\n<晴太>「あれ、若菜なにか言った？」

H7\_喜んでる

SV\_ボイスの演奏 EV16\_023 100 100 0 2

\n<若菜>「う、ううん……なんでもないよ！

　それより、ダイエットなんてよく分かったね……ンんっ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「ダイエットなら、もっと動いたほうがいいよ。

　ほら、こんな感じにもっと身体を上下させてさ」

H7\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV16\_024 100 100 0 2

\n<若菜>「でも、そんなことしたら声が……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「声……？」

SV\_ボイスの演奏 EV16\_025 100 100 0 2

\n<若菜>「う、ううん……なんでもない……なんでもない……」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV16\_026 100 100 0 2

\n<若菜>（でも、ハルタの前で思いっきりセックス出来たら……

　きっと、すごく気持ちいいだろうな……）

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「それじゃあ、やってみてよ。

　僕がちゃんと若菜のこと見ててあげるから」

晴太の視線が一心に若菜だけに注がれる。

それだけで若菜の秘部はきゅんと気持ちが昂りをみせた。

H7\_喜んでる

SV\_ボイスの演奏 EV16\_027 100 100 0 2

\n<若菜>「う、うん……

　そ、それじゃあ……わたしのこといっぱい見ててね……？」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV16\_028 100 100 0 2

\n<若菜>（ハルタがあんなに真剣にわたしを……

　わたしのセックスしてるところを見ようとしてるんだ……）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV16\_029 100 100 0 2

\n<若菜>（声我慢しないと本当にバレちゃう……

　大丈夫……本気になればちゃんと出来るもん……）

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>（思ってのとは違ぇけど、これはこれでおもしれーからいいか）

若菜は意を決したようにゆっくりと腰を持ち上げると、

まるで弾むように一息に腰を下ろした。

H7\_だらしない

SV\_ボイスの演奏 EV16\_030 100 100 0 2

\n<若菜>「ンんん゛ッ！　っはぁ……！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV16\_031 100 100 0 2

\n<若菜>（すごい……こんなの絶対に声出ちゃう……！

　こんなに気持ちいいなんて……絶対に我慢できないよぅ……！）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV16\_032 100 100 0 2

\n<若菜>「んふぁあ、っくぅ、んああッ……！」

SV\_ボイスの停止 2

若菜は本当にトランポリンにでも乗っているかのように、

身体を激しく上下に動かして肉棒を深くまで突っ込む。

\n<晴太>「いいよいいよ！　若菜、その調子！」

SV\_ボイスの演奏 EV16\_033 100 100 0 2

\n<若菜>「ンんぁあ……！　これっ、すごっ、いい……！

　これじゃあ、すぐッ……ひゃあンんっ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「すごいでしょ？　うんうん、すぐに痩せられるよ！」

SV\_ボイスの演奏 EV16\_034 100 100 0 2

\n<若菜>（ハルタの視線も……おちんちんの感覚も……

　どっちも良すぎて……頭がおかしくなっちゃう……！）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV16\_035 100 100 0 2

\n<若菜>（こんなに気持ち良くなれるなら……

　もう、ハルタにバレてもいいかも……）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV16\_036 100 100 0 2

\n<若菜>「ふぁんんッ、ハルタぁ……！

　わ、わたしのことちゃんと見ててね……っ！」

SV\_ボイスの停止 2

若菜はタガが外れたように、一心不乱に腰を打ちつける。

頭の中に浮かんでいるのは最早快楽のみだった。

\n<晴太>「心配しなくても、ちゃんと見てるよ。

　若菜が変わっていくところもちゃんと見ててあげるから！」

SV\_ボイスの演奏 EV16\_037 100 100 0 2

\n<若菜>「うん……うぅんんっ……！

　っはぁ……か、変わっちゃったわたしを見ててね……んふぁ！」

SV\_ボイスの停止 2

声には艶。漏れ出る吐息は色香を孕んだ熱を持つ。

嬌声からも若菜の絶頂が近いのは明らかだった。

SV\_ボイスの演奏 EV16\_038 100 100 0 2

\n<若菜>「んんっ、ハルタぁ……もう我慢できないよぉ……！

　イっても……ふぁっ、イってもいいよね……！？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「行っても……？　あっ、ひょっとしてトイレ我慢してた？

　そうだ、僕もトイレ行こうと思ってたんだ！　じゃあね、若菜！」

晴太はそう口にすると、窓を閉めて部屋を出ていく。

けれど、そのことにさえ気付かず若菜は快楽に喘ぐ。

SV\_ボイスの演奏 EV16\_039 100 100 0 2

\n<若菜>「うん……イクッ、イクからねッ！

　ちゃんとイクところも見ててね……！　ハルタぁ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「うっ……俺ももう限界だ……！」

SV\_ボイスの演奏 EV16\_040 100 100 0 2

\n<若菜>「わたしのイクところ……気持ち良くなっちゃってるところ……！

　全部見てぇ……！　んあぁッ、イクぅううう！」

SV\_ボイスの停止 2

H7\_射精\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV16\_041 100 100 0 2

\n<若菜>「ンんっふぁあああああああああ！」

SV\_ボイスの停止 2

どぷどぷと流し込まれる特濃の精液は、

彩乃の膣内を満たして外へと流れ出ていく。

H7\_射精\_だらしない

SV\_ボイスの演奏 EV16\_042 100 100 0 2

\n<若菜>「んはぁ……はぁはぁ……んんっく……」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV16\_043 100 100 0 2

\n<若菜>「はぁはぁ……わたし……ハルタに全部見せちゃった……

　あ、あれ……ハルタは……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「アイツならとっくにいねーっての。

　つーかまだセックスしてたことも気付いてねぇ」

H7\_射精\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV16\_044 100 100 0 2

\n<若菜>「そう、ですか……良かった……」

SV\_ボイスの停止 2

若菜は小さく呼吸を整えながら、

どこか気落ちしたような声を漏らす。

SV\_ボイスの演奏 EV16\_045 100 100 0 2

\n<若菜>（そっか……見られてないんだ……

　なのに、見られてると思って、わたしあんなに……）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV16\_046 100 100 0 2

\n<若菜>（でも、想像だけであんなにイっちゃったのに……

　本当に見られてたらどうなっちゃうんだろう……）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV16\_047 100 100 0 2

\n<若菜>（どれだけ気持ち良くなれるんだろう……）

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「休憩したら、明日までヤリっぱだからな。

　寝かさねーから覚悟しといてよ」

SV\_ボイスの演奏 EV16\_048 100 100 0 2

\n<若菜>「……どうせ文句言っても変わらないと思うので、

　先輩の好きにしてください……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「そう？　それじゃあ明日さ――」

H6\_EV17

H6\_感じてる

部屋の主が不在になったのをいいことに、

男女は裸で身体を繫ぎ合わせて腰を打ち付け合っていた。

\n<陸也>「もうそろそろ戻ってくるんじゃね？

　早くマンコ締めて射精させないとマズいんじゃない？」

SV\_ボイスの演奏 EV17\_001 100 100 0 2

\n<若菜>「んんっ、そ、そんなこと言っても……

　せ、先輩が焦らして……んあッ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「せっかく晴太くんの家でシてるんだからさぁ、

　気持ちよくイキたいっしょ？」

SV\_ボイスの演奏 EV17\_002 100 100 0 2

\n<若菜>「それ、は……んんぁッ！

　なら……も、もっと激しくしてくださ……ンンぅ！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV17\_003 100 100 0 2

\n<若菜>「う、うそ……

　か、階段上がってきてる音が……んっ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「だから？」

SV\_ボイスの演奏 EV17\_004 100 100 0 2

\n<若菜>「だ、だから……んんっ、早く止めないと……

　ハルタに……見つかっちゃ……ンはぁ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「だから？　それがどうかしたの？」

SV\_ボイスの演奏 EV17\_005 100 100 0 2

\n<若菜>「だ、だって……ハルタに見つかっちゃったら……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「若菜ちゃんさぁ、晴太くんに見られたいんだろ？

　見られると気持ちよくなっちゃう変態なんだろ？」

SV\_ボイスの演奏 EV17\_006 100 100 0 2

\n<若菜>「そんな、こと……んんっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「だったら、見せてやればいいじゃん。

　そうしたら、今までで一番気持ちよくなれるんだよ？」

SV\_ボイスの演奏 EV17\_007 100 100 0 2

\n<若菜>「い、今までで……いち、ばん……んぁあ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「そうそう。ほら、ちゃんとドアのほう向いて。

　そのトロ顔見せてやれよ」

SV\_ボイスの演奏 EV17\_008 100 100 0 2

\n<若菜>（このままじゃ本当に見られちゃう……！

　わたしのセックス……ハルタに見られちゃう……！）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV17\_009 100 100 0 2

\n<若菜>（でも、それって……どんなに気持ちいいんだろう……）

SV\_ボイスの停止 2

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

\n<晴太>「わか、な……？」

SV\_ボイスの演奏 EV17\_010 100 100 0 2

\n<若菜>「あっ、んっ、ハルタ……！

　やあっ、見ちゃ……んふぁっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV17\_011 100 100 0 2

\n<若菜>（ハルタに見られちゃってる……！

　わたしの裸も、エッチなところも全部……！）

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あーあ、バレちゃった。

　だから、ここでヤるのはアブねーって言ったのに」

SV\_ボイスの演奏 EV17\_012 100 100 0 2

\n<若菜>「そ、そんな……

　先輩がここでしようって……んああっ！」

SV\_ボイスの停止 2

男はさも自分は関係ないとばかりに、

淡々と若菜の膣へと肉棒を打ち付ける。

\n<陸也>「俺のせいにすんなって。

　だって若菜ちゃん、ここでするのが一番気持ちいいんだろ？」

SV\_ボイスの演奏 EV17\_013 100 100 0 2

\n<若菜>「それは……ンふぁ、あんっ、んん……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「そういや、激しくしてほしかったんだっけ？

　悪ぃ悪ぃ、今から激しくしてやるからさッ！」

SV\_ボイスの演奏 EV17\_014 100 100 0 2

\n<若菜>（いま激しくなんてされちゃったら……

　わたし、ハルタの前で変な声出しちゃうよ……）

SV\_ボイスの停止 2

男は容赦なく若菜の膣奥に亀頭を押し付けて、

子宮に口づけを交わすように突き上げる。

SV\_ボイスの演奏 EV17\_015 100 100 0 2

\n<若菜>「ン゛お……！　んふぁ、んんっ……！

　これ、すごっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「これ……なんで……

　どうして若菜が先輩と……」

H6\_喜んでる

SV\_ボイスの演奏 EV17\_016 100 100 0 2

\n<若菜>「あっ、んんっ、ハルタ、ごめんね……！

　ごめんね……んふぁ……！」

SV\_ボイスの停止 2

好きな人を目の前にしながら、

けれど若菜は喜びにも似た表情を浮かべる。

SV\_ボイスの演奏 EV17\_017 100 100 0 2

\n<若菜>「せ、先輩に脅されて……んんぅ、仕方なく……

　わ、わたしだってこんな……んひゃあッ！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV17\_018 100 100 0 2

\n<若菜>「え、えへへ……仕方なく……

　ぜ、全部……先輩が悪いんだから……んんあっ！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV17\_019 100 100 0 2

\n<若菜>（気持ちいい……！

　ハルタに見られながらのセックス気持ちいいよぉ……！）

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV17\_020 100 100 0 2

\n<若菜>（こんなのくせになっちゃう……！

　こんなエッチだめなのに……好きになっちゃう……！）

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「若菜ちゃんってすぐ俺のせいにするよな？

　んじゃあ、もう中出ししてやらねーから」

H6\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV17\_021 100 100 0 2

\n<若菜>「そんな……んっく、ふわぁ……！

　ご、ごめんなさい……先輩……ンんんっ！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV17\_022 100 100 0 2

\n<若菜>「わ、わたしが悪かったですから……ふぅあ！

　お、お願いだから中に……んんぁっ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「中って、そんな……若菜……？」

\n<陸也>「じゃあ、いつも通り中に出すからな！

　孕む準備しとけよ！」

SV\_ボイスの演奏 EV17\_023 100 100 0 2

\n<若菜>（ハルタに見られながら中出しされちゃう……！

　ハルタのじゃないザーメンがわたしに注がれちゃう！）

SV\_ボイスの停止 2

男のピストンが射精を促すものへと変わる。

その激しさに若菜の頬がほころんだ。

H6\_喜んでる

SV\_ボイスの演奏 EV17\_024 100 100 0 2

\n<若菜>「んぁっ、は、はい……！

　ざ、ザーメン……ザーメンいっぱいくださいっ！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV17\_025 100 100 0 2

\n<若菜>「んんっ……わ、わたしも……もう……！

　せ、先輩……！　わたしも一緒に……んんあっ！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV17\_026 100 100 0 2

\n<若菜>「んんっ、もう、イッっちゃ……！

　イクッ……イキます！　んんふぁああ……！」

SV\_ボイスの停止 2

H6\_射精\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV17\_027 100 100 0 2

\n<若菜>「んふぁああああああああああああ！」

SV\_ボイスの停止 2

好きな幼なじみの前にも関わらず、

若菜は盛大に喘ぎながら他の男の精子で子宮を満たす。

SV\_ボイスの演奏 EV17\_028 100 100 0 2

\n<若菜>「はぁはぁ……んはぁ……」

SV\_ボイスの停止 2

H6\_射精\_喜んでる

SV\_ボイスの演奏 EV17\_029 100 100 0 2

\n<若菜>「ハルタに……んんっく、見られちゃってるのに……

　先輩に、いっぱい中出しされちゃった……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「なに言ってんの？

　搾り取ってきたのは若菜ちゃんのマンコだろッ！」

H6\_射精\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV17\_030 100 100 0 2

\n<若菜>「ンんあッ……！　やめっ、先輩……

　イッたばかりで敏感だから……ひゃあんん！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「晴太くんの前だからって生娘ぶるなって。

　若菜ちゃんはこんなんじゃ満足できないっしょッ！」

H6\_射精\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV17\_031 100 100 0 2

\n<若菜>\{「ンンぅううッ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「悪ぃ悪ぃ、そういうことだからさぁ。

　もうちょい部屋借りるわ」

\n<晴太>「え……」

\n<陸也>「なんなら晴太くんも混ぜてやろうか？

　まあ、マンコはオレ専用だけどなッ！」

SV\_ボイスの演奏 EV17\_032 100 100 0 2

\n<若菜>「ンはぁっ……！　あんっ、んんぅう！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「ぼ、僕は……その、大丈夫です……」

\n<陸也>「あーあ。晴太くん行っちゃった。

　若菜ちゃん、幻滅されたかもね」

SV\_ボイスの演奏 EV17\_033 100 100 0 2

\n<若菜>「んんぅあ……んっ、あっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「その様子じゃ気にしてなさそうだな。

　若菜ちゃんが孕むまではずっと俺が可愛がってやるよッ！」

H6\_射精\_喜んでる

SV\_ボイスの演奏 EV17\_034 100 100 0 2

\n<若菜>「ンあっ！　はぁ……は、はい……」

SV\_ボイスの停止 2

H1\_EV01

とある路地の一角で、

一組の男女が気配を殺すようにして密着し合っていた。

H1\_着衣\_耐えてる

\n<陸也>「うおっ、すっげぇおっぱい！

　今までで一番ヤベェわ！」

SV\_ボイスの演奏 EV01\_001 100 100 0 2

\n<若菜>「こ、こんなこと……

　や、やめてください……！」

SV\_ボイスの停止 2

若菜は抵抗の言葉を口にしながらも、

強引に振りほどくことはせずにじっと耐えていた。

\n<陸也>「いーじゃん、減るもんじゃねぇんだしさぁ。

　むしろ、揉んで大きくしてあげてる的な？」

SV\_ボイスの演奏 EV01\_004 100 100 0 2

\n<若菜>「んっ……で、でも……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「なに？　文句でもあるわけ？

　あーあ、あの写真ばら撒いちゃおっかなぁ！」

SV\_ボイスの演奏 EV01\_005 100 100 0 2

\n<若菜>「そ、それは……」

SV\_ボイスの停止 2

男の脅しに若菜は言葉を詰まらせる。

その言動に男はニヤリと嫌な笑みを浮かべた。

\n<陸也>「俺は別にこんなことしなくてもいいんだけどさぁ。

　若菜ちゃんの秘密守る対価じゃん？」

SV\_ボイスの演奏 EV01\_007 100 100 0 2

\n<若菜>「…………」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV01\_008 100 100 0 2

\n<若菜>「……ごめんなさい、続けていいです……」

SV\_ボイスの停止 2

若菜は観念したように小さく呟く。

けれど、男の態度がそれで修まることはなかった。

\n<陸也>（ちょれー！

　おっぱいに栄養全部いってんじゃねーの！）

\n<陸也>（今時こんなんに騙される女がいんのかよ！

　まあ、おもしれーから、もうちょい続けてみるか）

\n<陸也>「続けていいです？　なに言ってんの？

　もっと言い方あるっしょ？　こっちはやんなくていいんだぞ？」

SV\_ボイスの演奏 EV01\_009 100 100 0 2

\n<若菜>「そんな……ううっ……」

SV\_ボイスの停止 2

戸惑いを表に出したまま、若菜は顔を紅潮させる。

そして意を決したようにおもむろに口を開いた。

H1\_着衣\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV01\_011 100 100 0 2

\n<若菜>「わたしの……お、おっぱい……揉んでください……」

SV\_ボイスの停止 2

若菜はひどく赤面しながら、胸元をぐっと差し出す。

その行動に男は口角を吊り上げた。

\n<陸也>「しょーがねぇなぁ。

　そこまで言うなら揉んでやるわ。感謝しろよ？」

SV\_ボイスの演奏 EV01\_012 100 100 0 2

\n<若菜>「ふぅん……！　は、はい……」

SV\_ボイスの停止 2

男はまたも若菜の胸を両手で掴むと、

揉みしだくように何度も無遠慮に手を動かす。

H1\_着衣\_耐えてる

\n<陸也>「服越しでなんつー柔らかさだよ！

　こんなおっぱい、オッサンに揉ませるなんてもったいねぇ」

\n<陸也>（つか、こんな最高のおっぱい、

　服の上から揉むだけで我慢なんて出来ねーっての！）

SV\_ボイスの演奏 EV01\_015 100 100 0 2

\n<若菜>「ん……ふぅ、んん……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>（おっぱい揉んでるだけでこんな感じてるとか、

　コイツ、ぜってぇ経験ねぇな）

\n<陸也>「若菜ちゃん、処女っしょ？」

SV\_ボイスの演奏 EV01\_016 100 100 0 2

\n<若菜>「あっ、ん……んんっ……」

SV\_ボイスの停止 2

若菜は返答ではなく、小さな嬌声で返す。

それだけで男は確信を得たようだった。

\n<陸也>「やっぱりな。

　処女のくせに男におっぱい揉まれて感じてんだ？」

SV\_ボイスの演奏 EV01\_018 100 100 0 2

\n<若菜>「そんなこと、ん……言わないで……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「否定はしねぇんだ？

　じゃあもっと気持ち良くしてやるよ！」

H1\_脱衣\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV01\_019 100 100 0 2

\n<若菜>「きゃああああ！」

SV\_ボイスの停止 2

男は若菜の胸元を包む衣服をぐっと下へ引っ張る。

それだけで、たわわに実った乳房が表に放り出された。

\n<陸也>「うおっ！　生で見ると迫力マジでヤベェわ！

　これ見てるやつゼッテー全員今シコってるっしょ！」

SV\_ボイスの演奏 EV01\_022 100 100 0 2

\n<若菜>「み、見てるやつって……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>（あっちゃー、マジしくったわ。

　まあ、コイツならどうとでも言いくるめれるっしょ）

\n<陸也>（なにせコレにも気付いてねぇっぽいし）

\n<陸也>「あー、こっちの話。

　若菜ちゃんは気にしなくていいから」

男は薄っぺらい笑みを浮かべながら視線を下へと落とす。

視線の先には隠れるように置かれたカメラが静かに動いていた。

\n<陸也>「じゃあ早速触っちゃおうかな……」

SV\_ボイスの演奏 EV01\_023 100 100 0 2

\n<若菜>「えっ……そのまま触るなんて……

　そ、そんなのダメです……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>（こんなエロいおっぱい前にして、

　ダメって言われて引くわけねーだろ！）

男は強引に若菜の胸部に手を伸ばす。

そして乳房を握るように揉み始めた。

SV\_ボイスの演奏 EV01\_024 100 100 0 2

\n<若菜>「んふぁ……！　ん、あっ……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「むっちゃ手におっぱい吸い付いてくるわ！

　マジこの生おっぱいエロすぎっしょ……！」

男の指は乳房の柔肌に沈み込んでいく。

しっとりとした肌は離れるのを拒むように吸い付いてきた。

SV\_ボイスの演奏 EV01\_026 100 100 0 2

\n<若菜>「エロくなんて……んっ、ない、です……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「なに言ってんの？　こんなエロいおっぱい無ぇっての。

　マジ最高だわ。無限に揉んでてぇ……！」

SV\_ボイスの演奏 EV01\_027 100 100 0 2

\n<若菜>「はぁはぁ……ん、あっ……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「乳首ビンビンじゃん！

　なに？　そんなに気持ち良くなっちゃってんの？」

SV\_ボイスの演奏 EV01\_028 100 100 0 2

\n<若菜>「そんな……こと、ふぁっ、んん……」

SV\_ボイスの停止 2

若菜の言葉とは裏腹に、乳首はツンと固くなっていた。

男は勃起した乳首を人差し指で弾くように触れる。

SV\_ボイスの演奏 EV01\_029 100 100 0 2

\n<若菜>「んふぁ……！　ち、乳首触っちゃ……んんっ！」

SV\_ボイスの停止 2

全身を駆け巡る経験したことのない感覚。

その感覚に、若菜の身体がびくりと震えた。

\n<陸也>「コリコリして欲しくて立ててんじゃないの？」

SV\_ボイスの演奏 EV01\_031 100 100 0 2

\n<若菜>「ちがっ……ふぁっ、んん……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「感じてるんでしょ？」

SV\_ボイスの演奏 EV01\_032 100 100 0 2

\n<若菜>「ふぅ、ん……そ、れは……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>（誤魔化したって、バレバレだっての）

\n<陸也>「こんなおっぱいマジでレアだわ。

　飽きるまで揉んでやるから」

SV\_ボイスの演奏 EV01\_033 100 100 0 2

\n<若菜>「そ、んな……ふぅっ、ん……！」

SV\_ボイスの停止 2

立ち絵\_EV02

廊下の隅にある物置の中で、

若菜は決まりが悪そうにモジモジと立ち尽くしていた。

立ち絵\_裸\_困り

SV\_ボイスの演奏 EV02\_001 100 100 0 2

\n<若菜>「これで……いいですか……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「うおっ、マジでえっろ……！

　こんなエロい身体して処女とかありえねー！」

若菜は衣服を纏うことなく男の前に立ちながら、

男の視線を一身に受け止めていた。

\n<陸也>（こうやって見るとマジでヤベェな……

　我ながら最高のおもちゃゲットしちまったわ）

男は全裸の若菜を舐めまわすように見つめる。

傍らには綺麗に畳まれた制服が置かれていた。

\n<陸也>「乳首まっピンクじゃん！

　中古ばっか相手してたから、新品最高だわ～！」

SV\_ボイスの演奏 EV02\_003 100 100 0 2

\n<若菜>「ううっ……恥ずかしいです……」

SV\_ボイスの停止 2

全身を視線が這っていく感覚に、

若菜は太ももをすり合わせて羞恥を露わにする。

\n<陸也>「マンコもみっちり閉じてるしさぁ。

　早くこじ開けてぇ……！」

SV\_ボイスの演奏 EV02\_004 100 100 0 2

\n<若菜>「そ、そんなこと……しません……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「つーかパイパンじゃん！

　なに、処女のくせに剃ったりしてるわけ？」

その言葉を聞くなり、

かあっと、若菜の顔がみるみるうちに赤くなっていく。

SV\_ボイスの演奏 EV02\_005 100 100 0 2

\n<若菜>「ま、まだ……その……生えてないだけです……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「ヤッバ！　そんなの初めてだわ！

　ロリっぽいと思ってたけど、犯罪臭すげぇ……！」

その指摘に若菜は視線を落として無毛の股間を見る。

そして更に顔を赤らめた。

SV\_ボイスの演奏 EV02\_007 100 100 0 2

\n<若菜>「やめてください……気にしてるんですから……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「でも、おっぱいだけはロリっぽくねーよな。

　あれか？　ロリ巨乳ってやつ？」

SV\_ボイスの演奏 EV02\_008 100 100 0 2

\n<若菜>「もうやめてください……

　これで……ちゃんと消してくれるんですよね……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あ？　なにを？」

SV\_ボイスの演奏 EV02\_009 100 100 0 2

\n<若菜>「あの写真です……

　裸を見せたら、消してくれるんですよね……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あー、うんうん。もちろんもちろん」

\n<陸也>（消すわけねぇだろ、バーカ。

　つか、とっくにバックアップ取ってるっての）

男は心にもなさそうに言ってみせる。

けれど、若菜は安心したようにほっと一息吐いた。

\n<陸也>「そんなことよりさぁ。

　こんなエロい裸、目に焼き付けるだけじゃもったいねぇな」

SV\_ボイスの演奏 EV02\_010 100 100 0 2

\n<若菜>「え、エロいなんて言わないでください……」

SV\_ボイスの停止 2

男はポケットからスマートフォンを取り出すと、

若菜の前で操作をしてみせる。

SV\_ボイスの演奏 EV02\_012 100 100 0 2

\n<若菜>「あの……そのスマホ、何に使うんですか……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「えー、そりゃあ一つに決まってるっしょ」

SV\_ボイスの演奏 EV02\_013 100 100 0 2

\n<若菜>「きゃっ……！　な、なんですか……！？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「まあまあ」

SV\_ボイスの演奏 EV02\_014 100 100 0 2

\n<若菜>「やめて……撮らないでください……！」

SV\_ボイスの停止 2

若菜の制止など気に留めることなく、

男はスマホのシャッターを切り続ける。

\n<陸也>「いいじゃん、誰にも見せないからさぁ。

　記念だって記念。俺が一人の時に使いたいじゃん？」

SV\_ボイスの演奏 EV02\_015 100 100 0 2

\n<若菜>「つ、使うって……なににですか……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「そりゃあ、シコる時に決まってるっしょ。

　オナニーだよオナニー」

SV\_ボイスの演奏 EV02\_016 100 100 0 2

\n<若菜>「オナ……っ！？　ううっ……」

SV\_ボイスの停止 2

言葉にするのも恥ずかしいというように、

若菜は俯きながら言葉尻をすぼめる。

\n<陸也>「恥ずかしがっちゃって！

　オナニーくらいしたことあるっしょ？」

SV\_ボイスの演奏 EV02\_017 100 100 0 2

\n<若菜>「そ、そんなこと……したこと、ないです……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「うっそ、マジで！？

　若菜ちゃんヤッバ！　初心すぎっしょ！」

\n<陸也>「そのクセにおっぱい揉まれたり、

　こうやって裸撮られて感じちゃってるんだ」

SV\_ボイスの演奏 EV02\_018 100 100 0 2

\n<若菜>「か、感じてないです……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「えー？

　でも、マンコからなんか垂れてね？」

SV\_ボイスの演奏 EV02\_019 100 100 0 2

\n<若菜>「……っ！」

SV\_ボイスの停止 2

若菜が慌てるように秘裂に手を当てると、

トロリとした液が糸を引いて指を光らせる。

\n<陸也>「そんなに愛液垂らしちゃうくらい、

　気持ち良くなっちゃってんでしょ？」

SV\_ボイスの演奏 EV02\_021 100 100 0 2

\n<若菜>「あいえき……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あー、初心な若菜ちゃんには分かんないか。

　それは若菜ちゃんがエロい気分になると出てくんの」

SV\_ボイスの演奏 EV02\_022 100 100 0 2

\n<若菜>「わ、わたしがエッチな気分の時に……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「見られて感じちゃうなんて、若菜ちゃん素質あるなぁ。

　まあ、変態のだけど」

SV\_ボイスの演奏 EV02\_024 100 100 0 2

\n<若菜>「そんなの……ないです……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「お？　感じちゃってるのは否定しないんだ？」

SV\_ボイスの演奏 EV02\_025 100 100 0 2

\n<若菜>「それは…………」

\n<陸也>「なんなら、愛液舐めとってあげよっか？

　若菜ちゃんのなら俺大歓迎なんだけど」

SV\_ボイスの演奏 EV02\_026 100 100 0 2

\n<若菜>「な、舐めとるって……

　わ、わたしの大事なところを舐めるって……ううっ……」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV02\_027 100 100 0 2

\n<若菜>「も、もういいですよね……

　お願いだから、消してください……」

SV\_ボイスの停止 2

　若菜は目を潤ませながら、

　懇願するように男に向かって言葉を投げかける。

\n<陸也>「分かってる分かってる。

　はい、消去っと」

\n<陸也>（適当な画像消しとくか。

　どうせコイツじゃ気付かねぇだろうし）

　男は若菜にスマホの画面を見せる。

　そこには『消去しました』の文字が浮かんでいた。

SV\_ボイスの演奏 EV02\_028 100 100 0 2

\n<若菜>「あ、ありが――」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あ、言い忘れてたけど、

　さっき撮ったやつは消さないから」

SV\_ボイスの演奏 EV02\_029 100 100 0 2

\n<若菜>「えっ……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「当然っしょ？　俺のオカズ用なんだからさぁ。

　大丈夫大丈夫、誰にも見せないって！」

\n<陸也>「まあ、でも？　若菜ちゃんの態度次第じゃあ、

　うっかり手が滑って誰かに送信しちゃうかもなぁ」

SV\_ボイスの演奏 EV02\_030 100 100 0 2

\n<若菜>「そんな……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「そういうことだから。

　それじゃあ、今日もおっぱい触らせてよ」

SV\_ボイスの演奏 EV02\_033 100 100 0 2

\n<若菜>「わかり、ました……」

SV\_ボイスの停止 2

H1\_EV02

H1\_着衣\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV03\_001 100 100 0 2

\n<若菜>「ん……んんっ……」

SV\_ボイスの停止 2

若菜の吐息が神社の片隅で小さく響く。

その後ろには、両手いっぱいの柔肉を揉む男がいた。

\n<陸也>（おっぱいも気持ちーけど飽きるな。

　さっさとヤりてぇ……！）

\n<陸也>「なあ、もっと気持ちいいことしねぇ？」

H1\_着衣\_耐えてる

SV\_ボイスの演奏 EV03\_002 100 100 0 2

\n<若菜>「ふっ、んん……もっと、気持ちいいこと……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「そーそー、例えばさぁ……セックスとか？」

H1\_着衣\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV03\_003 100 100 0 2

\n<若菜>「なっ……そんな、ダメです！

　そういうのは、結婚してからじゃないと……んん！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>（チッ、めんどくせーな。

　でも、下手に逃げられてもめんどくせぇしな……）

\n<陸也>「これ以上溜まったら襲っちゃうそうだしさぁ。

　せめて手で抜いてよ、若菜ちゃん」

SV\_ボイスの演奏 EV03\_004 100 100 0 2

\n<若菜>「手で……抜く……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あー、処女の若菜ちゃんはわかんねーか。

　保体の授業くらい受けてるっしょ？」

\n<陸也>「若菜ちゃんの手で俺のチンコ扱いて、

　射精させろってこと」

SV\_ボイスの演奏 EV03\_005 100 100 0 2

\n<若菜>「わ、わたしの手で……おちんちんを……」

SV\_ボイスの停止 2

若菜の顔が不安と興奮が入り混じって熱くなっていく。

そして、恐る恐るゆっくりと口を開いた。

SV\_ボイスの演奏 EV03\_010 100 100 0 2

\n<若菜>「わ、わかりました……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「それじゃあ、さっさとやってもらおうか」

SV\_ボイスの演奏 EV03\_011 100 100 0 2

\n<若菜>「きゃあ！」

SV\_ボイスの停止 2

男はすぐさまズボンを下ろすと、

ボロンとそそり立った一物を露わにした。

\n<陸也>「ほら、早く。触らねぇと話になんねーだろ？」

SV\_ボイスの演奏 EV03\_013 100 100 0 2

\n<若菜>「うう……」

SV\_ボイスの停止 2

H2\_EV03

H2\_着衣\_キス無\_耐えてる

若菜はおっかなびっくりな手つきで男根に触れ、

そのまま意を決してように握りしめた。

SV\_ボイスの演奏 EV03\_014 100 100 0 2

\n<若菜>「……これでいいですか」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「ああ。そのまま擦ってくれればいいから」

\n<陸也>（マジでチンコ触るの初めてっぽいな。

　初々しい手つきがたまんねぇ……！）

SV\_ボイスの演奏 EV03\_017 100 100 0 2

\n<若菜>「そ、それじゃあ動かします……」

SV\_ボイスの停止 2

若菜はゆっくりと皮を上下に擦り、

根元から亀頭まで、すべてを刺激するように動かす。

\n<陸也>（うおっ、コイツの手つきヤベェ……！

　天然モノでこれとか、どんだけ変態だよ！）

初めて触れる男根に、重なる拙い手つきは、

けれど拙いが故に想像だにしない刺激を男に与えていく。

SV\_ボイスの演奏 EV03\_022 100 100 0 2

\n<若菜>「あ、あの……これで、その……

　気持ちいいんですか……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「ああ、そのまま続けてくれればいいから」

\n<陸也>（気持ちいいどころじゃねーっての！

　そこいらのクソ童貞ならとっくに出してるわ）

\n<陸也>（マジ絶倫で良かったわー！

　こんな処女に簡単にイかされてたまるかっての）

SV\_ボイスの演奏 EV03\_023 100 100 0 2

\n<若菜>「分かりました……」

SV\_ボイスの停止 2

男の言葉通りに若菜は肉棒を一心に扱き続ける。

強弱も擦り方もまばらな刺激が絶えず男に襲い掛かる。

\n<陸也>（コイツ、前世娼婦だったんじゃねーの？

　まあでも、されっぱなしは手持無沙汰だな……）

SV\_ボイスの演奏 EV03\_024 100 100 0 2

\n<若菜>「んひゃあっ……！？」

SV\_ボイスの停止 2

　男の手が若菜のスカートの中へと伸びていく。

　そしてゆっくりスカートを上げて、太ももに触れた。

SV\_ボイスの演奏 EV03\_025 100 100 0 2

\n<若菜>「んっ……あ、あの……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「ああ、気にしなくていいから。

　若菜ちゃんは気にせず続けてて」

SV\_ボイスの演奏 EV03\_026 100 100 0 2

\n<若菜>「ふっ、んん……は、はい……」

SV\_ボイスの停止 2

若菜の太ももから臀部にかけてを滑るように、

男は焦らすような手つきで小さな刺激を与えていく。

触れられている部分へと意識が傾いていた若菜は、

手の平にぬるりと現れた冷たさに小さく驚く。

SV\_ボイスの演奏 EV03\_028 100 100 0 2

\n<若菜>「ひゃっ……！　先っぽから何か……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あー気にしなくていいから」

責められ続けた男根はカウパーを漏らし、

次第にぐちゅぐちゅと、淫らな水音を立て始めた。

若菜はきゅんと身体を震わせる。

クロッチには小さな染みが拡がっていた。

SV\_ボイスの演奏 EV03\_031 100 100 0 2

\n<若菜>「はぁ……ん、はぁ……」

SV\_ボイスの停止 2

　我慢汁は潤滑液の役割を果たし、

　竿全体に先ほどよりも容赦ない刺激を与える。

\n<陸也>（ダメだ……もう我慢できそうにねぇな……）

\n<陸也>「あーもうイきそう……」

SV\_ボイスの演奏 EV03\_034 100 100 0 2

\n<若菜>「えっ、その……イきそうってどういう……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「だから、もう射精しそうってこと」

男の申し出に、若菜の頭は半ば真っ白になる。

SV\_ボイスの演奏 EV03\_036 100 100 0 2

\n<若菜>「えっ！？　わ、わたしはどうすれば……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「そのまま手で受け止めてくれればいいから」

SV\_ボイスの演奏 EV03\_037 100 100 0 2

\n<若菜>「手で……は、はい……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あー、イく！」

H2\_着衣\_射精\_キス無\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV03\_038 100 100 0 2

\n<若菜>「んっ……んん……！」

SV\_ボイスの停止 2

肉棒はビクビクと大きく震えたかと思うと、

若菜の手のひらに白濁とした精液が解き放った。

\n<陸也>「ふぅ……イったイった」

SV\_ボイスの演奏 EV03\_039 100 100 0 2

\n<若菜>「…………」

SV\_ボイスの停止 2

若菜は手の平にこびりついた熱を感じながら、

呆然したように立ち尽くしていた。

\n<陸也>「もう手離してくれていいんだけど」

H2\_着衣\_射精\_キス無\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV03\_041 100 100 0 2

\n<若菜>「えっ？　あっ………は、はい……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>（お？　この反応……

　この調子なら早くヤれるかもな……！）

若菜はおずおずと精液まみれの手を鼻にかざす。

そこから放たれる濃密な雄の匂いに、瞳が一瞬蕩けた。

H2\_EV04

H2\_着衣\_キス無\_耐えてる

多目的トイレの中で、

二人の男女が密着し合って小さな吐息を漏らしていた。

室内に響くのは、ぐちゃぐちゃという、

粘液が摩擦を加えられているような音だった。

SV\_ボイスの演奏 EV04\_001 100 100 0 2

\n<若菜>「はぁはぁ…………」

SV\_ボイスの停止 2

若菜は頬を真っ赤に染めながら、肉棒を擦り続ける。

手はカウパーに塗れて白く染まっていた。

\n<陸也>（もう慣れてやがる……どんだけ変態なんだよ。

　もう一歩、踏み込んでやるか）

\n<陸也>「若菜ちゃんさぁ、手コキもいいんだけど、

　なんか物足りねーんだよなぁ」

SV\_ボイスの演奏 EV04\_003 100 100 0 2

\n<若菜>「え？　あの、それはどうすれば……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「そうだなぁ……あ、そうだ。

　若菜ちゃんがオカズになってよ」

SV\_ボイスの演奏 EV04\_004 100 100 0 2

\n<若菜>「お、おかず……ですか？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「そーそー。

　若菜ちゃんのエロいとこ見せてくれたらいいから」

SV\_ボイスの演奏 EV04\_005 100 100 0 2

\n<若菜>「わ、わたしのエッチなところ……

　そ、それって、胸を出すってことですか……？」

SV\_ボイスの停止 2

若菜はさっと片手で胸を押さえつける。

けれど、男はきょとんとした表情を浮かべた。

\n<陸也>「なに言ってんの？

　おっぱいよりエロいところあるっしょ？」

SV\_ボイスの演奏 EV04\_006 100 100 0 2

\n<若菜>「ひゃあっ！？」

SV\_ボイスの停止 2

男の手が若菜のスカートの中を這いずり回る。

無遠慮に、下着越しに若菜の肌を弄んでいく。

SV\_ボイスの演奏 EV04\_007 100 100 0 2

\n<若菜>「ふっ、ん……んん……」

SV\_ボイスの停止 2

男の手つきに、若菜は身体をくねらせる。

そんな若菜を追い込むように下着に指がかかった。

\n<陸也>「こんなの着けてたら、

　若菜ちゃんも窮屈っしょ？　楽にしてやっから」

SV\_ボイスの演奏 EV04\_009 100 100 0 2

\n<若菜>「やっ、それは……！」

SV\_ボイスの停止 2

H2\_脱衣\_キス無\_感じてる

若菜の言葉を無視して、男は下着をずり下げる。

桃色のショーツの下に隠れた秘裂が露わになった。

\n<陸也>「おっ、パンツ糸引いてね？

　若菜ちゃんもエロい気分になってたんだ？」

SV\_ボイスの演奏 EV04\_010 100 100 0 2

\n<若菜>「そ、そんなこと……

　あ、あんまり見ないでください……」

SV\_ボイスの停止 2

言葉尻をすぼめながら、若菜は俯くように言う。

その秘部は光に反射するほどぬめりを帯びていた。

\n<陸也>「もう全身くまなく見たってーの。

　俺等の仲で今さら恥ずかしがることねぇっしょ？」

SV\_ボイスの演奏 EV04\_011 100 100 0 2

\n<若菜>「それは……んんっ、ふぁ……！」

SV\_ボイスの停止 2

男は撫でまわすように若菜の臀部に触れる。

直接伝わる細やかな刺激に、若菜は声を漏らす。

\n<陸也>「やっぱ触るなら生に限るわ。

　挿れる時もだけどな」

SV\_ボイスの演奏 EV04\_012 100 100 0 2

\n<若菜>「んっ、あ、んん……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>（ケツまでこんな柔らけぇとかヤベェ！

　セックスするためだけに生まれてきたんじゃね？）

\n<陸也>「もう我慢できねぇ。

　おい、こっち向け」

H2\_脱衣\_キス\_耐えてる

SV\_ボイスの演奏 EV04\_013 100 100 0 2

\n<若菜>「えっ……んんっ！？」

SV\_ボイスの停止 2

若菜が男に目を合わせると、

男はそのまま顔を近づけて若菜の唇に口を重ねた。

けれど、初めての口づけはそれだけでは終わらない。

それは若菜の思い描いていたキスとは違うものだった。

SV\_ボイスの演奏 EV04\_016 100 100 0 2

\n<若菜>「んんっ、ちゅぶ、んんちゅ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「おい、もっと舌出せ」

H2\_脱衣\_キス\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV04\_018 100 100 0 2

\n<若菜>「んっ、ちゅ……んちゅ……」

SV\_ボイスの停止 2

男の言葉通りに若菜は舌を伸ばす。

その舌と絡み合うように男の舌も伸びてきた。

\n<陸也>（なんだこれ、あっま……！　美味すぎだろ！

　こんな甘いキス初めてだわ……！）

SV\_ボイスの演奏 EV04\_019 100 100 0 2

\n<若菜>「んっ、んちゅ……っぷはぁ……！」

SV\_ボイスの停止 2

H2\_脱衣\_キス無\_感じてる

ようやく若菜の口から男の唇が離れる。

舌は小さく糸を引いて男と繋がっていた。

SV\_ボイスの演奏 EV04\_020 100 100 0 2

\n<若菜>「わ、わたしのファーストキスが……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「若菜ちゃん、初めてだったの？

　おっそ……いやぁ、ごめんごめん」

\n<陸也>「まあ、でも気持ち良かったっしょ？

　あんなにエロく舌伸ばしちゃってさぁ」

若菜の頬が一気に紅潮する。

舌に残った他人の感覚に、若菜は戸惑っていた。

SV\_ボイスの演奏 EV04\_021 100 100 0 2

\n<若菜>「それは……先輩が出せって言うから……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「俺のせいにすんの？

　あんなに顔蕩けさせちゃってたくせにさぁ」

SV\_ボイスの演奏 EV04\_022 100 100 0 2

\n<若菜>「そんな顔……してないです……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「自分で分かってないわけ？　まあいいや。

　分かんねーなら分かるまでしてやるよ」

\n<陸也>「ほら、さっさと舌出せ。

　あ、手コキも止めんなよ？」

SV\_ボイスの演奏 EV04\_024 100 100 0 2

\n<若菜>「……はい」

SV\_ボイスの停止 2

若菜は恐る恐る舌を伸ばしていく。

それを啄むように、男の唇が迫ってきた。

H2\_脱衣\_キス\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV04\_025 100 100 0 2

\n<若菜>「ちゅ、んちゅ……れろ……」

SV\_ボイスの停止 2

若菜は拙いキスを繰り返しながら、

白く泡立った手で男根を前後に扱き続ける。

\n<陸也>（はぁ、マジでキス手コキ最高だわ……！

　処女のクセにこんなんしてるのコイツくらいっしょ）

SV\_ボイスの演奏 EV04\_026 100 100 0 2

\n<若菜>「んっ……はぁ、ちゅ……れろ、んちゅ……」

SV\_ボイスの停止 2

太もも周りやお尻の周辺を撫でまわされ、

愛撫されているように小さな息を吐く。

SV\_ボイスの演奏 EV04\_029 100 100 0 2

\n<若菜>「あ……んっ、ちゅる……んちゅ、はぁ……」

SV\_ボイスの停止 2

若菜は放心したように口づけを交わしながら、

右手で男根を刺激し続ける。

H2\_脱衣\_キス無\_感じてる

\n<陸也>「あー、イきそ……！

　もっと早くしてくんね？」

SV\_ボイスの演奏 EV04\_030 100 100 0 2

\n<若菜>「えっ……あ、わかりました……」

SV\_ボイスの停止 2

ぐちゅぐちゅと響く音を大きくさせながら、

若菜の手は肉棒を激しく擦り上げていく。

\n<陸也>「ああ……イく！」

H2\_脱衣\_射精\_キス無\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV04\_032 100 100 0 2

\n<若菜>「んんっ！」

SV\_ボイスの停止 2

若菜はきゅっと手をすぼめて精液を受け止める。

手にはべったりと白濁液がこびりついていた。

\n<陸也>「ふぅ……イったイった」

H2\_脱衣\_射精\_キス無\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV04\_033 100 100 0 2

\n<若菜>「…………」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あ、若菜ちゃん。

　今日はそのまま握っててくれていいから」

SV\_ボイスの演奏 EV04\_035 100 100 0 2

\n<若菜>「えっ……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「まだキスしたりないしさ、

　若菜ちゃんだってもっと触って欲しいでしょ？」

H2\_脱衣\_射精\_キス\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV04\_036 100 100 0 2

\n<若菜>「そ、そんなこと……んんむっ！」

SV\_ボイスの停止 2

若菜の口を塞ぐように男は唇を重ねては、

強引に口内に舌を潜り込ませていく。

SV\_ボイスの演奏 EV04\_037 100 100 0 2

\n<若菜>「んっ、んちゅ……んむ、れろ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「っぷは。

　まだまだ終わらせねぇよ。若菜ちゃん？」

H3\_EV05&06

H3\_着衣

保健室の仕切られたベッドの中から、

いっそ獣じみた声が部屋中に響き渡っていた。

SV\_ボイスの演奏 EV05\_001 100 100 0 2

\n<若菜>「んふぁ……！　んんっ、ああっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「なになに、若菜ちゃん？

　そんなによがっちゃって……気持ちいいんだ？」

若菜は仰向けになって足を抱えながら、

男に大事なところの全てをさらけ出していた。

SV\_ボイスの演奏 EV05\_002 100 100 0 2

\n<若菜>「ふあっ……！　ん、んふぁ……んんっ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「若菜ちゃんには手コキで良くしてもらったからさぁ。

　今度はこっちが気持ち良くしてあげねーとな」

カリカリと爪で擦るように、

下着越しに勃起したクリトリスを絶え間なく刺激し続ける。

\n<陸也>「若菜ちゃんの敏感なところここっしょ？

　さっきからすげービクビクしてっからバレバレ」

SV\_ボイスの演奏 EV05\_003 100 100 0 2

\n<若菜>「ああん……！　んっく、んふぅ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「ありゃ、手マンが気持ち良すぎて聞いてねぇな。

　まあ、オナったこともねーなら当然か」

男の挑発じみた言葉に、けれど若菜は返答を返さない。

それほどまでに若菜は切羽詰まっていた。

\n<陸也>「つか、あんだけこの格好するの嫌がってたくせに、

　こんなによがるとか……実はヤってほしかったの？」

SV\_ボイスの演奏 EV05\_004 100 100 0 2

\n<若菜>「んんっ、ふぁ……んっく、んん……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「返事しねぇとか……はいお仕置きー！」

SV\_ボイスの演奏 EV05\_005 100 100 0 2

\n<若菜>「んンふああああああッ！？」

SV\_ボイスの停止 2

男はクリトリスをきゅっと摘まんでみせる。

それだけで、若菜の身体は大きく腰を反らせた。

\n<陸也>「つーか、この体勢マジでエロいわ……

　このアングルで撮るとか、俺って天才じゃね？」

\n<陸也>「おい、シコってる童貞ども！

　俺に感謝しながら抜けよ！」

男はカメラに向かって高らかに言ってみせる。

その言葉にさえ、若菜が反応を示すことはなかった。

\n<陸也>「……反応なくてもつまんねーな。

　おーい、若菜ちゃん起きてー」

SV\_ボイスの演奏 EV05\_006 100 100 0 2

\n<若菜>「んんっ……ふぁ、ん……！」

SV\_ボイスの停止 2

男は若菜の耳元で名前を呼びながら、

秘裂をなぞるように何度も指で擦りあげる。

SV\_ボイスの演奏 EV05\_008 100 100 0 2

\n<若菜>「んあっ……はぁはぁ……せ、先輩……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「お？　やっとお目覚め？

　気持ちいいからって気ィ失わないでよ」

SV\_ボイスの演奏 EV05\_009 100 100 0 2

\n<若菜>「気を失うって……きゃあっ！」

SV\_ボイスの停止 2

若菜はふと意識を取り戻すと、

自分の置かれている状況に叫びにも近い声を上げた。

\n<陸也>「あーはいはい、足閉じないでねー。

　それじゃあ見てる人も萎えるから」

SV\_ボイスの演奏 EV05\_011 100 100 0 2

\n<若菜>「見てる人って……んんっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「ちゃんと足抱えてろよ？

　じゃねーと写真バラ撒くからな。あと気絶しても」

SV\_ボイスの演奏 EV05\_012 100 100 0 2

\n<若菜>「そん……んあぁ……んっく、ふぅん……！」

SV\_ボイスの停止 2

下着越しにピンと勃起したクリトリスに、

撫でて、弾いて、摘まんで、様々な刺激を与える。

SV\_ボイスの演奏 EV05\_013 100 100 0 2

\n<若菜>「そこ……ダメ……んふあ……！

　変な……んんっ、変な感じになっちゃうからぁ……！」

SV\_ボイスの停止 2

クチュクチュとわざと音をたたせながら、

男は若菜の敏感な部分を責め立てる。

\n<陸也>「若菜ちゃん、イきそうなんでしょ？」

SV\_ボイスの演奏 EV05\_015 100 100 0 2

\n<若菜>「ふぅ……んん……イ、イク……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>（このままイっても面白くねーな……

　コイツなら適当なこと吹き込んでもバレねーっしょ）

\n<陸也>「処女の若菜ちゃんは知らねーだろうけど、

　勝手にイクのはマナー違反だからな？」

\n<陸也>「イきそうな時はイってもいいか訊いて、

　オッケーが出てからイクんだからな？」

\n<陸也>「まあ、ビッチは勝手にイクけどさ。

　若菜ちゃんはそんなはしたねー女じゃねぇだろ？」

SV\_ボイスの演奏 EV05\_017 100 100 0 2

\n<若菜>「そ、そうなんですね……分かりました……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>（ちょれーわ！　マジで信じてんじゃね！？

　それじゃあ、さっさとイカせちまうか）

SV\_ボイスの演奏 EV05\_018 100 100 0 2

\n<若菜>「んっくぁ……！　きゅ、急に……激しく……んん！

　せ、せんぱい……待っ……ンンっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV05\_020 100 100 0 2

\n<若菜>「んふぅ……せ、せんぱい……！

　い、イっても……んふぁ！　イってもいいですか……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>（うっわ！　マジで言いやがった！　ウケるー！

　おもしれーから、聞こえねぇフリしとこ）

\n<陸也>「あっ？　なにって？」

SV\_ボイスの演奏 EV05\_021 100 100 0 2

\n<若菜>「あぁん……だ、だから……ンんんッ！？」

SV\_ボイスの停止 2

男の指が強く秘裂に押し込まれ、

下着を越えて秘裂に侵入しそうなほどに深く入り込む。

\n<陸也>「だから？　もっとはっきり言えよ」

SV\_ボイスの演奏 EV05\_022 100 100 0 2

\n<若菜>「ふぅあ……だ、だから、もう……い、イきそうで……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「イきそう？　だから？」

SV\_ボイスの演奏 EV05\_023 100 100 0 2

\n<若菜>「んあっ……だから、イっても……ンふぅ……！

　い、イってもいいで……ンんふあっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

若菜が肝心なところを言おうとする度に、

男は強い刺激を与えて妨害する。

SV\_ボイスの演奏 EV05\_024 100 100 0 2

\n<若菜>「ふぅンん……！　あっ、なんかきちゃう……！

　ダメ……んんっ、まだ言えてないのに……きちゃう……！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV05\_025 100 100 0 2

\n<若菜>「んふぁっ……イク！　イっちゃう……！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV05\_026 100 100 0 2

\n<若菜>「イクぅううううううううううううッ！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV05\_027 100 100 0 2

\n<若菜>「ンはぁあああああああああッ！」

SV\_ボイスの停止 2

若菜の腰が一際大きく震えると、

ビクビクと何度も痙攣しながら秘部をひくひくさせる。

SV\_ボイスの演奏 EV05\_028 100 100 0 2

\n<若菜>「んはぁ……はぁ……んん！」

SV\_ボイスの停止 2

未だ秘部に残った余韻に若菜は声を漏らす。

その顔は羞恥で真っ赤に染まっていた。

\n<陸也>「おいおい、若菜ちゃんさぁ。

　イク前はちゃんと言えって言っただろ？」

SV\_ボイスの演奏 EV05\_032 100 100 0 2

\n<若菜>「ご、ごめんなさい……

　その、変な感じで……ちゃんと言えなくて……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「変な感じ……？

　気持ち良すぎて言えなかっただけっしょ？」

SV\_ボイスの演奏 EV05\_033 100 100 0 2

\n<若菜>「そ、それは……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>（まだ恥ずかしがって認められねーのか。

　じゃあ、もっと追い込むか）

\n<陸也>「マナー守らずイったんだからさぁ。

　ちゃんと謝るのが筋なんじゃね？」

SV\_ボイスの演奏 EV05\_034 100 100 0 2

\n<若菜>「はい……ごめんなさい……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「そうじゃなくてさ。

　理由となんで謝ってるかも言わないと」

SV\_ボイスの演奏 EV05\_035 100 100 0 2

\n<若菜>「き、気持ち良すぎて……イってもいいか訊く前に、

　イっちゃって……ごめんなさい」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>（マジで言ってやんの……！

　ヤバ……真面目な顔してんのに笑っちまいそー！）

\n<陸也>「次からは気を付けろよ？」

SV\_ボイスの演奏 EV05\_036 100 100 0 2

\n<若菜>「はい……」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV05\_038 100 100 0 2

\n<若菜>「先輩……

　どうしたら……こんなこと止めてくれるんですか？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「なに？　止めたかったの？

　てっきり若菜ちゃんも喜んでるのかと」

SV\_ボイスの演奏 EV05\_039 100 100 0 2

\n<若菜>「……そんなことないです」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あー、じゃあ若菜ちゃんがセックスしてくれたら、

　あの写真消してやるよ」

SV\_ボイスの演奏 EV05\_040 100 100 0 2

\n<若菜>「そんな……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「一回セックスして、後腐れなくバイバイってことで。

　別にいいっしょ？　そんだけで消してあげるんだから」

\n<陸也>「まあ、でも若菜ちゃんは気に入ると思うけどなぁ」

SV\_ボイスの演奏 EV05\_041 100 100 0 2

\n<若菜>「何にですか……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「セックスだよ、セックス。

　手マンなんかより、遥かに気持ちいいぜ？」

SV\_ボイスの演奏 EV05\_042 100 100 0 2

\n<若菜>「そんなこと……絶対にないです……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あっそ。まあ、考えといてよ。

　それまでは、セックス以外で遊ぶからさ」

SV\_ボイスの演奏 EV05\_045 100 100 0 2

\n<若菜>「これよりも……気持ちいい……」

SV\_ボイスの停止 2

H3\_EV05&06

H3\_着衣

SV\_ボイスの演奏 EV06\_001 100 100 0 2

\n<若菜>「ふあっ……！　ん、んふぁ……んんっ！」

SV\_ボイスの停止 2

若菜は大きく足を拡げた体勢のまま、

秘部をされるがままに弄ばれていた。

\n<陸也>「それにしても、親が留守だからって、

　男連れ込むなんて。若菜ちゃんもやるねぇ」

SV\_ボイスの演奏 EV06\_002 100 100 0 2

\n<若菜>「そ、そんなんじゃ……んんっ、ないです……」

SV\_ボイスの停止 2

若菜は声を抑えようと必死になるも、

慣れない快感の波に止められないでいた。

SV\_ボイスの演奏 EV06\_003 100 100 0 2

\n<若菜>「へ、変な場所ですると……んあっ……

　だ、誰かにバレちゃうかもしれないから……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「だからって、家に連れ込むかフツー。

　部屋でヤんの期待してたんでしょ？」

SV\_ボイスの演奏 EV06\_004 100 100 0 2

\n<若菜>「そんなこと……あっ、んんっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「どおりでよく喘いじゃうわけだ。

　ここなら声出しても平気だもんな……！」

男は秘部の入り口を片手で擦ったまま、

下着のサイドをゆっくりと引っ張っていく。

SV\_ボイスの演奏 EV06\_005 100 100 0 2

\n<若菜>「ひゃあ……！　せ、せんぱい……それは……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「可愛いパンツ汚れちゃうと悪いっしょ？

　それに、こっちのほうが気持ち良くさせれるしさぁ」

H3\_脱衣

男は若菜の足からパンツを引き抜いていく。

パックリと口を開いた秘部が露わになった。

\n<陸也>（ヤバ……近くで見るとマジ名器だわ……

　早くぶち犯してぇ……！）

SV\_ボイスの演奏 EV06\_006 100 100 0 2

\n<若菜>「ううっ……そんなに見ないでください……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「マジ、エロいマンコしてるわー！

　こんなヒクヒクさせてさぁ、誘ってんの？」

SV\_ボイスの演奏 EV06\_007 100 100 0 2

\n<若菜>「そんなこと……ンんふぁあああ！？」

SV\_ボイスの停止 2

すぶり。若菜の秘裂を割って入っていくように、

男の中指が異物を知らない奥へと侵入していく。

\n<陸也>「マンコの中、とろとろで温けぇ……！

　俺の為に温めといてくれた感じ？」

SV\_ボイスの演奏 EV06\_008 100 100 0 2

\n<若菜>「んっく……！

　わ、わたしのお股の中に……指が……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あ？　オナニーもしたことねーんだっけ？

　若菜ちゃんの初めていっぱい奪っちゃって悪ィなぁ」

\n<陸也>「つか、そのお股って言い方なに？

　おまんこだろ？　さんはい、おまんこ」

SV\_ボイスの演奏 EV06\_009 100 100 0 2

\n<若菜>「お、おまんこ……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「はい、よく言えました。

　ご褒美におまんこ気持ち良くしてあげるから」

SV\_ボイスの演奏 EV06\_010 100 100 0 2

\n<若菜>「えっ、ちょっと、待っ――

　ンあっ、ンっくうぅ……！」

SV\_ボイスの停止 2

男は突き立てた中指を上下に動かして、

蜜壺をかき回すように奥を責め立てる。

SV\_ボイスの演奏 EV06\_011 100 100 0 2

\n<若菜>「んふぁ、ああぅ……！

　あっ、これ……ダメです……んんくぁ……！」

SV\_ボイスの停止 2

くちゅくちゅ、という水音をわざと立てて、

耳からでさえ若菜の興奮を底上げしていく。

\n<陸也>「どう、若菜ちゃん？

　パンツ越しより気持ちいいっしょ？」

SV\_ボイスの演奏 EV06\_012 100 100 0 2

\n<若菜>「ンんはぁっ……！　ふぁんんっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV06\_015 100 100 0 2

\n<若菜>「はうっ、んんっ……ふぁああっ……！

　これ……んあ、っふぅ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「ほら、若菜ちゃん。

　よがってばっかじゃなくて、舌出して」

SV\_ボイスの演奏 EV06\_016 100 100 0 2

\n<若菜>「んんっ……えっ、ほ、ほうへふは……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「そうそう。ほら、もっと突き出して」

H3\_脱衣\_キス

SV\_ボイスの演奏 EV06\_017 100 100 0 2

\n<若菜>「んっ……んちゅ、れろ……んんっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

若菜の伸ばした舌に、男の舌が絡みつく。

若菜は蕩けるような瞳でそれを受け入れた。

SV\_ボイスの演奏 EV06\_020 100 100 0 2

\n<若菜>「ちゅぶ、んちゅ……ちゅぱぁ……んちゅ……」

SV\_ボイスの停止 2

H3\_脱衣

\n<陸也>「……っぷあ、若菜ちゃん上手になったじゃん。

　そんなにキス好きなの？　エロいね」

H3\_脱衣\_キス

SV\_ボイスの演奏 EV06\_021 100 100 0 2

\n<若菜>「そ、そんなこと……んっ、ちゅ……れろ……」

SV\_ボイスの停止 2

H3\_脱衣

\n<陸也>「隠すなって。若菜ちゃん、舌伸ばして。

　そうそう、それじゃあ受け取ってね」

SV\_ボイスの演奏 EV06\_022 100 100 0 2

\n<若菜>「えっ、受け取るって……なにを……」

SV\_ボイスの停止 2

H3\_脱衣\_キス

若菜が舌を伸ばして恐々としていると、

男はくちゅくちゅと唾液を若菜の舌へと垂らした。

SV\_ボイスの演奏 EV06\_023 100 100 0 2

\n<若菜>「ん、んんっ……こくん……っぷぁ」

SV\_ボイスの停止 2

若菜は戸惑いつつもそれを口に含むと、

そのまま喉を鳴らして飲み込んだ。

\n<陸也>（うっわ……何も言ってねぇのに飲んだよ！

　やっぱりこの女、変態確定だわ）

H3\_脱衣

\n<陸也>「どう？　唾液美味しいっしょ？」

SV\_ボイスの演奏 EV06\_024 100 100 0 2

\n<若菜>「美味しくなんか……ないです……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「俺は好きだけどなぁ。若菜ちゃんの唾液」

H3\_脱衣\_キス

SV\_ボイスの演奏 EV06\_025 100 100 0 2

\n<若菜>「そんな……ちゅ、ちゅぶ、れろ……んちゅる……」

SV\_ボイスの停止 2

最早、抵抗もなく若菜は何度も口づけを交わす。

それは唾液を混ぜ合わせる淫靡なキスだった。

H3\_脱衣

\n<陸也>「それじゃあ、マンコもぐちょぐちょだし、

　若菜ちゃんもイキたそうだからイカせるか……」

SV\_ボイスの演奏 EV06\_027 100 100 0 2

\n<若菜>「えっ、なんで……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「そんなエロい目で懇願されたら分かるっての。

　あ、本気でやるけど失神すんなよ？」

SV\_ボイスの演奏 EV06\_028 100 100 0 2

\n<若菜>「失神って……ンんふああああッ！？」

SV\_ボイスの停止 2

男の指が今までよりも速く若菜の膣をかき回す。

途端に若菜の腰が大きく反りかえった。

SV\_ボイスの演奏 EV06\_029 100 100 0 2

\n<若菜>「ンひゃあっ、なに、これ……ふぅああん！

　ダメ……おかしく……んっくぅ……！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV06\_030 100 100 0 2

\n<若菜>「やだ、これ……んあっ、すごっ……ッ！

　あ、あたま……おかしくなっちゃうぅぅぅ！」

SV\_ボイスの停止 2

若菜が未だ経験したことのない快楽の渦が、

一気に押し寄せて若菜の身体に責めこんでくる。

\n<陸也>「気持ちいいの？

　若菜ちゃん、気持ちいいんだ？」

SV\_ボイスの演奏 EV06\_031 100 100 0 2

\n<若菜>「はぁ、んんっ……キモチイイ……！

　へ、変な感じで……おまんこキモチイよぉ……！」

SV\_ボイスの停止 2

最早、若菜の頭は正常な判断を下せずに、

思ったまま、聞かれたままを正直に口にする。

\n<陸也>（ようやく正直になってきたか。

　この女も、もうちょいで堕ちるな……！）

\n<陸也>「もうイキそうだ……！」

SV\_ボイスの演奏 EV06\_032 100 100 0 2

\n<若菜>「ふぁんん、は、はい……！　い、イキます……！

　んっく、イっちゃいます……ああ、もう……ンんんん！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV06\_033 100 100 0 2

\n<若菜>「ンっくぅうあああああああああ！」

SV\_ボイスの停止 2

若菜は嬌声をあげながら絶頂すると、

ビクッビクッ、と腰を一際大きく反り返させた。

SV\_ボイスの演奏 EV06\_034 100 100 0 2

\n<若菜>「んはぁ……はぁはぁ……んんっ……」

SV\_ボイスの停止 2

若菜は悩ましげな吐息を漏らし、

小刻みに震えながら、残った余韻に悶える。

\n<陸也>「若菜ちゃんさぁ、親はまだ帰ってこないんだろ？

　それじゃあ、まだやってもいいよな？」

SV\_ボイスの演奏 EV06\_035 100 100 0 2

\n<若菜>「はぁはぁ……んっ、はぁ……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「何も言わないって卑怯だなぁ、若菜ちゃん。

　つーか、こんなにヒクヒクさせてバレてないと思ってんの？」

SV\_ボイスの演奏 EV06\_039 100 100 0 2

\n<若菜>「ンふぁ……はぁはぁ……んんあっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

ずぶずぶと焦らすようにゆっくりと、

男は絶頂した秘部に指を出し入れしていく。

\n<陸也>「そんなにエロいこと好きならさぁ、

　早くセックスしちゃおうぜ？　もっと気持ち良くなれるって」

H4\_EV07

H4\_渋々

\n<陸也>「おい、歯立てんなよ」

SV\_ボイスの演奏 EV07\_001 100 100 0 2

\n<若菜>「ん……ふぁ、ふぁい……んちゅ、ちゅぶ……」

SV\_ボイスの停止 2

若菜は一糸まとわぬ姿で男に乗りかかりながら、

肉棒を口いっぱいに頬張っていた。

H4\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV07\_004 100 100 0 2

\n<若菜>「んちゅ、ちゅぶ……んっく、んん……」

SV\_ボイスの停止 2

若菜は口を懸命に動かして肉棒を扱く。

竿は唾液に塗れて、ぐちょぐちょに濡れていた。

\n<陸也>「ホントに若菜ちゃん初めてなの？

　むっちゃエロくしゃぶってるし上手すぎね？」

H4\_渋々

SV\_ボイスの演奏 EV07\_005 100 100 0 2

\n<若菜>「はぁ……そんなこと……ないです……

　んっく、ちゅる……ちゅぱ……んんちゅ……」

SV\_ボイスの停止 2

若菜は一心に男根を咥えこむ。

その姿はいっそ献身的にさえ見えた。

\n<陸也>（もう……すっかりチンコの虜だな。

　あとはこれを自覚させるだけか。チョロかったな）

\n<陸也>「若菜ちゃんの口ん中あったけぇ……

　俺専用ののチンポケースにしたげよっか？」

SV\_ボイスの演奏 EV07\_006 100 100 0 2

\n<若菜>「んじゅる……っぷあ……！

　そんなの……嫌です……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「つか、若菜ちゃん。あんまり拒否ってこなかったね。

　そんなに俺のチンコしゃぶりたかった？」

H4\_照れ

その言葉に若菜の顔は一気の紅潮する。

その表情には焦りにも似た色が浮かんでいた。

SV\_ボイスの演奏 EV07\_007 100 100 0 2

\n<若菜>「ち、ちが……っ！　そんなのじゃないです……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「その割にはちゃんとしゃぶってんじゃん。

　あ、思ったより美味しかった系？」

SV\_ボイスの演奏 EV07\_008 100 100 0 2

\n<若菜>「それ、は……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「まあいいや。それにしても眺め最高！

　やっぱ、しゃぶらせる時は全裸じゃねーとな」

SV\_ボイスの演奏 EV07\_011 100 100 0 2

\n<若菜>「そ、そんなに胸見ないでください……

　わ、わたしが裸になる必要……ないじゃないですか……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「チンコ勃起させる為に決まってるっしょ。

　生でおっぱい当たってると萎えねーわ」

SV\_ボイスの演奏 EV07\_012 100 100 0 2

\n<若菜>「わ、わたしの裸で……おちんちんが……

　んっ、ちゅ、ちゅぱ……んちゅ……」

SV\_ボイスの停止 2

恥ずかしさから逃げるように男根に口づけを交わし、

若菜はそのまま亀頭を口に含んだ。

SV\_ボイスの演奏 EV07\_013 100 100 0 2

\n<若菜>「れろ、んく……ちゅぶ、れろ……ちゅぱ……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>（クソ気持ちいいんだけど、物足りねぇな……

　イクには刺激が弱いんだよな）

\n<陸也>（あー、イラマさせてぇ……！

　けど、下手に怖がらせて逃がすのは得策じゃねぇか）

\n<陸也>（ま、コイツなら順調に堕とせば、

　イラマでもアナルでもなんでもしそうだけどな）

\n<陸也>「なぁ、もっと激しくしてくれね？」

SV\_ボイスの演奏 EV07\_014 100 100 0 2

\n<若菜>「は、激しくって……こ、こんな感じですか……？」

SV\_ボイスの停止 2

H4\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV07\_015 100 100 0 2

\n<若菜>「じゅぶ、んんっく……じゅる、んちゅ、じゅるるるる！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「うおっ……！」

若菜は顔を激しく前後に振りながら、

舌で亀頭も舐めまわして竿全体を刺激していく。

\n<陸也>（急に吸い付きヤベぇだろ……！

　マジで処女か？　娼婦でも乗り移ったんじゃねーの！？）

SV\_ボイスの演奏 EV07\_017 100 100 0 2

\n<若菜>「んじゅる、れろ、んちゅぷぁ、んじゅぼぼ……！」

SV\_ボイスの停止 2

H4\_照れ

SV\_ボイスの演奏 EV07\_018 100 100 0 2

\n<若菜>「こ、これでいいですか……んちゅぶ……

　んっくんっく、じゅる、んちゅぼ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>（分かってたらいくらでも耐えれるけど急にはダメだ……

　ムカつくけどもうイっちまいそうだ……！）

\n<陸也>「あー、もうイキそうだわ……！

　若菜ちゃん、口の中に出すから」

SV\_ボイスの演奏 EV07\_019 100 100 0 2

\n<若菜>「んあっ……く、口の中に出すって……

　そ、それって……精液がわたしの口に……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「当然っしょ。ちゃんと全部飲めよ」

SV\_ボイスの演奏 EV07\_022 100 100 0 2

\n<若菜>「ううっ…………」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「いいからフェラ続けろって」

H4\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV07\_023 100 100 0 2

\n<若菜>「んんっ、ふぁ、ふぁい……

　んじゅぶ、むちゅ、んちゅぶぁ……！」

SV\_ボイスの停止 2

射精間近の膨張した肉棒は、

若菜の口内でビクビクと脈打って絶頂を待つ。

SV\_ボイスの演奏 EV07\_026 100 100 0 2

\n<若菜>「んじゅる、ちゅぶ、ちゅぱぁ……んじゅるるる！」

SV\_ボイスの停止 2

若菜は絶頂の近づいた肉棒を激しく責め立てる。

その刺激に、男根は一際大きく震え上がった。

\n<陸也>「あー、イクわ……！　イク！」

H4\_射精\_驚き

SV\_ボイスの演奏 EV07\_027 100 100 0 2

\n<若菜>「んんんぅうううう！？」

SV\_ボイスの停止 2

若菜の口内に、白濁した液が放出される。

精液は若菜の口を一杯にしてなお溢れてきた。

H4\_射精\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV07\_028 100 100 0 2

\n<若菜>「んっくんっく……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>（うっわ……初フェラでマジ飲んでんじゃん！

　どんだけザー汁好きなんだよ！）

若菜は口の中に残る圭啓したことのない味を、

懸命に喉を鳴らして飲み込んでいく。

H4\_射精\_照れ

SV\_ボイスの演奏 EV07\_031 100 100 0 2

\n<若菜>「んっく……こくん、ぷぁっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「おいおい、溢してんじゃん。

　ちゃんと全部飲めって言ったよな？」

SV\_ボイスの演奏 EV07\_032 100 100 0 2

\n<若菜>「ご、ごめんなさい……

　飲もうとしたんですけど、すごく多くて、その……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>（全部飲もうとしたとか、変態かよ！

　まあ、当然全部飲んでもらうけどな）

\n<陸也>「言い訳はいいから。

　まだ残ってるっしょ？　早く飲んでよ」

\n<陸也>「それと、尿道にも残ってるから。

　ちゃんと吸い出すまでがフェラだかんな」

SV\_ボイスの演奏 EV07\_033 100 100 0 2

\n<若菜>「はい……わかりました……

　んちゅ、じゅる、ちゅぶ……」

SV\_ボイスの停止 2

H4\_射精\_閉じ目

若菜は残った肉棒に残った精液を、

舐めとって、吸い出して、綺麗にしていく。

SV\_ボイスの演奏 EV07\_034 100 100 0 2

\n<若菜>「れろ、んっく……じゅるるるる……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「はぁ……処女のお掃除フェラきもちー！

　残さずザーメン飲みきれよ」

H4\_射精\_照れ

言葉では拒絶の言葉を口にする若菜は、

けれど肉棒を口から離すことなく精液を拭き取っていった。

立ち絵\_EV08

立ち絵\_裸\_困り

\n<陸也>「なあ、そろそろ決めてくんね？」

SV\_ボイスの演奏 EV08\_001 100 100 0 2

\n<若菜>「決めるって……何をですか……？」

SV\_ボイスの停止 2

若菜は当然のように男の前で素肌を晒しながら、

おどおどとした様子で男の言葉に耳を傾ける。

\n<陸也>「決まってんだろ。セックスだよ、セックス。

　いい加減、写真隠すのもメンドーになってきたしさぁ」

SV\_ボイスの演奏 EV08\_002 100 100 0 2

\n<若菜>「そ、それは……

　でも……結婚もしてないのに、セックスなんて……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「つか、ラブホに来ておいてそれ言う？」

SV\_ボイスの演奏 EV08\_003 100 100 0 2

\n<若菜>「そ、それは……！　先輩が、無理やり……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「若菜ちゃんの考え方は古ぃんだって。

　今時、どんな女もパコパコハメまくってるっての」

\n<陸也>「それに、若菜ちゃんもハマると思うけどなぁ。

　今までヤったどんなことより気持ちいいからさぁ」

SV\_ボイスの演奏 EV08\_004 100 100 0 2

\n<若菜>「どんなことより……気持ちいい……」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV08\_007 100 100 0 2

\n<若菜>「本当に……その……せ、セックスをしたら、

　写真を消してくれるんですよね……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>（その言葉だけでヤる気満々だって分かるっての。

　まあ、一応退けねーようにしとくか）

\n<陸也>「当然っしょ。なんなら、今消したげよっか？」

SV\_ボイスの演奏 EV08\_008 100 100 0 2

\n<若菜>「えっ……？」

SV\_ボイスの停止 2

男は若菜にスマホのアルバムを見せながら、

若菜の裸が映った写真をその場で消去した。

\n<陸也>「ほら、消去完了っと。

　これでいいんでしょ？」

\n<陸也>（ガチで嫌なら、ヤる前に消してくれたら、

　そのままラッキーってとんずらこくけどな）

\n<陸也>（まあ、コイツに限ってそれはねぇな。

　とっくにメスの顔してんの気付いてねぇのか？）

SV\_ボイスの演奏 EV08\_011 100 100 0 2

\n<若菜>「わ、わかりました……

　一回だけ……一回だけセックスすればいいんですよね……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「そうそう。それじゃあヤろっか。

　まずはマンコに挿れる準備してよ」

SV\_ボイスの演奏 EV08\_012 100 100 0 2

\n<若菜>「それって……どうすれば……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「分かってんだろ？

　しゃぶってチンコ立たせるんだよ」

SV\_ボイスの演奏 EV08\_013 100 100 0 2

\n<若菜>「は、はい……」

SV\_ボイスの停止 2

若菜は男のズボンをおもむろに下ろすと、

露わになった肉棒をゆっくりと口に咥えこんだ。

H4\_EV13

H4\_とろけ顔

SV\_ボイスの演奏 EV08\_015 100 100 0 2

\n<若菜>「ちゅる、ちゅぶ、んちゅ……

　んっ、おっきくなってきた……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「マジで若菜ちゃんのフェラ良いわ……

　なんなら、このまま出していい？」

SV\_ボイスの演奏 EV08\_016 100 100 0 2

\n<若菜>「んっく、むちゅ……んぷぁ……

　そんなの、ダメです……んちゅぶ……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「冗談冗談。本気にしちゃった？

　そんな勿体ないことするわけないっしょ」

SV\_ボイスの演奏 EV08\_017 100 100 0 2

\n<若菜>「んっ、ちゅぶ……もったいない……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「溜まった精液は全部さぁ、

　若菜ちゃんの中に注ぐに決まってるっしょ？」

H4\_照れ

H4\_とろけ顔

SV\_ボイスの演奏 EV08\_018 100 100 0 2

\n<若菜>「……んっく、じゅる、ちゅぶ……

　れろ、んぷぁ、ちゅるる……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「それじゃあ、フェラはこれくらいにして、

　セックスしちゃおうか、若菜ちゃん」

SV\_ボイスの演奏 EV08\_021 100 100 0 2

\n<若菜>「んちゅぷぁ……は、はい……」

SV\_ボイスの停止 2

若菜は一糸纏わぬまま恐る恐るベッドに横たわる。

男はその光景を目に焼き付けながら、男根をそそり立てる。

\n<陸也>（それじゃあ、処女マンコいただきまーす！）

H5\_EV08&15

H5\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV08\_023 100 100 0 2

\n<若菜>「ンんっ、んんんんっふぅ……！」

SV\_ボイスの停止 2

みちみちと秘裂を押し広げていくように、

肉棒が若菜の処女膜を貫いて膣内へと侵入していく。

\n<陸也>「うお……処女マンコきっつ……！

　そのくせ中トロトロでマジヤベェわ……！」

\n<陸也>「どんだけ名器なんだっつーの。」

　こんなん挿れただけで出ちまいそうだわ……！」

H5\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV08\_025 100 100 0 2

\n<若菜>「はぁはぁ……そ、そんなこと言わないで……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「それじゃあ……動くよっと！」

H5\_放心

SV\_ボイスの演奏 EV08\_028 100 100 0 2

\n<若菜>「んんお゛っ……！？」

SV\_ボイスの停止 2

ずぶり、と容赦なく秘部に腰が打ち付けられる。

その衝撃と快楽に若菜は低い声を上げた。

\n<陸也>「どう！　若菜ちゃん！

　これが若菜ちゃんのしたがってたセックスだよ！」

SV\_ボイスの演奏 EV08\_031 100 100 0 2

\n<若菜>「んふぁあッ……！　んっくぅ、んふぁあああ！」

SV\_ボイスの停止 2

パンパンとリズミカルに男は腰を打ち付ける。

その度に、若菜は響くような嬌声を漏らした。

\n<陸也>「さっきまで処女だったくせに……

　いきなり感じてるとか変態すぎだろ……ッ！」

SV\_ボイスの演奏 EV08\_032 100 100 0 2

\n<若菜>「ンっふぁあッ……！

　そんっ、なぁ……いきなり、激し……んんっ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あれ？　優しくしてほしかったの？

　激しいほうが気持ちいいんだけど？」

SV\_ボイスの演奏 EV08\_033 100 100 0 2

\n<若菜>「はぁんんっ、で、でも……

　わ、わたし……初めてなのに……んっくうぅ！」

SV\_ボイスの停止 2

H5\_閉じ目

\n<陸也>（このマンコの気持ち良さヤベェだろ……！

　今までで断トツの名器だわ……！）

\n<陸也>（こんなん俺でも長く保たねぇわ……

　ま、何回戦もヤればいいか）

男は若菜の敏感なポイントを探るように、

突く部分を変えながら何度も出し入れを繰り返す。

SV\_ボイスの演奏 EV08\_035 100 100 0 2

\n<若菜>「んふぁ、そ、そこ……ダメ……んんあぁぅ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「ダメってことは、ここを責めて欲しいってことね」

SV\_ボイスの演奏 EV08\_036 100 100 0 2

\n<若菜>「んぁっ、ちが、ンんんっ……！

　そこ、気持ち良すぎるからぁ……ダメ……んんぁ！」

SV\_ボイスの停止 2

見つけた性感帯を男は容赦なく責め立てる。

そのたびに、若菜は身体を揺らして興奮を露わにする。

\n<陸也>「ねぇ、若菜ちゃん。写真撮っていいよね？」

H5\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV08\_037 100 100 0 2

\n<若菜>「んっ、ふぁ……え、えっ……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「今の若菜ちゃんスゲェエロいからさぁ。

　どうしても撮りたいんだよね」

SV\_ボイスの演奏 EV08\_038 100 100 0 2

\n<若菜>「そ、それは……んっ、あっんんっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV08\_041 100 100 0 2

\n<若菜>「……ふぅっ、んんっ……んはぁ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「何も言わないってことは、

　してもいいって受け取っちゃうけどいいの？」

H5\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV08\_042 100 100 0 2

\n<若菜>「はぁ……んんっく、っあぁ、んんぅ……！」

SV\_ボイスの停止 2

若菜はわざとらしく嬌声だけをあげる。

その姿に男はニヤリと口角を釣り上げた。

\n<陸也>「ホントに、若菜ちゃんは卑怯だね。

　まあ、そんなところも可愛いんだけどさッ！」

SV\_ボイスの演奏 EV08\_043 100 100 0 2

\n<若菜>「ンんんぅッ……！　はぁ、んんっ……んっ！」

SV\_ボイスの停止 2

男は激しさを増して腰を動かす。

それは絶頂を迎える寸前である合図だった。

\n<陸也>「あー、もうイキそうだわ……！

　若菜ちゃん、中に出すから！」

H5\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV08\_044 100 100 0 2

\n<若菜>「んぁっ……えっ……？　そ、それはダメです……！

　そんなことしたら、あ、赤ちゃんが……ンんんっ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「何言ってんの！

　中出しが一番気持ちいいんだって、マジで！」

SV\_ボイスの演奏 EV08\_045 100 100 0 2

\n<若菜>「んっ、ふぅんん……！

　い、いちばん……きもちいい……んふぁっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「ここまでしたんだからさぁ……

　一番気持ちいいの味わわないと損だって！」

SV\_ボイスの演奏 EV08\_046 100 100 0 2

\n<若菜>「それ、は……ンんんぁ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「それじゃあ、聞くけどさぁ……

　中出ししていい？　ダメならちゃんと言ってね」

SV\_ボイスの演奏 EV08\_047 100 100 0 2

\n<若菜>「そ、そんな……っふあっ、んんっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あー、もうマジでイキそうだわ……！」

SV\_ボイスの演奏 EV08\_050 100 100 0 2

\n<若菜>「んはぁ、んんっ、ああんっ……んっくぅう！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>（中出し許可ゲット。

　それじゃあ、遠慮なくマンコに子種ぶちまけるか！）

\n<陸也>「中出しするぞ……！　あー、出る……！」

H5\_射精\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV08\_051 100 100 0 2

\n<若菜>「ンんっふぅぁあああああああ！」

SV\_ボイスの停止 2

ビクビクと痙攣する若菜の膣内に、

逆流するほどの精液が勢いよく流し込まれる。

SV\_ボイスの演奏 EV08\_053 100 100 0 2

\n<若菜>「んふぁ……はぁはぁ……んっ、はぁはぁ……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「ふぅ……出した出した……」

男は最後の一滴まで精液を出し尽くしても、

なお若菜と繋がったままでいた。

H5\_射精\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV08\_056 100 100 0 2

\n<若菜>「んっ、あの、なんで……

　お、おちんちん抜かないんですか……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「は？　まだヤるからに決まってんだろ？

　若菜ちゃんだって一回で満足なんかしてねーっしょ？」

SV\_ボイスの演奏 EV08\_057 100 100 0 2

\n<若菜>「えっ……で、でも……一回だけって……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「じゃあホントにこれで止めていいんだ？

　こんなにマンコでチンコ締め付けてきてんのにさぁ」

男の言葉に若菜の顔が耳まで真っ赤に染まる。

その実、若菜の膣内はきゅうっと竿全体を包んでいた。

SV\_ボイスの演奏 EV08\_058 100 100 0 2

\n<若菜>「そ、そんなこと……わたしは……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「いい加減さぁ、正直になっちゃえって。

　もっとハメて欲しくてたまんねぇんだろ？」

SV\_ボイスの演奏 EV08\_059 100 100 0 2

\n<若菜>「そ、そんなこと……ないです……」

SV\_ボイスの停止 2

H6\_EV09

H6\_閉じ目

若菜の部屋中にパンパンと腰を打ち付ける音と、

甲高い嬌声と吐息が響き渡っていた。

SV\_ボイスの演奏 EV09\_001 100 100 0 2

\n<若菜>「ふあっ、んんっ……んふぅう……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「若菜ちゃんって部屋でヤるとさぁ、

　すごく良い声で鳴いてくれるよなッ！」

SV\_ボイスの演奏 EV09\_002 100 100 0 2

\n<若菜>「そ、そんなこと……なぁ、んんっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「そんな声で言われたって説得力ねぇってーの」

SV\_ボイスの演奏 EV09\_003 100 100 0 2

\n<若菜>「んひゃあ、んんっく……んふぁ、んああっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

男は容赦のない突きで若菜の秘部を抉っていく。

かき回された蜜壺は白く濁った液に塗れていた。

\n<陸也>「そういやさぁ、この前は正常位で今日はバックじゃん？

　若菜ちゃんはどっちが好きなの？」

H6\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV09\_004 100 100 0 2

\n<若菜>「んんっ、そ、そんなの……

　あんぅぅ……分かりません……んあっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>（分かんねぇわけねぇだろ。

　前の時よりこんなにマンコ締めてくるくせによ！）

\n<陸也>「ま、俺もどっちでもいいけどね。

　この極上マンコにハメれればさッ！」

H6\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV09\_007 100 100 0 2

\n<若菜>「ンんんぅううッ！　んっ、んんっ……ふぁっ！」

SV\_ボイスの停止 2

　若菜はさらに喘ぎ声を大きく響かせる。

　その声にこそ、若菜の本心が露わになっていた。

\n<陸也>「このトロマンと一緒にいてセックスしてないとか、

　ハルタくんだっけ？　ソイツさ、ホモなんじゃね？」

H6\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV09\_010 100 100 0 2

\n<若菜>「あっ、んふぁ、んんっ……は、ハルタ……？」

SV\_ボイスの停止 2

若菜は想像を逞しくさせながら、

愛液を洪水のように垂らしながら肉棒を咥えこむ。

\n<陸也>「こんなに愛液出しちゃってさぁ。

　そんなにバックで興奮してんの？」

H6\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV09\_014 100 100 0 2

\n<若菜>「ちがっ……そんなんじゃ、んんっ、あんん……ッ！」

SV\_ボイスの停止 2

愛液はローションの役目を果たし、

肉棒のピストンをさらに加速させていく。

SV\_ボイスの演奏 EV09\_015 100 100 0 2

\n<若菜>「んんっ、そ、そんな早くしちゃ……

　だ、ダメ……んあっ、お、おかしくなっちゃ……んんっ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「えー、じゃあおかしくなっちゃおっか」

H6\_だらしない

SV\_ボイスの演奏 EV09\_016 100 100 0 2

\n<若菜>「えっ……ダメ、そんな……ンんんふぁぁあッ！？

　んんっく、んんぅうっ……ッ！」

SV\_ボイスの停止 2

男は執拗に同じ部分だけを突き続ける。

そこは若菜が一等身体をくねらせる敏感なポイントだった。

\n<陸也>「若菜ちゃん、ここが気持ちいいんでしょ？」

SV\_ボイスの演奏 EV09\_017 100 100 0 2

\n<若菜>「ンんんぅ……！　そ、そんなの……ああぅうッ……！

　し、知らないです……ふぁ、んっくぅ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「それじゃあ分かるまで教え込んであげるよ。

　ま、若菜ちゃんは全身性感帯だけどね」

SV\_ボイスの演奏 EV09\_019 100 100 0 2

\n<若菜>「ンふぁ……！？」

SV\_ボイスの停止 2

男が軽くお尻の表面を撫で上げただけで、

若菜は肩をびくりと震わせて快感に声を上げる。

H6\_閉じ目

\n<陸也>（ケツ触っただけで感じすぎだっての！

　急にマンコ締めやがったから、もうイキそうだわ……）

\n<陸也>「あー、そろそろ出そうだわ。

　若菜ちゃん、今回も中に出すけどいいよね？」

\n<陸也>（一回中出し許した女ってのは、

　もう何回中出ししようと何も言わねぇんだよね）

\n<陸也>（自分だけは孕まねぇとでも思ってんのかね？

　こちとら孕まるつもりで種付けしてんのにさぁ！）

SV\_ボイスの演奏 EV09\_021 100 100 0 2

\n<若菜>「んっ……んんっ……」

SV\_ボイスの停止 2

H6\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV09\_025 100 100 0 2

\n<若菜>「んっ、ふぅぁ……す、好きにしてください……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「そ。じゃあ、好きに種付けするわ」

男はフィニッシュを迎えるために、

腰の打ちつける速度をぐんぐん加速させていく。

SV\_ボイスの演奏 EV09\_026 100 100 0 2

\n<若菜>「あぁんん……！　んっく、んうぅう、ふぁっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「若菜ちゃん……子宮めがけて出してやるよ！」

SV\_ボイスの演奏 EV09\_027 100 100 0 2

\n<若菜>「んっくぅ、んふぁんん、あふぁあっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あー、出る出る……ううッ！」

H6\_射精\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV09\_028 100 100 0 2

\n<若菜>「ンんふぅぁあああああああ！」

SV\_ボイスの停止 2

一番奥へと亀頭を押し付けながら、

男は膣内いっぱいに精液を放出させる。

H6\_射精\_喜んでる

SV\_ボイスの演奏 EV09\_030 100 100 0 2

\n<若菜>「はぁはぁ……んんっ、気持ちよか――」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「へぇ、若菜ちゃん。気持ち良かったんだ？」

若菜がポロリと溢した言葉を聞き逃さず、

男は煽り立てるように言ってみせる。

H6\_射精\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV09\_031 100 100 0 2

\n<若菜>「ちがっ……気持ち良くなんか……ない、です……

　わたしはもう……こんな、こと……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「もうセックスなんかしたくないって？」

SV\_ボイスの演奏 EV09\_032 100 100 0 2

\n<若菜>「…………」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「じゃあ、若菜ちゃんが『もうセックスしたくないです』

　ってちゃんと言えたらセックスするの止めるわ」

SV\_ボイスの演奏 EV09\_033 100 100 0 2

\n<若菜>「絶対に、嘘ですよね……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「嘘じゃねぇって。マジマジ大マジ。

　俺だって別に脅してまでヤリたくなんかねーって」

\n<陸也>（こんな名器ならいくらでも脅してヤリてぇけどな）

SV\_ボイスの演奏 EV09\_034 100 100 0 2

\n<若菜>「……そんなの絶対嘘です。

　先輩は嘘つきだから……だから、言いません……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「……そっかぁ。若菜ちゃんは正直だねぇ。

　じゃあ、若菜ちゃんが言うまで遠慮なくヤリまくるわ」

H8\_EV10

H8\_目を逸らす

夏休み中の静まり返った廊下の用具室から、

けれど学び舎とは思えない淫靡な声が漏れていた。

SV\_ボイスの演奏 EV10\_001 100 100 0 2

\n<若菜>「んっくぅ、ふぁ、んんっ……！

　せ、先輩……こんなところでなんて……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「そんなこと言って興奮してるんでしょ？

　こんなにマンコとろとろにしちゃってさぁ」

SV\_ボイスの演奏 EV10\_002 100 100 0 2

\n<若菜>「ちがっ、それは……ンんんっ……！

　先輩の……お、おちんちんが……ふぁ、んぅ……！」

SV\_ボイスの停止 2

若菜は立ったまま足を大きく広げて、

壁に寄り掛かるようにして膣いっぱいに肉棒を咥えこむ。

\n<陸也>「つか、この体勢マジでヤベェわ……！

　マンコ締まりすぎてチンコ持ってかれるわ！」

H8\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV10\_005 100 100 0 2

\n<若菜>「んふぅ、んっくぅ……！

　そんな、こと……んあっ、言わないでぇ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「なに言ってんだよ。

　こんなにマンコ喜んでんのにさぁッ！」

SV\_ボイスの演奏 EV10\_006 100 100 0 2

\n<若菜>「んふああああッ、はぁ……奥、ダメ……！

　そんなとこ、突いちゃ……ひゃぁっ、んんっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

男は若菜の太ももを抱えながら、

奥まで抉るようなピストンで膣内を責める。

\n<陸也>「若菜ちゃんはこの体勢どうなの？

　まあ、聞くまでもないけどね」

SV\_ボイスの演奏 EV10\_007 100 100 0 2

\n<若菜>「ンんんぅう……！　はぁ、こ、こんなの……

　つ、疲れるだけで、気持ち良くなんか……ひゃあん！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「その割には愛液ドバドバ出てるよ。

　あーあ、床までびしょびしょだわ」

SV\_ボイスの演奏 EV10\_008 100 100 0 2

\n<若菜>「そ、それは……

　た、ただの……生理現しょ……う゛うッんん……！？」

SV\_ボイスの停止 2

膣奥まで突き刺さった肉棒は、

浅く、けれど深い部分をいじめるように前後する。

SV\_ボイスの演奏 EV10\_009 100 100 0 2

\n<若菜>「なに、これ……やめっ……ンンんっ……！

　そんなぁ、奥ばっか……んふぁぅう！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV10\_011 100 100 0 2

\n<若菜>「んふぁ、せ、先輩……わ、わたし……

　も、もうイっちゃいそうです……んんっくう……！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV10\_012 100 100 0 2

\n<若菜>「だ、だから、その……ああっ、んんっ……！

　い、イっても……んひゃあ！　い、いいですか……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>（マジで言ってやがるのガチでウケるな！

　折角言ってくれたんだから、サービスしてやらねぇと）

\n<陸也>「しゃーねーなぁ。

　それじゃあ、イキやすいようにしてやるよッ！」

SV\_ボイスの演奏 EV10\_013 100 100 0 2

\n<若菜>「えっ……？　そ、そんな……今のままでじゅうぶ――」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV10\_014 100 100 0 2

\n<若菜>「ンんんぅ……！」

SV\_ボイスの停止 2

男は近づいた若菜の絶頂を迎えるために、

ピストンの速度を早くして膣内に刺激を与える。

SV\_ボイスの演奏 EV10\_015 100 100 0 2

\n<若菜>「ひゃあ、んんっ、ああっ……！

　こ、これ……すぐ、イっちゃ……ンンぅぅ！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV10\_016 100 100 0 2

\n<若菜>「あっ、やぁ、ダメ……ンふあぁ……！

　もう、我慢できない……い、イキます……イっちゃ……！」

SV\_ボイスの停止 2

H8\_だらしない

SV\_ボイスの演奏 EV10\_017 100 100 0 2

\n<若菜>「ンんふぁああああああああ！」

SV\_ボイスの停止 2

若菜の腰が大きく震えて絶頂へと至る。

その目は虚ろに、けれど満足そうな表情を浮かべていた。

SV\_ボイスの演奏 EV10\_018 100 100 0 2

\n<若菜>「はぁ……はぁはぁ……ンんっく、ひゃあああッ！？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「なに満足そうにしてんだよッ！」

若菜が絶頂を迎えたというのに、

男のピストンは止まることなく若菜の秘部をかき回す。

H8\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV10\_019 100 100 0 2

\n<若菜>「せ、先輩……イった……イキましたから……

　だ、だから……動くの、やめ……ンんんっ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「は？　まだ俺がイってねーんだけど？」

SV\_ボイスの演奏 EV10\_020 100 100 0 2

\n<若菜>「で、でも……おまんこが……び、敏感すぎて……！

　これじゃあ……んあっ、っくう……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「若菜ちゃん感じすぎっしょ！

　すげぇエロい顔してるよ？」

SV\_ボイスの演奏 EV10\_021 100 100 0 2

\n<若菜>「そんなっ、かお……んんふぁっ……

　し、してない……です……んんっく、うぅんんっ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「なに言ってんの。そこに鏡あるっしょ？

　そこに映ってる自分の顔見て見ろよ」

SV\_ボイスの演奏 EV10\_022 100 100 0 2

\n<若菜>「あっ、んんっ……！　ふぁぅ……えっ……？」

SV\_ボイスの停止 2

若菜は鏡に映った自分の姿を目に映す。

そこには快楽に表情を歪めた自分自身が映っていた。

\n<陸也>「チンコ入れられてる時の若菜ちゃん、

　すごい表情してるだろ？」

H8\_だらしない

SV\_ボイスの演奏 EV10\_025 100 100 0 2

\n<若菜>「んっ、んんぅ、っくぅあああッ……！」

SV\_ボイスの停止 2

性行為に酔っている自分の姿を見た若菜は、

その姿に寄っていくように快感が深まっていく。

\n<陸也>「なになに、若菜ちゃん？

　エロい自分の姿見たらエロい気分になっちゃった？」

SV\_ボイスの演奏 EV10\_026 100 100 0 2

\n<若菜>「あっ、んはぁ、んんぅ……！　っくうぅ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「その気持ち分かるわぁ～！

　俺も毎回エロくさせられて困ってんだよねッ！」

SV\_ボイスの演奏 EV10\_027 100 100 0 2

\n<若菜>「お゛ッ！　おっ、ンンッ……ふぐぅうう！」

SV\_ボイスの停止 2

一等深くまで突き刺される肉棒に、

若菜は低い声で鳴きながら秘部をぐっしょりと濡らす。

\n<陸也>「あー、そろそろ限界だわ……

　若菜ちゃん相手だとマジすぐイキそうになるわ」

\n<陸也>「それじゃあ、若菜ちゃん。

　今日も中に出すけど……って聞いてねぇな」

SV\_ボイスの演奏 EV10\_028 100 100 0 2

\n<若菜>「んお゛っ、んぐぅう、ふぅ……んふぁあ……！」

SV\_ボイスの停止 2

絶頂を迎えて感覚が鋭くなった秘部を突かれ続け、

若菜の意識は快楽の渦に飲み込まれていた。

\n<陸也>「まあ、いいや。嫌がっても中出しするし。

　中出ししねぇセックスって意味ねぇってのッ！」

SV\_ボイスの演奏 EV10\_029 100 100 0 2

\n<若菜>「ンんふぁあ……！」

SV\_ボイスの停止 2

男はラストスパートをかけるように腰の動きを速める。

それに合わせて若菜の声も大きくなっていく。

\n<陸也>「あー、もうダメだわ……イクッ！」

H8\_射精\_だらしない

SV\_ボイスの演奏 EV10\_030 100 100 0 2

\n<若菜>「ンんんっぅおおおおおおおおッ！」

SV\_ボイスの停止 2

明後日の方向を向きながら、若菜は身体を震わせ、

膣内に注がれる精液を迎えていた。

\n<陸也>「ふぅ……出した出した。

　この体勢ヤベェな……今度他の女でも試すか」

SV\_ボイスの演奏 EV10\_031 100 100 0 2

\n<若菜>「はぁはぁ……んっく、あっ、んんっ……」

SV\_ボイスの停止 2

男は時折奥まで突いて精子を膣奥へと押し込む。

その隙間から溢れ出た精液が床へと零れた。

\n<陸也>「……喘ぐだけのオナホみてぇになっちまったな。

　それじゃあ、犯して起こしてやるか」

SV\_ボイスの演奏 EV10\_032 100 100 0 2

\n<若菜>「ンおお゛っ、ふぁあっ、んんふぁううう！」

SV\_ボイスの停止 2

H7\_EV11&16

H7\_全裸\_感じてる

若菜の部屋でベッドがギシギシと悲鳴を上げる。

その上では若菜が跳ねるように突き上げられていた。

SV\_ボイスの演奏 EV11\_001 100 100 0 2

\n<若菜>「んふぁ……！　んっく、んぅううう！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「やっぱ騎乗位たまんねぇわ……！

　若菜ちゃんと繋がってるとこ丸見え」

SV\_ボイスの演奏 EV11\_002 100 100 0 2

\n<若菜>「んっ、やっ……見ないでください……！

　わ、わたしのおまんこ……んあっ、ひゃっ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「そんなこと言って見て欲しいんでしょ？

　ほら、見ただけで愛液溢れてきてんじゃん」

SV\_ボイスの演奏 EV11\_003 100 100 0 2

\n<若菜>「ち、ちがっ……んっ、違います……！

　見られてなんて、わたし……んあっ、ふぅ……！」

SV\_ボイスの停止 2

男は肉棒が出入りする秘部をじっくりと見つめる。

愛液とカウパーが混ざり合ってぐっしょりと濡れていた。

\n<陸也>「若菜ちゃんのおっぱいすげぇ！

　突かれてめっちゃ揺らしてんじゃん！」

H7\_全裸\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV11\_005 100 100 0 2

\n<若菜>「ふぁあ、んんっ……！

　そ、そんなこと……言わな……んあっ、んふぅ！」

SV\_ボイスの停止 2

まるでゼリーを揺らしているような柔らかさで、

若菜の胸はたゆんと弾むように激しく上下に揺れる。

\n<陸也>「ヤリまくっても締まり変わんねぇしさぁ。

　ああ、もうチンコ持ってかれちまいそう……！」

SV\_ボイスの演奏 EV11\_006 100 100 0 2

\n<若菜>「ンふぁ、ああんっ、んっくぅう……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あー、そろそろイキそうだわ……！」

\n<陸也>（当然中出し……と思ったけど、

　コイツが堕ちてるかちょっと確認するか）

H7\_全裸\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV11\_008 100 100 0 2

\n<若菜>「んふぁっ、んんっく、あんぅう……！

　ま、また……中に出すんですよね……んんっ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あ、中出しはもうしねーから」

男の腰の動きが突如止まる。

その言葉に若菜は動揺を隠し切れないでいた。

SV\_ボイスの演奏 EV11\_009 100 100 0 2

\n<若菜>「えっ……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「だから、もう中出しはしねーって。

　ガチで孕んでも困るからさぁ。所詮遊びじゃん？」

SV\_ボイスの演奏 EV11\_010 100 100 0 2

\n<若菜>「それは、そう……ですね……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>（見るからにテンション落ちてるじゃん！

　どんだけ中出ししてほしいんだよ！）

SV\_ボイスの演奏 EV11\_012 100 100 0 2

\n<若菜>「…………」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV11\_015 100 100 0 2

\n<若菜>「――して、ください……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あ？　なんか言った？」

SV\_ボイスの演奏 EV11\_016 100 100 0 2

\n<若菜>「先輩のざ、ザーメン……

　わ、わたしの中に出してください……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>（ようやく自分から求めたな……

　それじゃあ遠慮なく……って、すぐ認めても面白くねーか）

男は満足そうにニヤリと下卑た笑みを浮かべる。

けれど、すぐさま平静を装って若菜に声をかけた。

\n<陸也>「いいの？

　赤ちゃんできちゃうかもしれねーよ？」

SV\_ボイスの演奏 EV11\_017 100 100 0 2

\n<若菜>「それ、は……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「でも、若菜ちゃんに赤ちゃん出来たらさぁ、

　俺の子になるってことっしょ？　俺めんどいの嫌だわ」

\n<陸也>「だからさぁ、そんなに精子欲しいなら、

　自分で腰振って勝手に中出しさせれば？」

SV\_ボイスの演奏 EV11\_018 100 100 0 2

\n<若菜>「えっ……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「若菜ちゃんが勝手に俺の精子で孕むなら、

　俺の知ったことじゃねーじゃん？」

\n<陸也>「俺、変な責任とか負いたくねーしさぁ。

　全部若菜ちゃんの責任でヤるなら好きにすれば？」

SV\_ボイスの演奏 EV11\_019 100 100 0 2

\n<若菜>「…………」

SV\_ボイスの停止 2

静寂を破ったのは、

ぐちゅぐちゅと粘液をかき回すような音だった。

H7\_全裸\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV11\_020 100 100 0 2

\n<若菜>「はぁはぁ……んっく、ふぅ……んあっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

若菜はまるで肉棒で自慰をするように、

自ら腰を前後左右に揺すって膣内を刺激する。

\n<陸也>「気持ち良そうに腰振っちゃってさぁ。

　そんなに俺の赤ちゃん欲しいんだ？」

SV\_ボイスの演奏 EV11\_021 100 100 0 2

\n<若菜>「んっ……ちがっ、います……

　わ、わたしは……中出しして欲しいだけ……んふぁ……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「うわっ、そんな理由で中出ししてほしいとか、

　若菜ちゃんエロすぎっしょ……！」

SV\_ボイスの演奏 EV11\_026 100 100 0 2

\n<若菜>「エッチなんかじゃ……ないです……んんっ……」

SV\_ボイスの停止 2

若菜は心の中の自分に何度も言い訳をしながら、

けれど腰を上下に振り続けるのを止めないでいた。

\n<陸也>（コイツも完全に堕ちたな。

　つか、想像以上のセックス狂いだわ。根っからか？）

\n<陸也>「つか、若菜ちゃん今のソレさぁ。

　オナニーしてみるたいでめっちゃエロい」

H7\_全裸\_喜んでる

SV\_ボイスの演奏 EV11\_027 100 100 0 2

\n<若菜>「オナ……こ、これが……オナニーですか……？

　おちんちんで……オナニー……ふっぅ、んんっ……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「チンコでオナニーとかビッチすぎっしょ！」

H7\_全裸\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV11\_029 100 100 0 2

\n<若菜>「わ、わたしは……んふぅ、んんっ……

　ビッチ、なんかじゃ……あっ、ないです……」

SV\_ボイスの停止 2

若菜は敏感な部分を探り当てては、

腰を縦横無尽に振って膣内に肉棒を押し当てる。

\n<陸也>「そんなエロい腰使いしてビッチじゃねーとか、

　流石に言い訳ひどすぎね？」

H7\_全裸\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV11\_030 100 100 0 2

\n<若菜>「そんなの……んっ、ふぁっ……んんっく、ふぅ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あー、もうイキそうだわ……！

　若菜ちゃんさぁ、引き返すなら今しかねーよ？」

SV\_ボイスの演奏 EV11\_031 100 100 0 2

\n<若菜>「んんっ……ふぁっ、ああっんんっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

男の言葉に若菜は返答することなく、

ただ絶頂を促すように腰の動きを激しくさせる。

H7\_全裸\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV11\_032 100 100 0 2

\n<若菜>「はぁはぁ……んふっ、んんっ……ふぁ……！

　あっ、ここ……んぁ、すごい……」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV11\_033 100 100 0 2

\n<若菜>「んんぅ……もう、ダメ……わ、わたしも……

　わ、わたしも……一緒に、イっても……いいですか……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「ああ。中出しで絶頂させてやるよ」

SV\_ボイスの演奏 EV11\_034 100 100 0 2

\n<若菜>「はぁ、んんぅ……それは、んんっ、あっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV11\_035 100 100 0 2

\n<若菜>「んはぁ、ダメ……もう我慢できないです……！

　んっく、ううぅ……イクッ、イっちゃ……んんんんっ！」

SV\_ボイスの停止 2

H7\_全裸\_射精\_喜んでる

SV\_ボイスの演奏 EV11\_036 100 100 0 2

\n<若菜>「ンふぅぁあああああああああああああっ！」

SV\_ボイスの停止 2

若菜の膣内に精液が流し込まれるのと同時に、

若菜は身体を大きく反らして絶頂を迎える。

SV\_ボイスの演奏 EV11\_037 100 100 0 2

\n<若菜>「んっ……はぁはぁ……んんっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

大量に射精された精液は若菜の膣内をいっぱいにして、

それでも溢れ返って体外へと放出される。

\n<陸也>「ふぅ……搾り取られたわ。

　どんだけザー汁狂いなんだよ」

H7\_全裸\_射精\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV11\_039 100 100 0 2

\n<若菜>「ざ、ザーメンなんて好きじゃないです……

　わ、わたしは先輩が脅すから仕方なく……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>（まだそんな言い訳してんのかよ。

　その言い訳できなくしたら素直になるか試すか）

\n<陸也>「そうだ。もう写真消したから」

SV\_ボイスの演奏 EV11\_040 100 100 0 2

\n<若菜>「えっ……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「どうかしたの？　写真消してほしくて、

　俺とセックスしてたんでしょ？」

SV\_ボイスの演奏 EV11\_041 100 100 0 2

\n<若菜>「そ、そうですけど……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「だから、望み通り消してあげたってわけ。

　ほら、証拠にスマホのアルバム見せたげよっか？」

男は若菜に向かってスマホの画面を向ける。

そこに若菜の姿は一枚たりとも映っていなかった。

\n<陸也>「あーあ。すっげー残念だけど、

　これで若菜ちゃんとセックスする理由はなくなっちゃった」

SV\_ボイスの演奏 EV11\_042 100 100 0 2

\n<若菜>「……わたしは、良かったです……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あっ、それで話は変わるんだけどさ。

　俺、明日も学園行くんだわ。新しい女漁りに」

SV\_ボイスの演奏 EV11\_043 100 100 0 2

\n<若菜>「…………」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「次も若菜ちゃんみたいな子がいいなぁ。

　見つけたら保健室に連れ込んでその場でヤリまくるわ」

\n<陸也>「夜までよがらせまくってセックス三昧。

　孕むまで中出ししまくってやろうかな」

SV\_ボイスの演奏 EV11\_044 100 100 0 2

\n<若菜>「孕むまでずっと……中出し……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「ま、もう若菜ちゃんには関係ねーか」

SV\_ボイスの演奏 EV11\_045 100 100 0 2

\n<若菜>「そ、そうです……

　わたしには、もう……関係ないです……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>（なにが関係ないだよ。

　興味津々なエロい表情してやがるクセに）

H6\_EV12

H6\_閉じ目

保健室の中のカーテンに仕切られた奥から、

淫靡な匂いを放つ物音が小さく聞こえてくる。

SV\_ボイスの演奏 EV12\_001 100 100 0 2

\n<若菜>「んっ、はぁ、んんっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「それにしても、若菜ちゃんが来るなんてね」

SV\_ボイスの演奏 EV12\_002 100 100 0 2

\n<若菜>「た、たまたま……んんっ、です……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「つか、来たってことはさ、

　これからも若菜ちゃんを犯しまくっていいってことだよね？」

H6\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV12\_003 100 100 0 2

\n<若菜>「それは…………」

SV\_ボイスの停止 2

H6\_喜んでる

SV\_ボイスの演奏 EV12\_004 100 100 0 2

\n<若菜>「……先輩のところに来ちゃったのは、

　わたしの不注意ですから……されても文句言えないです……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「ホント、若菜ちゃん言い訳好きだよね。

　正直に言ったら？　セックス大好きですってさ」

SV\_ボイスの演奏 EV12\_005 100 100 0 2

\n<若菜>「んっあ……い、言い訳なんかじゃ……ンンッ……！

　わ、わたしは……そんなこと……ひゃあ、んあっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

ガラガラと、保健室の扉が開く音がする。

その瞬間、若菜の鼓動は緊張で早く鳴り始めた。

H6\_射精\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV12\_006 100 100 0 2

\n<若菜>「せ、先輩……誰か来ちゃいました……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「それはマズったな……とりあえず静かに」

SV\_ボイスの演奏 EV12\_007 100 100 0 2

\n<若菜>「わ、分かりました……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>（ようやく来たか、おっせーなゴミが。

　このマンコ相手じゃ我慢するのも大変なんだっての）

\n<晴太>「あれ……いない……

　トイレに行ってるのかな……？」

\n<陸也>（それじゃあ、遊んでやるか。

　若菜ちゃんはどこまで我慢できるかなッ！）

H6\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV12\_009 100 100 0 2

\n<若菜>「ンんんっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

止まっていたはずの肉棒が、急に膣奥へと刺さり、

若菜は抑えていた声を思わず漏らした。

H6\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV12\_010 100 100 0 2

\n<若菜>「せ、先輩……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「悪ぃ悪ぃ、つい腰が動いちゃって。

　マジわざとじゃねーって。ごめんごめん」

\n<晴太>「あれ……誰かいるのかな……？」

SV\_ボイスの演奏 EV12\_011 100 100 0 2

\n<若菜>「ハルタがこっち来ちゃう……！

　せ、先輩……ど、どうすれば……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「知り合いなんだろ？　俺はいねーことにするから。

　若菜ちゃんも身体だけ隠して追い払ってよ」

SV\_ボイスの演奏 EV12\_012 100 100 0 2

\n<若菜>「わかりました……や、やってみます……」

SV\_ボイスの停止 2

若菜は仕切られたカーテンから顔だけを出して、

こちらを向いていた晴太に声をかけた。

H6\_喜んでる

SV\_ボイスの演奏 EV12\_013 100 100 0 2

\n<若菜>「は、ハルタ……どうしたの……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「あれ？　若菜？

　どうしてこんなところにいるの……？」

SV\_ボイスの演奏 EV12\_014 100 100 0 2

\n<若菜>「えーっと、その、それはね……

　ほ、保健室の先生に見ててって言われてね……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「そうなんだ……って、あれ？

　大事な用事があるんじゃなかったの？」

\n<陸也>（大事な用事ね……）

SV\_ボイスの演奏 EV12\_015 100 100 0 2

\n<若菜>「そ、それは……も、もう終わったの！

　意外と早く終わっちゃって……えへへ……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「そうだったんだ……

　ということは、若菜はずっと保健室にいたんだよね？」

SV\_ボイスの演奏 EV12\_016 100 100 0 2

\n<若菜>「えっ、う、うん……そうだよ……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「それじゃあさ、先輩見なかった？」

H6\_だらしない

SV\_ボイスの演奏 EV12\_017 100 100 0 2

\n<若菜>「先輩……？　それってどのせんぱ――ンんぁッ！？」

SV\_ボイスの停止 2

ずぶり、と油断していた膣内に肉棒が突き刺さる。

突然の出来事に、若菜は甲高い声を漏らした。

\n<晴太>「若菜？　どうかしたの？」

H6\_喜んでる

SV\_ボイスの演奏 EV12\_018 100 100 0 2

\n<若菜>「えっ、んっ……な、なにが……？

　なにも……ふぅっ、な、ないよ……」

SV\_ボイスの停止 2

H6\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV12\_020 100 100 0 2

\n<若菜>\}「せ、先輩……止めてください……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>\}「ごめんごめん、腰が勝手に動いちゃってさぁ。

　ほら、普通にしてないとハルタくんにバレちゃうよ」

SV\_ボイスの演奏 EV12\_021 100 100 0 2

\n<若菜>\}「そ、そんな……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「若菜……？」

H6\_喜んでる

SV\_ボイスの演奏 EV12\_022 100 100 0 2

\n<若菜>「う、ううん……！　んっ……な、なんにも……

　ふぅ、な、ないよ……えへへ……んんっ……」

SV\_ボイスの停止 2

若菜は努めて平静を装うも、

男はからかうようにピストンを速めていく。

\n<晴太>「なんか変な音がしない……？

　ほら、パンパンって」

SV\_ボイスの演奏 EV12\_023 100 100 0 2

\n<若菜>「んっ……え、そ、そうかな……んんっ……

　わ、わたしには聞こえないけど……！」

SV\_ボイスの停止 2

H6\_閉じ目

\n<陸也>（好きな奴に見られてマンコドロドロじゃん！

　見られて感じるとかどんだけ変態なんだよッ！）

男はまるで面白がるような表情で、

若菜の膣奥に肉棒を抉るように押し込んだ。

H6\_だらしない

SV\_ボイスの演奏 EV12\_026 100 100 0 2

\n<若菜>「ンんお゛っ……！？　んふぁああ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「若菜！？

　そんな声出して……まさか病気なの！？」

H6\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV12\_028 100 100 0 2

\n<若菜>「んんっ、ち、違うの……んふぅっ……！

　ちょ、ちょっと……ぐ、具合が悪くて……んんっ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「大丈夫なの、若菜？

　具合が悪いなら僕が看病してあげるから！」

SV\_ボイスの演奏 EV12\_029 100 100 0 2

\n<若菜>「んんっ、だ、ダメ……来ないで……！

　は、ハルタは……ダメ……んんっ、なの……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「で、でも……若菜苦しそうだよ！」

H6\_閉じ目

H6\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV12\_033 100 100 0 2

\n<若菜>「は、ハルタぁ……お、おねがいが……んんっ！

　おねがいが……あるの……んふぅ……！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV12\_034 100 100 0 2

\n<若菜>「ほ、保健室の……せ、先生を……んんっく……！

　よ、呼んできて……はぁ、く、くれないかな……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「わ、分かった！　すぐに呼んでくるから！

　頑張ってね、若菜！」

晴太は慌てるように、保健室を飛び出していく。

若菜は安堵しながら身体の力を抜いた。

SV\_ボイスの演奏 EV12\_035 100 100 0 2

\n<若菜>「んっく……せ、先輩……！

　ば、バレたら……どうするんで……んふぁ、んんっ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「見られながらイキそうなクセに。

　イクところ見られたくなくて追い出したんだろ！」

H6\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV12\_036 100 100 0 2

\n<若菜>「ンふぅあ……そ、それは……ンんッ！

　せ、先輩が……おちんちん入れてくるから……ふぁ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「その割にはいつもより濡れてたっての。

　物欲しそうにマンコもヒクヒクさせてさぁ」

SV\_ボイスの演奏 EV12\_037 100 100 0 2

\n<若菜>「そんな……こと、んひゃあっ……！

　おちんちんなんて……欲しく……ンんあっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「俺とのセックスは大事な用事なんだろ！

　ハルタくんと遊ぶより気持ちいいもんなッ！」

SV\_ボイスの演奏 EV12\_038 100 100 0 2

\n<若菜>「はぁ……ンンんっ！　んあふぅ……！

　そ、それは……んっあっ、んんっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「それじゃあご褒美に、

　若菜ちゃんの大好きな中出ししてやるよ！」

H6\_喜んでる

SV\_ボイスの演奏 EV12\_039 100 100 0 2

\n<若菜>「んふぁ……！　は、はい……！

　な、中出し……中出ししてください……！」

SV\_ボイスの停止 2

若菜の懇願するような言葉に、

男のピストンは絶頂を迎えるために加速していく。

\n<陸也>「孕むまで止めねぇからな……！

　その覚悟出来たから来たんだもんな！」

SV\_ボイスの演奏 EV12\_040 100 100 0 2

\n<若菜>「ふぅんんっ……せ、先輩の赤ちゃんなんて……

　そ、そんなの……孕みません……からぁ、んあッ！」

SV\_ボイスの停止 2

H6\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV12\_041 100 100 0 2

\n<若菜>「あんっ……も、もう我慢できないよぉ……！

　はぁ……イク、イっちゃう……んんぅ、イクぅ……！」

SV\_ボイスの停止 2

H6\_射精\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV12\_042 100 100 0 2

\n<若菜>「ンんんっうあああああああああ！」

SV\_ボイスの停止 2

若菜は抑えていた声を解放するように、

廊下にまで響くほどの嬌声を上げて絶頂に至る。

H6\_射精\_喜んでる

SV\_ボイスの演奏 EV12\_043 100 100 0 2

\n<若菜>「はぁはぁ……ふぅ……んんっ……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「見られて興奮するなんて若菜ちゃん変態だね。

　ま、そういうところがいいんだけどッ」

SV\_ボイスの演奏 EV12\_044 100 100 0 2

\n<若菜>「んんっ……！　ふぅ、はぁはぁ……んっく……」

SV\_ボイスの停止 2

子宮口にまで精子を押し込むように、

男は射精しきった肉棒を膣奥へと突っ込む。

\n<陸也>「それじゃあ、場所移すか。

　早く行かねーとハルタくんが戻ってくるぜ？」

SV\_ボイスの演奏 EV12\_045 100 100 0 2

\n<若菜>「は……はい……」

SV\_ボイスの停止 2

H4\_EV13

H4\_射精\_閉じ目

ラブホテルの一室で事を終えた二人の男女が、

身体を重ねながら、淫らな音を部屋中に響かせていた。

SV\_ボイスの演奏 EV13\_001 100 100 0 2

\n<若菜>「んんっ……じゅる、んちゅぶ……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「はぁ……出した出した。

　若菜ちゃん、ちゃんとお掃除フェラしてよ？」

SV\_ボイスの演奏 EV13\_002 100 100 0 2

\n<若菜>「わ、分かってます……んじゅ、ちゅぷぁ……」

SV\_ボイスの停止 2

若菜は性行為を終えてドロドロになった肉棒を、

口いっぱいに頬張って液を舐めとっていく。

\n<陸也>「美味しそうにザーメン飲むようになったな。

　そんなに美味しいの？」

H4\_射精\_照れ

SV\_ボイスの演奏 EV13\_003 100 100 0 2

\n<若菜>「ザーメンなんて……美味しくないです……

　こんなの……本当は舐めたくないです……れろ、んちゅ……」

SV\_ボイスの停止 2

言葉とは裏腹に若菜は熱心に竿を咥え、

あらゆる隙間に舌を伸ばして愛撫するように亀頭を舐める。

\n<陸也>「あー、マジで気持ちいいわー。

　ここまでヤる女はそうそういねーからな」

H4\_射精\_とろけ顔

SV\_ボイスの演奏 EV13\_004 100 100 0 2

\n<若菜>「じゅぶ、んむっ、れろ……んっじゅる……んん……！」

SV\_ボイスの停止 2

若菜はカリの部分に溜まった恥垢を舌で掬い、

その味を確かめるように喉を鳴らした。

SV\_ボイスの演奏 EV13\_007 100 100 0 2

\n<若菜>「んっく……変な味……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「うわ、チンカスついてんじゃん。

　若菜ちゃん、食べちゃったの？」

H4\_射精\_渋々

SV\_ボイスの演奏 EV13\_008 100 100 0 2

\n<若菜>「え……た、食べちゃダメなのでしたか……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「いいや、俺好みだからセーフ。

　まあ、その口とはキスしたくねーけど」

\n<陸也>「これからチンカス付いてたら、

　ちゃんと食べて掃除してよ？」

H4\_射精\_照れ

SV\_ボイスの演奏 EV13\_009 100 100 0 2

\n<若菜>「これが……ち、ちんかすなんですね……

　は、はい……分かりました……」

SV\_ボイスの停止 2

若菜はカリと皮の隙間に舌を滑り込ませると、

ほじくるように恥垢を舐めとっていく。

SV\_ボイスの演奏 EV13\_011 100 100 0 2

\n<若菜>「れろ、んれろ……んちゅる、れろ、んっく……」

SV\_ボイスの停止 2

H4\_射精\_とろけ顔

恥垢の強烈な媚薬のような匂いにあてられて、

若菜の表情が蕩けるように締まりのないものになっていく。

SV\_ボイスの演奏 EV13\_013 100 100 0 2

\n<若菜>「んちゅ、れろ……んんっ、こくん……っぷはぁ……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「若菜ちゃんくらいだわ。

　そんなに美味しそうにチンカス食べるの」

H4\_射精\_照れ

SV\_ボイスの演奏 EV13\_015 100 100 0 2

\n<若菜>「美味しくなんか……ないです……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「でも、嫌いじゃないんでしょ？」

H4\_射精\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV13\_016 100 100 0 2

\n<若菜>「…………。

　れろ、ちゅぶ……んちゅる、ちゅぷぁ……」

SV\_ボイスの停止 2

若菜は返答代わりに亀頭へ口づけを交わす。

それは暗に肯定を意を示していた。

SV\_ボイスの演奏 EV13\_017 100 100 0 2

\n<若菜>「ちゅる、れろ、んぷぁ……はぁはぁ……

　んっく……れろ、れろ……んんっ……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>（そんな舐めたらイキそうになんだろ。

　ひょっとして、またイカせようとしてんのか？）

\n<陸也>「つか、若菜ちゃんのってさぁ、

　お掃除フェラってよりフェラじゃね？　イキそうになるわ」

H4\_射精\_照れ

SV\_ボイスの演奏 EV13\_019 100 100 0 2

\n<若菜>「ちゅる、ちゅぷ……ち、違います……

　これは……フェラじゃありませんから……んちゅ……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「まあいいけど。これは掃除なんだからさぁ、

　射精させんなよ？　汚したらまた初めから掃除だからな」

SV\_ボイスの演奏 EV13\_020 100 100 0 2

\n<若菜>「また……初めから……

　……そんなの絶対に嫌です……んちゅぷ、れろ、んちゅる……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>（うわ、めっちゃ嬉しそうな顔してんじゃん。

　どんだけチンコにしゃぶりつきてぇんだよ）

H4\_射精\_とろけ顔

肉棒から放たれる強烈な雄の匂いが若菜の鼻孔をくすぐる。

その匂いに、若菜の瞳はとろんと蕩ける。

SV\_ボイスの演奏 EV13\_024 100 100 0 2

\n<若菜>「んじゅる、れろ……んっくんっく！　んっちゅぷ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「おいおいそんなに激しくしたら……

　あー、また出そうだわ……いいのか……？」

若菜は男の言葉を聞かずに顔を激しく上下に動かす。

それは射精に導くためだけの強引な口淫だった。

SV\_ボイスの演奏 EV13\_025 100 100 0 2

\n<若菜>「んじゅるる、ぐっぽぐっぽ……んじゅぼぼぼ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あー、もうイキそ……出すぞ……！」

SV\_ボイスの演奏 EV13\_026 100 100 0 2

\n<若菜>「ぐっぽぐっぽ……じゅる、んむちゅ……んじゅるるる！」

SV\_ボイスの停止 2

H4\_射精\_驚き

SV\_ボイスの演奏 EV13\_027 100 100 0 2

\n<若菜>「ンんんんむぅううううっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

若菜を口内から孕ませるような勢いで、

白濁した液が喉奥に絡むように口内を穢していく。

H4\_射精\_とろけ顔

SV\_ボイスの演奏 EV13\_028 100 100 0 2

\n<若菜>「んんっ……んちゅる、んんっく……」

SV\_ボイスの停止 2

口内に溢れかえるほどの精液を、

若菜は何度も喉を鳴らして飲み干していく。

\n<陸也>「あーあ。またチンコ汚くなったわ。

　若菜ちゃんさぁ、どうすればいいか分かるよね？」

SV\_ボイスの演奏 EV13\_029 100 100 0 2

\n<若菜>「んっく……こくん……っぷぁ。

　……それくらい、分かってます……」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV13\_030 100 100 0 2

\n<若菜>「先輩をイカせたわたしが悪いんですから……

　嫌ですけど、また……おちんちん掃除します……」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV13\_031 100 100 0 2

\n<若菜>「しょうがなく……しょうがなくですから……

　んれろ、んじゅぶ……ちゅ、んんちゅ……ちゅぷぁ……」

SV\_ボイスの停止 2

若菜は渋々というように再度肉棒にむしゃぶりつく。

けれどその瞳には、情欲の色が浮かんでいた。

H8\_EV14

H8\_感じてる

神社の境内の奥でひっそりと、

裸の男女が抱き合うようにして腰を打ち付け合っていた。

SV\_ボイスの演奏 EV14\_001 100 100 0 2

\n<若菜>「んんっ……！　はぁはぁ……んっく、んあっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV14\_002 100 100 0 2

\n<若菜>「わ、わたし……こんなところでセックスしちゃってる……！

　お、お外でなんて……んっ、ふぁ、んんっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「でも若菜ちゃんも興奮してんだろ？

　いつも以上にマンコ締めちゃってさッ！」

H8\_射精\_だらしない

SV\_ボイスの演奏 EV14\_003 100 100 0 2

\n<若菜>「ンお゛っ……！？」

SV\_ボイスの停止 2

男はぐっと肉棒を膣深くまで沈み込ませる。

若菜の身体がぶるりと快楽に震えて膣をさらに狭めた。

\n<陸也>「あー、やっぱこの体位いいわ……！

　若菜ちゃんの身体が柔らかくてマジラッキー」

H8\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV14\_004 100 100 0 2

\n<若菜>「んあっ、っくぅ……そ、そんな深く……！

　はぅ、んんっ……ああっ、んふぁ……！」

SV\_ボイスの停止 2

立ち鼎できゅっと締められた膣内に形を教え込むように、

竿全体がぎちぎちと肉壁を押し広げて擦り上げる。

\n<陸也>「ほら、若菜ちゃんも分かるっしょ？

　チンコがマンコの形作り変えてくとこ」

H8\_目を逸らす

SV\_ボイスの演奏 EV14\_006 100 100 0 2

\n<若菜>「んふっ、そ、そんなの分かん……ンんあぁッ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>（変態なコイツのことだし、どうせ分かってるんだろうけど、

　おもしれーし、ちゃんと口に出すまで遊んでやるか）

\n<陸也>「それじゃあ、若菜ちゃんでも分かるように、

　俺のチンコの形をマンコに教えて込んあげる」

SV\_ボイスの演奏 EV14\_008 100 100 0 2

\n<若菜>「い、いいです……そんなことしなくても……！

　そんなことされたら……ンんんぅぅうっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

男は竿を秘部からゆっくりと引き抜いていき、

カリ首が肉壁を緩やかに擦る感覚を植え付けていく。

H8\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV14\_010 100 100 0 2

\n<若菜>「んっ……ふぅん……はぁ、んふぁ……！」

SV\_ボイスの停止 2

激しいピストンとは対称的な性行為ながら、

若菜の漏らす声はそれに近しいほどの熱を帯びていた。

\n<陸也>「どう？　分かってきた？」

SV\_ボイスの演奏 EV14\_011 100 100 0 2

\n<若菜>「そんなの知らな……んふぁ……ふぅ、んんっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

ぬぷり、と肉壁を分け入るように亀頭が侵入していく。

緩慢な動作ながら、若菜の身体は大きく震えた。

\n<陸也>（こんなゆっくりで感じてるとか……

　そろそろ仕上げてもいいか）

竿はゆっくりと何度も膣内を往復しながら、

若菜の肉壁に形を徐々に染みこませていく。

SV\_ボイスの演奏 EV14\_013 100 100 0 2

\n<若菜>「はぁ、んんっ……んっく、ふぅ……んふぁ……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「これで分かった……っしょッ！」

H8\_だらしない

SV\_ボイスの演奏 EV14\_014 100 100 0 2

\n<若菜>「ンんあ゛ッ！？」

SV\_ボイスの停止 2

男のピストンが突然激しさを取り戻し、

油断しきっていた若菜は押し寄せる快楽に頭が真っ白になった。

H8\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV14\_015 100 100 0 2

\n<若菜>「ああっ、んんっ……んふぁ！　んっく、はぁんん！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「若菜ちゃんさぁ、喘いでばっかじゃなくて、

　折角教えてやったんだから、分かったか言えよっ！」

SV\_ボイスの演奏 EV14\_017 100 100 0 2

\n<若菜>「わ、わか……んんっく、わかりましたぁ……！

　おまんこが、先輩のおちんちんの形になっちゃってますっ！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV14\_018 100 100 0 2

\n<若菜>「わたしのおまんこが……んひゃあっ！

　先輩のおちんちん専用に……なっちゃって……あアんんっ！」

SV\_ボイスの停止 2

若菜は恥ずかしげもなく大声で淫らな言葉を叫ぶ。

男は満足げに腰をさらに強く打ちつける。

\n<陸也>「これで若菜ちゃんのマンコは、

　オレ専用のチンコケースだからなッ！　他のチンコ食うなよ！」

SV\_ボイスの演奏 EV14\_019 100 100 0 2

\n<若菜>「ンぅうッ……！　は、はい……！

　せ、先輩としかセックスしま……んふぁ、んあっ……！！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あー、もう限界だわ……イキそ……出すぞ！」

SV\_ボイスの演奏 EV14\_020 100 100 0 2

\n<若菜>「んぁっ、な、中に……中に出してください……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「中出し以外するかよッ！

　若菜ちゃんは孕んでも俺の精液便所だってーのッ！」

SV\_ボイスの演奏 EV14\_021 100 100 0 2

\n<若菜>「ンふぁっ……！　んっく、んはぁ……！

　わ、わたしも……わたしももう……イクぅッ！」

SV\_ボイスの停止 2

H8\_射精\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV14\_022 100 100 0 2

\n<若菜>「ンんんふぅぁあああああああああっ！」

SV\_ボイスの停止 2

膣内を満たすように放出された精液を、

若菜の子宮はごくごくと飲み干していく。

\n<陸也>「あー、搾り取られるわ……！

　どんだけ孕みてぇんだよ」

SV\_ボイスの演奏 EV14\_023 100 100 0 2

\n<若菜>「んはぁ……は、孕みたくなんかないです……

　ただ、中出しが気持ちいいだけ……んんっ……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「どんだけ変態なんだよ。

　そっちのほうがエロいとか思わねーの？」

SV\_ボイスの演奏 EV14\_024 100 100 0 2

\n<若菜>「はぁはぁ……んふぁっ……

　わ、わたしはエッチなんかじゃ……ないです……」

SV\_ボイスの停止 2

若菜は艶めかしい吐息を何度も溢しては、

いつも以上に湧き上がる悦楽に浸っていた。

\n<陸也>「若菜ちゃん、この後どこでヤる？

　若菜ちゃん家か……ラブホとか？」

男は当然のように性行為を続ける宣言をするも、

それに対して若菜が思うことは何もなかった。

SV\_ボイスの演奏 EV14\_028 100 100 0 2

\n<若菜>「はぁはぁ……先輩を家に入れたくないです……

　でも、ラブホなんて……そんなエッチなところは嫌です……」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV14\_029 100 100 0 2

\n<若菜>「だ、だから……しょうがないですから……

　こ、ここで……このままでいいです……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>（突っ込まれると思ったのに、もうヤるの前提かよ。

　ホント、エロい女捕まえれてラッキーだわ）

\n<陸也>「んじゃあ、抜くのもメンドイしこのままヤるか。

　孕むまで中出し続けてやるから」

SV\_ボイスの演奏 EV14\_030 100 100 0 2

\n<若菜>「んんっ……は、はい……」

SV\_ボイスの停止 2

H5\_EV08&15

H5\_喜んでる

部屋の主人が留守にしている状況で、

男女がスリルを楽しむように身体を繋ぎ合っていた。

SV\_ボイスの演奏 EV15\_001 100 100 0 2

\n<若菜>「ンはぁ……！　んあっ、んんっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「若菜ちゃん、いつもより興奮してるっしょ？

　挿れる前からマンコびしょびしょだったもんね？」

H5\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV15\_002 100 100 0 2

\n<若菜>「んっく、そ、それは……ふぁっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「おいおい……他の男のこと考えてんじゃねーだろうな？

　若菜ちゃんは俺のチンコのことだけ考えてろッ！」

SV\_ボイスの演奏 EV15\_006 100 100 0 2

\n<若菜>「ふぁあッ……！　んっく、んああッ！

　ダメ、そんな……いま、敏感だから……ふぅんん！」

SV\_ボイスの停止 2

瞬間、カーテンに閉め切られた窓の向こうから、

ドンドンとガラスを叩く音と共に大声が響いてきた。

\n<晴太>「若菜ー！　本ってどこにあるのー！」

\n<陸也>「うるせぇな。若菜ちゃんならテメェの部屋で、

　セックスの真っ最中だっての！」

H5\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV15\_007 100 100 0 2

\n<若菜>「先輩……ちょっと、待ってくだ……んんっ！

　このままじゃハルタにバレちゃ……うううっ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「聞こえないフリしてればいいんじゃね？

　そんなことより若菜ちゃんはマンコに集中！」

H5\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV15\_008 100 100 0 2

\n<若菜>「ンんっあっ……！　で、でも……それじゃ、んんっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

しばらくすると窓を叩く音は止み、

代わりに、電話の着信音が部屋中に鳴り響いた。

H5\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV15\_009 100 100 0 2

\n<若菜>「は、ハルタから電話だ……

　せ、先輩……これは出ないと怪しまれるんじゃ……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>（マジうぜぇな……いや、良いこと思いついたわ）

\n<陸也>「しつけー男だな。もういいや。出れば？

　まあ、俺は勝手にヤってるから」

SV\_ボイスの演奏 EV15\_010 100 100 0 2

\n<若菜>「んんっ……！　で、でもそれじゃあ声が……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「いいからさっさと出ろって。怪しまれていいの？」

SV\_ボイスの演奏 EV15\_011 100 100 0 2

\n<若菜>「ううっ……」

SV\_ボイスの停止 2

H5\_電話\_感じてる

若菜は渋々と言ったように着信ボタンを押す。

その実、蜜壺からは愛液が洪水のように溢れ出していた。

\n<晴太>『もしもし、若菜？』

SV\_ボイスの演奏 EV15\_013 100 100 0 2

\n<若菜>「んっ……は、ハルタ……？　ど、どうしたの……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>『若菜の言ってた本ってどこにあるの？』

\n<陸也>（おっぱいちゃんとセックス出来ない可哀想なモヤシ男に、

　喘ぎ声くらい聞かせてやるか）

SV\_ボイスの演奏 EV15\_015 100 100 0 2

\n<若菜>「え、えーっと……んんっ……アぁッ……！」

SV\_ボイスの停止 2

男は膣奥にぐっと亀頭を押し込む。

その快感に、若菜は抑えていた声をふっと漏らした。

\n<晴太>『若菜？』

H5\_電話\_射精\_喜んでる

SV\_ボイスの演奏 EV15\_016 100 100 0 2

\n<若菜>「な、なんでもないよ！　な、んんっ……！

　あ、あはは……ふぅ、んんっ……」

SV\_ボイスの停止 2

H5\_電話\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV15\_017 100 100 0 2

\n<若菜>「せ、先輩……！

　お願いですから、ハルタの前では……んんぁっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「なに言ってんの？　聞かれて気持ちいいんだろ？」

SV\_ボイスの演奏 EV15\_018 100 100 0 2

\n<若菜>「そ、そんなこと……ふぁ、んっく、んはぁ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>『若菜？　何かしてるの？』

H5\_電話\_喜んでる

SV\_ボイスの演奏 EV15\_019 100 100 0 2

\n<若菜>「な、なにも……んぁっ、なにもしてないよ……！

　ほ、ほんと……んっく、ほんとだよ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>『そう？』

SV\_ボイスの演奏 EV15\_020 100 100 0 2

\n<若菜>「う、うん……ホント……んんっ、えへへ……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>『でも、カーテン越しに動いてるのが見えるんだけど』

H5\_電話\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV15\_021 100 100 0 2

\n<若菜>「えっ……？」

SV\_ボイスの停止 2

若菜が窓に視線を移すと、

そこには自分の部屋いる晴太の姿がシルエットで映っていた。

H5\_電話\_喜んでる

SV\_ボイスの演奏 EV15\_023 100 100 0 2

\n<若菜>「ほ、ほんとは……ストレッチしてるの……！

　さ、最近……はまってて、んあっ……！！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV15\_024 100 100 0 2

\n<若菜>「とっても……んふぁ、気持ちいいの……んんっ！

　気持ち良くて……あんっ、声が漏れちゃうくらい……えへへ」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>『へぇ、そんなのがあるんだ。

　今度僕にも教えてよ』

SV\_ボイスの演奏 EV15\_025 100 100 0 2

\n<若菜>「ふぁ……う、うんっ……は、ハルタにも……んんっ！

　き、きもちいいストレッチ……教えて……んあっ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「なあなあ、若菜ちゃんさぁ。

　俺とヤってる最中に、他の男とセックスの予約してんじゃねーよ！」

H5\_電話\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV15\_026 100 100 0 2

\n<若菜>「ンあぅッ……！」

SV\_ボイスの停止 2

男は若菜の握っている電話の画面を操作し、

マイクとスピーカーをミュートに切り替える。

\n<陸也>「若菜ちゃんのマンコはオレ専用だって言ったよな？

　クソビッチの若菜ちゃんには難しかったかッ！？」

SV\_ボイスの演奏 EV15\_027 100 100 0 2

\n<若菜>「あんんっ……！　わ、忘れてなんか……はぁんんッ！

　そ、それに……わたしはビッチじゃ……ンふぁ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「なら、ちゃんと言ってみろよ！

　若菜ちゃんのマンコは誰のモンだ！？」

責め立てるように腰を強く振るう男に、

若菜はたじたじになりながらも快楽に喘ぐ。

SV\_ボイスの演奏 EV15\_028 100 100 0 2

\n<若菜>「ふぁあ、んううっ、激し……んあっ……！

　い、言います……んんっく、言いますからぁ……！」

SV\_ボイスの停止 2

H5\_電話\_放心

SV\_ボイスの演奏 EV15\_029 100 100 0 2

\n<若菜>「わ、わたしのおまんこは……せ、先輩の……

　先輩のおちんちん専用の……精液便所です……ンふあぅッ……！？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「ちゃんと分かってんじゃん。

　ちゃんと言えたご褒美に、すぐにイカせてやるよッ！」

H5\_電話\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV15\_030 100 100 0 2

\n<若菜>「ンはぁあぅっ……！

　そ、そこ……んんっ、すごっ……あっ、んんっぅう！」

SV\_ボイスの停止 2

繋がっていないマイクに向かって、

若菜は遠慮なしに快楽の声を上げ続ける。

H5\_電話\_放心

SV\_ボイスの演奏 EV15\_031 100 100 0 2

\n<若菜>「んあっ、も、もう我慢できない……！

　い、イっても……イってもいいですか……んひゃぁ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あー、俺も出そうだわ……！

　俺の射精でイカせてやるよ！」

SV\_ボイスの演奏 EV15\_032 100 100 0 2

\n<若菜>「は、ハルタに……バレちゃうとダメだから……

　ざ、ザーメンは……わ、わたしの中に……んんあっ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「素直に中出ししてほしいって言えっての！

　まあ、どっちにしろ中出し以外しねーけどなッ！」

男は射精を導くための激しいピストンを繰り返し、

若菜を絶頂へと高めていく。

SV\_ボイスの演奏 EV15\_033 100 100 0 2

\n<若菜>「ンはぁっ！　だめっ、もうっ……んあっ！

　はぁはぁ……イっちゃう……ハルタの部屋で……ふぁっ！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV15\_034 100 100 0 2

\n<若菜>「こんなこと、イケナイのに……感じちゃうぅっ！

　ンんんっ、イクッ……イっちゃうぅうう！」

SV\_ボイスの停止 2

H5\_電話\_射精\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV15\_035 100 100 0 2

\n<若菜>「ンんんぅぅうあああああああっ！」

SV\_ボイスの停止 2

若菜は声を必死に抑えながら絶頂に至るも、

漏れ出た声は若菜の興奮を大いに物語っていた。

SV\_ボイスの演奏 EV15\_036 100 100 0 2

\n<若菜>「……っ、んんっ……！　んはぁ……はぁはぁ……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「ふぅ……出した出した。

　おっと、電話のことすっかり忘れてたわ」

男は若菜に抱き着くような姿勢でミュートをオフにする。

瞬間、部屋の中にもう一人の声が響き渡った。

\n<晴太>『――かな！　もしもーし、若菜！

　聞こえてるー？　大丈夫ー？』

H5\_電話\_射精\_喜んでる

SV\_ボイスの演奏 EV15\_039 100 100 0 2

\n<若菜>「えっ……？　んっ……ああ、うん。だ、大丈夫だよ……」

SV\_ボイスの停止 2

突然耳元で聞こえてくる晴太の言葉に、

若菜は快楽の余韻に浸りながら虚ろな言葉を返す。

SV\_ボイスの演奏 EV15\_040 100 100 0 2

\n<若菜>「あっ、思い出した……い、いま家に本が無いんだった……

　はぁはぁ……は、ハルタももう戻ってきていいよ……」

SV\_ボイスの停止 2

ごぽり、と若菜の秘部から白濁した液が零れる。

それを見ながら若菜は緩んだ口元で送話口に声をかけた。

SV\_ボイスの演奏 EV15\_041 100 100 0 2

\n<若菜>「も、もう……終わったから……」

SV\_ボイスの停止 2

H7\_EV11&16

H7\_喜んでる

むせ返るような淫靡な匂い、部屋中を包む熱気。

夜通し響く乾いた音は止むことなく朝を迎えた。

SV\_ボイスの演奏 EV16\_001 100 100 0 2

\n<若菜>「んはぁ、んんっ……！　はぁはぁ……んんぅ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「うわ、もう朝じゃん。

　若菜ちゃんに一晩中搾り取られてたわ」

H7\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV16\_002 100 100 0 2

\n<若菜>「ちがっ、先輩が……んんぁッ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「何がちげーの？　チンコ咥えこんで離さなかったクセにさぁ。

　こんなドロドロマンコで言っても説得力なくね？」

SV\_ボイスの演奏 EV16\_003 100 100 0 2

\n<若菜>「あんっ、んっくぁ……！

　それは、先輩がセックスやめてくれないからぁ……んふぁ！」

SV\_ボイスの停止 2

一日中肉棒を頬張った蜜壺はぐちょぐちょに蕩け、

滑るように子宮奥まで男根を飲み込んでいく。

\n<陸也>「流石にそろそろ休憩すっか。

　じゃあ、次出したら一旦終わりなッ！」

SV\_ボイスの演奏 EV16\_004 100 100 0 2

\n<若菜>「ンあぁっ、は、はい……！

　わ、わか……んんっ、あ、わかりましたぁ……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「おいおい、そんな悲しそうにすんなって。

　起きたらまたハメ倒してやるっての」

SV\_ボイスの演奏 EV16\_005 100 100 0 2

\n<若菜>「か、悲しくなんて……」

SV\_ボイスの停止 2

若菜の言葉を遮るように、窓を叩く音が部屋中に響く。

その音に続くように、男にしては高めな声が聞こえてきた。

\n<晴太>「若菜ー！　おはよー！」

SV\_ボイスの演奏 EV16\_006 100 100 0 2

\n<若菜>「は、ハルタ……？　なんで……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「またアイツかよ。

　彼氏でもねーのにしつけー男だな、モヤシ男」

SV\_ボイスの演奏 EV16\_007 100 100 0 2

\n<若菜>「ど、どうしよう……

　わたしがいるのはバレちゃってるだろうし……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「いいじゃん。開けちゃえば。

　部屋ん中あちぃし、精子くせぇし、換気換気」

SV\_ボイスの演奏 EV16\_008 100 100 0 2

\n<若菜>「えっ、ちょっと待っ――！」

SV\_ボイスの停止 2

男は足で蹴とばすようにカーテンを払い、窓を開け放つ。

窓越しに若菜と晴太の目があった。

H7\_喜んでる

SV\_ボイスの演奏 EV16\_009 100 100 0 2

\n<若菜>「お、おはよう……ハルタ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「おはよう。ふぁ～あ、まだ眠いや」

SV\_ボイスの演奏 EV16\_010 100 100 0 2

\n<若菜>「あ、あはは……ハルタにしては朝が早――い゛んんっ！？」

SV\_ボイスの停止 2

晴太の目があるにも関わらず、

男は容赦なく若菜の秘部を突きあげて身体を揺らす。

H7\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV16\_012 100 100 0 2

\n<若菜>「せ、先輩……動いちゃダメです……んんぁっ！

　は、ハルタに……セックスしちゃってるのバレちゃう！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「大丈夫大丈夫。今までだってバレてないっしょ？

　若菜ちゃんが声抑えてりゃ大丈夫だってのッ！」

H7\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV16\_013 100 100 0 2

\n<若菜>「んふぁあ！　な、なら……せめて、んんっ！

　激しく……ふぅんん、しないでくだ……ンんぅっ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「可愛い可愛い若菜ちゃんの頼みだから、まあ……

　出来る限り、多少は、小指の先くらいは善処してみるわ」

\n<陸也>（って、やめるわけねーだろ。

　つーか、バレたほうが俺としておもしれーし）

\n<晴太>「ねぇ、若菜。なんでそんなに揺れてるの？」

H7\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV16\_016 100 100 0 2

\n<若菜>「えっ？　えっと……」

SV\_ボイスの停止 2

若菜は考え込むような素振りで男を見やる。

男はヘラヘラと笑いながら手で謝罪を表した。

H7\_喜んでる

SV\_ボイスの演奏 EV16\_017 100 100 0 2

\n<若菜>「そ、それは……んんっ、その……と、トランポリン！

　トランポリンに乗ってるの！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「そんなの若菜の家にあったっけ？」

SV\_ボイスの演奏 EV16\_018 100 100 0 2

\n<若菜>「あ、最近買ったの……んあっ！」

SV\_ボイスの停止 2

激しくはないものの、小刻みに動く肉棒に、

一晩かけて開発された若菜の秘部は蜜を垂らす。

\n<晴太>「若菜？　ちょっと様子が変だよ？」

SV\_ボイスの演奏 EV16\_019 100 100 0 2

\n<若菜>「へ、変じゃないよ……！

　ただ……んんっ！　えへへ……き、キモチイイだけ……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「トランポリンが気持ちいいの？

　若菜ってば変だなぁ」

\n<晴太>「あれ、ひょっとして、若菜……」

晴太の目がきっと鋭くなり若菜を見つめる。

それは、まるで何かに気づいたような表情だった。

H7\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV16\_021 100 100 0 2

\n<若菜>「や、やだっ、ハルタ！　違うの、これは……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>（やっとかよクソ鈍感野郎が。

　それじゃあ、モヤシとおっぱいの反応でも楽しむか）

\n<晴太>「ダイエットの為にトランポリン買ったんでしょ！

　あんなにケーキ食べてたら太っちゃうもんね」

SV\_ボイスの演奏 EV16\_022 100 100 0 2

\n<若菜>「え……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「は……？」

\n<晴太>「あれ、若菜なにか言った？」

H7\_喜んでる

SV\_ボイスの演奏 EV16\_023 100 100 0 2

\n<若菜>「う、ううん……なんでもないよ！

　それより、ダイエットなんてよく分かったね……ンんっ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「ダイエットなら、もっと動いたほうがいいよ。

　ほら、こんな感じにもっと身体を上下させてさ」

H7\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV16\_024 100 100 0 2

\n<若菜>「でも、そんなことしたら声が……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「声……？」

SV\_ボイスの演奏 EV16\_025 100 100 0 2

\n<若菜>「う、ううん……なんでもない……なんでもない……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「それじゃあ、やってみてよ。

　僕がちゃんと若菜のこと見ててあげるから」

晴太の視線が一心に若菜だけに注がれる。

それだけで若菜の秘部はきゅんと気持ちが昂りをみせた。

H7\_喜んでる

SV\_ボイスの演奏 EV16\_027 100 100 0 2

\n<若菜>「う、うん……

　そ、それじゃあ……わたしのこといっぱい見ててね……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>（思ってのとは違ぇけど、これはこれでおもしれーからいいか）

若菜は意を決したようにゆっくりと腰を持ち上げると、

まるで弾むように一息に腰を下ろした。

H7\_だらしない

SV\_ボイスの演奏 EV16\_030 100 100 0 2

\n<若菜>「ンんん゛ッ！　っはぁ……！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV16\_032 100 100 0 2

\n<若菜>「んふぁあ、っくぅ、んああッ……！」

SV\_ボイスの停止 2

若菜は本当にトランポリンにでも乗っているかのように、

身体を激しく上下に動かして肉棒を深くまで突っ込む。

\n<晴太>「いいよいいよ！　若菜、その調子！」

SV\_ボイスの演奏 EV16\_033 100 100 0 2

\n<若菜>「ンんぁあ……！　これっ、すごっ、いい……！

　これじゃあ、すぐッ……ひゃあンんっ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「すごいでしょ？　うんうん、すぐに痩せられるよ！」

\n<陸也>（こんな激しくされたら、俺のほうだってもたねぇっての！）

SV\_ボイスの演奏 EV16\_036 100 100 0 2

\n<若菜>「ふぁんんッ、ハルタぁ……！

　わ、わたしのことちゃんと見ててね……っ！」

SV\_ボイスの停止 2

若菜はタガが外れたように、一心不乱に腰を打ちつける。

頭の中に浮かんでいるのは最早快楽のみだった。

\n<晴太>「心配しなくても、ちゃんと見てるよ。

　若菜が変わっていくところもちゃんと見ててあげるから！」

SV\_ボイスの演奏 EV16\_037 100 100 0 2

\n<若菜>「うん……うぅんんっ……！

　っはぁ……か、変わっちゃったわたしを見ててね……んふぁ！」

SV\_ボイスの停止 2

声には艶。漏れ出る吐息は色香を孕んだ熱を持つ。

嬌声からも若菜の絶頂が近いのは明らかだった。

SV\_ボイスの演奏 EV16\_038 100 100 0 2

\n<若菜>「んんっ、ハルタぁ……もう我慢できないよぉ……！

　イっても……ふぁっ、イってもいいよね……！？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「行っても……？　あっ、ひょっとしてトイレ我慢してた？

　そうだ、僕もトイレ行こうと思ってたんだ！　じゃあね、若菜！」

晴太はそう口にすると、窓を閉めて部屋を出ていく。

けれど、そのことにさえ気付かず若菜は快楽に喘ぐ。

SV\_ボイスの演奏 EV16\_039 100 100 0 2

\n<若菜>「うん……イクッ、イクからねッ！

　ちゃんとイクところも見ててね……！　ハルタぁ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「うっ……俺ももう限界だ……！」

SV\_ボイスの演奏 EV16\_040 100 100 0 2

\n<若菜>「わたしのイクところ……気持ち良くなっちゃってるところ……！

　全部見てぇ……！　んあぁッ、イクぅううう！」

SV\_ボイスの停止 2

H7\_射精\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV16\_041 100 100 0 2

\n<若菜>「ンんっふぁあああああああああ！」

SV\_ボイスの停止 2

どぷどぷと流し込まれる特濃の精液は、

彩乃の膣内を満たして外へと流れ出ていく。

H7\_射精\_だらしない

SV\_ボイスの演奏 EV16\_042 100 100 0 2

\n<若菜>「んはぁ……はぁはぁ……んんっく……」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV16\_043 100 100 0 2

\n<若菜>「はぁはぁ……わたし……ハルタに全部見せちゃった……

　あ、あれ……ハルタは……？」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「アイツならとっくにいねーっての。

　つーかまだセックスしてたことも気付いてねぇ」

H7\_射精\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV16\_044 100 100 0 2

\n<若菜>「そう、ですか……良かった……」

SV\_ボイスの停止 2

若菜は小さく呼吸を整えながら、

どこか気落ちしたような声を漏らす。

\n<陸也>（つーか、もう見られても平気そうだな。

　男よりチンコのほうが好きって目してるし）

\n<陸也>（もう仕上げだな……掲示板の奴も待ってるだろうし。

　次はガチでバラしに行くか）

\n<陸也>「休憩したら、明日までヤリっぱだからな。

　寝かさねーから覚悟しといてよ」

SV\_ボイスの演奏 EV16\_048 100 100 0 2

\n<若菜>「……どうせ文句言っても変わらないと思うので、

　先輩の好きにしてください……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「そう？　それじゃあ明日さ――」

H6\_EV17

H6\_感じてる

部屋の主が不在になったのをいいことに、

男女は裸で身体を繫ぎ合わせて腰を打ち付け合っていた。

\n<陸也>「もうそろそろ戻ってくるんじゃね？

　早くマンコ締めて射精させないとマズいんじゃない？」

\n<陸也>（まあ、最初からモヤシ男に見せるのが目的だけど。

　そのためにゆっくりシてやってんだから）

SV\_ボイスの演奏 EV17\_001 100 100 0 2

\n<若菜>「んんっ、そ、そんなこと言っても……

　せ、先輩が焦らして……んあッ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「せっかく晴太くんの家でシてるんだからさぁ、

　気持ちよくイキたいっしょ？」

SV\_ボイスの演奏 EV17\_002 100 100 0 2

\n<若菜>「それ、は……んんぁッ！

　なら……も、もっと激しくしてくださ……ンンぅ！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV17\_003 100 100 0 2

\n<若菜>「う、うそ……

　か、階段上がってきてる音が……んっ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「だから？」

SV\_ボイスの演奏 EV17\_004 100 100 0 2

\n<若菜>「だ、だから……んんっ、早く止めないと……

　ハルタに……見つかっちゃ……ンはぁ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「だから？　それがどうかしたの？」

SV\_ボイスの演奏 EV17\_005 100 100 0 2

\n<若菜>「だ、だって……ハルタに見つかっちゃったら……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「若菜ちゃんさぁ、晴太くんに見られたいんだろ？

　見られると気持ちよくなっちゃう変態なんだろ？」

SV\_ボイスの演奏 EV17\_006 100 100 0 2

\n<若菜>「そんな、こと……んんっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「だったら、見せてやればいいじゃん。

　そうしたら、今までで一番気持ちよくなれるんだよ？」

SV\_ボイスの演奏 EV17\_007 100 100 0 2

\n<若菜>「い、今までで……いち、ばん……んぁあ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「そうそう。ほら、ちゃんとドアのほう向いて。

　そのトロ顔見せてやれよ」

\n<陸也>（すっかりその気になってんじゃん。

　マジで人生崩壊するまで遊んでやろうかな）

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

\n<晴太>「わか、な……？」

SV\_ボイスの演奏 EV17\_010 100 100 0 2

\n<若菜>「あっ、んっ、ハルタ……！

　やあっ、見ちゃ……んふぁっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「あーあ、バレちゃった。

　だから、ここでヤるのはアブねーって言ったのに」

SV\_ボイスの演奏 EV17\_012 100 100 0 2

\n<若菜>「そ、そんな……

　先輩がここでしようって……んああっ！」

SV\_ボイスの停止 2

男はさも自分は関係ないとばかりに、

淡々と若菜の膣へと肉棒を打ち付ける。

\n<陸也>「俺のせいにすんなって。

　だって若菜ちゃん、ここでするのが一番気持ちいいんだろ？」

SV\_ボイスの演奏 EV17\_013 100 100 0 2

\n<若菜>「それは……ンふぁ、あんっ、んん……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「そういや、激しくしてほしかったんだっけ？

　悪ぃ悪ぃ、今から激しくしてやるからさッ！」

男は容赦なく若菜の膣奥に亀頭を押し付けて、

子宮に口づけを交わすように突き上げる。

SV\_ボイスの演奏 EV17\_015 100 100 0 2

\n<若菜>「ン゛お……！　んふぁ、んんっ……！

　これ、すごっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「これ……なんで……

　どうして若菜が先輩と……」

H6\_喜んでる

SV\_ボイスの演奏 EV17\_016 100 100 0 2

\n<若菜>「あっ、んんっ、ハルタ、ごめんね……！

　ごめんね……んふぁ……！」

SV\_ボイスの停止 2

好きな人を目の前にしながら、

けれど若菜は喜びにも似た表情を浮かべる。

SV\_ボイスの演奏 EV17\_017 100 100 0 2

\n<若菜>「せ、先輩に脅されて……んんぅ、仕方なく……

　わ、わたしだってこんな……んひゃあッ！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV17\_018 100 100 0 2

\n<若菜>「え、えへへ……仕方なく……

　ぜ、全部……先輩が悪いんだから……んんあっ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「若菜ちゃんってすぐ俺のせいにするよな？

　んじゃあ、もう中出ししてやらねーから」

H6\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV17\_021 100 100 0 2

\n<若菜>「そんな……んっく、ふわぁ……！

　ご、ごめんなさい……先輩……ンんんっ！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV17\_022 100 100 0 2

\n<若菜>「わ、わたしが悪かったですから……ふぅあ！

　お、お願いだから中に……んんぁっ！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「中って、そんな……若菜……？」

\n<陸也>「じゃあ、いつも通り中に出すからな！

　孕む準備しとけよ！」

男のピストンが射精を促すものへと変わる。

その激しさに若菜の頬がほころんだ。

H6\_喜んでる

SV\_ボイスの演奏 EV17\_024 100 100 0 2

\n<若菜>「んぁっ、は、はい……！

　ざ、ザーメン……ザーメンいっぱいくださいっ！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV17\_025 100 100 0 2

\n<若菜>「んんっ……わ、わたしも……もう……！

　せ、先輩……！　わたしも一緒に……んんあっ！」

SV\_ボイスの停止 2

SV\_ボイスの演奏 EV17\_026 100 100 0 2

\n<若菜>「んんっ、もう、イッっちゃ……！

　イクッ……イキます！　んんふぁああ……！」

SV\_ボイスの停止 2

H6\_射精\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV17\_027 100 100 0 2

\n<若菜>「んふぁああああああああああああ！」

SV\_ボイスの停止 2

好きな幼なじみの前にも関わらず、

若菜は盛大に喘ぎながら他の男の精子で子宮を満たす。

SV\_ボイスの演奏 EV17\_028 100 100 0 2

\n<若菜>「はぁはぁ……んはぁ……」

SV\_ボイスの停止 2

H6\_射精\_喜んでる

SV\_ボイスの演奏 EV17\_029 100 100 0 2

\n<若菜>「ハルタに……んんっく、見られちゃってるのに……

　先輩に、いっぱい中出しされちゃった……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「なに言ってんの？

　搾り取ってきたのは若菜ちゃんのマンコだろッ！」

H6\_射精\_感じてる

SV\_ボイスの演奏 EV17\_030 100 100 0 2

\n<若菜>「ンんあッ……！　やめっ、先輩……

　イッたばかりで敏感だから……ひゃあんん！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「晴太くんの前だからって生娘ぶるなって。

　若菜ちゃんはこんなんじゃ満足できないっしょッ！」

H6\_射精\_閉じ目

SV\_ボイスの演奏 EV17\_031 100 100 0 2

\n<若菜>\{「ンンぅううッ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「悪ぃ悪ぃ、そういうことだからさぁ。

　もうちょい部屋借りるわ」

\n<晴太>「え……」

\n<陸也>「なんなら晴太くんも混ぜてやろうか？

　まあ、マンコはオレ専用だけどなッ！」

SV\_ボイスの演奏 EV17\_032 100 100 0 2

\n<若菜>「ンはぁっ……！　あんっ、んんぅう！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<晴太>「ぼ、僕は……その、大丈夫です……」

\n<陸也>「あーあ。晴太くん行っちゃった。

　若菜ちゃん、幻滅されたかもね」

SV\_ボイスの演奏 EV17\_033 100 100 0 2

\n<若菜>「んんぅあ……んっ、あっ……！」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>（まだ喘いでやがる。興味なしかよ。

　まあ、そのほうが俺好みだからいいけどさ）

\n<陸也>「その様子じゃ気にしてなさそうだな。

　若菜ちゃんが孕むまではずっと俺が可愛がってやるよッ！」

H6\_射精\_喜んでる

SV\_ボイスの演奏 EV17\_034 100 100 0 2

\n<若菜>「ンあっ！　はぁ……は、はい……」

SV\_ボイスの停止 2

\n<陸也>「なあ、そろそろ決めてくんね？」

\n<若菜>「決めるって……何をですか……？」

若菜は当然のように男の前で素肌を晒しながら、

おどおどとした様子で男の言葉に耳を傾ける。

\n<陸也>「決まってんだろ。セックスだよ、セックス。

　いい加減、写真隠すのもメンドーになってきたしさぁ」

\n<若菜>「そ、それは……

　でも……結婚もしてないのに、セックスなんて……」

\n<陸也>「つか、ラブホに来ておいてそれ言う？」

\n<若菜>「そ、それは……！　先輩が、無理やり……」

\n<陸也>「若菜ちゃんの考え方は古ぃんだって。

　今時、どんな女もパコパコハメまくってるっての」

\n<陸也>「それに、若菜ちゃんもハマると思うけどなぁ。

　今までヤったどんなことより気持ちいいからさぁ」

\n<若菜>「どんなことより……気持ちいい……」

\n<若菜>（胸揉まれたのも、キスされたのも、

　て、手マンされたのだって……すごかったのに……）

\n<若菜>（そ、それより気持ちいいなんて……

　でも、そんな……そんなの……）

\n<若菜>「本当に……その……せ、セックスをしたら、

　写真を消してくれるんですよね……？」

\n<陸也>（その言葉だけでヤる気満々だって分かるっての。

　まあ、一応退けねーようにしとくか）

\n<陸也>「当然っしょ。なんなら、今消したげよっか？」

\n<若菜>「えっ……？」

男は若菜にスマホのアルバムを見せながら、

若菜の裸が映った写真をその場で消去した。

\n<陸也>「ほら、消去完了っと。

　これでいいんでしょ？」

\n<陸也>（ガチで嫌なら、ヤる前に消してくれたら、

　そのままラッキーってとんずらこくけどな）

\n<陸也>（まあ、コイツに限ってそれはねぇな。

　とっくにメスの顔してんの気付いてねぇのか？）

\n<若菜>（ほ、本当に消してくれた……

　それなら、わたしも……ちゃんとしないと……）

\n<若菜>（セックスなんて……すごくエッチで、嫌だけど……

　でも、消してもらったんだからしょうがないよね……）

\n<若菜>「わ、わかりました……

　一回だけ……一回だけセックスすればいいんですよね……？」

\n<陸也>「そうそう。それじゃあ、ヤろっか」

\n<若菜>「ンんっ、んんんんっふぅ……！」

みちみちと秘裂を押し広げていくように、

肉棒が若菜の処女膜を貫いて膣内へと侵入していく。

\n<若菜>（先輩に……わたしの初めてあげちゃった……

　ハルタじゃない人に……奪われちゃった……）

\n<陸也>「うお……処女マンコきっつ……！

　そのくせ中トロトロでマジヤベェわ……！」

\n<陸也>「どんだけ名器なんだっつーの。」

　こんなん挿れただけで出ちまいそうだわ……！」

\n<若菜>「はぁはぁ……そ、そんなこと言わないで……」

\n<若菜>（お、お腹の中が……圧迫されてるみたい……

　ずっと……おまんこ弄られてる感じがする……）

\n<若菜>（これがセックス……

　でも、これなら今までのとはあんまり……）

\n<陸也>「それじゃあ……動くよっと！」

\n<若菜>「んんお゛っ……！？」

ずぶり、と容赦なく秘部に腰が打ち付けられる。

その衝撃と快楽に若菜は低い声を上げた。

\n<若菜>（なにこれ……なにこれなにこれ……！

　今までのと……全然違う……！）

\n<若菜>（ダメ……こんなこと、しちゃったら……

　気持ち良すぎておかしくなっちゃう……！）

\n<陸也>「どう！　若菜ちゃん！

　これが若菜ちゃんのしたがってたセックスだよ！」

\n<若菜>「んふぁあッ……！　んっくぅ、んふぁあああ！」

パンパンとリズミカルに男は腰を打ち付ける。

その度に、若菜は響くような嬌声を漏らした。

\n<陸也>「さっきまで処女だったくせに……

　いきなり感じてるとか変態すぎだろ……ッ！」

\n<若菜>「ンっふぁあッ……！

　そんっ、なぁ……いきなり、激し……んんっ！」

\n<陸也>「あれ？　優しくしてほしかったの？

　激しいほうが気持ちいいんだけど？」

\n<若菜>「はぁんんっ、で、でも……

　わ、わたし……初めてなのに……んっくうぅ！」

\n<若菜>（はぁはぁ……激しくされるのすごい……

　セックスで……おまんこ馬鹿になっちゃう……！）

\n<陸也>（このマンコの気持ち良さヤベェだろ……！

　今までで断トツの名器だわ……！）

\n<陸也>（こんなん俺でも長く保たねぇわ……

　ま、何回戦もヤればいいか）

男は若菜の敏感なポイントを探るように、

突く部分を変えながら何度も出し入れを繰り返す。

\n<若菜>「んふぁ、そ、そこ……ダメ……んんあぁぅ！」

\n<陸也>「ダメってことは、ここを責めて欲しいってことね」

\n<若菜>「んぁっ、ちが、ンんんっ……！

　そこ、気持ち良すぎるからぁ……ダメ……んんぁ！」

見つけた性感帯を男は容赦なく責め立てる。

そのたびに、若菜は身体を揺らして興奮を露わにする。

\n<陸也>「ねぇ、若菜ちゃん。写真撮っていいよね？」

\n<若菜>「んっ、ふぁ……え、えっ……？」

\n<陸也>「今の若菜ちゃんスゲェエロいからさぁ。

　どうしても撮りたいんだよね」

\n<若菜>「そ、それは……んっ、あっんんっ……！」

\n<若菜>（せっかく写真を消してもらったのに……

　また撮られたら、またエッチなことさせられちゃう……）

\n<若菜>（またセックスをさせられちゃう……

　この気持ちいいことを……また、ずっと……）

\n<若菜>「……ふぅっ、んんっ……んはぁ……！」

\n<陸也>「何も言わないってことは、

　してもいいって受け取っちゃうけどいいの？」

\n<若菜>「はぁ……んんっく、っあぁ、んんぅ……！」

若菜はわざとらしく嬌声だけをあげる。

その姿に男はニヤリと口角を釣り上げた。

\n<陸也>「ホントに、若菜ちゃんは卑怯だね。

　まあ、そんなところも可愛いんだけどさッ！」

\n<若菜>「ンんんぅッ……！　はぁ、んんっ……んっ！」

男は激しさを増して腰を動かす。

それは絶頂を迎える寸前である合図だった。

\n<陸也>「あー、もうイキそうだわ……！

　若菜ちゃん、中に出すから！」

\n<若菜>「んぁっ……えっ……？　そ、それはダメです……！

　そんなことしたら、あ、赤ちゃんが……ンんんっ！」

\n<陸也>「何言ってんの！

　中出しが一番気持ちいいんだって、マジで！」

\n<若菜>「んっ、ふぅんん……！

　い、いちばん……きもちいい……んふぁっ……！」

\n<陸也>「ここまでしたんだからさぁ……

　一番気持ちいいの味わわないと損だって！」

\n<若菜>「それ、は……ンんんぁ……！」

\n<陸也>「それじゃあ、聞くけどさぁ……

　中出ししていい？　ダメならちゃんと言ってね」

\n<若菜>「そ、そんな……っふあっ、んんっ……！」

\n<若菜>（中で出すなんて……そんなこと絶対にダメ……

　赤ちゃんできちゃうかもしれないのに……）

\n<若菜>（でも、それが一番気持ちいいなら……

　い、一回くらいなら……大丈夫、だよね……？）

\n<陸也>「あー、もうマジでイキそうだわ……！」

\n<若菜>「んはぁ、んんっ、ああんっ……んっくぅう！」

\n<陸也>（中出し許可ゲット。

　それじゃあ、遠慮なくマンコに子種ぶちまけるか！）

\n<陸也>「中出しするぞ……！　あー、出る……！」

\n<若菜>「ンんっふぅぁあああああああ！」

ビクビクと痙攣する若菜の膣内に、

逆流するほどの精液が勢いよく流し込まれる。

\n<若菜>（これが中出し……

　こんな気持ちいいことがあるなんて……！）

\n<若菜>「んふぁ……はぁはぁ……んっ、はぁはぁ……」

\n<若菜>（まだドクドク流れ込んできちゃってる……

　これ、本当に赤ちゃん出来ないよね……？）

\n<陸也>「ふぅ……出した出した……」

男は最後の一滴まで精液を出し尽くしても、

なお若菜と繋がったままでいた。

\n<若菜>（まだおちんちん挿れられちゃってる……

　ザーメンが出ないようにおまんこ蓋されちゃってるみたい……）

\n<若菜>「んっ、あの、なんで……

　お、おちんちん抜かないんですか……？」

\n<陸也>「は？　まだヤるからに決まってんだろ？

　若菜ちゃんだって一回で満足なんかしてねーっしょ？」

\n<若菜>「えっ……で、でも……一回だけって……」

\n<陸也>「じゃあホントにこれで止めていいんだ？

　こんなにマンコでチンコ締め付けてきてんのにさぁ」

男の言葉に若菜の顔が耳まで真っ赤に染まる。

その実、若菜の膣内はきゅうっと竿全体を包んでいた。

\n<若菜>「そ、そんなこと……わたしは……！」

\n<陸也>「いい加減さぁ、正直になっちゃえって。

　もっとハメて欲しくてたまんねぇんだろ？」

\n<若菜>「そ、そんなこと……ないです……」

学校

校内1F

校内2F

若菜家1F&2F

家2F

家1F

お菓子屋\_内装

ラブホ

コンビニ

裏ビデオ屋

家2F

家1F

お菓子屋\_内装

ラブホ

コンビニ

裏ビデオ屋

日付スキップ

P\_CALL\_CE 13 205 7 ON

P\_CALL\_CE\_REMOVE 5

P\_CALL\_CE\_REMOVE 6

P\_CALL\_CE\_REMOVE 31

P\_CALL\_CE\_REMOVE 32

P\_CALL\_CE\_REMOVE 33

P\_CALL\_CE\_REMOVE 34

P\_CALL\_CE\_REMOVE 35

P\_CALL\_CE\_REMOVE 36

P\_CALL\_CE\_REMOVE 37

P\_CALL\_CE\_REMOVE 38

P\_CALL\_CE\_REMOVE 39

P\_CALL\_CE\_REMOVE 40

P\_CALL\_CE\_REMOVE 42

P\_CALL\_CE\_REMOVE 43

P\_CALL\_CE\_REMOVE 44

\n<晴太>「あれ……いない……

　トイレに行ってるのかな……？」

\n<若菜>「ンんんっ……！」

\n<晴太>「あれ……誰かいるのかな……？」

H6\_EV12

H6\_喜んでる

H6\_カーテン

\n<若菜>「は、ハルタ……どうしたの……？」

\n<晴太>「あれ？　若菜？

　どうしてこんなところにいるの……？」

\n<若菜>「えーっと、その、それはね……

　ほ、保健室の先生に見ててって言われてね……」

\n<晴太>「そうなんだ……って、あれ？

　大事な用事があるんじゃなかったの？」

\n<若菜>「そ、それは……も、もう終わったの！

　意外と早く終わっちゃって……えへへ……」

\n<晴太>「そうだったんだ……

　ということは、若菜はずっと保健室にいたんだよね？」

\n<若菜>「えっ、う、うん……そうだよ……」

\n<晴太>「それじゃあさ、先輩見なかった？」

H6\_だらしない

\n<若菜>「先輩……？　それってどのせんぱ――ンんぁッ！？」

\n<晴太>「若菜？　どうかしたの？」

H6\_喜んでる

\n<若菜>「えっ、んっ……な、なにが……？

　なにも……ふぅっ、な、ないよ……」

H6\_感じてる

\n<若菜>「せ、――……、――、……」

\n<晴太>「若菜……？」

H6\_喜んでる

\n<若菜>「う、ううん……！　んっ……な、なんにも……

　ふぅ、な、ないよ……えへへ……んんっ……」

\n<晴太>「なんか変な音がしない……？

　ほら、パンパンって」

\n<若菜>「んっ……え、そ、そうかな……んんっ……

　わ、わたしには聞こえないけど……！」

H6\_だらしない

\n<若菜>「ンんお゛っ……！？　んふぁああ……！」

\n<晴太>「若菜！？

　そんな声出して……まさか病気なの！？」

H6\_感じてる

\n<若菜>「んんっ、ち、違うの……んふぅっ……！

　ちょ、ちょっと……ぐ、具合が悪くて……んんっ！」

\n<晴太>「大丈夫なの、若菜？

　具合が悪いなら僕が看病してあげるから！」

\n<若菜>「んんっ、だ、ダメ……来ないで……！

　は、ハルタは……ダメ……んんっ、なの……！」

\n<晴太>「で、でも……若菜苦しそうだよ！」

H6\_感じてる

\n<若菜>「は、ハルタぁ……お、おねがいが……んんっ！

　おねがいが……あるの……んふぅ……！」

\n<若菜>「ほ、保健室の……せ、先生を……んんっく……！

　よ、呼んできて……はぁ、く、くれないかな……？」

\n<晴太>「わ、分かった！　すぐに呼んでくるから！

　頑張ってね、若菜！」

\n<晴太>「若菜、先生はあとから――」

\n<晴太>「あれ、若菜……？」

P\_CALL\_CE 12 6 7 ON

P\_CALL\_CE 13 205 7 ON

\n<晴太>「っと、その前にトイレトイレ。

　おしっこしたくなってきちゃった」

\n<晴太>「トイレっ♪　トイレっ♪」

\n<晴太>「あれ、若菜だ。何してるんだろう？」

\n<晴太>「若菜ー！　おはよー！」

\n<晴太>「あれ？　わか――」

H7\_室内

H7\_喜んでる

H7\_窓

\n<若菜>「お、おはよう……ハルタ……！」

\n<晴太>「おはよう。ふぁ～あ、まだ眠いや」

\n<若菜>「あ、あはは……ハルタにしては朝が早――い゛んんっ！？」

\n<晴太>「ねぇ、若菜。なんでそんなに揺れてるの？」

H7\_感じてる

\n<若菜>「えっ？　えっと……」

H7\_喜んでる

\n<若菜>「そ、それは……んんっ、その……と、トランポリン！

　トランポリンに乗ってるの！」

\n<晴太>「そんなの若菜の家にあったっけ？」

\n<若菜>「あ、最近買ったの……んあっ！」

\n<晴太>「若菜？　ちょっと様子が変だよ？」

\n<若菜>「へ、変じゃないよ……！

　ただ……んんっ！　えへへ……き、キモチイイだけ……」

\n<晴太>「トランポリンが気持ちいいの？

　若菜ってば変だなぁ」

\n<晴太>「あれ、ひょっとして、若菜……」

H7\_感じてる

\n<若菜>「や、やだっ、ハルタ！　違うの、これは……！」

\n<晴太>「ダイエットの為にトランポリン買ったんでしょ！

　あんなにケーキ食べてたら太っちゃうもんね」

\n<若菜>「え……？」

\n<晴太>「あれ、若菜なにか言った？」

H7\_喜んでる

\n<若菜>「う、ううん……なんでもないよ！

　それより、ダイエットなんてよく分かったね……ンんっ！」

\n<晴太>「ダイエットなら、もっと動いたほうがいいよ。

　ほら、こんな感じにもっと身体を上下させてさ」

H7\_感じてる

\n<若菜>「でも、そんなことしたら声が……」

\n<晴太>「声……？」

\n<若菜>「う、ううん……なんでもない……なんでもない……」

\n<晴太>「それじゃあ、やってみてよ。

　僕がちゃんと若菜のこと見ててあげるから」

H7\_喜んでる

\n<若菜>「う、うん……

　そ、それじゃあ……わたしのこといっぱい見ててね……？」

H7\_だらしない

\n<若菜>「ンんん゛ッ！　っはぁ……！」

\n<若菜>「んふぁあ、っくぅ、んああッ……！」

\n<晴太>「いいよいいよ！　若菜、その調子！」

\n<若菜>「ンんぁあ……！　これっ、すごっ、いい……！

　これじゃあ、すぐッ……ひゃあンんっ！」

\n<晴太>「すごいでしょ？　うんうん、すぐに痩せられるよ！」

\n<若菜>「ふぁんんッ、ハルタぁ……！

　わ、わたしのことちゃんと見ててね……っ！」

\n<晴太>「心配しなくても、ちゃんと見てるよ。

　若菜が変わっていくところもちゃんと見ててあげるから！」

\n<若菜>「うん……うぅんんっ……！

　っはぁ……か、変わっちゃったわたしを見ててね……んふぁ！」

\n<若菜>「んんっ、ハルタぁ……もう我慢できないよぉ……！

　イっても……ふぁっ、イってもいいよね……！？」

\n<晴太>「行っても……？　あっ、ひょっとしてトイレ我慢してた？

　そうだ、僕もトイレ行こうと思ってたんだ！　じゃあね、若菜！」

\n<晴太>「なんだか今日の若菜……ちょっとエロいかも……」

\n<晴太>「……今日は家でオナニーでもしてようかな」

\n<晴太>「わか、な……？」

H6\_EV17

H6\_感じてる

\n<若菜>「あっ、んっ、ハルタ……！

　やあっ、見ちゃ……んふぁっ……！」

\n<陸也>「あーあ、バレちゃった。

　だから、ここでヤるのはアブねーって言ったのに」

\n<若菜>「そ、そんな……

　先輩がここでしようって……んああっ！」

\n<陸也>「俺のせいにすんなって。

　だって若菜ちゃん、ここでするのが一番気持ちいいんだろ？」

\n<若菜>「それは……ンふぁ、あんっ、んん……！」

\n<晴太>「これ……なんで……

　どうして若菜が先輩と……」

H6\_喜んでる

\n<若菜>「あっ、んんっ、ハルタ、ごめんね……！

　ごめんね……んふぁ……！」

\n<若菜>「せ、先輩に脅されて……んんぅ、仕方なく……

　わ、わたしだってこんな……んひゃあッ！」

\n<若菜>「え、えへへ……仕方なく……

　ぜ、全部……先輩が悪いんだから……んんあっ！」

\n<陸也>「若菜ちゃんってすぐ俺のせいにするよな？

　んじゃあ、もう中出ししてやらねーから」

H6\_感じてる

\n<若菜>「そんな……んっく、ふわぁ……！

　ご、ごめんなさい……先輩……ンんんっ！」

\n<若菜>「わ、わたしが悪かったですから……ふぅあ！

　お、お願いだから中に……んんぁっ！」

\n<晴太>「中って、そんな……若菜……？」

\n<陸也>「じゃあ、いつも通り中に出すからな！

　孕む準備しとけよ！」

H6\_喜んでる

\n<若菜>「んぁっ、は、はい……！

　ざ、ザーメン……ザーメンいっぱいくださいっ！」

\n<若菜>「んんっ……わ、わたしも……もう……！

　せ、先輩……！　わたしも一緒に……んんあっ！」

\n<若菜>「んんっ、もう、イッっちゃ……！

　イクッ……イキます！　んんふぁああ……！」

H6\_射精\_閉じ目

\n<若菜>「んふぁああああああああああああ！」

\n<若菜>「はぁはぁ……んはぁ……」

H6\_射精\_喜んでる

\n<若菜>「ハルタに……んんっく、見られちゃってるのに……

　先輩に、いっぱい中出しされちゃった……」

\n<陸也>「なに言ってんの？

　搾り取ってきたのは若菜ちゃんのマンコだろッ！」

H6\_射精\_感じてる

\n<若菜>「ンんあッ……！　やめっ、先輩……

　イッたばかりで敏感だから……ひゃあんん！」

\n<陸也>「晴太くんの前だからって生娘ぶるなって。

　若菜ちゃんはこんなんじゃ満足できないっしょッ！」

H6\_射精\_閉じ目

\n<若菜>\{「ンンぅううッ……！」

\n<陸也>「悪ぃ悪ぃ、そういうことだからさぁ。

　もうちょい部屋借りるわ」

\n<晴太>「え……」

\n<陸也>「なんなら晴太くんも混ぜてやろうか？

　まあ、マンコはオレ専用だけどなッ！」

\n<若菜>「ンはぁっ……！　あんっ、んんぅう！」

\n<晴太>「ぼ、僕は……その、大丈夫です……」

\n<晴太>（それからのことは、あまり覚えていない）

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「おはよう。今日もいい天気だねぇ。

　ちゃんと朝ご飯は食べた？」

\n<晴太>「僕は朝ごはん食べない派だから」

立ち絵\_服\_困り

\n<若菜>「もう。そんなこと言ってると大きくなれないよ」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「う～ん♪

　今日も朝ごはんは美味しいよ」

\n<晴太>「若菜って本当にたくさん食べるよね」

\n<若菜>「うん。だってこんなにも美味しいんだもん。

　いっぱい食べないともったいないよ」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「目玉焼きとベーコンをパンにはさんで……

　若菜サンドのできあがり」

\n<晴太>「若菜サンドって言う割にはオリジナリティがないよね」

\n<若菜>「美味しければいいんだよ。

　う～ん、若菜サンド美味しい」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「晴太もちゃんと朝ごはん食べないとだよ。

　お母さん、今留守にしてるんでしょ？」

\n<晴太>「朝ごはんはいいよ。

　昼も夜も……カップ麺があるし」

\n<若菜>「もう……良かったら、わたしが作ってあげるよ。

　食べたいものがあったら何でも言ってね」

立ち絵\_服\_笑顔

\n<若菜>「ん～、おいし～い♪

　ケーキもお店も大好きだよ～！」

\n<晴太>「若菜って美味しそうに食べるよね」

\n<若菜>「美味しそうじゃないよ。美味しいんだよ。

　ほっぺた落ちちゃいそう」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「ショートケーキかチョコケーキか……

　う～ん、どっちから食べようかなぁ」

\n<晴太>「どっちでもいいんじゃない？

　どっちにしろ両方食べるんだから」

\n<若菜>「もう、ハルタは分かってないなぁ。

　これはとっても大事なことなんだから」

立ち絵\_服\_笑顔

\n<若菜>「マカロンはっ♪　美味しいなっ♪

　まっかろん、まっかろん♪」

\n<晴太>「若菜、その歌なに？」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「もちろん、マカロンの曲だよ。

　まかまかまっかろん♪　おいしいなっ♪」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「お菓子ならたくさん食べられるよ。

　いつかこの店のケーキ全部食べたいなぁ」

\n<晴太>「そんなに食べたら太るよ」

立ち絵\_服\_困り

\n<若菜>「もう、なんでそんなこと言うの。

　最近お肉付いてきちゃったの気にしてるんだから……」

立ち絵\_服\_目閉じ

\n<若菜>「ここにいると落ち着くなぁ。

　ほら、子どもの頃に戻ったみたい」

\n<晴太>「本当にここが好きだよね。僕も好きだけど」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「えへへ。このブランコも大好き。

　ずっと乗ってられるよ」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「子どもの頃はよく競争したよね。

　ブランコでどっちが高く漕げるか……とか」

\n<晴太>「そうだったね。若菜って意外と強いんだから」

\n<若菜>「えへへ。ブランコ大好きだもん。

　ハルタには負けないよぉ」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「夕方にいるのが一番好きだなぁ。

　ほら、子どもがいる時だと不審者だと思われちゃうから」

\n<晴太>「若菜が不審者？

　むしろ、子どもと間違われるんじゃない？」

立ち絵\_服\_困り

\n<若菜>「もう、すぐそうやってバカにする。

　わたしだってもう大人なんだから」

立ち絵\_服\_通常

\n<若菜>「ここにいるとね、神社から鐘の音が聞こえるんだよ。

　それを聞くとなんだかほっとするの」

\n<晴太>「若菜ってば、お年寄りみたいだね」

\n<若菜>「むう。ハルタだってお線香の匂い好きって言ってたのに。

　だったら、ハルタもお年寄りだもん」

P\_CALL\_CE\_REMOVE 5

P\_CALL\_CE\_REMOVE 6

P\_CALL\_CE\_REMOVE 31

P\_CALL\_CE\_REMOVE 32

P\_CALL\_CE\_REMOVE 33

P\_CALL\_CE\_REMOVE 34

P\_CALL\_CE\_REMOVE 35

P\_CALL\_CE\_REMOVE 36

P\_CALL\_CE\_REMOVE 37

P\_CALL\_CE\_REMOVE 38

P\_CALL\_CE\_REMOVE 39

P\_CALL\_CE\_REMOVE 40

P\_CALL\_CE\_REMOVE 42

P\_CALL\_CE\_REMOVE 43

P\_CALL\_CE\_REMOVE 44

$gameVariables.setValue(34, '7月25日');

$gameVariables.setValue(35, 'のこり 30日');

$gameVariables.setValue(34, '7月26日');

$gameVariables.setValue(35, 'のこり 29日');

$gameVariables.setValue(34, '7月27日');

$gameVariables.setValue(35, 'のこり 28日');

$gameVariables.setValue(34, '7月28日');

$gameVariables.setValue(35, 'のこり 27日');

$gameVariables.setValue(34, '7月29日');

$gameVariables.setValue(35, 'のこり 26日');

$gameVariables.setValue(34, '7月30日');

$gameVariables.setValue(35, 'のこり 25日');

$gameVariables.setValue(34, '7月31日');

$gameVariables.setValue(35, 'のこり 24日');

$gameVariables.setValue(34, '8月1日');

$gameVariables.setValue(35, 'のこり 23日');

$gameVariables.setValue(34, '8月2日');

$gameVariables.setValue(35, 'のこり 22日');

$gameVariables.setValue(34, '8月3日');

$gameVariables.setValue(35, 'のこり 21日');

$gameVariables.setValue(34, '8月4日');

$gameVariables.setValue(35, 'のこり 20日');

$gameVariables.setValue(34, '8月5日');

$gameVariables.setValue(35, 'のこり 19日');

$gameVariables.setValue(34, '8月6日');

$gameVariables.setValue(35, 'のこり 18日');

$gameVariables.setValue(34, '8月7日');

$gameVariables.setValue(35, 'のこり 17日');

$gameVariables.setValue(34, '8月8日');

$gameVariables.setValue(35, 'のこり 16日');

$gameVariables.setValue(34, '8月9日');

$gameVariables.setValue(35, 'のこり 15日');

$gameVariables.setValue(34, '8月10日');

$gameVariables.setValue(35, 'のこり 14日');

$gameVariables.setValue(34, '8月11日');

$gameVariables.setValue(35, 'のこり 13日');

$gameVariables.setValue(34, '8月12日');

$gameVariables.setValue(35, 'のこり 12日');

$gameVariables.setValue(34, '8月13日');

$gameVariables.setValue(35, 'のこり 11日');

$gameVariables.setValue(34, '8月14日');

$gameVariables.setValue(35, 'のこり 10日');

$gameVariables.setValue(34, '8月15日');

$gameVariables.setValue(35, 'のこり 9日');

$gameVariables.setValue(34, '8月16日');

$gameVariables.setValue(35, 'のこり 8日');

$gameVariables.setValue(34, '8月17日');

$gameVariables.setValue(35, 'のこり 7日');

$gameVariables.setValue(34, '8月18日');

$gameVariables.setValue(35, 'のこり 6日');

$gameVariables.setValue(34, '8月19日');

$gameVariables.setValue(35, 'のこり 5日');

$gameVariables.setValue(34, '8月20日');

$gameVariables.setValue(35, 'のこり 4日');

$gameVariables.setValue(34, '8月21日');

$gameVariables.setValue(35, 'のこり 3日');

$gameVariables.setValue(34, '8月22日');

$gameVariables.setValue(35, 'のこり 2日');

$gameVariables.setValue(34, '8月23日');

$gameVariables.setValue(35, 'のこり 1日');

$gameVariables.setValue(34, '8月24日');

$gameVariables.setValue(35, 'のこり 0日');

P\_CALL\_CE\_REMOVE 4

P\_CALL\_CE\_REMOVE 4

日記\_なにもなし

日記\_イベント1

日記\_告白イベント1

日記\_なにもなし

日記\_イベント1

日記\_イベント2

日記\_告白イベント1

日記\_告白イベント2

日記\_告白イベント3

日記\_なにもなし

日記\_イベント1

日記\_イベント2

日記\_イベント3

日記\_告白イベント1

日記\_告白イベント2

日記\_告白イベント3

日記\_なにもなし

日記\_イベント1

日記\_イベント2

日記\_イベント3

日記\_イベント4

日記\_Hイベント1

日記\_告白イベント1

日記\_告白イベント2

日記\_告白イベント3

日記\_なにもなし

日記\_イベント1

日記\_イベント2

日記\_イベント3

日記\_イベント4

日記\_イベント5if

日記\_イベント5

日記\_Hイベント1

日記\_Hイベント2

日記\_告白イベント1

日記\_告白イベント2

日記\_告白イベント3

日記\_なにもなし

日記\_イベント1

日記\_イベント2

日記\_イベント3

日記\_イベント4

日記\_イベント5if

日記\_イベント5

日記\_イベント6

日記\_Hイベント1

日記\_Hイベント2

日記\_Hイベント3

日記\_告白イベント1

日記\_告白イベント2

日記\_告白イベント3

日記\_なにもなし

日記\_イベント1

日記\_イベント2

日記\_イベント3

日記\_イベント4

日記\_イベント5if

日記\_イベント5

日記\_イベント6

日記\_イベント7if

日記\_イベント7

日記\_Hイベント1

日記\_Hイベント2

日記\_Hイベント3

日記\_Hイベント4

日記\_告白イベント1

日記\_告白イベント2

日記\_告白イベント3

日記\_なにもなし

日記\_イベント1

日記\_イベント2

日記\_イベント3

日記\_イベント4

日記\_イベント5if

日記\_イベント5

日記\_イベント6

日記\_イベント7if

日記\_イベント7

日記\_イベント8if

日記\_イベント8

日記\_Hイベント1

日記\_Hイベント2

日記\_Hイベント3

日記\_Hイベント4

日記\_Hイベント5

日記\_告白イベント1

日記\_告白イベント2

日記\_告白イベント3

日記\_なにもなし

日記\_イベント1

日記\_イベント2

日記\_イベント3

日記\_イベント4

日記\_イベント5if

日記\_イベント5

日記\_イベント6

日記\_イベント7if

日記\_イベント7

日記\_イベント8if

日記\_イベント8

日記\_イベント9if

日記\_イベント9

日記\_Hイベント1

日記\_Hイベント2

日記\_Hイベント3

日記\_Hイベント4

日記\_Hイベント5

日記\_Hイベント6

日記\_告白イベント1

日記\_告白イベント2

日記\_告白イベント3

日記\_なにもなし

日記\_イベント1

日記\_イベント2

日記\_イベント3

日記\_イベント4

日記\_イベント5if

日記\_イベント5

日記\_イベント6

日記\_イベント7if

日記\_イベント7

日記\_イベント8if

日記\_イベント8

日記\_イベント9if

日記\_イベント9

日記\_イベント10if

日記\_イベント10

日記\_Hイベント1

日記\_Hイベント2

日記\_Hイベント3

日記\_Hイベント4

日記\_Hイベント5

日記\_Hイベント6

日記\_Hイベント7

日記\_告白イベント1

日記\_告白イベント2

日記\_告白イベント3

日記\_なにもなし

日記\_イベント1

日記\_イベント2

日記\_イベント3

日記\_イベント4

日記\_イベント5if

日記\_イベント5

日記\_イベント6

日記\_イベント7if

日記\_イベント7

日記\_イベント8if

日記\_イベント8

日記\_イベント9if

日記\_イベント9

日記\_イベント10if

日記\_イベント10

日記\_イベント11if

日記\_イベント11

日記\_Hイベント1

日記\_Hイベント2

日記\_Hイベント3

日記\_Hイベント4

日記\_Hイベント5

日記\_Hイベント6

日記\_Hイベント7

日記\_Hイベント8

日記\_告白イベント1

日記\_告白イベント2

日記\_告白イベント3

日記\_なにもなし

日記\_イベント1

日記\_イベント2

日記\_イベント3

日記\_イベント4

日記\_イベント5if

日記\_イベント5

日記\_イベント6

日記\_イベント7if

日記\_イベント7

日記\_イベント8if

日記\_イベント8

日記\_イベント9if

日記\_イベント9

日記\_イベント10if

日記\_イベント10

日記\_イベント11if

日記\_イベント11

日記\_イベント12if

日記\_イベント12

日記\_Hイベント1

日記\_Hイベント2

日記\_Hイベント3

日記\_Hイベント4

日記\_Hイベント5

日記\_Hイベント6

日記\_Hイベント7

日記\_Hイベント8

日記\_Hイベント9

日記\_告白イベント1

日記\_告白イベント2

日記\_告白イベント3

日記\_なにもなし

日記\_イベント1

日記\_イベント2

日記\_イベント3

日記\_イベント4

日記\_イベント5if

日記\_イベント5

日記\_イベント6

日記\_イベント7if

日記\_イベント7

日記\_イベント8if

日記\_イベント8

日記\_イベント9if

日記\_イベント9

日記\_イベント10if

日記\_イベント10

日記\_イベント11if

日記\_イベント11

日記\_イベント12if

日記\_イベント12

日記\_イベント13if

日記\_イベント13

日記\_Hイベント1

日記\_Hイベント2

日記\_Hイベント3

日記\_Hイベント4

日記\_Hイベント5

日記\_Hイベント6

日記\_Hイベント7

日記\_Hイベント8

日記\_Hイベント9

日記\_Hイベント10

日記\_告白イベント1

日記\_告白イベント2

日記\_告白イベント3

日記\_なにもなし

日記\_イベント1

日記\_イベント2

日記\_イベント3

日記\_イベント4

日記\_イベント5if

日記\_イベント5

日記\_イベント6

日記\_イベント7if

日記\_イベント7

日記\_イベント8if

日記\_イベント8

日記\_イベント9if

日記\_イベント9

日記\_イベント10if

日記\_イベント10

日記\_イベント11if

日記\_イベント11

日記\_イベント12if

日記\_イベント12

日記\_イベント13if

日記\_イベント13

日記\_イベント14if

日記\_イベント14

日記\_Hイベント1

日記\_Hイベント2

日記\_Hイベント3

日記\_Hイベント4

日記\_Hイベント5

日記\_Hイベント6

日記\_Hイベント7

日記\_Hイベント8

日記\_Hイベント9

日記\_Hイベント10

日記\_Hイベント11

日記\_告白イベント1

日記\_告白イベント2

日記\_告白イベント3

日記\_なにもなし

日記\_イベント1

日記\_イベント2

日記\_イベント3

日記\_イベント4

日記\_イベント5if

日記\_イベント5

日記\_イベント6

日記\_イベント7if

日記\_イベント7

日記\_イベント8if

日記\_イベント8

日記\_イベント9if

日記\_イベント9

日記\_イベント10if

日記\_イベント10

日記\_イベント11if

日記\_イベント11

日記\_イベント12if

日記\_イベント12

日記\_イベント13if

日記\_イベント13

日記\_イベント14if

日記\_イベント14

日記\_イベント15if

日記\_イベント15if2

日記\_イベント15

日記\_Hイベント1

日記\_Hイベント2

日記\_Hイベント3

日記\_Hイベント4

日記\_Hイベント5

日記\_Hイベント6

日記\_Hイベント7

日記\_Hイベント8

日記\_Hイベント9

日記\_Hイベント10

日記\_Hイベント11

日記\_Hイベント12

日記\_告白イベント1

日記\_告白イベント2

日記\_告白イベント3

日記\_なにもなし

日記\_イベント1

日記\_イベント2

日記\_イベント3

日記\_イベント4

日記\_イベント5if

日記\_イベント5

日記\_イベント6

日記\_イベント7if

日記\_イベント7

日記\_イベント8if

日記\_イベント8

日記\_イベント9if

日記\_イベント9

日記\_イベント10if

日記\_イベント10

日記\_イベント11if

日記\_イベント11

日記\_イベント12if

日記\_イベント12

日記\_イベント13if

日記\_イベント13

日記\_イベント14if

日記\_イベント14

日記\_イベント15if

日記\_イベント15if2

日記\_イベント15

日記\_イベント16if

日記\_イベント16

日記\_Hイベント1

日記\_Hイベント2

日記\_Hイベント3

日記\_Hイベント4

日記\_Hイベント5

日記\_Hイベント6

日記\_Hイベント7

日記\_Hイベント8

日記\_Hイベント9

日記\_Hイベント10

日記\_Hイベント11

日記\_Hイベント12

日記\_Hイベント13

日記\_告白イベント1

日記\_告白イベント2

日記\_告白イベント3

日記\_なにもなし

日記\_イベント1

日記\_イベント2

日記\_イベント3

日記\_イベント4

日記\_イベント5if

日記\_イベント5

日記\_イベント6

日記\_イベント7if

日記\_イベント7

日記\_イベント8if

日記\_イベント8

日記\_イベント9if

日記\_イベント9

日記\_イベント10if

日記\_イベント10

日記\_イベント11if

日記\_イベント11

日記\_イベント12if

日記\_イベント12

日記\_イベント13if

日記\_イベント13

日記\_イベント14if

日記\_イベント14

日記\_イベント15if

日記\_イベント15if2

日記\_イベント15

日記\_イベント16if

日記\_イベント16

日記\_イベント17if

日記\_イベント17

日記\_Hイベント1

日記\_Hイベント2

日記\_Hイベント3

日記\_Hイベント4

日記\_Hイベント5

日記\_Hイベント6

日記\_Hイベント7

日記\_Hイベント8

日記\_Hイベント9

日記\_Hイベント10

日記\_Hイベント11

日記\_Hイベント12

日記\_Hイベント13

日記\_Hイベント14

日記\_告白イベント1

日記\_告白イベント2

日記\_告白イベント3

日記\_なにもなし

日記\_イベント1

日記\_イベント2

日記\_イベント3

日記\_イベント4

日記\_イベント5if

日記\_イベント5

日記\_イベント6

日記\_イベント7if

日記\_イベント7

日記\_イベント8if

日記\_イベント8

日記\_イベント9if

日記\_イベント9

日記\_イベント10if

日記\_イベント10

日記\_イベント11if

日記\_イベント11

日記\_イベント12if

日記\_イベント12

日記\_イベント13if

日記\_イベント13

日記\_イベント14if

日記\_イベント14

日記\_イベント15if

日記\_イベント15if2

日記\_イベント15

日記\_イベント16if

日記\_イベント16

日記\_イベント17if

日記\_イベント17

日記\_イベント18if

日記\_イベント18

日記\_Hイベント1

日記\_Hイベント2

日記\_Hイベント3

日記\_Hイベント4

日記\_Hイベント5

日記\_Hイベント6

日記\_Hイベント7

日記\_Hイベント8

日記\_Hイベント9

日記\_Hイベント10

日記\_Hイベント11

日記\_Hイベント12

日記\_Hイベント13

日記\_Hイベント14

日記\_Hイベント15

日記\_告白イベント1

日記\_告白イベント2

日記\_告白イベント3

日記\_なにもなし

日記\_イベント1

日記\_イベント2

日記\_イベント3

日記\_イベント4

日記\_イベント5if

日記\_イベント5

日記\_イベント6

日記\_イベント7if

日記\_イベント7

日記\_イベント8if

日記\_イベント8

日記\_イベント9if

日記\_イベント9

日記\_イベント10if

日記\_イベント10

日記\_イベント11if

日記\_イベント11

日記\_イベント12if

日記\_イベント12

日記\_イベント13if

日記\_イベント13

日記\_イベント14if

日記\_イベント14

日記\_イベント15if

日記\_イベント15if2

日記\_イベント15

日記\_イベント16if

日記\_イベント16

日記\_イベント17if

日記\_イベント17

日記\_イベント18if

日記\_イベント18

日記\_イベント19if

日記\_イベント19

日記\_Hイベント1

日記\_Hイベント2

日記\_Hイベント3

日記\_Hイベント4

日記\_Hイベント5

日記\_Hイベント6

日記\_Hイベント7

日記\_Hイベント8

日記\_Hイベント9

日記\_Hイベント10

日記\_Hイベント11

日記\_Hイベント12

日記\_Hイベント13

日記\_Hイベント14

日記\_Hイベント15

日記\_Hイベント16

日記\_告白イベント1

日記\_告白イベント2

日記\_告白イベント3

日記\_なにもなし

日記\_イベント1

日記\_イベント2

日記\_イベント3

日記\_イベント4

日記\_イベント5if

日記\_イベント5

日記\_イベント6

日記\_イベント7if

日記\_イベント7

日記\_イベント8if

日記\_イベント8

日記\_イベント9if

日記\_イベント9

日記\_イベント10if

日記\_イベント10

日記\_イベント11if

日記\_イベント11

日記\_イベント12if

日記\_イベント12

日記\_イベント13if

日記\_イベント13

日記\_イベント14if

日記\_イベント14

日記\_イベント15if

日記\_イベント15if2

日記\_イベント15

日記\_イベント16if

日記\_イベント16

日記\_イベント17if

日記\_イベント17

日記\_イベント18if

日記\_イベント18

日記\_イベント19if

日記\_イベント19

日記\_イベント20if

日記\_イベント20

日記\_Hイベント1

日記\_Hイベント2

日記\_Hイベント3

日記\_Hイベント4

日記\_Hイベント5

日記\_Hイベント6

日記\_Hイベント7

日記\_Hイベント8

日記\_Hイベント9

日記\_Hイベント10

日記\_Hイベント11

日記\_Hイベント12

日記\_Hイベント13

日記\_Hイベント14

日記\_Hイベント15

日記\_Hイベント16

日記\_Hイベント17

日記\_告白イベント1

日記\_告白イベント2

日記\_告白イベント3

日記\_なにもなし

日記\_イベント1

日記\_イベント2

日記\_イベント3

日記\_イベント4

日記\_イベント5if

日記\_イベント5

日記\_イベント6

日記\_イベント7if

日記\_イベント7

日記\_イベント8if

日記\_イベント8

日記\_イベント9if

日記\_イベント9

日記\_イベント10if

日記\_イベント10

日記\_イベント11if

日記\_イベント11

日記\_イベント12if

日記\_イベント12

日記\_イベント13if

日記\_イベント13

日記\_イベント14if

日記\_イベント14

日記\_イベント15if

日記\_イベント15if2

日記\_イベント15

日記\_イベント16if

日記\_イベント16

日記\_イベント17if

日記\_イベント17

日記\_イベント18if

日記\_イベント18

日記\_イベント19if

日記\_イベント19

日記\_イベント20if

日記\_イベント20

日記\_イベント21

日記\_Hイベント1

日記\_Hイベント2

日記\_Hイベント3

日記\_Hイベント4

日記\_Hイベント5

日記\_Hイベント6

日記\_Hイベント7

日記\_Hイベント8

日記\_Hイベント9

日記\_Hイベント10

日記\_Hイベント11

日記\_Hイベント12

日記\_Hイベント13

日記\_Hイベント14

日記\_Hイベント15

日記\_Hイベント16

日記\_Hイベント17

日記\_告白イベント1

日記\_告白イベント2

日記\_告白イベント3

日記\_なにもなし

日記\_イベント1

日記\_イベント2

日記\_イベント3

日記\_イベント4

日記\_イベント5if

日記\_イベント5

日記\_イベント6

日記\_イベント7if

日記\_イベント7

日記\_イベント8if

日記\_イベント8

日記\_イベント9if

日記\_イベント9

日記\_イベント10if

日記\_イベント10

日記\_イベント11if

日記\_イベント11

日記\_イベント12if

日記\_イベント12

日記\_イベント13if

日記\_イベント13

日記\_イベント14if

日記\_イベント14

日記\_イベント15if

日記\_イベント15if2

日記\_イベント15

日記\_イベント16if

日記\_イベント16

日記\_イベント17if

日記\_イベント17

日記\_イベント18if

日記\_イベント18

日記\_イベント19if

日記\_イベント19

日記\_イベント20if

日記\_イベント20

日記\_イベント21

日記\_イベント22

日記\_Hイベント1

日記\_Hイベント2

日記\_Hイベント3

日記\_Hイベント4

日記\_Hイベント5

日記\_Hイベント6

日記\_Hイベント7

日記\_Hイベント8

日記\_Hイベント9

日記\_Hイベント10

日記\_Hイベント11

日記\_Hイベント12

日記\_Hイベント13

日記\_Hイベント14

日記\_Hイベント15

日記\_Hイベント16

日記\_Hイベント17

日記\_告白イベント1

日記\_告白イベント2

日記\_告白イベント3

日記\_なにもなし

日記\_イベント1

日記\_イベント2

日記\_イベント3

日記\_イベント4

日記\_イベント5if

日記\_イベント5

日記\_イベント6

日記\_イベント7if

日記\_イベント7

日記\_イベント8if

日記\_イベント8

日記\_イベント9if

日記\_イベント9

日記\_イベント10if

日記\_イベント10

日記\_イベント11if

日記\_イベント11

日記\_イベント12if

日記\_イベント12

日記\_イベント13if

日記\_イベント13

日記\_イベント14if

日記\_イベント14

日記\_イベント15if

日記\_イベント15if2

日記\_イベント15

日記\_イベント16if

日記\_イベント16

日記\_イベント17if

日記\_イベント17

日記\_イベント18if

日記\_イベント18

日記\_イベント19if

日記\_イベント19

日記\_イベント20if

日記\_イベント20

日記\_イベント21

日記\_イベント22

日記\_イベント23

日記\_Hイベント1

日記\_Hイベント2

日記\_Hイベント3

日記\_Hイベント4

日記\_Hイベント5

日記\_Hイベント6

日記\_Hイベント7

日記\_Hイベント8

日記\_Hイベント9

日記\_Hイベント10

日記\_Hイベント11

日記\_Hイベント12

日記\_Hイベント13

日記\_Hイベント14

日記\_Hイベント15

日記\_Hイベント16

日記\_Hイベント17

日記\_告白イベント1

日記\_告白イベント2

日記\_告白イベント3

日記\_なにもなし

日記\_イベント1

日記\_イベント2

日記\_イベント3

日記\_イベント4

日記\_イベント5if

日記\_イベント5

日記\_イベント6

日記\_イベント7if

日記\_イベント7

日記\_イベント8if

日記\_イベント8

日記\_イベント9if

日記\_イベント9

日記\_イベント10if

日記\_イベント10

日記\_イベント11if

日記\_イベント11

日記\_イベント12if

日記\_イベント12

日記\_イベント13if

日記\_イベント13

日記\_イベント14if

日記\_イベント14

日記\_イベント15if

日記\_イベント15if2

日記\_イベント15

日記\_イベント16if

日記\_イベント16

日記\_イベント17if

日記\_イベント17

日記\_イベント18if

日記\_イベント18

日記\_イベント19if

日記\_イベント19

日記\_イベント20if

日記\_イベント20

日記\_イベント21

日記\_イベント22

日記\_イベント23

日記\_イベント24

日記\_Hイベント1

日記\_Hイベント2

日記\_Hイベント3

日記\_Hイベント4

日記\_Hイベント5

日記\_Hイベント6

日記\_Hイベント7

日記\_Hイベント8

日記\_Hイベント9

日記\_Hイベント10

日記\_Hイベント11

日記\_Hイベント12

日記\_Hイベント13

日記\_Hイベント14

日記\_Hイベント15

日記\_Hイベント16

日記\_Hイベント17

日記\_告白イベント1

日記\_告白イベント2

日記\_告白イベント3

日記\_なにもなし

日記\_イベント1

日記\_イベント2

日記\_イベント3

日記\_イベント4

日記\_イベント5if

日記\_イベント5

日記\_イベント6

日記\_イベント7if

日記\_イベント7

日記\_イベント8if

日記\_イベント8

日記\_イベント9if

日記\_イベント9

日記\_イベント10if

日記\_イベント10

日記\_イベント11if

日記\_イベント11

日記\_イベント12if

日記\_イベント12

日記\_イベント13if

日記\_イベント13

日記\_イベント14if

日記\_イベント14

日記\_イベント15if

日記\_イベント15if2

日記\_イベント15

日記\_イベント16if

日記\_イベント16

日記\_イベント17if

日記\_イベント17

日記\_イベント18if

日記\_イベント18

日記\_イベント19if

日記\_イベント19

日記\_イベント20if

日記\_イベント20

日記\_イベント21

日記\_イベント22

日記\_イベント23

日記\_イベント24

日記\_イベント25

日記\_Hイベント1

日記\_Hイベント2

日記\_Hイベント3

日記\_Hイベント4

日記\_Hイベント5

日記\_Hイベント6

日記\_Hイベント7

日記\_Hイベント8

日記\_Hイベント9

日記\_Hイベント10

日記\_Hイベント11

日記\_Hイベント12

日記\_Hイベント13

日記\_Hイベント14

日記\_Hイベント15

日記\_Hイベント16

日記\_Hイベント17

日記\_告白イベント1

日記\_告白イベント2

日記\_告白イベント3

日記\_なにもなし

日記\_イベント1

日記\_イベント2

日記\_イベント3

日記\_イベント4

日記\_イベント5if

日記\_イベント5

日記\_イベント6

日記\_イベント7if

日記\_イベント7

日記\_イベント8if

日記\_イベント8

日記\_イベント9if

日記\_イベント9

日記\_イベント10if

日記\_イベント10

日記\_イベント11if

日記\_イベント11

日記\_イベント12if

日記\_イベント12

日記\_イベント13if

日記\_イベント13

日記\_イベント14if

日記\_イベント14

日記\_イベント15if

日記\_イベント15if2

日記\_イベント15

日記\_イベント16if

日記\_イベント16

日記\_イベント17if

日記\_イベント17

日記\_イベント18if

日記\_イベント18

日記\_イベント19if

日記\_イベント19

日記\_イベント20if

日記\_イベント20

日記\_イベント21

日記\_イベント22

日記\_イベント23

日記\_イベント24

日記\_イベント25

日記\_イベント26

日記\_Hイベント1

日記\_Hイベント2

日記\_Hイベント3

日記\_Hイベント4

日記\_Hイベント5

日記\_Hイベント6

日記\_Hイベント7

日記\_Hイベント8

日記\_Hイベント9

日記\_Hイベント10

日記\_Hイベント11

日記\_Hイベント12

日記\_Hイベント13

日記\_Hイベント14

日記\_Hイベント15

日記\_Hイベント16

日記\_Hイベント17

日記\_告白イベント1

日記\_告白イベント2

日記\_告白イベント3

日記\_なにもなし

日記\_イベント1

日記\_イベント2

日記\_イベント3

日記\_イベント4

日記\_イベント5if

日記\_イベント5

日記\_イベント6

日記\_イベント7if

日記\_イベント7

日記\_イベント8if

日記\_イベント8

日記\_イベント9if

日記\_イベント9

日記\_イベント10if

日記\_イベント10

日記\_イベント11if

日記\_イベント11

日記\_イベント12if

日記\_イベント12

日記\_イベント13if

日記\_イベント13

日記\_イベント14if

日記\_イベント14

日記\_イベント15if

日記\_イベント15if2

日記\_イベント15

日記\_イベント16if

日記\_イベント16

日記\_イベント17if

日記\_イベント17

日記\_イベント18if

日記\_イベント18

日記\_イベント19if

日記\_イベント19

日記\_イベント20if

日記\_イベント20

日記\_イベント21

日記\_イベント22

日記\_イベント23

日記\_イベント24

日記\_イベント25

日記\_イベント26

日記\_イベント27

日記\_Hイベント1

日記\_Hイベント2

日記\_Hイベント3

日記\_Hイベント4

日記\_Hイベント5

日記\_Hイベント6

日記\_Hイベント7

日記\_Hイベント8

日記\_Hイベント9

日記\_Hイベント10

日記\_Hイベント11

日記\_Hイベント12

日記\_Hイベント13

日記\_Hイベント14

日記\_Hイベント15

日記\_Hイベント16

日記\_Hイベント17

日記\_告白イベント1

日記\_告白イベント2

日記\_告白イベント3

日記\_なにもなし

日記\_イベント1

日記\_イベント2

日記\_イベント3

日記\_イベント4

日記\_イベント5if

日記\_イベント5

日記\_イベント6

日記\_イベント7if

日記\_イベント7

日記\_イベント8if

日記\_イベント8

日記\_イベント9if

日記\_イベント9

日記\_イベント10if

日記\_イベント10

日記\_イベント11if

日記\_イベント11

日記\_イベント12if

日記\_イベント12

日記\_イベント13if

日記\_イベント13

日記\_イベント14if

日記\_イベント14

日記\_イベント15if

日記\_イベント15if2

日記\_イベント15

日記\_イベント16if

日記\_イベント16

日記\_イベント17if

日記\_イベント17

日記\_イベント18if

日記\_イベント18

日記\_イベント19if

日記\_イベント19

日記\_イベント20if

日記\_イベント20

日記\_イベント21

日記\_イベント22

日記\_イベント23

日記\_イベント24

日記\_イベント25

日記\_イベント26

日記\_イベント27

日記\_イベント28

日記\_Hイベント1

日記\_Hイベント2

日記\_Hイベント3

日記\_Hイベント4

日記\_Hイベント5

日記\_Hイベント6

日記\_Hイベント7

日記\_Hイベント8

日記\_Hイベント9

日記\_Hイベント10

日記\_Hイベント11

日記\_Hイベント12

日記\_Hイベント13

日記\_Hイベント14

日記\_Hイベント15

日記\_Hイベント16

日記\_Hイベント17

日記\_告白イベント1

日記\_告白イベント2

日記\_告白イベント3

日記\_なにもなし

日記\_イベント1

日記\_イベント2

日記\_イベント3

日記\_イベント4

日記\_イベント5if

日記\_イベント5

日記\_イベント6

日記\_イベント7if

日記\_イベント7

日記\_イベント8if

日記\_イベント8

日記\_イベント9if

日記\_イベント9

日記\_イベント10if

日記\_イベント10

日記\_イベント11if

日記\_イベント11

日記\_イベント12if

日記\_イベント12

日記\_イベント13if

日記\_イベント13

日記\_イベント14if

日記\_イベント14

日記\_イベント15if

日記\_イベント15if2

日記\_イベント15

日記\_イベント16if

日記\_イベント16

日記\_イベント17if

日記\_イベント17

日記\_イベント18if

日記\_イベント18

日記\_イベント19if

日記\_イベント19

日記\_イベント20if

日記\_イベント20

日記\_イベント21

日記\_イベント22

日記\_イベント23

日記\_イベント24

日記\_イベント25

日記\_イベント26

日記\_イベント27

日記\_イベント28

日記\_イベント29

日記\_Hイベント1

日記\_Hイベント2

日記\_Hイベント3

日記\_Hイベント4

日記\_Hイベント5

日記\_Hイベント6

日記\_Hイベント7

日記\_Hイベント8

日記\_Hイベント9

日記\_Hイベント10

日記\_Hイベント11

日記\_Hイベント12

日記\_Hイベント13

日記\_Hイベント14

日記\_Hイベント15

日記\_Hイベント16

日記\_Hイベント17

日記\_告白イベント1

日記\_告白イベント2

日記\_告白イベント3

日記\_なにもなし

日記\_イベント1

日記\_イベント2

日記\_イベント3

日記\_イベント4

日記\_イベント5if

日記\_イベント5

日記\_イベント6

日記\_イベント7if

日記\_イベント7

日記\_イベント8if

日記\_イベント8

日記\_イベント9if

日記\_イベント9

日記\_イベント10if

日記\_イベント10

日記\_イベント11if

日記\_イベント11

日記\_イベント12if

日記\_イベント12

日記\_イベント13if

日記\_イベント13

日記\_イベント14if

日記\_イベント14

日記\_イベント15if

日記\_イベント15if2

日記\_イベント15

日記\_イベント16if

日記\_イベント16

日記\_イベント17if

日記\_イベント17

日記\_イベント18if

日記\_イベント18

日記\_イベント19if

日記\_イベント19

日記\_イベント20if

日記\_イベント20

日記\_イベント21

日記\_イベント22

日記\_イベント23

日記\_イベント24

日記\_イベント25

日記\_イベント26

日記\_イベント27

日記\_イベント28

日記\_イベント29

日記\_イベント30

日記\_Hイベント1

日記\_Hイベント2

日記\_Hイベント3

日記\_Hイベント4

日記\_Hイベント5

日記\_Hイベント6

日記\_Hイベント7

日記\_Hイベント8

日記\_Hイベント9

日記\_Hイベント10

日記\_Hイベント11

日記\_Hイベント12

日記\_Hイベント13

日記\_Hイベント14

日記\_Hイベント15

日記\_Hイベント16

日記\_Hイベント17

日記\_告白イベント1

日記\_告白イベント2

日記\_告白イベント3

とある路地の一角で、

一組の男女が気配を殺すようにして密着し合っていた。

\n<陸也>「うおっ、すっげぇおっぱい！

　今までで一番ヤベェわ！」

\n<若菜>「こ、こんなこと……

　や、やめてください……！」

若菜は抵抗の言葉を口にしながらも、

強引に振りほどくことはせずにじっと耐えていた。

\n<若菜>（胸なんて、今まで誰にも触られたことないのに……

　こんな、先輩に……）

\n<若菜>（でも断ったら、写真が……）

\n<陸也>「いーじゃん、減るもんじゃねぇんだしさぁ。

　むしろ、揉んで大きくしてあげてる的な？」

\n<若菜>「んっ……で、でも……」

\n<陸也>「なに？　文句でもあるわけ？

　あーあ、あの写真ばら撒いちゃおっかなぁ！」

\n<若菜>「そ、それは……」

\n<若菜>（それだけは絶対にダメ……

　ハルタに見られちゃったら、わたし……！）

男の脅しに若菜は言葉を詰まらせる。

その言動に男はニヤリと嫌な笑みを浮かべた。

\n<陸也>「俺は別にこんなことしなくてもいいんだけどさぁ。

　若菜ちゃんの秘密守る対価じゃん？」

\n<若菜>「…………」

\n<若菜>「……ごめんなさい、続けていいです……」

若菜は観念したように小さく呟く。

けれど、男の態度がそれで修まることはなかった。

\n<陸也>「続けていいです？　なに言ってんの？

　もっと言い方あるっしょ？　こっちはやんなくていいんだぞ？」

\n<若菜>「そんな……ううっ……」

\n<若菜>（言い方って……それって、わたしから誘うってこと……？

　きっと、エッチな言葉で……）

戸惑いを表に出したまま、若菜は顔を紅潮させる。

そして意を決したようにおもむろに口を開いた。

\n<若菜>「わたしの……お、おっぱい……揉んでください……」

若菜はひどく赤面しながら、胸元をぐっと差し出す。

その行動に男は口角を吊り上げた。

\n<陸也>「しょーがねぇなぁ。

　そこまで言うなら揉んでやるわ。感謝しろよ？」

\n<若菜>「ふぅん……！　は、はい……」

男はまたも若菜の胸を両手で掴むと、

揉みしだくように何度も無遠慮に手を動かす。

\n<若菜>（なんだろう、これ……

　なんだか、変な気持ちになってきちゃう……！）

\n<若菜>（変な声も出ちゃってるし……

　わたし、どうかしちゃったのかな……）

\n<陸也>「服越しでなんつー柔らかさだよ！

　こんなおっぱい、オッサンに揉ませるなんてもったいねぇ」

\n<若菜>「ん……ふぅ、んん……」

\n<陸也>「若菜ちゃん、処女っしょ？」

\n<若菜>「あっ、ん……んんっ……」

若菜は返答ではなく、小さな嬌声で返す。

それだけで男は確信を得たようだった。

\n<陸也>「やっぱりな。

　処女のくせに男におっぱい揉まれて感じてんだ？」

\n<若菜>（感じる……？　これが感じるってことなの……？

　じゃあ、わたし……エッチな気分になってるってこと……？）

\n<若菜>「そんなこと、ん……言わないで……」

\n<陸也>「否定はしねぇんだ？

　じゃあもっと気持ち良くしてやるよ！」

\n<若菜>「きゃああああ！」

男は若菜の胸元を包む衣服をぐっと下へ引っ張る。

それだけで、たわわに実った乳房が表に放り出された。

\n<若菜>（見られちゃった見られちゃった見られちゃった！

　ハルタにも見せたことないのに……！）

\n<若菜>（わたしの胸を見られちゃった……！）

\n<陸也>「うおっ！　生で見ると迫力マジでヤベェわ！

　これ見てるやつゼッテー全員今シコってるっしょ！」

\n<若菜>「み、見てるやつって……」

\n<陸也>「あー、こっちの話。

　若菜ちゃんは気にしなくていいから」

男は薄っぺらい笑みを浮かべながら視線を下へと落とす。

視線の先には隠れるように置かれたカメラが静かに動いていた。

\n<陸也>「じゃあ早速触っちゃおうかな……」

\n<若菜>「えっ……そのまま触るなんて……

　そ、そんなのダメです……！」

男は強引に若菜の胸部に手を伸ばす。

そして乳房を握るように揉み始めた。

\n<若菜>「んふぁ……！　ん、あっ……」

\n<若菜>（ダメ……声が抑えられない……！

　なんでこんな声出ちゃうの……！）

\n<陸也>「むっちゃ手におっぱい吸い付いてくるわ！

　マジこの生おっぱいエロすぎっしょ……！」

男の指は乳房の柔肌に沈み込んでいく。

しっとりとした肌は離れるのを拒むように吸い付いてきた。

\n<若菜>「エロくなんて……んっ、ない、です……」

\n<陸也>「なに言ってんの？　こんなエロいおっぱい無ぇっての。

　マジ最高だわ。無限に揉んでてぇ……！」

\n<若菜>「はぁはぁ……ん、あっ……」

\n<陸也>「乳首ビンビンじゃん！

　なに？　そんなに気持ち良くなっちゃってんの？」

\n<若菜>「そんな……こと、ふぁっ、んん……」

若菜の言葉とは裏腹に、乳首はツンと固くなっていた。

男は勃起した乳首を人差し指で弾くように触れる。

\n<若菜>「んふぁ……！　ち、乳首触っちゃ……んんっ！」

全身を駆け巡る経験したことのない感覚。

その感覚に、若菜の身体がびくりと震えた。

\n<若菜>（なにこれ……！　今まででいちばん……っ！

　なにか……なにかきちゃいそう……！）

\n<陸也>「コリコリして欲しくて立ててんじゃないの？」

\n<若菜>「ちがっ……ふぁっ、んん……！」

\n<陸也>「感じてるんでしょ？」

\n<若菜>「ふぅ、ん……そ、れは……」

\n<陸也>「こんなおっぱいマジでレアだわ。

　飽きるまで揉んでやるから」

\n<若菜>「そ、んな……ふぅっ、ん……！」

廊下の隅にある物置の中で、

若菜は決まりが悪そうにモジモジと立ち尽くしていた。

\n<若菜>「これで……いいですか……」

\n<陸也>「うおっ、マジでえっろ……！

　こんなエロい身体して処女とかありえねー！」

若菜は衣服を纏うことなく男の前に立ちながら、

男の視線を一身に受け止めていた。

\n<若菜>（恥ずかしい……でも、我慢しなきゃ……

　これで、終わるんだから……）

男は全裸の若菜を舐めまわすように見つめる。

傍らには綺麗に畳まれた制服が置かれていた。

\n<陸也>「乳首まっピンクじゃん！

　中古ばっか相手してたから、新品最高だわ～！」

\n<若菜>「ううっ……恥ずかしいです……」

全身を視線が這っていく感覚に、

若菜は太ももをすり合わせて羞恥を露わにする。

\n<陸也>「マンコもみっちり閉じてるしさぁ。

　早くこじ開けてぇ……！」

\n<若菜>「そ、そんなこと……しません……」

\n<陸也>「つーかパイパンじゃん！

　なに、処女のくせに剃ったりしてるわけ？」

その言葉を聞くなり、

かあっと、若菜の顔がみるみるうちに赤くなっていく。

\n<若菜>「ま、まだ……その……生えてないだけです……」

\n<陸也>「ヤッバ！　そんなの初めてだわ！

　ロリっぽいと思ってたけど、犯罪臭すげぇ……！」

その指摘に若菜は視線を落として無毛の股間を見る。

そして更に顔を赤らめた。

\n<若菜>（や、やっぱり変なんだ……

　お友達もみんなもう生えてるって言ってたし……）

\n<若菜>「やめてください……気にしてるんですから……」

\n<陸也>「でも、おっぱいだけはロリっぽくねーよな。

　あれか？　ロリ巨乳ってやつ？」

\n<若菜>「もうやめてください……

　これで……ちゃんと消してくれるんですよね……？」

\n<陸也>「あ？　なにを？」

\n<若菜>「あの写真です……

　裸を見せたら、消してくれるんですよね……？」

\n<陸也>「あー、うんうん。もちろんもちろん」

男は心にもなさそうに言ってみせる。

けれど、若菜は安心したようにほっと一息吐いた。

\n<陸也>「そんなことよりさぁ。

　こんなエロい裸、目に焼き付けるだけじゃもったいねぇな」

\n<若菜>「え、エロいなんて言わないでください……」

男はポケットからスマートフォンを取り出すと、

若菜の前で操作をしてみせる。

\n<若菜>（良かった……写真消してくれるんだ……

　でも、なんでスマホをこっちに向けてるんだろう……？）

\n<若菜>「あの……そのスマホ、何に使うんですか……？」

\n<陸也>「えー、そりゃあ一つに決まってるっしょ」

\n<若菜>「きゃっ……！　な、なんですか……！？」

\n<陸也>「まあまあ」

\n<若菜>「やめて……撮らないでください……！」

若菜の制止など気に留めることなく、

男はスマホのシャッターを切り続ける。

\n<陸也>「いいじゃん、誰にも見せないからさぁ。

　記念だって記念。俺が一人の時に使いたいじゃん？」

\n<若菜>「つ、使うって……なににですか……」

\n<陸也>「そりゃあ、シコる時に決まってるっしょ。

　オナニーだよオナニー」

\n<若菜>「オナ……っ！？　ううっ……」

言葉にするのも恥ずかしいというように、

若菜は俯きながら言葉尻をすぼめる。

\n<陸也>「恥ずかしがっちゃって！

　オナニーくらいしたことあるっしょ？」

\n<若菜>「そ、そんなこと……したこと、ないです……」

\n<陸也>「うっそ、マジで！？

　若菜ちゃんヤッバ！　初心すぎっしょ！」

\n<陸也>「そのクセにおっぱい揉まれたり、

　こうやって裸撮られて感じちゃってるんだ」

\n<若菜>「か、感じてないです……！」

\n<陸也>「えー？

　でも、マンコからなんか垂れてね？」

\n<若菜>「……っ！」

若菜が慌てるように秘裂に手を当てると、

トロリとした液が糸を引いて指を光らせる。

\n<若菜>（これ、ハルタのこと考えてる時に出てくるやつだ……

　なんでこんな時に出てくるんだろう……）

\n<陸也>「そんなに愛液垂らしちゃうくらい、

　気持ち良くなっちゃってんでしょ？」

\n<若菜>「あいえき……？」

\n<陸也>「あー、初心な若菜ちゃんには分かんないか。

　それは若菜ちゃんがエロい気分になると出てくんの」

\n<若菜>「わ、わたしがエッチな気分の時に……」

\n<若菜>（それじゃあ、お股がきゅうってなってたのって、

　ひょっとして、エッチな気分だったってこと……？）

\n<陸也>「見られて感じちゃうなんて、若菜ちゃん素質あるなぁ。

　まあ、変態のだけど」

\n<若菜>「そんなの……ないです……」

\n<陸也>「お？　感じちゃってるのは否定しないんだ？」

\n<若菜>「それは…………」

\n<陸也>「なんなら、愛液舐めとってあげよっか？

　若菜ちゃんのなら俺大歓迎なんだけど」

\n<若菜>「な、舐めとるって……

　わ、わたしの大事なところを舐めるって……ううっ……」

\n<若菜>「も、もういいですよね……

　お願いだから、消してください……」

　若菜は目を潤ませながら、

　懇願するように男に向かって言葉を投げかける。

\n<陸也>「分かってる分かってる。

　はい、消去っと」

　男は若菜にスマホの画面を見せる。

　そこには『消去しました』の文字が浮かんでいた。

\n<若菜>「あ、ありが――」

\n<陸也>「あ、言い忘れてたけど、

　さっき撮ったやつは消さないから」

\n<若菜>「えっ……？」

\n<陸也>「当然っしょ？　俺のオカズ用なんだからさぁ。

　大丈夫大丈夫、誰にも見せないって！」

\n<陸也>「まあ、でも？　若菜ちゃんの態度次第じゃあ、

　うっかり手が滑って誰かに送信しちゃうかもなぁ」

\n<若菜>「そんな……」

\n<陸也>「そういうことだから。

　それじゃあ、今日もおっぱい触らせてよ」

\n<若菜>（胸を触られてる写真なら、言い訳はできたのに……

　でも、学校で裸になってる写真なんて……）

\n<若菜>（わたしは……先輩に逆らえないんだ……）

\n<若菜>「わかり、ました……」

\n<若菜>「ん……んんっ……」

若菜の吐息が神社の片隅で小さく響く。

その後ろには、両手いっぱいの柔肉を揉む男がいた。

\n<陸也>「なあ、もっと気持ちいいことしねぇ？」

\n<若菜>「ふっ、んん……もっと、気持ちいいこと……？」

\n<陸也>「そーそー、例えばさぁ……セックスとか？」

\n<若菜>「なっ……そんな、ダメです！

　そういうのは、結婚してからじゃないと……んん！」

\n<陸也>「これ以上溜まったら襲っちゃうそうだしさぁ。

　せめて手で抜いてよ、若菜ちゃん」

\n<若菜>「手で……抜く……？」

\n<陸也>「あー、処女の若菜ちゃんはわかんねーか。

　保体の授業くらい受けてるっしょ？」

\n<陸也>「若菜ちゃんの手で俺のチンコ扱いて、

　射精させろってこと」

\n<若菜>「わ、わたしの手で……おちんちんを……」

\n<若菜>（そ、それって……すごくエッチなことじゃ……！

　陸也先輩は彼氏でもないのに、そんなこと……）

\n<若菜>（それに……そういうのは好きな人と……

　結婚を誓った相手じゃないとダメなのに……）

\n<若菜>（でも、やらないと写真が……

　わたしの裸がみんなに見られちゃう……）

\n<若菜>（ハルタに……見られちゃう……

　エッチな女の子だって、幻滅されちゃう……）

若菜の顔が不安と興奮が入り混じって熱くなっていく。

そして、恐る恐るゆっくりと口を開いた。

\n<若菜>「わ、わかりました……」

\n<陸也>「それじゃあ、さっさとやってもらおうか」

\n<若菜>「きゃあ！」

男はすぐさまズボンを下ろすと、

ボロンとそそり立った一物を露わにした。

\n<若菜>（お、おちんちん……授業で見たことあるけど、

　本物なんて初めて見た……）

\n<陸也>「ほら、早く。触らねぇと話になんねーだろ？」

\n<若菜>「うう……」

若菜はおっかなびっくりな手つきで男根に触れ、

そのまま意を決してように握りしめた。

\n<若菜>「……これでいいですか」

\n<若菜>（さ、触っちゃった……！

　こ、これが男の人のおちんちん……）

\n<若菜>（こんなに大きくて、固くて、熱いなんて……

　は、ハルタのもこんな感じなのかな……）

\n<陸也>「ああ。そのまま擦ってくれればいいから」

\n<若菜>「そ、それじゃあ動かします……」

若菜はゆっくりと皮を上下に擦り、

根元から亀頭まで、すべてを刺激するように動かす。

\n<若菜>（こんな感じでいいのかな……）

初めて触れる男根に、重なる拙い手つきは、

けれど拙いが故に想像だにしない刺激を男に与えていく。

\n<若菜>（射精……をしたら、終わりなんだよね……

　でも、それってどうやったら……）

\n<若菜>（わたしも……お、オナニーしたことないから……

　どういう感じなのか全然分からないよ……）

\n<若菜>（でも、おちんちん……ビクビクしてる……

　これって、気持ちいいってことなのかな……？）

\n<若菜>「あ、あの……これで、その……

　気持ちいいんですか……？」

\n<陸也>「ああ、そのまま続けてくれればいいから」

\n<若菜>「分かりました……」

男の言葉通りに若菜は肉棒を一心に扱き続ける。

強弱も擦り方もまばらな刺激が絶えず男に襲い掛かる。

\n<若菜>「んひゃあっ……！？」

　男の手が若菜のスカートの中へと伸びていく。

　そしてゆっくりスカートを上げて、太ももに触れた。

\n<若菜>「んっ……あ、あの……」

\n<陸也>「ああ、気にしなくていいから。

　若菜ちゃんは気にせず続けてて」

\n<若菜>「ふっ、んん……は、はい……」

若菜の太ももから臀部にかけてを滑るように、

男は焦らすような手つきで小さな刺激を与えていく。

\n<若菜>（なにこれ……変な感じ……

　自分で触ってもこんな気分にならないのに……）

触れられている部分へと意識が傾いていた若菜は、

手の平にぬるりと現れた冷たさに小さく驚く。

\n<若菜>「ひゃっ……！　先っぽから何か……」

\n<陸也>「あー気にしなくていいから」

責められ続けた男根はカウパーを漏らし、

次第にぐちゅぐちゅと、淫らな水音を立て始めた。

\n<若菜>（このぬるぬるした液体ってもしかして……

　これって、愛液だよね……？）

\n<若菜>（先輩もエッチな気持ちなんだ……

　なんだか、わたしもお股がむずむずしてきた……）

若菜はきゅんと身体を震わせる。

クロッチには小さな染みが拡がっていた。

\n<若菜>「はぁ……ん、はぁ……」

　我慢汁は潤滑液の役割を果たし、

　竿全体に先ほどよりも容赦ない刺激を与える。

\n<若菜>（身体が熱い……火照ってるみたい……

　それに……この音聞いてるとなんだか……）

\n<若菜>（変な気持ちになる……）

\n<陸也>「あーもうイきそう……」

\n<若菜>「えっ、その……イきそうってどういう……」

\n<陸也>「だから、もう射精しそうってこと」

男の申し出に、若菜の頭は半ば真っ白になる。

\n<若菜>（射精するってことは……そのえーっと……

　精液が出るってことで、その……）

\n<若菜>「えっ！？　わ、わたしはどうすれば……」

\n<陸也>「そのまま手で受け止めてくれればいいから」

\n<若菜>「手で……は、はい……」

\n<陸也>「あー、イく！」

\n<若菜>「んっ……んん……！」

肉棒はビクビクと大きく震えたかと思うと、

若菜の手のひらに白濁とした精液が解き放った。

\n<陸也>「ふぅ……イったイった」

\n<若菜>「…………」

若菜は手の平にこびりついた熱を感じながら、

呆然したように立ち尽くしていた。

\n<若菜>（これが精液……

　すごく熱くて……なんだか、クラクラする匂い……）

\n<陸也>「もう手離してくれていいんだけど」

\n<若菜>「えっ？　あっ………は、はい……」

若菜はおずおずと精液まみれの手を鼻にかざす。

そこから放たれる濃密な雄の匂いに、瞳が一瞬蕩けた。

\n<若菜>（嫌いな匂いじゃ……ない……）

多目的トイレの中で、

二人の男女が密着し合って小さな吐息を漏らしていた。

室内に響くのは、ぐちゃぐちゃという、

粘液が摩擦を加えられているような音だった。

\n<若菜>「はぁはぁ…………」

若菜は頬を真っ赤に染めながら、肉棒を擦り続ける。

手はカウパーに塗れて白く染まっていた。

\n<若菜>（こんな感じでいいんだよね……

　すごくエッチで、恥ずかしいけど、これなら……）

\n<陸也>「若菜ちゃんさぁ、手コキもいいんだけど、

　なんか物足りねーんだよなぁ」

\n<若菜>「え？　あの、それはどうすれば……」

\n<陸也>「そうだなぁ……あ、そうだ。

　若菜ちゃんがオカズになってよ」

\n<若菜>「お、おかず……ですか？」

\n<陸也>「そーそー。

　若菜ちゃんのエロいとこ見せてくれたらいいから」

\n<若菜>「わ、わたしのエッチなところ……

　そ、それって、胸を出すってことですか……？」

若菜はさっと片手で胸を押さえつける。

けれど、男はきょとんとした表情を浮かべた。

\n<陸也>「なに言ってんの？

　おっぱいよりエロいところあるっしょ？」

\n<若菜>「ひゃあっ！？」

男の手が若菜のスカートの中を這いずり回る。

無遠慮に、下着越しに若菜の肌を弄んでいく。

\n<若菜>「ふっ、ん……んん……」

\n<若菜>（この触り方、なんで……

　なんで……こんなに身体が熱くなるの……）

男の手つきに、若菜は身体をくねらせる。

そんな若菜を追い込むように下着に指がかかった。

\n<陸也>「こんなの着けてたら、

　若菜ちゃんも窮屈っしょ？　楽にしてやっから」

\n<若菜>「やっ、それは……！」

若菜の言葉を無視して、男は下着をずり下げる。

桃色のショーツの下に隠れた秘裂が露わになった。

\n<陸也>「おっ、パンツ糸引いてね？

　若菜ちゃんもエロい気分になってたんだ？」

\n<若菜>「そ、そんなこと……

　あ、あんまり見ないでください……」

言葉尻をすぼめながら、若菜は俯くように言う。

その秘部は光に反射するほどぬめりを帯びていた。

\n<陸也>「もう全身くまなく見たってーの。

　俺等の仲で今さら恥ずかしがることねぇっしょ？」

\n<若菜>「それは……んんっ、ふぁ……！」

男は撫でまわすように若菜の臀部に触れる。

直接伝わる細やかな刺激に、若菜は声を漏らす。

\n<陸也>「やっぱ触るなら生に限るわ。

　挿れる時もだけどな」

\n<若菜>「んっ、あ、んん……」

\n<陸也>「もう我慢できねぇ。

　おい、こっち向け」

\n<若菜>「えっ……んんっ！？」

若菜が男に目を合わせると、

男はそのまま顔を近づけて若菜の唇に口を重ねた。

\n<若菜>（これ……キス……！

　わたしのファーストキスが……奪われちゃった……）

\n<若菜>（ハルタにあげるはずだった初めてが……

　先輩に、先に奪われちゃった……）

けれど、初めての口づけはそれだけでは終わらない。

それは若菜の思い描いていたキスとは違うものだった。

\n<若菜>「んんっ、ちゅぶ、んんちゅ……！」

\n<若菜>（舌が……舌が吸われちゃってる……！

　これがキスなの……？　こんな、エッチなのが……）

\n<陸也>「おい、もっと舌出せ」

\n<若菜>「んっ、ちゅ……んちゅ……」

男の言葉通りに若菜は舌を伸ばす。

その舌と絡み合うように男の舌も伸びてきた。

\n<若菜>「んっ、んちゅ……っぷはぁ……！」

ようやく若菜の口から男の唇が離れる。

舌は小さく糸を引いて男と繋がっていた。

\n<若菜>「わ、わたしのファーストキスが……」

\n<陸也>「若菜ちゃん、初めてだったの？

　おっそ……いやぁ、ごめんごめん」

\n<陸也>「まあ、でも気持ち良かったっしょ？

　あんなにエロく舌伸ばしちゃってさぁ」

若菜の頬が一気に紅潮する。

舌に残った他人の感覚に、若菜は戸惑っていた。

\n<若菜>「それは……先輩が出せって言うから……」

\n<陸也>「俺のせいにすんの？

　あんなに顔蕩けさせちゃってたくせにさぁ」

\n<若菜>「そんな顔……してないです……」

\n<陸也>「自分で分かってないわけ？　まあいいや。

　分かんねーなら分かるまでしてやるよ」

\n<陸也>「ほら、さっさと舌出せ。

　あ、手コキも止めんなよ？」

\n<若菜>（嫌だって言いたい……

　でも、そんなことしたら……）

\n<若菜>「……はい」

若菜は恐る恐る舌を伸ばしていく。

それを啄むように、男の唇が迫ってきた。

\n<若菜>「ちゅ、んちゅ……れろ……」

若菜は拙いキスを繰り返しながら、

白く泡立った手で男根を前後に扱き続ける。

\n<若菜>「んっ……はぁ、ちゅ……れろ、んちゅ……」

太もも周りやお尻の周辺を撫でまわされ、

愛撫されているように小さな息を吐く。

\n<若菜>（キスされると頭がぼーっとするし……

　触られると身体がびくってする……）

\n<若菜>（なんだか、何も考えられない……

　わたし、なんでこんなことしてるんだろ……）

\n<若菜>「あ……んっ、ちゅる……んちゅ、はぁ……」

若菜は放心したように口づけを交わしながら、

右手で男根を刺激し続ける。

\n<陸也>「あー、イきそ……！

　もっと早くしてくんね？」

\n<若菜>「えっ……あ、わかりました……」

ぐちゅぐちゅと響く音を大きくさせながら、

若菜の手は肉棒を激しく擦り上げていく。

\n<若菜>（ビクビクして、熱くなっていく感じ……

　もうすぐ……しゃ、射精しそうなんだ……）

\n<陸也>「ああ……イく！」

\n<若菜>「んんっ！」

若菜はきゅっと手をすぼめて精液を受け止める。

手にはべったりと白濁液がこびりついていた。

\n<陸也>「ふぅ……イったイった」

\n<若菜>「…………」

\n<若菜>（こんなにたくさん……

　変な匂いがすごく漂ってくる……）

\n<陸也>「あ、若菜ちゃん。

　今日はそのまま握っててくれていいから」

\n<若菜>「えっ……？」

\n<陸也>「まだキスしたりないしさ、

　若菜ちゃんだってもっと触って欲しいでしょ？」

\n<若菜>「そ、そんなこと……んんむっ！」

若菜の口を塞ぐように男は唇を重ねては、

強引に口内に舌を潜り込ませていく。

\n<若菜>「んっ、んちゅ……んむ、れろ……！」

\n<陸也>「っぷは。

　まだまだ終わらせねぇよ。若菜ちゃん？」

保健室の仕切られたベッドの中から、

いっそ獣じみた声が部屋中に響き渡っていた。

\n<若菜>「んふぁ……！　んんっ、ああっ……！」

\n<陸也>「なになに、若菜ちゃん？

　そんなによがっちゃって……気持ちいいんだ？」

若菜は仰向けになって足を抱えながら、

男に大事なところの全てをさらけ出していた。

\n<若菜>「ふあっ……！　ん、んふぁ……んんっ！」

\n<陸也>「若菜ちゃんには手コキで良くしてもらったからさぁ。

　今度はこっちが気持ち良くしてあげねーとな」

カリカリと爪で擦るように、

下着越しに勃起したクリトリスを絶え間なく刺激し続ける。

\n<陸也>「若菜ちゃんの敏感なところここっしょ？

　さっきからすげービクビクしてっからバレバレ」

\n<若菜>「ああん……！　んっく、んふぅ……！」

\n<陸也>「ありゃ、手マンが気持ち良すぎて聞いてねぇな。

　まあ、オナったこともねーなら当然か」

男の挑発じみた言葉に、けれど若菜は返答を返さない。

それほどまでに若菜は切羽詰まっていた。

\n<陸也>「つか、あんだけこの格好するの嫌がってたくせに、

　こんなによがるとか……実はヤってほしかったの？」

\n<若菜>「んんっ、ふぁ……んっく、んん……！」

\n<陸也>「返事しねぇとか……はいお仕置きー！」

\n<若菜>「んンふああああああッ！？」

男はクリトリスをきゅっと摘まんでみせる。

それだけで、若菜の身体は大きく腰を反らせた。

\n<陸也>「つーか、この体勢マジでエロいわ……

　このアングルで撮るとか、俺って天才じゃね？」

\n<陸也>「おい、シコってる童貞ども！

　俺に感謝しながら抜けよ！」

男はカメラに向かって高らかに言ってみせる。

その言葉にさえ、若菜が反応を示すことはなかった。

\n<陸也>「……反応なくてもつまんねーな。

　おーい、若菜ちゃん起きてー」

\n<若菜>「んんっ……ふぁ、ん……！」

男は若菜の耳元で名前を呼びながら、

秘裂をなぞるように何度も指で擦りあげる。

\n<若菜>（んっ……あれ、わたし……どうして……

　誰かに名前が呼ばれてるような……）

\n<若菜>「んあっ……はぁはぁ……せ、先輩……？」

\n<陸也>「お？　やっとお目覚め？

　気持ちいいからって気ィ失わないでよ」

\n<若菜>「気を失うって……きゃあっ！」

若菜はふと意識を取り戻すと、

自分の置かれている状況に叫びにも近い声を上げた。

\n<若菜>（そうだ……わたし、先輩にお股触られて……

　それで、すごく変な気分になって……）

\n<陸也>「あーはいはい、足閉じないでねー。

　それじゃあ見てる人も萎えるから」

\n<若菜>「見てる人って……んんっ……！」

\n<陸也>「ちゃんと足抱えてろよ？

　じゃねーと写真バラ撒くからな。あと気絶しても」

\n<若菜>「そん……んあぁ……んっく、ふぅん……！」

下着越しにピンと勃起したクリトリスに、

撫でて、弾いて、摘まんで、様々な刺激を与える。

\n<若菜>「そこ……ダメ……んふあ……！

　変な……んんっ、変な感じになっちゃうからぁ……！」

クチュクチュとわざと音をたたせながら、

男は若菜の敏感な部分を責め立てる。

\n<若菜>（なにこれ……なにか、込み上げてくる……！

　なにかすごいのが……きちゃいそう……！）

\n<陸也>「若菜ちゃん、イきそうなんでしょ？」

\n<若菜>「ふぅ……んん……イ、イク……？」

\n<若菜>（これが……イクってことなの……？

　それじゃあ、あの変な感じは気持ちいいってこと……？）

\n<陸也>「処女の若菜ちゃんは知らねーだろうけど、

　勝手にイクのはマナー違反だからな？」

\n<陸也>「イきそうな時はイってもいいか訊いて、

　オッケーが出てからイクんだからな？」

\n<陸也>「まあ、ビッチは勝手にイクけどさ。

　若菜ちゃんはそんなはしたねー女じゃねぇだろ？」

\n<若菜>「そ、そうなんですね……分かりました……」

\n<若菜>「んっくぁ……！　きゅ、急に……激しく……んん！

　せ、せんぱい……待っ……ンンっ……！」

\n<若菜>（なにかきちゃうの……！

　もうダメ……もう抑えきれない……！）

\n<若菜>「んふぅ……せ、せんぱい……！

　い、イっても……んふぁ！　イってもいいですか……？」

\n<陸也>「あっ？　なにって？」

\n<若菜>「あぁん……だ、だから……ンんんッ！？」

男の指が強く秘裂に押し込まれ、

下着を越えて秘裂に侵入しそうなほどに深く入り込む。

\n<陸也>「だから？　もっとはっきり言えよ」

\n<若菜>「ふぅあ……だ、だから、もう……い、イきそうで……」

\n<陸也>「イきそう？　だから？」

\n<若菜>「んあっ……だから、イっても……ンふぅ……！

　い、イってもいいで……ンんふあっ……！」

若菜が肝心なところを言おうとする度に、

男は強い刺激を与えて妨害する。

\n<若菜>「ふぅンん……！　あっ、なんかきちゃう……！

　ダメ……んんっ、まだ言えてないのに……きちゃう……！」

\n<若菜>「んふぁっ……イク！　イっちゃう……！」

\n<若菜>「イクぅううううううううううううッ！」

\n<若菜>「ンはぁあああああああああッ！」

若菜の腰が一際大きく震えると、

ビクビクと何度も痙攣しながら秘部をひくひくさせる。

\n<若菜>「んはぁ……はぁ……んん！」

未だ秘部に残った余韻に若菜は声を漏らす。

その顔は羞恥で真っ赤に染まっていた。

\n<若菜>（言う前に……イっちゃった……

　先輩にマナーだって言われてたのに……）

\n<若菜>（わたし……はしたない女だったんだ……

　わたし……び、ビッチだったんだ……）

\n<若菜>（だから、先輩にこんなことされるのに……

　嫌なはずなのに、気持ち良くなっちゃうんだ……）

\n<陸也>「おいおい、若菜ちゃんさぁ。

　イク前はちゃんと言えって言っただろ？」

\n<若菜>「ご、ごめんなさい……

　その、変な感じで……ちゃんと言えなくて……」

\n<陸也>「変な感じ……？

　気持ち良すぎて言えなかっただけっしょ？」

\n<若菜>「そ、それは……」

\n<陸也>「マナー守らずイったんだからさぁ。

　ちゃんと謝るのが筋なんじゃね？」

\n<若菜>「はい……ごめんなさい……」

\n<陸也>「そうじゃなくてさ。

　理由となんで謝ってるかも言わないと」

\n<若菜>「き、気持ち良すぎて……イってもいいか訊く前に、

　イっちゃって……ごめんなさい」

\n<陸也>「次からは気を付けろよ？」

\n<若菜>「はい……」

\n<若菜>（あれ……次って……）

\n<若菜>「先輩……

　どうしたら……こんなこと止めてくれるんですか？」

\n<陸也>「なに？　止めたかったの？

　てっきり若菜ちゃんも喜んでるのかと」

\n<若菜>「……そんなことないです」

\n<陸也>「あー、じゃあ若菜ちゃんがセックスしてくれたら、

　あの写真消してやるよ」

\n<若菜>「そんな……！」

\n<陸也>「一回セックスして、後腐れなくバイバイってことで。

　別にいいっしょ？　そんだけで消してあげるんだから」

\n<陸也>「まあ、でも若菜ちゃんは気に入ると思うけどなぁ」

\n<若菜>「何にですか……？」

\n<陸也>「セックスだよ、セックス。

　手マンなんかより、遥かに気持ちいいぜ？」

\n<若菜>「そんなこと……絶対にないです……」

\n<陸也>「あっそ。まあ、考えといてよ。

　それまでは、セックス以外で遊ぶからさ」

\n<若菜>（写真を消してもらうには、

　先輩とセックスしなきゃいけないなんて……）

\n<若菜>（でも……）

\n<若菜>「これよりも……気持ちいい……」

\n<若菜>（それって……どんな感じなんだろう……）

\n<若菜>「ふあっ……！　ん、んふぁ……んんっ！」

若菜は大きく足を拡げた体勢のまま、

秘部をされるがままに弄ばれていた。

\n<陸也>「それにしても、親が留守だからって、

　男連れ込むなんて。若菜ちゃんもやるねぇ」

\n<若菜>「そ、そんなんじゃ……んんっ、ないです……」

若菜は声を抑えようと必死になるも、

慣れない快感の波に止められないでいた。

\n<若菜>「へ、変な場所ですると……んあっ……

　だ、誰かにバレちゃうかもしれないから……」

\n<陸也>「だからって、家に連れ込むかフツー。

　部屋でヤんの期待してたんでしょ？」

\n<若菜>「そんなこと……あっ、んんっ……！」

\n<陸也>「どおりでよく喘いじゃうわけだ。

　ここなら声出しても平気だもんな……！」

男は秘部の入り口を片手で擦ったまま、

下着のサイドをゆっくりと引っ張っていく。

\n<若菜>「ひゃあ……！　せ、せんぱい……それは……！」

\n<陸也>「可愛いパンツ汚れちゃうと悪いっしょ？

　それに、こっちのほうが気持ち良くさせれるしさぁ」

男は若菜の足からパンツを引き抜いていく。

パックリと口を開いた秘部が露わになった。

\n<若菜>「ううっ……そんなに見ないでください……」

\n<陸也>「マジ、エロいマンコしてるわー！

　こんなヒクヒクさせてさぁ、誘ってんの？」

\n<若菜>「そんなこと……ンんふぁあああ！？」

すぶり。若菜の秘裂を割って入っていくように、

男の中指が異物を知らない奥へと侵入していく。

\n<陸也>「マンコの中、とろとろで温けぇ……！

　俺の為に温めといてくれた感じ？」

\n<若菜>「んっく……！

　わ、わたしのお股の中に……指が……」

\n<陸也>「あ？　オナニーもしたことねーんだっけ？

　若菜ちゃんの初めていっぱい奪っちゃって悪ィなぁ」

\n<陸也>「つか、そのお股って言い方なに？

　おまんこだろ？　さんはい、おまんこ」

\n<若菜>「お、おまんこ……」

\n<陸也>「はい、よく言えました。

　ご褒美におまんこ気持ち良くしてあげるから」

\n<若菜>「えっ、ちょっと、待っ――

　ンあっ、ンっくうぅ……！」

男は突き立てた中指を上下に動かして、

蜜壺をかき回すように奥を責め立てる。

\n<若菜>「んふぁ、ああぅ……！

　あっ、これ……ダメです……んんくぁ……！」

くちゅくちゅ、という水音をわざと立てて、

耳からでさえ若菜の興奮を底上げしていく。

\n<陸也>「どう、若菜ちゃん？

　パンツ越しより気持ちいいっしょ？」

\n<若菜>「ンんはぁっ……！　ふぁんんっ……！」

\n<若菜>（これ……気持ち良すぎちゃう……！

　直接触られるとこんなになっちゃうなんて……！）

\n<若菜>（なにも考えれないよぅ……

　おまんこのことしか……考えられない……！）

\n<若菜>「はうっ、んんっ……ふぁああっ……！

　これ……んあ、っふぅ……！」

\n<陸也>「ほら、若菜ちゃん。

　よがってばっかじゃなくて、舌出して」

\n<若菜>「んんっ……えっ、ほ、ほうへふは……？」

\n<陸也>「そうそう。ほら、もっと突き出して」

\n<若菜>「んっ……んちゅ、れろ……んんっ……！」

若菜の伸ばした舌に、男の舌が絡みつく。

若菜は蕩けるような瞳でそれを受け入れた。

\n<若菜>（なにこれ……この前のキスと違う……！

　おまんこ触られて、身体中が敏感なんだ……）

\n<若菜>（口の中まで敏感になっちゃってるから……

　キスだけで気持ち良くなっちゃう……！）

\n<若菜>「ちゅぶ、んちゅ……ちゅぱぁ……んちゅ……」

\n<陸也>「……っぷあ、若菜ちゃん上手になったじゃん。

　そんなにキス好きなの？　エロいね」

\n<若菜>「そ、そんなこと……んっ、ちゅ……れろ……」

\n<陸也>「隠すなって。若菜ちゃん、舌伸ばして。

　そうそう、それじゃあ受け取ってね」

\n<若菜>「えっ、受け取るって……なにを……」

若菜が舌を伸ばして恐々としていると、

男はくちゅくちゅと唾液を若菜の舌へと垂らした。

\n<若菜>「ん、んんっ……こくん……っぷぁ」

若菜は戸惑いつつもそれを口に含むと、

そのまま喉を鳴らして飲み込んだ。

\n<陸也>「どう？　唾液美味しいっしょ？」

\n<若菜>「美味しくなんか……ないです……」

\n<陸也>「俺は好きだけどなぁ。若菜ちゃんの唾液」

\n<若菜>「そんな……ちゅ、ちゅぶ、れろ……んちゅる……」

最早、抵抗もなく若菜は何度も口づけを交わす。

それは唾液を混ぜ合わせる淫靡なキスだった。

\n<若菜>（はぁはぁ……あの変な感じ……きちゃいそう……

　また、イキたい……）

\n<陸也>「それじゃあ、マンコもぐちょぐちょだし、

　若菜ちゃんもイキたそうだからイカせるか……」

\n<若菜>「えっ、なんで……」

\n<陸也>「そんなエロい目で懇願されたら分かるっての。

　あ、本気でやるけど失神すんなよ？」

\n<若菜>「失神って……ンんふああああッ！？」

男の指が今までよりも速く若菜の膣をかき回す。

途端に若菜の腰が大きく反りかえった。

\n<若菜>「ンひゃあっ、なに、これ……ふぅああん！

　ダメ……おかしく……んっくぅ……！」

\n<若菜>「やだ、これ……んあっ、すごっ……ッ！

　あ、あたま……おかしくなっちゃうぅぅぅ！」

若菜が未だ経験したことのない快楽の渦が、

一気に押し寄せて若菜の身体に責めこんでくる。

\n<陸也>「気持ちいいの？

　若菜ちゃん、気持ちいいんだ？」

\n<若菜>「はぁ、んんっ……キモチイイ……！

　へ、変な感じで……おまんこキモチイよぉ……！」

最早、若菜の頭は正常な判断を下せずに、

思ったまま、聞かれたままを正直に口にする。

\n<陸也>「もうイキそうだ……！」

\n<若菜>「ふぁんん、は、はい……！　い、イキます……！

　んっく、イっちゃいます……ああ、もう……ンんんん！」

\n<若菜>「ンっくぅうあああああああああ！」

若菜は嬌声をあげながら絶頂すると、

ビクッビクッ、と腰を一際大きく反り返させた。

\n<若菜>「んはぁ……はぁはぁ……んんっ……」

若菜は悩ましげな吐息を漏らし、

小刻みに震えながら、残った余韻に悶える。

\n<陸也>「若菜ちゃんさぁ、親はまだ帰ってこないんだろ？

　それじゃあ、まだやってもいいよな？」

\n<若菜>「はぁはぁ……んっ、はぁ……」

\n<若菜>（嫌って言わなきゃ……嫌って……

　こんなこと……嫌なはずなんだから……）

\n<若菜>（でも……疲れて上手く声が出ない……

　だったら……このまま黙ってればいいかな……）

\n<若菜>（それなら……

　先輩が勝手にやったことになるから……）

\n<陸也>「何も言わないって卑怯だなぁ、若菜ちゃん。

　つーか、こんなにヒクヒクさせてバレてないと思ってんの？」

\n<若菜>「ンふぁ……はぁはぁ……んんあっ……！」

ずぶずぶと焦らすようにゆっくりと、

男は絶頂した秘部に指を出し入れしていく。

\n<陸也>「そんなにエロいこと好きならさぁ、

　早くセックスしちゃおうぜ？　もっと気持ち良くなれるって」

\n<若菜>（これより……気持ちいいこと……

　そんなことされたら、わたし……）

\n<陸也>「おい、歯立てんなよ」

\n<若菜>「ん……ふぁ、ふぁい……んちゅ、ちゅぶ……」

若菜は一糸まとわぬ姿で男に乗りかかりながら、

肉棒を口いっぱいに頬張っていた。

\n<若菜>（わたし……おちんちん口に入れちゃってる……

　こんなエッチなこと……ダメなのに……）

\n<若菜>（でも、写真で脅されてるんだから……

　仕方ないよね……）

\n<若菜>「んちゅ、ちゅぶ……んっく、んん……」

若菜は口を懸命に動かして肉棒を扱く。

竿は唾液に塗れて、ぐちょぐちょに濡れていた。

\n<陸也>「ホントに若菜ちゃん初めてなの？

　むっちゃエロくしゃぶってるし上手すぎね？」

\n<若菜>「はぁ……そんなこと……ないです……

　んっく、ちゅる……ちゅぱ……んんちゅ……」

若菜は一心に男根を咥えこむ。

その姿はいっそ献身的にさえ見えた。

\n<陸也>「若菜ちゃんの口ん中あったけぇ……

　俺専用ののチンポケースにしたげよっか？」

\n<若菜>「んじゅる……っぷあ……！

　そんなの……嫌です……」

\n<陸也>「つか、若菜ちゃん。あんまり拒否ってこなかったね。

　そんなに俺のチンコしゃぶりたかった？」

その言葉に若菜の顔は一気の紅潮する。

その表情には焦りにも似た色が浮かんでいた。

\n<若菜>「ち、ちが……っ！　そんなのじゃないです……」

\n<陸也>「その割にはちゃんとしゃぶってんじゃん。

　あ、思ったより美味しかった系？」

\n<若菜>「それ、は……」

\n<若菜>（こんなの……美味しくないもん……

　ただ、すごくマズいのを想像したからそう思っただけ……）

\n<若菜>（こんなの……本当は口に入れたくない……

　でも、先輩に言われたから仕方なく……）

\n<陸也>「まあいいや。それにしても眺め最高！

　やっぱ、しゃぶらせる時は全裸じゃねーとな」

\n<若菜>「そ、そんなに胸見ないでください……

　わ、わたしが裸になる必要……ないじゃないですか……」

\n<陸也>「チンコ勃起させる為に決まってるっしょ。

　生でおっぱい当たってると萎えねーわ」

\n<若菜>「わ、わたしの裸で……おちんちんが……

　んっ、ちゅ、ちゅぱ……んちゅ……」

恥ずかしさから逃げるように男根に口づけを交わし、

若菜はそのまま亀頭を口に含んだ。

\n<若菜>「れろ、んく……ちゅぶ、れろ……ちゅぱ……」

\n<陸也>「なぁ、もっと激しくしてくれね？」

\n<若菜>「は、激しくって……こ、こんな感じですか……？」

\n<若菜>「じゅぶ、んんっく……じゅる、んちゅ、じゅるるるる！」

\n<陸也>「うおっ……！」

若菜は顔を激しく前後に振りながら、

舌で亀頭も舐めまわして竿全体を刺激していく。

\n<若菜>（激しくって……こういうことだよね……？

　分からないけど、すごく恥ずかしいことしてる気がする……）

\n<若菜>「んじゅる、れろ、んちゅぷぁ、んじゅぼぼ……！」

\n<若菜>「こ、これでいいですか……んちゅぶ……

　んっくんっく、じゅる、んちゅぼ……！」

\n<陸也>「あー、もうイキそうだわ……！

　若菜ちゃん、口の中に出すから」

\n<若菜>「んあっ……く、口の中に出すって……

　そ、それって……精液がわたしの口に……」

\n<陸也>「当然っしょ。ちゃんと全部飲めよ」

\n<若菜>（せ、精液を飲んじゃうなんて……！

　そんなエッチなこと……わたしがするなんて……）

\n<若菜>（でも……匂いだけでもすごいのに……

　飲んだら……どんな感じなんだろう……）

\n<若菜>「ううっ…………」

\n<陸也>「いいからフェラ続けろって」

\n<若菜>「んんっ、ふぁ、ふぁい……

　んじゅぶ、むちゅ、んちゅぶぁ……！」

射精間近の膨張した肉棒は、

若菜の口内でビクビクと脈打って絶頂を待つ。

\n<若菜>（すごくビクビクしてる……

　もうすぐに出ちゃうそうなんだって分かっちゃう……）

\n<若菜>（でも、そうしたら……わたしの口の中に、

　精液が出されちゃうんだ……飲まされちゃうんだ……）

\n<若菜>「んじゅる、ちゅぶ、ちゅぱぁ……んじゅるるる！」

若菜は絶頂の近づいた肉棒を激しく責め立てる。

その刺激に、男根は一際大きく震え上がった。

\n<陸也>「あー、イクわ……！　イク！」

\n<若菜>「んんんぅうううう！？」

若菜の口内に、白濁した液が放出される。

精液は若菜の口を一杯にしてなお溢れてきた。

\n<若菜>「んっくんっく……！」

若菜は口の中に残る圭啓したことのない味を、

懸命に喉を鳴らして飲み込んでいく。

\n<若菜>（ううっ……熱くて、喉に絡みついてくる……

　これが精液なんだ……この味が……）

\n<若菜>（匂いだけでもすごかったのに……

　飲んだら……もっと変な気持ちになっちゃう……）

\n<若菜>「んっく……こくん、ぷぁっ……！」

\n<陸也>「おいおい、溢してんじゃん。

　ちゃんと全部飲めって言ったよな？」

\n<若菜>「ご、ごめんなさい……

　飲もうとしたんですけど、すごく多くて、その……」

\n<陸也>「言い訳はいいから。

　まだ残ってるっしょ？　早く飲んでよ」

\n<陸也>「それと、尿道にも残ってるから。

　ちゃんと吸い出すまでがフェラだかんな」

\n<若菜>「はい……わかりました……

　んちゅ、じゅる、ちゅぶ……」

若菜は残った肉棒に残った精液を、

舐めとって、吸い出して、綺麗にしていく。

\n<若菜>「れろ、んっく……じゅるるるる……！」

\n<陸也>「はぁ……処女のお掃除フェラきもちー！

　残さずザーメン飲みきれよ」

\n<若菜>（精液……ザーメンって言うんだ……

　この匂い……ずっと嗅いでたらおかしくなっちゃいそう……）

\n<若菜>（ザーメンの匂いなんて……好きじゃない……

　こんな味なんて……好きなはずないもん……）

言葉では拒絶の言葉を口にする若菜は、

けれど肉棒を口から離すことなく精液を拭き取っていった。

\n<陸也>「なあ、そろそろ決めてくんね？」

\n<若菜>「決めるって……何をですか……？」

若菜は当然のように男の前で素肌を晒しながら、

おどおどとした様子で男の言葉に耳を傾ける。

\n<陸也>「決まってんだろ。セックスだよ、セックス。

　いい加減、写真隠すのもメンドーになってきたしさぁ」

\n<若菜>「そ、それは……

　でも……結婚もしてないのに、セックスなんて……」

\n<陸也>「つか、ラブホに来ておいてそれ言う？」

\n<若菜>「そ、それは……！　先輩が、無理やり……」

\n<陸也>「若菜ちゃんの考え方は古ぃんだって。

　今時、どんな女もパコパコハメまくってるっての」

\n<陸也>「それに、若菜ちゃんもハマると思うけどなぁ。

　今までヤったどんなことより気持ちいいからさぁ」

\n<若菜>「どんなことより……気持ちいい……」

\n<若菜>（胸揉まれたのも、キスされたのも、

　て、手マンされたのだって……すごかったのに……）

\n<若菜>（そ、それより気持ちいいなんて……

　でも、そんな……そんなの……）

\n<若菜>「本当に……その……せ、セックスをしたら、

　写真を消してくれるんですよね……？」

\n<陸也>「当然っしょ。なんなら、今消したげよっか？」

\n<若菜>「えっ……？」

男は若菜にスマホのアルバムを見せながら、

若菜の裸が映った写真をその場で消去した。

\n<陸也>「ほら、消去完了っと。

　これでいいんでしょ？」

\n<若菜>（ほ、本当に消してくれた……

　それなら、わたしも……ちゃんとしないと……）

\n<若菜>（セックスなんて……すごくエッチで、嫌だけど……

　でも、消してもらったんだからしょうがないよね……）

\n<若菜>「わ、わかりました……

　一回だけ……一回だけセックスすればいいんですよね……？」

\n<陸也>「そうそう。それじゃあヤろっか。

　まずはマンコに挿れる準備してよ」

\n<若菜>「それって……どうすれば……？」

\n<陸也>「分かってんだろ？

　しゃぶってチンコ立たせるんだよ」

\n<若菜>「は、はい……」

若菜は男のズボンをおもむろに下ろすと、

露わになった肉棒をゆっくりと口に咥えこんだ。

\n<若菜>（セックスするために……わたしの中に挿れるために……

　処女をあげるためだけに、おちんちん舐めちゃってる……）

\n<若菜>「ちゅる、ちゅぶ、んちゅ……

　んっ、おっきくなってきた……」

\n<陸也>「マジで若菜ちゃんのフェラ良いわ……

　なんなら、このまま出していい？」

\n<若菜>「んっく、むちゅ……んぷぁ……

　そんなの、ダメです……んちゅぶ……」

\n<陸也>「冗談冗談。本気にしちゃった？

　そんな勿体ないことするわけないっしょ」

\n<若菜>「んっ、ちゅぶ……もったいない……？」

\n<陸也>「溜まった精液は全部さぁ、

　若菜ちゃんの中に注ぐに決まってるっしょ？」

\n<若菜>「……んっく、じゅる、ちゅぶ……

　れろ、んぷぁ、ちゅるる……」

\n<若菜>（舐めてると分かる……こんなに大きいのが……

　わたしの中に入っちゃうんだ……）

\n<若菜>（おまんこに挿れられちゃうんだ……）

\n<陸也>「それじゃあ、フェラはこれくらいにして、

　セックスしちゃおうか、若菜ちゃん」

\n<若菜>「んちゅぷぁ……は、はい……」

若菜は一糸纏わぬまま恐る恐るベッドに横たわる。

男はその光景を目に焼き付けながら、男根をそそり立てる。

\n<若菜>（ああ、今からおちんちんが入っちゃうんだ……

　んんっ…来る……入ってきちゃう……！）

\n<若菜>「ンんっ、んんんんっふぅ……！」

みちみちと秘裂を押し広げていくように、

肉棒が若菜の処女膜を貫いて膣内へと侵入していく。

\n<若菜>（先輩に……わたしの初めてあげちゃった……

　ハルタじゃない人に……奪われちゃった……）

\n<陸也>「うお……処女マンコきっつ……！

　そのくせ中トロトロでマジヤベェわ……！」

\n<陸也>「どんだけ名器なんだっつーの。」

　こんなん挿れただけで出ちまいそうだわ……！」

\n<若菜>「はぁはぁ……そ、そんなこと言わないで……」

\n<若菜>（お、お腹の中が……圧迫されてるみたい……

　ずっと……おまんこ弄られてる感じがする……）

\n<若菜>（これがセックス……

　でも、これなら今までのとはあんまり……）

\n<陸也>「それじゃあ……動くよっと！」

\n<若菜>「んんお゛っ……！？」

ずぶり、と容赦なく秘部に腰が打ち付けられる。

その衝撃と快楽に若菜は低い声を上げた。

\n<若菜>（なにこれ……なにこれなにこれ……！

　今までのと……全然違う……！）

\n<若菜>（ダメ……こんなこと、しちゃったら……

　気持ち良すぎておかしくなっちゃう……！）

\n<陸也>「どう！　若菜ちゃん！

　これが若菜ちゃんのしたがってたセックスだよ！」

\n<若菜>「んふぁあッ……！　んっくぅ、んふぁあああ！」

パンパンとリズミカルに男は腰を打ち付ける。

その度に、若菜は響くような嬌声を漏らした。

\n<陸也>「さっきまで処女だったくせに……

　いきなり感じてるとか変態すぎだろ……ッ！」

\n<若菜>「ンっふぁあッ……！

　そんっ、なぁ……いきなり、激し……んんっ！」

\n<陸也>「あれ？　優しくしてほしかったの？

　激しいほうが気持ちいいんだけど？」

\n<若菜>「はぁんんっ、で、でも……

　わ、わたし……初めてなのに……んっくうぅ！」

\n<若菜>（はぁはぁ……激しくされるのすごい……

　セックスで……おまんこ馬鹿になっちゃう……！）

男は若菜の敏感なポイントを探るように、

突く部分を変えながら何度も出し入れを繰り返す。

\n<若菜>「んふぁ、そ、そこ……ダメ……んんあぁぅ！」

\n<陸也>「ダメってことは、ここを責めて欲しいってことね」

\n<若菜>「んぁっ、ちが、ンんんっ……！

　そこ、気持ち良すぎるからぁ……ダメ……んんぁ！」

見つけた性感帯を男は容赦なく責め立てる。

そのたびに、若菜は身体を揺らして興奮を露わにする。

\n<陸也>「ねぇ、若菜ちゃん。写真撮っていいよね？」

\n<若菜>「んっ、ふぁ……え、えっ……？」

\n<陸也>「今の若菜ちゃんスゲェエロいからさぁ。

　どうしても撮りたいんだよね」

\n<若菜>「そ、それは……んっ、あっんんっ……！」

\n<若菜>（せっかく写真を消してもらったのに……

　また撮られたら、またエッチなことさせられちゃう……）

\n<若菜>（またセックスをさせられちゃう……

　この気持ちいいことを……また、ずっと……）

\n<若菜>「……ふぅっ、んんっ……んはぁ……！」

\n<陸也>「何も言わないってことは、

　してもいいって受け取っちゃうけどいいの？」

\n<若菜>「はぁ……んんっく、っあぁ、んんぅ……！」

若菜はわざとらしく嬌声だけをあげる。

その姿に男はニヤリと口角を釣り上げた。

\n<陸也>「ホントに、若菜ちゃんは卑怯だね。

　まあ、そんなところも可愛いんだけどさッ！」

\n<若菜>「ンんんぅッ……！　はぁ、んんっ……んっ！」

男は激しさを増して腰を動かす。

それは絶頂を迎える寸前である合図だった。

\n<陸也>「あー、もうイキそうだわ……！

　若菜ちゃん、中に出すから！」

\n<若菜>「んぁっ……えっ……？　そ、それはダメです……！

　そんなことしたら、あ、赤ちゃんが……ンんんっ！」

\n<陸也>「何言ってんの！

　中出しが一番気持ちいいんだって、マジで！」

\n<若菜>「んっ、ふぅんん……！

　い、いちばん……きもちいい……んふぁっ……！」

\n<陸也>「ここまでしたんだからさぁ……

　一番気持ちいいの味わわないと損だって！」

\n<若菜>「それ、は……ンんんぁ……！」

\n<陸也>「それじゃあ、聞くけどさぁ……

　中出ししていい？　ダメならちゃんと言ってね」

\n<若菜>「そ、そんな……っふあっ、んんっ……！」

\n<若菜>（中で出すなんて……そんなこと絶対にダメ……

　赤ちゃんできちゃうかもしれないのに……）

\n<若菜>（でも、それが一番気持ちいいなら……

　い、一回くらいなら……大丈夫、だよね……？）

\n<陸也>「あー、もうマジでイキそうだわ……！」

\n<若菜>「んはぁ、んんっ、ああんっ……んっくぅう！」

\n<陸也>「中出しするぞ……！　あー、出る……！」

\n<若菜>「ンんっふぅぁあああああああ！」

ビクビクと痙攣する若菜の膣内に、

逆流するほどの精液が勢いよく流し込まれる。

\n<若菜>（これが中出し……

　こんな気持ちいいことがあるなんて……！）

\n<若菜>「んふぁ……はぁはぁ……んっ、はぁはぁ……」

\n<若菜>（まだドクドク流れ込んできちゃってる……

　これ、本当に赤ちゃん出来ないよね……？）

\n<陸也>「ふぅ……出した出した……」

男は最後の一滴まで精液を出し尽くしても、

なお若菜と繋がったままでいた。

\n<若菜>（まだおちんちん挿れられちゃってる……

　ザーメンが出ないようにおまんこ蓋されちゃってるみたい……）

\n<若菜>「んっ、あの、なんで……

　お、おちんちん抜かないんですか……？」

\n<陸也>「は？　まだヤるからに決まってんだろ？

　若菜ちゃんだって一回で満足なんかしてねーっしょ？」

\n<若菜>「えっ……で、でも……一回だけって……」

\n<陸也>「じゃあホントにこれで止めていいんだ？

　こんなにマンコでチンコ締め付けてきてんのにさぁ」

男の言葉に若菜の顔が耳まで真っ赤に染まる。

その実、若菜の膣内はきゅうっと竿全体を包んでいた。

\n<若菜>「そ、そんなこと……わたしは……！」

\n<陸也>「いい加減さぁ、正直になっちゃえって。

　もっとハメて欲しくてたまんねぇんだろ？」

\n<若菜>「そ、そんなこと……ないです……」

若菜の部屋中にパンパンと腰を打ち付ける音と、

甲高い嬌声と吐息が響き渡っていた。

\n<若菜>「ふあっ、んんっ……んふぅう……！」

\n<陸也>「若菜ちゃんって部屋でヤるとさぁ、

　すごく良い声で鳴いてくれるよなッ！」

\n<若菜>「そ、そんなこと……なぁ、んんっ……！」

\n<陸也>「そんな声で言われたって説得力ねぇってーの」

\n<若菜>「んひゃあ、んんっく……んふぁ、んああっ……！」

男は容赦のない突きで若菜の秘部を抉っていく。

かき回された蜜壺は白く濁った液に塗れていた。

\n<陸也>「そういやさぁ、この前は正常位で今日はバックじゃん？

　若菜ちゃんはどっちが好きなの？」

\n<若菜>「んんっ、そ、そんなの……

　あんぅぅ……分かりません……んあっ……！」

\n<若菜>（どっちが気持ちいいかなんて考えられない……

　だって、セックスが気持ち良すぎるもん……！）

\n<若菜>（どっちもおちんちんが奥まで当たって……

　おまんこがきゅんきゅんしちゃってるもん……！）

\n<陸也>「ま、俺もどっちでもいいけどね。

　この極上マンコにハメれればさッ！」

\n<若菜>「ンんんぅううッ！　んっ、んんっ……ふぁっ！」

\n<若菜>（前の体勢より奥まで突かれちゃってる……！

　し、子宮の入口に……おちんちんでキスされちゃってる……！）

\n<若菜>（後ろからのセックスすごい……！

　こっちの体勢のほうが気持ちいいかも……！）

　若菜はさらに喘ぎ声を大きく響かせる。

　その声にこそ、若菜の本心が露わになっていた。

\n<陸也>「このトロマンと一緒にいてセックスしてないとか、

　ハルタくんだっけ？　ソイツさ、ホモなんじゃね？」

\n<若菜>「あっ、んふぁ、んんっ……は、ハルタ……？」

\n<若菜>（ハルタはそんなこと思わないもん……

　ハルタはわたしのことエッチな目でなんか……）

\n<若菜>（でも、この体勢だと先輩の顔見えないから、

　あ、相手がハルタだって想像しただけで……）

\n<若菜>（あっ……ダメ、そんなこと考えちゃったら……

　おまんこからエッチなお汁がいっぱい垂れちゃう……！）

若菜は想像を逞しくさせながら、

愛液を洪水のように垂らしながら肉棒を咥えこむ。

\n<陸也>「こんなに愛液出しちゃってさぁ。

　そんなにバックで興奮してんの？」

\n<若菜>「ちがっ……そんなんじゃ、んんっ、あんん……ッ！」

愛液はローションの役目を果たし、

肉棒のピストンをさらに加速させていく。

\n<若菜>「んんっ、そ、そんな早くしちゃ……

　だ、ダメ……んあっ、お、おかしくなっちゃ……んんっ！」

\n<陸也>「えー、じゃあおかしくなっちゃおっか」

\n<若菜>「えっ……ダメ、そんな……ンんんふぁぁあッ！？

　んんっく、んんぅうっ……ッ！」

男は執拗に同じ部分だけを突き続ける。

そこは若菜が一等身体をくねらせる敏感なポイントだった。

\n<陸也>「若菜ちゃん、ここが気持ちいいんでしょ？」

\n<若菜>「ンんんぅ……！　そ、そんなの……ああぅうッ……！

　し、知らないです……ふぁ、んっくぅ！」

\n<若菜>（そんなこと、わたしでも知らないのに……

　先輩に、わたしの身体のこと全部知られちゃってる……）

\n<陸也>「それじゃあ分かるまで教え込んであげるよ。

　ま、若菜ちゃんは全身性感帯だけどね」

\n<若菜>「ンふぁ……！？」

男が軽くお尻の表面を撫で上げただけで、

若菜は肩をびくりと震わせて快感に声を上げる。

\n<若菜>（な、なんで……お尻触られただけなのに……

　こんなに気持ち良く感じちゃうの……？）

\n<陸也>「あー、そろそろ出そうだわ。

　若菜ちゃん、今回も中に出すけどいいよね？」

\n<若菜>「んっ……んんっ……」

\n<若菜>（今度こそ……ちゃんと言わなきゃ……

　中出ししちゃダメだって……）

\n<若菜>（また中出しされちゃったら本当に……

　でも、またあの気持ちいいのを……）

\n<若菜>（一回しちゃったんだし、別にいいよね……

　赤ちゃんなんて簡単にできないもん……）

\n<若菜>「んっ、ふぅぁ……す、好きにしてください……」

\n<陸也>「そ。じゃあ、好きに種付けするわ」

男はフィニッシュを迎えるために、

腰の打ちつける速度をぐんぐん加速させていく。

\n<若菜>「あぁんん……！　んっく、んうぅう、ふぁっ……！」

\n<陸也>「若菜ちゃん……子宮めがけて出してやるよ！」

\n<若菜>「んっくぅ、んふぁんん、あふぁあっ……！」

\n<陸也>「あー、出る出る……ううッ！」

\n<若菜>「ンんふぅぁあああああああ！」

一番奥へと亀頭を押し付けながら、

男は膣内いっぱいに精液を放出させる。

\n<若菜>（んんっ……すごい量のザーメン……

　お腹の中で精子が動いてるの分かっちゃう……）

\n<若菜>「はぁはぁ……んんっ、気持ちよか――」

\n<陸也>「へぇ、若菜ちゃん。気持ち良かったんだ？」

若菜がポロリと溢した言葉を聞き逃さず、

男は煽り立てるように言ってみせる。

\n<若菜>「ちがっ……気持ち良くなんか……ない、です……

　わたしはもう……こんな、こと……」

\n<陸也>「もうセックスなんかしたくないって？」

\n<若菜>「…………」

\n<陸也>「じゃあ、若菜ちゃんが『もうセックスしたくないです』

　ってちゃんと言えたらセックスするの止めるわ」

\n<若菜>「絶対に、嘘ですよね……」

\n<陸也>「嘘じゃねぇって。マジマジ大マジ。

　俺だって別に脅してまでヤリたくなんかねーって」

\n<若菜>「……そんなの絶対嘘です。

　先輩は嘘つきだから……だから、言いません……」

\n<陸也>「……そっかぁ。若菜ちゃんは正直だねぇ。

　じゃあ、若菜ちゃんが言うまで遠慮なくヤリまくるわ」

夏休み中の静まり返った廊下の用具室から、

けれど学び舎とは思えない淫靡な声が漏れていた。

\n<若菜>「んっくぅ、ふぁ、んんっ……！

　せ、先輩……こんなところでなんて……！」

\n<陸也>「そんなこと言って興奮してるんでしょ？

　こんなにマンコとろとろにしちゃってさぁ」

\n<若菜>「ちがっ、それは……ンんんっ……！

　先輩の……お、おちんちんが……ふぁ、んぅ……！」

若菜は立ったまま足を大きく広げて、

壁に寄り掛かるようにして膣いっぱいに肉棒を咥えこむ。

\n<陸也>「つか、この体勢マジでヤベェわ……！

　マンコ締まりすぎてチンコ持ってかれるわ！」

\n<若菜>（この体勢……なんだか動物みたい……

　すごく……犯されちゃってる感じがする……！）

\n<若菜>（それに、前の時とは全然違う場所に当たって……

　それがすごく……気持ちいい……！）

\n<若菜>「んふぅ、んっくぅ……！

　そんな、こと……んあっ、言わないでぇ……！」

\n<陸也>「なに言ってんだよ。

　こんなにマンコ喜んでんのにさぁッ！」

\n<若菜>「んふああああッ、はぁ……奥、ダメ……！

　そんなとこ、突いちゃ……ひゃぁっ、んんっ……！」

男は若菜の太ももを抱えながら、

奥まで抉るようなピストンで膣内を責める。

\n<陸也>「若菜ちゃんはこの体勢どうなの？

　まあ、聞くまでもないけどね」

\n<若菜>「ンんんぅう……！　はぁ、こ、こんなの……

　つ、疲れるだけで、気持ち良くなんか……ひゃあん！」

\n<陸也>「その割には愛液ドバドバ出てるよ。

　あーあ、床までびしょびしょだわ」

\n<若菜>「そ、それは……

　た、ただの……生理現しょ……う゛うッんん……！？」

膣奥まで突き刺さった肉棒は、

浅く、けれど深い部分をいじめるように前後する。

\n<若菜>「なに、これ……やめっ……ンンんっ……！

　そんなぁ、奥ばっか……んふぁぅう！」

\n<若菜>（この体勢ダメ……すぐにイっちゃいそうになる……

　も、もう……これ以上耐えられない……！）

\n<若菜>「んふぁ、せ、先輩……わ、わたし……

　も、もうイっちゃいそうです……んんっくう……！」

\n<若菜>「だ、だから、その……ああっ、んんっ……！

　い、イっても……んひゃあ！　い、いいですか……？」

\n<陸也>「しゃーねーなぁ。

　それじゃあ、イキやすいようにしてやるよッ！」

\n<若菜>「えっ……？　そ、そんな……今のままでじゅうぶ――」

\n<若菜>「ンんんぅ……！」

男は近づいた若菜の絶頂を迎えるために、

ピストンの速度を早くして膣内に刺激を与える。

\n<若菜>「ひゃあ、んんっ、ああっ……！

　こ、これ……すぐ、イっちゃ……ンンぅぅ！」

\n<若菜>「あっ、やぁ、ダメ……ンふあぁ……！

　もう、我慢できない……い、イキます……イっちゃ……！」

\n<若菜>「ンんふぁああああああああ！」

若菜の腰が大きく震えて絶頂へと至る。

その目は虚ろに、けれど満足そうな表情を浮かべていた。

\n<若菜>「はぁ……はぁはぁ……ンんっく、ひゃあああッ！？」

\n<陸也>「なに満足そうにしてんだよッ！」

若菜が絶頂を迎えたというのに、

男のピストンは止まることなく若菜の秘部をかき回す。

\n<若菜>「せ、先輩……イった……イキましたから……

　だ、だから……動くの、やめ……ンんんっ！」

\n<陸也>「は？　まだ俺がイってねーんだけど？」

\n<若菜>「で、でも……おまんこが……び、敏感すぎて……！

　これじゃあ……んあっ、っくう……！」

\n<陸也>「若菜ちゃん感じすぎっしょ！

　すげぇエロい顔してるよ？」

\n<若菜>「そんなっ、かお……んんふぁっ……

　し、してない……です……んんっく、うぅんんっ！」

\n<陸也>「なに言ってんの。そこに鏡あるっしょ？

　そこに映ってる自分の顔見て見ろよ」

\n<若菜>「あっ、んんっ……！　ふぁぅ……えっ……？」

若菜は鏡に映った自分の姿を目に映す。

そこには快楽に表情を歪めた自分自身が映っていた。

\n<陸也>「チンコ入れられてる時の若菜ちゃん、

　すごい表情してるだろ？」

\n<若菜>（こ、これが……わたし……？

　こんなエッチで……喜んでるのが、わたし……？）

\n<若菜>（こんな……こんなエッチな顔してるなんて……

　まるで、わたしがセックス好きみたいな……）

\n<若菜>「んっ、んんぅ、っくぅあああッ……！」

性行為に酔っている自分の姿を見た若菜は、

その姿に寄っていくように快感が深まっていく。

\n<陸也>「なになに、若菜ちゃん？

　エロい自分の姿見たらエロい気分になっちゃった？」

\n<若菜>「あっ、んはぁ、んんぅ……！　っくうぅ！」

\n<陸也>「その気持ち分かるわぁ～！

　俺も毎回エロくさせられて困ってんだよねッ！」

\n<若菜>「お゛ッ！　おっ、ンンッ……ふぐぅうう！」

一等深くまで突き刺される肉棒に、

若菜は低い声で鳴きながら秘部をぐっしょりと濡らす。

\n<陸也>「あー、そろそろ限界だわ……

　若菜ちゃん相手だとマジすぐイキそうになるわ」

\n<陸也>「それじゃあ、若菜ちゃん。

　今日も中に出すけど……って聞いてねぇな」

\n<若菜>「んお゛っ、んぐぅう、ふぅ……んふぁあ……！」

絶頂を迎えて感覚が鋭くなった秘部を突かれ続け、

若菜の意識は快楽の渦に飲み込まれていた。

\n<陸也>「まあ、いいや。嫌がっても中出しするし。

　中出ししねぇセックスって意味ねぇってのッ！」

\n<若菜>「ンんふぁあ……！」

男はラストスパートをかけるように腰の動きを速める。

それに合わせて若菜の声も大きくなっていく。

\n<陸也>「あー、もうダメだわ……イクッ！」

\n<若菜>「ンんんっぅおおおおおおおおッ！」

明後日の方向を向きながら、若菜は身体を震わせ、

膣内に注がれる精液を迎えていた。

\n<陸也>「ふぅ……出した出した。

　この体勢ヤベェな……今度他の女でも試すか」

\n<若菜>「はぁはぁ……んっく、あっ、んんっ……」

男は時折奥まで突いて精子を膣奥へと押し込む。

その隙間から溢れ出た精液が床へと零れた。

\n<陸也>「……喘ぐだけのオナホみてぇになっちまったな。

　それじゃあ、犯して起こしてやるか」

\n<若菜>「ンおお゛っ、ふぁあっ、んんふぁううう！」

若菜の部屋でベッドがギシギシと悲鳴を上げる。

その上では若菜が跳ねるように突き上げられていた。

\n<若菜>「んふぁ……！　んっく、んぅううう！」

\n<陸也>「やっぱ騎乗位たまんねぇわ……！

　若菜ちゃんと繋がってるとこ丸見え」

\n<若菜>「んっ、やっ……見ないでください……！

　わ、わたしのおまんこ……んあっ、ひゃっ！」

\n<陸也>「そんなこと言って見て欲しいんでしょ？

　ほら、見ただけで愛液溢れてきてんじゃん」

\n<若菜>「ち、ちがっ……んっ、違います……！

　見られてなんて、わたし……んあっ、ふぅ……！」

男は肉棒が出入りする秘部をじっくりと見つめる。

愛液とカウパーが混ざり合ってぐっしょりと濡れていた。

\n<若菜>（お、おまんこすごく見られてる……！

　おちんちんが出たり入ったりするとこ……見られちゃってる！）

\n<陸也>「若菜ちゃんのおっぱいすげぇ！

　突かれてめっちゃ揺らしてんじゃん！」

\n<若菜>「ふぁあ、んんっ……！

　そ、そんなこと……言わな……んあっ、んふぅ！」

まるでゼリーを揺らしているような柔らかさで、

若菜の胸はたゆんと弾むように激しく上下に揺れる。

\n<陸也>「ヤリまくっても締まり変わんねぇしさぁ。

　ああ、もうチンコ持ってかれちまいそう……！」

\n<若菜>「ンふぁ、ああんっ、んっくぅう……！」

\n<陸也>「あー、そろそろイキそうだわ……！」

\n<若菜>（中出しされちゃう……でも、もういっか……

　わたしは先輩には逆らえないんだから……）

\n<若菜>「んふぁっ、んんっく、あんぅう……！

　ま、また……中に出すんですよね……んんっ！」

\n<陸也>「あ、中出しはもうしねーから」

男の腰の動きが突如止まる。

その言葉に若菜は動揺を隠し切れないでいた。

\n<若菜>「えっ……？」

\n<陸也>「だから、もう中出しはしねーって。

　ガチで孕んでも困るからさぁ。所詮遊びじゃん？」

\n<若菜>「それは、そう……ですね……」

\n<若菜>（ザーメンを中に出すなんていけないことなんだから……

　これでいいんだよね……これが普通なんだよね……）

\n<若菜>「…………」

\n<若菜>（でも……それじゃあ、あの気持ちいいのが……

　中出しされる気持ちいい感覚が味わえない……）

\n<若菜>（そんな……そんなの……セックスじゃない……

　あの気持ちいいのをまた……中出しされたい……！）

\n<若菜>「――して、ください……」

\n<陸也>「あ？　なんか言った？」

\n<若菜>「先輩のざ、ザーメン……

　わ、わたしの中に出してください……！」

男は満足そうにニヤリと下卑た笑みを浮かべる。

けれど、すぐさま平静を装って若菜に声をかけた。

\n<陸也>「いいの？

　赤ちゃんできちゃうかもしれねーよ？」

\n<若菜>「それ、は……」

\n<陸也>「でも、若菜ちゃんに赤ちゃん出来たらさぁ、

　俺の子になるってことっしょ？　俺めんどいの嫌だわ」

\n<陸也>「だからさぁ、そんなに精子欲しいなら、

　自分で腰振って勝手に中出しさせれば？」

\n<若菜>「えっ……？」

\n<陸也>「若菜ちゃんが勝手に俺の精子で孕むなら、

　俺の知ったことじゃねーじゃん？」

\n<陸也>「俺、変な責任とか負いたくねーしさぁ。

　全部若菜ちゃんの責任でヤるなら好きにすれば？」

\n<若菜>「…………」

静寂を破ったのは、

ぐちゅぐちゅと粘液をかき回すような音だった。

\n<若菜>「はぁはぁ……んっく、ふぅ……んあっ……！」

若菜はまるで肉棒で自慰をするように、

自ら腰を前後左右に揺すって膣内を刺激する。

\n<陸也>「気持ち良そうに腰振っちゃってさぁ。

　そんなに俺の赤ちゃん欲しいんだ？」

\n<若菜>「んっ……ちがっ、います……

　わ、わたしは……中出しして欲しいだけ……んふぁ……」

\n<陸也>「うわっ、そんな理由で中出ししてほしいとか、

　若菜ちゃんエロすぎっしょ……！」

\n<若菜>（わたしは先輩のことなんて好きじゃないもん……

　わたしは……エッチなんかじゃないもん……）

\n<若菜>（でも……先輩に脅されてるから仕方なく……

　今のだって……きっとわたしが言わなくても中出しされてた……）

\n<若菜>（そうだよ……絶対にされてたもん……

　きっと、おねだりするようにも言わされてたよ……）

\n<若菜>（わたしは、言われる前にしただけ……

　全然……わたしがしたいだけとかじゃないもん……）

\n<若菜>「エッチなんかじゃ……ないです……んんっ……」

若菜は心の中の自分に何度も言い訳をしながら、

けれど腰を上下に振り続けるのを止めないでいた。

\n<陸也>「つか、若菜ちゃん今のソレさぁ。

　オナニーしてみるたいでめっちゃエロい」

\n<若菜>「オナ……こ、これが……オナニーですか……？

　おちんちんで……オナニー……ふっぅ、んんっ……」

\n<若菜>（オナニーって、こんなに気持ちいいんだ……

　自分の好きなところに、自分で当てれて……すごい……）

\n<陸也>「チンコでオナニーとかビッチすぎっしょ！」

\n<若菜>「わ、わたしは……んふぅ、んんっ……

　ビッチ、なんかじゃ……あっ、ないです……」

若菜は敏感な部分を探り当てては、

腰を縦横無尽に振って膣内に肉棒を押し当てる。

\n<陸也>「そんなエロい腰使いしてビッチじゃねーとか、

　流石に言い訳ひどすぎね？」

\n<若菜>「そんなの……んっ、ふぁっ……んんっく、ふぅ……！」

\n<陸也>「あー、もうイキそうだわ……！

　若菜ちゃんさぁ、引き返すなら今しかねーよ？」

\n<若菜>「んんっ……ふぁっ、ああっんんっ……！」

男の言葉に若菜は返答することなく、

ただ絶頂を促すように腰の動きを激しくさせる。

\n<若菜>「はぁはぁ……んふっ、んんっ……ふぁ……！

　あっ、ここ……んぁ、すごい……」

\n<若菜>「んんぅ……もう、ダメ……わ、わたしも……

　わ、わたしも……一緒に、イっても……いいですか……？」

\n<陸也>「ああ。中出しで絶頂させてやるよ」

\n<若菜>「はぁ、んんぅ……それは、んんっ、あっ……！」

\n<若菜>「んはぁ、ダメ……もう我慢できないです……！

　んっく、ううぅ……イクッ、イっちゃ……んんんんっ！」

\n<若菜>「ンふぅぁあああああああああああああっ！」

若菜の膣内に精液が流し込まれるのと同時に、

若菜は身体を大きく反らして絶頂を迎える。

\n<若菜>「んっ……はぁはぁ……んんっ……！」

大量に射精された精液は若菜の膣内をいっぱいにして、

それでも溢れ返って体外へと放出される。

\n<若菜>（やっぱり中出しが一番気持ちいい……！）

\n<陸也>「ふぅ……搾り取られたわ。

　どんだけザー汁狂いなんだよ」

\n<若菜>「ざ、ザーメンなんて好きじゃないです……

　わ、わたしは先輩が脅すから仕方なく……」

\n<陸也>「そうだ。もう写真消したから」

\n<若菜>「えっ……？」

\n<陸也>「どうかしたの？　写真消してほしくて、

　俺とセックスしてたんでしょ？」

\n<若菜>「そ、そうですけど……」

\n<陸也>「だから、望み通り消してあげたってわけ。

　ほら、証拠にスマホのアルバム見せたげよっか？」

男は若菜に向かってスマホの画面を向ける。

そこに若菜の姿は一枚たりとも映っていなかった。

\n<陸也>「あーあ。すっげー残念だけど、

　これで若菜ちゃんとセックスする理由はなくなっちゃった」

\n<若菜>「……わたしは、良かったです……」

\n<陸也>「あっ、それで話は変わるんだけどさ。

　俺、明日も学園行くんだわ。新しい女漁りに」

\n<若菜>「…………」

\n<陸也>「次も若菜ちゃんみたいな子がいいなぁ。

　見つけたら保健室に連れ込んでその場でヤリまくるわ」

\n<陸也>「夜までよがらせまくってセックス三昧。

　孕むまで中出ししまくってやろうかな」

\n<若菜>「孕むまでずっと……中出し……」

\n<陸也>「ま、もう若菜ちゃんには関係ねーか」

\n<若菜>「そ、そうです……

　わたしには、もう……関係ないです……」

\n<若菜>（そうだもん……もうわたしには関係ない……

　もうセックスなんて、しなくていいんだから……）

\n<若菜>（セックスを……もう、しない……

　もう……気持ち良くなれないってこと……？）

\n<若菜>（わたしに似た子が良いって言ってたけど……

　それって……わたしでも良いのかな……）

保健室の中のカーテンに仕切られた奥から、

淫靡な匂いを放つ物音が小さく聞こえてくる。

\n<若菜>「んっ、はぁ、んんっ……！」

\n<陸也>「それにしても、若菜ちゃんが来るなんてね」

\n<若菜>「た、たまたま……んんっ、です……！」

\n<陸也>「つか、来たってことはさ、

　これからも若菜ちゃんを犯しまくっていいってことだよね？」

\n<若菜>「それは…………」

\n<若菜>「……先輩のところに来ちゃったのは、

　わたしの不注意ですから……されても文句言えないです……」

\n<陸也>「ホント、若菜ちゃん言い訳好きだよね。

　正直に言ったら？　セックス大好きですってさ」

\n<若菜>「んっあ……い、言い訳なんかじゃ……ンンッ……！

　わ、わたしは……そんなこと……ひゃあ、んあっ……！」

ガラガラと、保健室の扉が開く音がする。

その瞬間、若菜の鼓動は緊張で早く鳴り始めた。

\n<若菜>「せ、先輩……誰か来ちゃいました……！」

\n<陸也>「それはマズったな……とりあえず静かに」

\n<若菜>「わ、分かりました……」

\n<晴太>「あれ……いない……

　トイレに行ってるのかな……？」

\n<若菜>（あれ……この声って……ハルタ？

　な、なんで保健室に……！）

\n<若菜>「ンんんっ……！」

止まっていたはずの肉棒が、急に膣奥へと刺さり、

若菜は抑えていた声を思わず漏らした。

\n<若菜>「せ、先輩……！」

\n<陸也>「悪ぃ悪ぃ、つい腰が動いちゃって。

　マジわざとじゃねーって。ごめんごめん」

\n<晴太>「あれ……誰かいるのかな……？」

\n<若菜>「ハルタがこっち来ちゃう……！

　せ、先輩……ど、どうすれば……？」

\n<陸也>「知り合いなんだろ？　俺はいねーことにするから。

　若菜ちゃんも身体だけ隠して追い払ってよ」

\n<若菜>「わかりました……や、やってみます……」

若菜は仕切られたカーテンから顔だけを出して、

こちらを向いていた晴太に声をかけた。

\n<若菜>「は、ハルタ……どうしたの……？」

\n<晴太>「あれ？　若菜？

　どうしてこんなところにいるの……？」

\n<若菜>「えーっと、その、それはね……

　ほ、保健室の先生に見ててって言われてね……」

\n<晴太>「そうなんだ……って、あれ？

　大事な用事があるんじゃなかったの？」

\n<若菜>「そ、それは……も、もう終わったの！

　意外と早く終わっちゃって……えへへ……」

\n<晴太>「そうだったんだ……

　ということは、若菜はずっと保健室にいたんだよね？」

\n<若菜>「えっ、う、うん……そうだよ……」

\n<晴太>「それじゃあさ、先輩見なかった？」

\n<若菜>「先輩……？　それってどのせんぱ――ンんぁッ！？」

ずぶり、と油断していた膣内に肉棒が突き刺さる。

突然の出来事に、若菜は甲高い声を漏らした。

\n<晴太>「若菜？　どうかしたの？」

\n<若菜>「えっ、んっ……な、なにが……？

　なにも……ふぅっ、な、ないよ……」

\n<若菜>（先輩なんで動くの……！

　これじゃあ、ハルタにバレちゃう……！）

\n<若菜>\}「せ、先輩……止めてください……」

\n<陸也>\}「ごめんごめん、腰が勝手に動いちゃってさぁ。

　ほら、普通にしてないとハルタくんにバレちゃうよ」

\n<若菜>\}「そ、そんな……」

\n<晴太>「若菜……？」

\n<若菜>「う、ううん……！　んっ……な、なんにも……

　ふぅ、な、ないよ……えへへ……んんっ……」

若菜は努めて平静を装うも、

男はからかうようにピストンを速めていく。

\n<晴太>「なんか変な音がしない……？

　ほら、パンパンって」

\n<若菜>「んっ……え、そ、そうかな……んんっ……

　わ、わたしには聞こえないけど……！」

\n<若菜>（なにこれ……いつもと全然違う……！

　ハルタがいるだけなのに……キュンキュンする……！）

\n<若菜>（ハルタにセックスしてるところ、

　見られちゃうかもしれないのに……なんで……！）

男はまるで面白がるような表情で、

若菜の膣奥に肉棒を抉るように押し込んだ。

\n<若菜>「ンんお゛っ……！？　んふぁああ……！」

\n<若菜>（そんな奥まで挿れられちゃったら……

　声が抑えきれないよ……！）

\n<晴太>「若菜！？

　そんな声出して……まさか病気なの！？」

\n<若菜>「んんっ、ち、違うの……んふぅっ……！

　ちょ、ちょっと……ぐ、具合が悪くて……んんっ！」

\n<晴太>「大丈夫なの、若菜？

　具合が悪いなら僕が看病してあげるから！」

\n<若菜>「んんっ、だ、ダメ……来ないで……！

　は、ハルタは……ダメ……んんっ、なの……！」

\n<晴太>「で、でも……若菜苦しそうだよ！」

\n<若菜>（ハルタに見られてるだけで……

　いつもより……すごく感じちゃってる……！）

\n<若菜>（こんなのすぐにイっちゃうよ……！

　ハルタに見られながら……イっちゃう……！）

\n<若菜>（そんなのダメ……ハルタにバレちゃ……！

　は、早く……ハルタを追い返してイキたい……！）

\n<若菜>「は、ハルタぁ……お、おねがいが……んんっ！

　おねがいが……あるの……んふぅ……！」

\n<若菜>「ほ、保健室の……せ、先生を……んんっく……！

　よ、呼んできて……はぁ、く、くれないかな……？」

\n<晴太>「わ、分かった！　すぐに呼んでくるから！

　頑張ってね、若菜！」

晴太は慌てるように、保健室を飛び出していく。

若菜は安堵しながら身体の力を抜いた。

\n<若菜>「んっく……せ、先輩……！

　ば、バレたら……どうするんで……んふぁ、んんっ！」

\n<陸也>「見られながらイキそうなクセに。

　イクところ見られたくなくて追い出したんだろ！」

\n<若菜>「ンふぅあ……そ、それは……ンんッ！

　せ、先輩が……おちんちん入れてくるから……ふぁ！」

\n<陸也>「その割にはいつもより濡れてたっての。

　物欲しそうにマンコもヒクヒクさせてさぁ」

\n<若菜>「そんな……こと、んひゃあっ……！

　おちんちんなんて……欲しく……ンんあっ……！」

\n<陸也>「俺とのセックスは大事な用事なんだろ！

　ハルタくんと遊ぶより気持ちいいもんなッ！」

\n<若菜>「はぁ……ンンんっ！　んあふぅ……！

　そ、それは……んっあっ、んんっ……！」

\n<陸也>「それじゃあご褒美に、

　若菜ちゃんの大好きな中出ししてやるよ！」

\n<若菜>「んふぁ……！　は、はい……！

　な、中出し……中出ししてください……！」

若菜の懇願するような言葉に、

男のピストンは絶頂を迎えるために加速していく。

\n<陸也>「孕むまで止めねぇからな……！

　その覚悟出来たから来たんだもんな！」

\n<若菜>「ふぅんんっ……せ、先輩の赤ちゃんなんて……

　そ、そんなの……孕みません……からぁ、んあッ！」

\n<若菜>「あんっ……も、もう我慢できないよぉ……！

　はぁ……イク、イっちゃう……んんぅ、イクぅ……！」

\n<若菜>「ンんんっうあああああああああ！」

若菜は抑えていた声を解放するように、

廊下にまで響くほどの嬌声を上げて絶頂に至る。

\n<若菜>「はぁはぁ……ふぅ……んんっ……」

\n<陸也>「見られて興奮するなんて若菜ちゃん変態だね。

　ま、そういうところがいいんだけどッ」

\n<若菜>「んんっ……！　ふぅ、はぁはぁ……んっく……」

子宮口にまで精子を押し込むように、

男は射精しきった肉棒を膣奥へと突っ込む。

\n<陸也>「それじゃあ、場所移すか。

　早く行かねーとハルタくんが戻ってくるぜ？」

\n<若菜>「は……はい……」

ラブホテルの一室で事を終えた二人の男女が、

身体を重ねながら、淫らな音を部屋中に響かせていた。

\n<若菜>「んんっ……じゅる、んちゅぶ……」

\n<陸也>「はぁ……出した出した。

　若菜ちゃん、ちゃんとお掃除フェラしてよ？」

\n<若菜>「わ、分かってます……んじゅ、ちゅぷぁ……」

若菜は性行為を終えてドロドロになった肉棒を、

口いっぱいに頬張って液を舐めとっていく。

\n<陸也>「美味しそうにザーメン飲むようになったな。

　そんなに美味しいの？」

\n<若菜>「ザーメンなんて……美味しくないです……

　こんなの……本当は舐めたくないです……れろ、んちゅ……」

言葉とは裏腹に若菜は熱心に竿を咥え、

あらゆる隙間に舌を伸ばして愛撫するように亀頭を舐める。

\n<陸也>「あー、マジで気持ちいいわー。

　ここまでヤる女はそうそういねーからな」

\n<若菜>「じゅぶ、んむっ、れろ……んっじゅる……んん……！」

\n<若菜>（なにこれ……この黄色い消しカスみたいなの……

　すごい……くらっとする匂いがする……）

\n<若菜>（でも……この匂い嗅いでるとなんだか……

　だんだん変な気分になっちゃう……）

若菜はカリの部分に溜まった恥垢を舌で掬い、

その味を確かめるように喉を鳴らした。

\n<若菜>「んっく……変な味……」

\n<陸也>「うわ、チンカスついてんじゃん。

　若菜ちゃん、食べちゃったの？」

\n<若菜>「え……た、食べちゃダメなのでしたか……？」

\n<陸也>「いいや、俺好みだからセーフ。

　まあ、その口とはキスしたくねーけど」

\n<陸也>「これからチンカス付いてたら、

　ちゃんと食べて掃除してよ？」

\n<若菜>「これが……ち、ちんかすなんですね……

　は、はい……分かりました……」

\n<若菜>（ちんかす……変な味だけど、嫌いじゃない……

　もっといっぱいあるのかな……？）

若菜はカリと皮の隙間に舌を滑り込ませると、

ほじくるように恥垢を舐めとっていく。

\n<若菜>「れろ、んれろ……んちゅる、れろ、んっく……」

\n<若菜>（はぁはぁ……頭がすごくくらくらする……

　なんでだろ……おまんこがキュンってしちゃう……）

恥垢の強烈な媚薬のような匂いにあてられて、

若菜の表情が蕩けるように締まりのないものになっていく。

\n<若菜>「んちゅ、れろ……んんっ、こくん……っぷはぁ……」

\n<若菜>（味は全然違うのに……ザーメン飲んでる感じがする……

　美味しくないのに……全然嫌いじゃなくて……）

\n<陸也>「若菜ちゃんくらいだわ。

　そんなに美味しそうにチンカス食べるの」

\n<若菜>「美味しくなんか……ないです……」

\n<陸也>「でも、嫌いじゃないんでしょ？」

\n<若菜>「…………。

　れろ、ちゅぶ……んちゅる、ちゅぷぁ……」

若菜は返答代わりに亀頭へ口づけを交わす。

それは暗に肯定を意を示していた。

\n<若菜>「ちゅる、れろ、んぷぁ……はぁはぁ……

　んっく……れろ、れろ……んんっ……」

\n<若菜>（我慢汁が垂れてきてる……

　しょっぱくて、トロトロで……美味しい……）

\n<陸也>「つか、若菜ちゃんのってさぁ、

　お掃除フェラってよりフェラじゃね？　イキそうになるわ」

\n<若菜>「ちゅる、ちゅぷ……ち、違います……

　これは……フェラじゃありませんから……んちゅ……」

\n<陸也>「まあいいけど。これは掃除なんだからさぁ、

　射精させんなよ？　汚したらまた初めから掃除だからな」

\n<若菜>「また……初めから……

　……そんなの絶対に嫌です……んちゅぷ、れろ、んちゅる……」

\n<若菜>（このままおちんちん射精させたら……

　また……ザーメンがいっぱい飲める……）

\n<若菜>（このまま……少しおちんちんしゃぶるだけで……

　でも、そんなエッチなこと……）

肉棒から放たれる強烈な雄の匂いが若菜の鼻孔をくすぐる。

その匂いに、若菜の瞳はとろんと蕩ける。

\n<若菜>（こんなに匂い嗅いじゃったら、抑えられない……

　ザーメンが……ザーメンが飲みたい……！）

\n<若菜>「んじゅる、れろ……んっくんっく！　んっちゅぷ……！」

\n<陸也>「おいおいそんなに激しくしたら……

　あー、また出そうだわ……いいのか……？」

若菜は男の言葉を聞かずに顔を激しく上下に動かす。

それは射精に導くためだけの強引な口淫だった。

\n<若菜>「んじゅるる、ぐっぽぐっぽ……んじゅぼぼぼ！」

\n<陸也>「あー、もうイキそ……出すぞ……！」

\n<若菜>「ぐっぽぐっぽ……じゅる、んむちゅ……んじゅるるる！」

\n<若菜>「ンんんんむぅううううっ……！」

若菜を口内から孕ませるような勢いで、

白濁した液が喉奥に絡むように口内を穢していく。

\n<若菜>「んんっ……んちゅる、んんっく……」

口内に溢れかえるほどの精液を、

若菜は何度も喉を鳴らして飲み干していく。

\n<陸也>「あーあ。またチンコ汚くなったわ。

　若菜ちゃんさぁ、どうすればいいか分かるよね？」

\n<若菜>「んっく……こくん……っぷぁ。

　……それくらい、分かってます……」

\n<若菜>「先輩をイカせたわたしが悪いんですから……

　嫌ですけど、また……おちんちん掃除します……」

\n<若菜>「しょうがなく……しょうがなくですから……

　んれろ、んじゅぶ……ちゅ、んんちゅ……ちゅぷぁ……」

若菜は渋々というように再度肉棒にむしゃぶりつく。

けれどその瞳には、情欲の色が浮かんでいた。

神社の境内の奥でひっそりと、

裸の男女が抱き合うようにして腰を打ち付け合っていた。

\n<若菜>「んんっ……！　はぁはぁ……んっく、んあっ……！」

\n<若菜>「わ、わたし……こんなところでセックスしちゃってる……！

　お、お外でなんて……んっ、ふぁ、んんっ……！」

\n<陸也>「でも若菜ちゃんも興奮してんだろ？

　いつも以上にマンコ締めちゃってさッ！」

\n<若菜>「ンお゛っ……！？」

男はぐっと肉棒を膣深くまで沈み込ませる。

若菜の身体がぶるりと快楽に震えて膣をさらに狭めた。

\n<陸也>「あー、やっぱこの体位いいわ……！

　若菜ちゃんの身体が柔らかくてマジラッキー」

\n<若菜>「んあっ、っくぅ……そ、そんな深く……！

　はぅ、んんっ……ああっ、んふぁ……！」

\n<若菜>（やっぱり……この体勢すごい……

　おちんちんが気持ちいいところに擦れちゃう……！）

立ち鼎できゅっと締められた膣内に形を教え込むように、

竿全体がぎちぎちと肉壁を押し広げて擦り上げる。

\n<陸也>「ほら、若菜ちゃんも分かるっしょ？

　チンコがマンコの形作り変えてくとこ」

\n<若菜>「んふっ、そ、そんなの分かん……ンんあぁッ！」

\n<若菜>（わかっちゃう……おまんこで分からされちゃう……！

　わたしのおまんこが……先輩の形に変わってきちゃってるの……！）

\n<陸也>「それじゃあ、若菜ちゃんでも分かるように、

　俺のチンコの形をマンコに教えて込んあげる」

\n<若菜>「い、いいです……そんなことしなくても……！

　そんなことされたら……ンんんぅぅうっ……！」

男は竿を秘部からゆっくりと引き抜いていき、

カリ首が肉壁を緩やかに擦る感覚を植え付けていく。

\n<若菜>（おちんちんの形をいつも以上に感じる……

　一番太いところがおまんこに引っかかるの分かっちゃう……）

\n<若菜>「んっ……ふぅん……はぁ、んふぁ……！」

激しいピストンとは対称的な性行為ながら、

若菜の漏らす声はそれに近しいほどの熱を帯びていた。

\n<陸也>「どう？　分かってきた？」

\n<若菜>「そんなの知らな……んふぁ……ふぅ、んんっ……！」

ぬぷり、と肉壁を分け入るように亀頭が侵入していく。

緩慢な動作ながら、若菜の身体は大きく震えた。

\n<若菜>（こんなにゆっくり動いてるはずなのに……

　なんでこんなにも気持ちいいの……！）

竿はゆっくりと何度も膣内を往復しながら、

若菜の肉壁に形を徐々に染みこませていく。

\n<若菜>「はぁ、んんっ……んっく、ふぅ……んふぁ……」

\n<陸也>「これで分かった……っしょッ！」

\n<若菜>「ンんあ゛ッ！？」

男のピストンが突然激しさを取り戻し、

油断しきっていた若菜は押し寄せる快楽に頭が真っ白になった。

\n<若菜>「ああっ、んんっ……んふぁ！　んっく、はぁんん！」

\n<陸也>「若菜ちゃんさぁ、喘いでばっかじゃなくて、

　折角教えてやったんだから、分かったか言えよっ！」

\n<若菜>（わ、分かりたくなんてないのに……！

　完璧におまんこに分からされちゃったよぅ！）

\n<若菜>「わ、わか……んんっく、わかりましたぁ……！

　おまんこが、先輩のおちんちんの形になっちゃってますっ！」

\n<若菜>「わたしのおまんこが……んひゃあっ！

　先輩のおちんちん専用に……なっちゃって……あアんんっ！」

若菜は恥ずかしげもなく大声で淫らな言葉を叫ぶ。

男は満足げに腰をさらに強く打ちつける。

\n<陸也>「これで若菜ちゃんのマンコは、

　オレ専用のチンコケースだからなッ！　他のチンコ食うなよ！」

\n<若菜>「ンぅうッ……！　は、はい……！

　せ、先輩としかセックスしま……んふぁ、んあっ……！！」

\n<陸也>「あー、もう限界だわ……イキそ……出すぞ！」

\n<若菜>「んぁっ、な、中に……中に出してください……！」

\n<陸也>「中出し以外するかよッ！

　若菜ちゃんは孕んでも俺の精液便所だってーのッ！」

\n<若菜>「ンふぁっ……！　んっく、んはぁ……！

　わ、わたしも……わたしももう……イクぅッ！」

\n<若菜>「ンんんふぅぁあああああああああっ！」

膣内を満たすように放出された精液を、

若菜の子宮はごくごくと飲み干していく。

\n<陸也>「あー、搾り取られるわ……！

　どんだけ孕みてぇんだよ」

\n<若菜>「んはぁ……は、孕みたくなんかないです……

　ただ、中出しが気持ちいいだけ……んんっ……」

\n<陸也>「どんだけ変態なんだよ。

　そっちのほうがエロいとか思わねーの？」

\n<若菜>「はぁはぁ……んふぁっ……

　わ、わたしはエッチなんかじゃ……ないです……」

若菜は艶めかしい吐息を何度も溢しては、

いつも以上に湧き上がる悦楽に浸っていた。

\n<若菜>（誰かに見られるかもと思ったら……

　中出しされるのも……いつもよりも興奮しちゃった……）

\n<若菜>（これがお外でするセックス……イケナイことなのに、

　こんなにキモチイイなんて……またお外でヤリたい……）

\n<陸也>「若菜ちゃん、この後どこでヤる？

　若菜ちゃん家か……ラブホとか？」

\n<若菜>（お外がいい……このままここでヤリたい……！

　でも、そんなエッチなこと言えない……どうしよう……）

男は当然のように性行為を続ける宣言をするも、

それに対して若菜が思うことは何もなかった。

\n<若菜>「はぁはぁ……先輩を家に入れたくないです……

　でも、ラブホなんて……そんなエッチなところは嫌です……」

\n<若菜>「だ、だから……しょうがないですから……

　こ、ここで……このままでいいです……」

\n<陸也>「んじゃあ、抜くのもメンドイしこのままヤるか。

　孕むまで中出し続けてやるから」

\n<若菜>「んんっ……は、はい……」

部屋の主人が留守にしている状況で、

男女がスリルを楽しむように身体を繋ぎ合っていた。

\n<若菜>「ンはぁ……！　んあっ、んんっ……！」

\n<陸也>「若菜ちゃん、いつもより興奮してるっしょ？

　挿れる前からマンコびしょびしょだったもんね？」

\n<若菜>「んっく、そ、それは……ふぁっ……！」

\n<若菜>（ハルタの部屋でセックスしちゃってる……！

　相手はハルタじゃなくて先輩なのに……！）

\n<若菜>（でもハルタの部屋で……ハルタの匂いに囲まれて……

　こんな中でセックスするなんて……ハルタとしてるみたい……）

\n<若菜>（はぁはぁ……ハルタと……セックス……

　こんなの……いつもより気持ち良くなっちゃう……！）

\n<陸也>「おいおい……他の男のこと考えてんじゃねーだろうな？

　若菜ちゃんは俺のチンコのことだけ考えてろッ！」

\n<若菜>「ふぁあッ……！　んっく、んああッ！

　ダメ、そんな……いま、敏感だから……ふぅんん！」

瞬間、カーテンに閉め切られた窓の向こうから、

ドンドンとガラスを叩く音と共に大声が響いてきた。

\n<晴太>「若菜ー！　本ってどこにあるのー！」

\n<陸也>「うるせぇな。若菜ちゃんならテメェの部屋で、

　セックスの真っ最中だっての！」

\n<若菜>「先輩……ちょっと、待ってくだ……んんっ！

　このままじゃハルタにバレちゃ……うううっ！」

\n<陸也>「聞こえないフリしてればいいんじゃね？

　そんなことより若菜ちゃんはマンコに集中！」

\n<若菜>「ンんっあっ……！　で、でも……それじゃ、んんっ……！」

しばらくすると窓を叩く音は止み、

代わりに、電話の着信音が部屋中に鳴り響いた。

\n<若菜>「は、ハルタから電話だ……

　せ、先輩……これは出ないと怪しまれるんじゃ……」

\n<陸也>「しつけー男だな。もういいや。出れば？

　まあ、俺は勝手にヤってるから」

\n<若菜>「んんっ……！　で、でもそれじゃあ声が……」

\n<陸也>「いいからさっさと出ろって。怪しまれていいの？」

\n<若菜>「ううっ……」

\n<若菜>（先輩のことだから……本当に続けてくるよね。

　頑張って声抑えないと……本当にバレちゃう……）

若菜は渋々と言ったように着信ボタンを押す。

その実、蜜壺からは愛液が洪水のように溢れ出していた。

\n<晴太>『もしもし、若菜？』

\n<若菜>「んっ……は、ハルタ……？　ど、どうしたの……？」

\n<晴太>『若菜の言ってた本ってどこにあるの？』

\n<若菜>（大丈夫……これくらいなら耐えれるかも……

　でも、ハルタの声を聴きながらセックスしちゃうなんて……）

\n<若菜>「え、えーっと……んんっ……アぁッ……！」

男は膣奥にぐっと亀頭を押し込む。

その快感に、若菜は抑えていた声をふっと漏らした。

\n<晴太>『若菜？』

\n<若菜>「な、なんでもないよ！　な、んんっ……！

　あ、あはは……ふぅ、んんっ……」

\n<若菜>「せ、先輩……！

　お願いですから、ハルタの前では……んんぁっ……！」

\n<陸也>「なに言ってんの？　聞かれて気持ちいいんだろ？」

\n<若菜>「そ、そんなこと……ふぁ、んっく、んはぁ……！」

\n<晴太>『若菜？　何かしてるの？』

\n<若菜>「な、なにも……んぁっ、なにもしてないよ……！

　ほ、ほんと……んっく、ほんとだよ……！」

\n<晴太>『そう？』

\n<若菜>「う、うん……ホント……んんっ、えへへ……」

\n<晴太>『でも、カーテン越しに動いてるのが見えるんだけど』

\n<若菜>「えっ……？」

若菜が窓に視線を移すと、

そこには自分の部屋いる晴太の姿がシルエットで映っていた。

\n<若菜>（そ、そうだった……どうしよう！

　部屋の窓から、影で分かっちゃうんだった……！）

\n<若菜>「ほ、ほんとは……ストレッチしてるの……！

　さ、最近……はまってて、んあっ……！！」

\n<若菜>「とっても……んふぁ、気持ちいいの……んんっ！

　気持ち良くて……あんっ、声が漏れちゃうくらい……えへへ」

\n<晴太>『へぇ、そんなのがあるんだ。

　今度僕にも教えてよ』

\n<若菜>「ふぁ……う、うんっ……は、ハルタにも……んんっ！

　き、きもちいいストレッチ……教えて……んあっ！」

\n<陸也>「なあなあ、若菜ちゃんさぁ。

　俺とヤってる最中に、他の男とセックスの予約してんじゃねーよ！」

\n<若菜>「ンあぅッ……！」

男は若菜の握っている電話の画面を操作し、

マイクとスピーカーをミュートに切り替える。

\n<陸也>「若菜ちゃんのマンコはオレ専用だって言ったよな？

　クソビッチの若菜ちゃんには難しかったかッ！？」

\n<若菜>「あんんっ……！　わ、忘れてなんか……はぁんんッ！

　そ、それに……わたしはビッチじゃ……ンふぁ……！」

\n<陸也>「なら、ちゃんと言ってみろよ！

　若菜ちゃんのマンコは誰のモンだ！？」

責め立てるように腰を強く振るう男に、

若菜はたじたじになりながらも快楽に喘ぐ。

\n<若菜>「ふぁあ、んううっ、激し……んあっ……！

　い、言います……んんっく、言いますからぁ……！」

\n<若菜>「わ、わたしのおまんこは……せ、先輩の……

　先輩のおちんちん専用の……精液便所です……ンふあぅッ……！？」

\n<陸也>「ちゃんと分かってんじゃん。

　ちゃんと言えたご褒美に、すぐにイカせてやるよッ！」

\n<若菜>「ンはぁあぅっ……！

　そ、そこ……んんっ、すごっ……あっ、んんっぅう！」

繋がっていないマイクに向かって、

若菜は遠慮なしに快楽の声を上げ続ける。

\n<若菜>「んあっ、も、もう我慢できない……！

　い、イっても……イってもいいですか……んひゃぁ！」

\n<陸也>「あー、俺も出そうだわ……！

　俺の射精でイカせてやるよ！」

\n<若菜>「は、ハルタに……バレちゃうとダメだから……

　ざ、ザーメンは……わ、わたしの中に……んんあっ！」

\n<陸也>「素直に中出ししてほしいって言えっての！

　まあ、どっちにしろ中出し以外しねーけどなッ！」

男は射精を導くための激しいピストンを繰り返し、

若菜を絶頂へと高めていく。

\n<若菜>「ンはぁっ！　だめっ、もうっ……んあっ！

　はぁはぁ……イっちゃう……ハルタの部屋で……ふぁっ！」

\n<若菜>「こんなこと、イケナイのに……感じちゃうぅっ！

　ンんんっ、イクッ……イっちゃうぅうう！」

\n<若菜>「ンんんぅぅうあああああああっ！」

若菜は声を必死に抑えながら絶頂に至るも、

漏れ出た声は若菜の興奮を大いに物語っていた。

\n<若菜>「……っ、んんっ……！　んはぁ……はぁはぁ……」

\n<若菜>（これ……今までで一番気持ち良かった……

　こんな……ハルタの部屋でシちゃダメなのに……）

\n<若菜>（……こんなに気持ち良かったのって、

　ひょっとしてハルタの部屋だから……かな？）

\n<陸也>「ふぅ……出した出した。

　おっと、電話のことすっかり忘れてたわ」

男は若菜に抱き着くような姿勢でミュートをオフにする。

瞬間、部屋の中にもう一人の声が響き渡った。

\n<晴太>『――かな！　もしもーし、若菜！

　聞こえてるー？　大丈夫ー？』

\n<若菜>「えっ……？　んっ……ああ、うん。だ、大丈夫だよ……」

突然耳元で聞こえてくる晴太の言葉に、

若菜は快楽の余韻に浸りながら虚ろな言葉を返す。

\n<若菜>「あっ、思い出した……い、いま家に本が無いんだった……

　はぁはぁ……は、ハルタももう戻ってきていいよ……」

ごぽり、と若菜の秘部から白濁した液が零れる。

それを見ながら若菜は緩んだ口元で送話口に声をかけた。

\n<若菜>「も、もう……終わったから……」

むせ返るような淫靡な匂い、部屋中を包む熱気。

夜通し響く乾いた音は止むことなく朝を迎えた。

\n<若菜>「んはぁ、んんっ……！　はぁはぁ……んんぅ！」

\n<陸也>「うわ、もう朝じゃん。

　若菜ちゃんに一晩中搾り取られてたわ」

\n<若菜>「ちがっ、先輩が……んんぁッ！」

\n<陸也>「何がちげーの？　チンコ咥えこんで離さなかったクセにさぁ。

　こんなドロドロマンコで言っても説得力なくね？」

\n<若菜>「あんっ、んっくぁ……！

　それは、先輩がセックスやめてくれないからぁ……んふぁ！」

一日中肉棒を頬張った蜜壺はぐちょぐちょに蕩け、

滑るように子宮奥まで男根を飲み込んでいく。

\n<陸也>「流石にそろそろ休憩すっか。

　じゃあ、次出したら一旦終わりなッ！」

\n<若菜>「ンあぁっ、は、はい……！

　わ、わか……んんっ、あ、わかりましたぁ……」

\n<陸也>「おいおい、そんな悲しそうにすんなって。

　起きたらまたハメ倒してやるっての」

\n<若菜>「か、悲しくなんて……」

若菜の言葉を遮るように、窓を叩く音が部屋中に響く。

その音に続くように、男にしては高めな声が聞こえてきた。

\n<晴太>「若菜ー！　おはよー！」

\n<若菜>「は、ハルタ……？　なんで……」

\n<陸也>「またアイツかよ。

　彼氏でもねーのにしつけー男だな、モヤシ男」

\n<若菜>「ど、どうしよう……

　わたしがいるのはバレちゃってるだろうし……」

\n<陸也>「いいじゃん。開けちゃえば。

　部屋ん中あちぃし、精子くせぇし、換気換気」

\n<若菜>「えっ、ちょっと待っ――！」

男は足で蹴とばすようにカーテンを払い、窓を開け放つ。

窓越しに若菜と晴太の目があった。

\n<若菜>「お、おはよう……ハルタ……！」

\n<晴太>「おはよう。ふぁ～あ、まだ眠いや」

\n<若菜>「あ、あはは……ハルタにしては朝が早――い゛んんっ！？」

晴太の目があるにも関わらず、

男は容赦なく若菜の秘部を突きあげて身体を揺らす。

\n<若菜>（な、なんで……

　こんなことしたらハルタにバレちゃう……！）

\n<若菜>「せ、先輩……動いちゃダメです……んんぁっ！

　は、ハルタに……セックスしちゃってるのバレちゃう！」

\n<陸也>「大丈夫大丈夫。今までだってバレてないっしょ？

　若菜ちゃんが声抑えてりゃ大丈夫だってのッ！」

\n<若菜>「んふぁあ！　な、なら……せめて、んんっ！

　激しく……ふぅんん、しないでくだ……ンんぅっ！」

\n<陸也>「可愛い可愛い若菜ちゃんの頼みだから、まあ……

　出来る限り、多少は、小指の先くらいは善処してみるわ」

\n<若菜>（先輩……本当にやめてくれるかな……？

　とにかく、あんまり声が出ないように頑張らないと……）

\n<若菜>（ただでさえ、ずっとセックスしちゃってたから、

　おまんこがすごく敏感になっちゃってるのに……）

\n<晴太>「ねぇ、若菜。なんでそんなに揺れてるの？」

\n<若菜>「えっ？　えっと……」

若菜は考え込むような素振りで男を見やる。

男はヘラヘラと笑いながら手で謝罪を表した。

\n<若菜>「そ、それは……んんっ、その……と、トランポリン！

　トランポリンに乗ってるの！」

\n<晴太>「そんなの若菜の家にあったっけ？」

\n<若菜>「あ、最近買ったの……んあっ！」

激しくはないものの、小刻みに動く肉棒に、

一晩かけて開発された若菜の秘部は蜜を垂らす。

\n<晴太>「若菜？　ちょっと様子が変だよ？」

\n<若菜>「へ、変じゃないよ……！

　ただ……んんっ！　えへへ……き、キモチイイだけ……」

\n<晴太>「トランポリンが気持ちいいの？

　若菜ってば変だなぁ」

\n<晴太>「あれ、ひょっとして、若菜……」

晴太の目がきっと鋭くなり若菜を見つめる。

それは、まるで何かに気づいたような表情だった。

\n<若菜>（ハルタのあの顔……気付いちゃったんだ！

　どうしよう……わたしがエッチだってバレちゃう……！）

\n<若菜>「や、やだっ、ハルタ！　違うの、これは……！」

\n<晴太>「ダイエットの為にトランポリン買ったんでしょ！

　あんなにケーキ食べてたら太っちゃうもんね」

\n<若菜>「え……？」

\n<陸也>「は……？」

\n<晴太>「あれ、若菜なにか言った？」

\n<若菜>「う、ううん……なんでもないよ！

　それより、ダイエットなんてよく分かったね……ンんっ！」

\n<晴太>「ダイエットなら、もっと動いたほうがいいよ。

　ほら、こんな感じにもっと身体を上下させてさ」

\n<若菜>「でも、そんなことしたら声が……」

\n<晴太>「声……？」

\n<若菜>「う、ううん……なんでもない……なんでもない……」

\n<若菜>（でも、ハルタの前で思いっきりセックス出来たら……

　きっと、すごく気持ちいいだろうな……）

\n<晴太>「それじゃあ、やってみてよ。

　僕がちゃんと若菜のこと見ててあげるから」

晴太の視線が一心に若菜だけに注がれる。

それだけで若菜の秘部はきゅんと気持ちが昂りをみせた。

\n<若菜>「う、うん……

　そ、それじゃあ……わたしのこといっぱい見ててね……？」

\n<若菜>（ハルタがあんなに真剣にわたしを……

　わたしのセックスしてるところを見ようとしてるんだ……）

\n<若菜>（声我慢しないと本当にバレちゃう……

　大丈夫……本気になればちゃんと出来るもん……）

\n<陸也>（思ってのとは違ぇけど、これはこれでおもしれーからいいか）

若菜は意を決したようにゆっくりと腰を持ち上げると、

まるで弾むように一息に腰を下ろした。

\n<若菜>「ンんん゛ッ！　っはぁ……！」

\n<若菜>（すごい……こんなの絶対に声出ちゃう……！

　こんなに気持ちいいなんて……絶対に我慢できないよぅ……！）

\n<若菜>「んふぁあ、っくぅ、んああッ……！」

若菜は本当にトランポリンにでも乗っているかのように、

身体を激しく上下に動かして肉棒を深くまで突っ込む。

\n<晴太>「いいよいいよ！　若菜、その調子！」

\n<若菜>「ンんぁあ……！　これっ、すごっ、いい……！

　これじゃあ、すぐッ……ひゃあンんっ！」

\n<晴太>「すごいでしょ？　うんうん、すぐに痩せられるよ！」

\n<若菜>（ハルタの視線も……おちんちんの感覚も……

　どっちも良すぎて……頭がおかしくなっちゃう……！）

\n<若菜>（こんなに気持ち良くなれるなら……

　もう、ハルタにバレてもいいかも……）

\n<若菜>「ふぁんんッ、ハルタぁ……！

　わ、わたしのことちゃんと見ててね……っ！」

若菜はタガが外れたように、一心不乱に腰を打ちつける。

頭の中に浮かんでいるのは最早快楽のみだった。

\n<晴太>「心配しなくても、ちゃんと見てるよ。

　若菜が変わっていくところもちゃんと見ててあげるから！」

\n<若菜>「うん……うぅんんっ……！

　っはぁ……か、変わっちゃったわたしを見ててね……んふぁ！」

声には艶。漏れ出る吐息は色香を孕んだ熱を持つ。

嬌声からも若菜の絶頂が近いのは明らかだった。

\n<若菜>「んんっ、ハルタぁ……もう我慢できないよぉ……！

　イっても……ふぁっ、イってもいいよね……！？」

\n<晴太>「行っても……？　あっ、ひょっとしてトイレ我慢してた？

　そうだ、僕もトイレ行こうと思ってたんだ！　じゃあね、若菜！」

晴太はそう口にすると、窓を閉めて部屋を出ていく。

けれど、そのことにさえ気付かず若菜は快楽に喘ぐ。

\n<若菜>「うん……イクッ、イクからねッ！

　ちゃんとイクところも見ててね……！　ハルタぁ……！」

\n<陸也>「うっ……俺ももう限界だ……！」

\n<若菜>「わたしのイクところ……気持ち良くなっちゃってるところ……！

　全部見てぇ……！　んあぁッ、イクぅううう！」

\n<若菜>「ンんっふぁあああああああああ！」

どぷどぷと流し込まれる特濃の精液は、

彩乃の膣内を満たして外へと流れ出ていく。

\n<若菜>「んはぁ……はぁはぁ……んんっく……」

\n<若菜>「はぁはぁ……わたし……ハルタに全部見せちゃった……

　あ、あれ……ハルタは……？」

\n<陸也>「アイツならとっくにいねーっての。

　つーかまだセックスしてたことも気付いてねぇ」

\n<若菜>「そう、ですか……良かった……」

若菜は小さく呼吸を整えながら、

どこか気落ちしたような声を漏らす。

\n<若菜>（そっか……見られてないんだ……

　なのに、見られてると思って、わたしあんなに……）

\n<若菜>（でも、想像だけであんなにイっちゃったのに……

　本当に見られてたらどうなっちゃうんだろう……）

\n<若菜>（どれだけ気持ち良くなれるんだろう……）

\n<陸也>「休憩したら、明日までヤリっぱだからな。

　寝かさねーから覚悟しといてよ」

\n<若菜>「……どうせ文句言っても変わらないと思うので、

　先輩の好きにしてください……」

\n<陸也>「そう？　それじゃあ明日さ――」

部屋の主が不在になったのをいいことに、

男女は裸で身体を繫ぎ合わせて腰を打ち付け合っていた。

\n<陸也>「もうそろそろ戻ってくるんじゃね？

　早くマンコ締めて射精させないとマズいんじゃない？」

\n<若菜>「んんっ、そ、そんなこと言っても……

　せ、先輩が焦らして……んあッ……！」

\n<陸也>「せっかく晴太くんの家でシてるんだからさぁ、

　気持ちよくイキたいっしょ？」

\n<若菜>「それ、は……んんぁッ！

　なら……も、もっと激しくしてくださ……ンンぅ！」

\n<若菜>「う、うそ……

　か、階段上がってきてる音が……んっ！」

\n<陸也>「だから？」

\n<若菜>「だ、だから……んんっ、早く止めないと……

　ハルタに……見つかっちゃ……ンはぁ！」

\n<陸也>「だから？　それがどうかしたの？」

\n<若菜>「だ、だって……ハルタに見つかっちゃったら……」

\n<陸也>「若菜ちゃんさぁ、晴太くんに見られたいんだろ？

　見られると気持ちよくなっちゃう変態なんだろ？」

\n<若菜>「そんな、こと……んんっ……！」

\n<陸也>「だったら、見せてやればいいじゃん。

　そうしたら、今までで一番気持ちよくなれるんだよ？」

\n<若菜>「い、今までで……いち、ばん……んぁあ！」

\n<陸也>「そうそう。ほら、ちゃんとドアのほう向いて。

　そのトロ顔見せてやれよ」

\n<若菜>（このままじゃ本当に見られちゃう……！

　わたしのセックス……ハルタに見られちゃう……！）

\n<若菜>（でも、それって……どんなに気持ちいいんだろう……）

\n<晴太>「わか、な……？」

\n<若菜>「あっ、んっ、ハルタ……！

　やあっ、見ちゃ……んふぁっ……！」

\n<若菜>（ハルタに見られちゃってる……！

　わたしの裸も、エッチなところも全部……！）

\n<陸也>「あーあ、バレちゃった。

　だから、ここでヤるのはアブねーって言ったのに」

\n<若菜>「そ、そんな……

　先輩がここでしようって……んああっ！」

男はさも自分は関係ないとばかりに、

淡々と若菜の膣へと肉棒を打ち付ける。

\n<陸也>「俺のせいにすんなって。

　だって若菜ちゃん、ここでするのが一番気持ちいいんだろ？」

\n<若菜>「それは……ンふぁ、あんっ、んん……！」

\n<陸也>「そういや、激しくしてほしかったんだっけ？

　悪ぃ悪ぃ、今から激しくしてやるからさッ！」

\n<若菜>（いま激しくなんてされちゃったら……

　わたし、ハルタの前で変な声出しちゃうよ……）

男は容赦なく若菜の膣奥に亀頭を押し付けて、

子宮に口づけを交わすように突き上げる。

\n<若菜>「ン゛お……！　んふぁ、んんっ……！

　これ、すごっ……！」

\n<晴太>「これ……なんで……

　どうして若菜が先輩と……」

\n<若菜>「あっ、んんっ、ハルタ、ごめんね……！

　ごめんね……んふぁ……！」

好きな人を目の前にしながら、

けれど若菜は喜びにも似た表情を浮かべる。

\n<若菜>「せ、先輩に脅されて……んんぅ、仕方なく……

　わ、わたしだってこんな……んひゃあッ！」

\n<若菜>「え、えへへ……仕方なく……

　ぜ、全部……先輩が悪いんだから……んんあっ！」

\n<若菜>（気持ちいい……！

　ハルタに見られながらのセックス気持ちいいよぉ……！）

\n<若菜>（こんなのくせになっちゃう……！

　こんなエッチだめなのに……好きになっちゃう……！）

\n<陸也>「若菜ちゃんってすぐ俺のせいにするよな？

　んじゃあ、もう中出ししてやらねーから」

\n<若菜>「そんな……んっく、ふわぁ……！

　ご、ごめんなさい……先輩……ンんんっ！」

\n<若菜>「わ、わたしが悪かったですから……ふぅあ！

　お、お願いだから中に……んんぁっ！」

\n<晴太>「中って、そんな……若菜……？」

\n<陸也>「じゃあ、いつも通り中に出すからな！

　孕む準備しとけよ！」

\n<若菜>（ハルタに見られながら中出しされちゃう……！

　ハルタのじゃないザーメンがわたしに注がれちゃう！）

男のピストンが射精を促すものへと変わる。

その激しさに若菜の頬がほころんだ。

\n<若菜>「んぁっ、は、はい……！

　ざ、ザーメン……ザーメンいっぱいくださいっ！」

\n<若菜>「んんっ……わ、わたしも……もう……！

　せ、先輩……！　わたしも一緒に……んんあっ！」

\n<若菜>「んんっ、もう、イッっちゃ……！

　イクッ……イキます！　んんふぁああ……！」

\n<若菜>「んふぁああああああああああああ！」

好きな幼なじみの前にも関わらず、

若菜は盛大に喘ぎながら他の男の精子で子宮を満たす。

\n<若菜>「はぁはぁ……んはぁ……」

\n<若菜>「ハルタに……んんっく、見られちゃってるのに……

　先輩に、いっぱい中出しされちゃった……」

\n<陸也>「なに言ってんの？

　搾り取ってきたのは若菜ちゃんのマンコだろッ！」

\n<若菜>「ンんあッ……！　やめっ、先輩……

　イッたばかりで敏感だから……ひゃあんん！」

\n<陸也>「晴太くんの前だからって生娘ぶるなって。

　若菜ちゃんはこんなんじゃ満足できないっしょッ！」

\n<若菜>\{「ンンぅううッ……！」

\n<陸也>「悪ぃ悪ぃ、そういうことだからさぁ。

　もうちょい部屋借りるわ」

\n<晴太>「え……」

\n<陸也>「なんなら晴太くんも混ぜてやろうか？

　まあ、マンコはオレ専用だけどなッ！」

\n<若菜>「ンはぁっ……！　あんっ、んんぅう！」

\n<晴太>「ぼ、僕は……その、大丈夫です……」

\n<陸也>「あーあ。晴太くん行っちゃった。

　若菜ちゃん、幻滅されたかもね」

\n<若菜>「んんぅあ……んっ、あっ……！」

\n<陸也>「その様子じゃ気にしてなさそうだな。

　若菜ちゃんが孕むまではずっと俺が可愛がってやるよッ！」

\n<若菜>「ンあっ！　はぁ……は、はい……」